
そうだ、最強になろう

(仮)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうだ、最強になろう

【Nコード】

N5219K

【作者名】

(仮)

【あらすじ】

ある日

「そうだ、最強になろう」

と思いついた男、田中彼方。

友人深山功一を巻き込んで異世界へと出立。

よくある流れで可愛い巫女さんがやってきたまでは良かったのだけど…？

「お待ちしておりました新神様」

「え？おれ??」

神になったのは深山功一のほうだった…?!

「おのれ深山功一」

田中は神の座を乗っ取ることができるのか？

最強とハーレムをめざす田中の物語！

ファンタジー&コメディー（たまにシリアス）の戦争ファンタジー！
チート少なめ。

【人気キャラ投票始めました ぽちつとよろしくお願ひします】
終了しましたゝ（＾o＾）ノありがとうございました

まずは、異世界へ

オレの名前は田中^{たなか}彼方^{かなた}
自分の名前ほど同じ音が被った奴もいないと思う。

学校は地元出身。

運動能力は並。

年齢は18歳見た目はまあまあ。

根気とやる気はありますと言い切る自信はない。

そんな俺はある日急に思いついたのだ。

「そうだ、最強になろう」

一緒に部屋で昼食^{ハンバーガー}つてた友達に思いつきり馬鹿を見るような目で見つめられたがオレは気にしない。

なんていうか、神の啓示？みたいな

「ということでは俺は早速異世界へと旅立つことにした！」

「ちよつとまてええええええ！！」

「む？なんだ、深山功一」

「いちいちフルネームで呼ぶな」

深山功一。

小学からの腐れ縁という名の俺の一番の理解者で突っ込み役。

理解者というか、理解させようと無理やりさせている。

顔も頭も運動能力もよいという、平凡な男だ。

「ちよつとまて、なんだかお前の頭の中でものすごく突っ込みたいことがいくつか浮かんだような気がするんだが」

「気のせいだ。深山功一…で、なんだ」

「あのなあ」

深山功一は右手でこめかみを押さえつつ…そんな格好もかっこよく

決まってるあたりがものすごくムカつくので俺の頭の中でのこいつを古畑さんにしてみる…文句を呟く古畑さん。うん、カッコいいが許す

「何で異世界なんだ？」

「だって、この世界で剣とか銃とか取り出したら頭痛い子で捕まっちゃって終わりじゃん？」

「そうだけど…かわいく言うなよムカつくから」

なんだ、俺の可愛さにしつとか？見苦しいぞモブめ

「…なんか、今イラってしたな…で、なんでこの怪しげな魔法陣を完成させてるんだ？」

「何度も言わせるな。異世界に行くためだ」

「突っ込みどころ1どこからこんな怪しげな知識を手に入ってきた」

「ネット。最近のデジタルはすごいなあ」

ん？深山功…手を握りしめてラスボスに負けた勇者みたいに手を震わせてるんだ？

「…突っ込みどころ2…何で…つかいつの間におれの部屋で書いてるんだよっ…！」

「だって俺の部屋じゃいろいろともつたいないじゃん？」

「オレならいいのかよ…！」

うん。

だって俺の部屋お宝いっぱいだし

「最後にひとつ…異世界に行くのは勝手だし、事実行けるとも限らない」

「不可能を可能にする、それが神を目指すおれのディステニー…！」

「うんうんそうだね、黙れ。てかいつのまに目標神になってんだよ」

あ、小説タイトル変えないとな

「じゃなくて、行けたとする…何でおれも一緒なんだよ…！」

「だって、一人は俺の知り合いいないとおれがどれだけすごくなっ

お、やっと来たようだな

お決まりのパターン、美少女巫女たん来た〜！

おお、なかなか可愛いではないか。

「あ、あなた様はもしや〜！」

きたきたきたこれ！このパターン待つてました！

「新神様あらかみですね〜！お待ちしておりました！」

そういつて俺のほうへ近づき、ひざまづいて…ひざま…あれ？

「わたくしの名はアリア…新神様に仕える巫女にございます」

「え〜！？お…おれ??？」

可愛い巫女さんは深山功一の前に…

あれ？次話から主役交代？

まずは、異世界へ（後書き）

交代しません。

はじめましてこんにちは、（仮）といたします。

初連載ですが、末永くお付き合いいただければと思っています

とりま、始まりの村的な？

想定外デス

どっかのお兄ちゃんみたいなことを言ってみても現状は変わりませ

ん…マル

おかしい

おかしい

想定外デス（二回目）

おかしいではないか？

どこで間違った？どこでミスった？

すいませーん。リセットボタンはどこですか？

え？無いの？冗談きついよ〜？？？え？マジで！！？

「おい。おいつてば。彼方」

「黙れカスという名のモブキャラの深山功一」

「すごいこと言い切りやがったなこの野郎」

えいさほいさえいさほいさと神輿のような乗り物で運ばれる深山功一
一に対して、

この田中彼方はなぜに徒歩らねばならんだ！！

ええい。忌々しい！

神は俺のはずではなかったのか？！

何が俺に足りないのだ？努力か？そんなものは犬にでも食わしてあげ！

俺にはあふれ出るカリスマと有り余る才能があつたはず…

ええい！巫女は何をしているのだ！

「はい、新神様…お口にあうかわかりませんが…あくん？」

「え？ええ（照れ）」

ええええええい！！忌々しい！妬ましい妬ましい！！
桃色の髪のアニメチックな乙女巫女さんはぶっちゃけかなり萌キ
ヤラだ。

うん。顔は可愛らしい！及第点だ！

なのに…なのにいいいいいいいい！！

ちくしょう！ちくしょうちくしょうちくしょうちくしょう！！

「お…おい。彼方？目から赤いものが流れてるぜ…？」

「うるさいっ！！黙れ！悔しくなどあるものか！！」

(…誰も聞いてねえよ)

森の奥をどんどん進んでいく

その間中いちゃいちゃいちゃいちゃが…

その、おいしい席はわたくしのもものではなかったんデスカ??!

「着きました…新神さま」

そういつてミニスカ巫女は神輿から降りて一礼。

「改めまして、ようこそおいで下さいました新神様」

そして、どっかのアニメの始まりのようにその色の白い両手を広げ
た。

「貴方様を崇める民が村、ファルデへようこそ！」

あゝそゝ

空気壊してる感じでごめんなさいねゝ

どゝせ俺、KYですからあ

え？KYも古い？どゝもすいませんねえゝ

「オイ…彼方うざいオーラが体から湧き出てるぞ。気持ち悪い」
「っけ」

再び神輿は動きはじめ村の中へと入っていく。

ひととき大きな神社みたいなものの建物に向かっていく途中。

ととととと…とととととと

とと遠くから何者かが走ってやってきた。

「お姉ちゃあ〜ん！」

ずっきゅうつうつうん

ツインテールの桃色の髪の毛を揺らしつつ、小さな足で必死にこちらへと手をこれでもかといわんばかりに振りながら走ってくる、幼女！！

何あの生き物！何あれ！マジ可愛い！

歳は6・7くらいだろうか

…やっべ〜。

俺今までそっちは専門外だったのに…目覚めちゃったぜ

小学校の帰りに幼女さうおっさんの気持ちわかつちゃう感じだぜ

「テトラ！新神様の前ですよ！…もう、すみません」

「…ごめんなさい」

「いや、別にかまわないよ」

そうやって深山功一はテトラの頭をいやらしくもなあでなあでする

…なんて変態なんだ！

「おい、今ものすごくお前に制裁を加えねばならないような気がしたのだが気のせいだろうか」

「え、気のせいじゃないかなあ??かなあ」

「そのねた止めるってきもいから、原作に謝れ」

「すいませんでした」

謝ってみたのはいい物のどの作品に謝ればいいものか

ま、該当する神作品の皆さんごめんなさい。

まだ使うつもりです(@ _ @)。

とりま、始まりの村的な？（後書き）

ポインなのもいいけど、つるつるも捨てがたい
（。。。）y。。。。

形が良ければいいのよー！（セクハラ発言？

ごめんなさい）（。。。）

自己紹介中の裏の俺

屋敷です。

ま、結構いい感じじゃねえの？って感じの屋敷です。

広間というのか知らんが、一番広くて一番豪華な部屋へと案内され、その一番の上座に深山功一は勧められ、この俺は、その近くに座布団つぽいのを用意された。

…まあ、いいだろう

無視されなかつただけいいとしようじゃあないか？

別に泣いてなんかないぞ？悔しくなんてないぞ？この眼から出てるのは、だたの鼻水だぞ？

「えつと。ありがとうアリア」

「いえ」

深山功一にお礼を言われ、白い肌を薄紅色に染めながら微笑むミニスカ巫女

いいなあ。やっぱり、ミニスカ巫女

ミニスカ巫女いいよ（重要なので何度も言います）

「それでは、改めまして自己紹介いたします」

そういつて頭を下げ、半歩後ろに下がる

「貴方様にお仕えします、巫女、アリアといます」

あゝ重要なとこなんだろうけど、ここから続々おっちゃん爺さんの自己紹介になっちゃったので俺の視界と思考の中から一旦消させていただく…だつておっちゃん見てもねえ??

「あ、どうも」

などとくそまじめに深山功一はいちいち頭を下げている

あ〜くそ。爺率たつかいなココ、カワイコちゃん連れてこいよお〜
ぴよこ、と視界の隅に映るは先ほど愛らしい妹ちゃん!!
そわそわとこちらを見ては隠れている

「おいでおいで」

オレは出来るだけ優しく呼んでみた。

「!!--」

テトラ：…だっただと思う。

テトラはぴんつと猫だったら耳を立てるだろうなって感じで反応し、
こちらをじい〜つとみている。

「こいこ〜い」

オレはもはや子猫を呼んでるような心持だ。

優しい声で招く

「……ふむっ」

テトラは意を決したのかてててて〜とこちらへとまっすぐに寄
ってきた。

うっわwかわいいww何この生き物w

「お兄ちゃん、だあれ??新神様のお友達?」

「そんなところだよ、お兄ちゃんは田中彼方っていうんだ。よろし
く、テトラちゃん?」

「やっぱりそうなんだ!うん。よろしくね!お兄ちゃん!あ…お兄
ちゃんていいよね?」

「いいよ」

不安げに尋ねてくるテトラにいいよと了承してあげると目に見えて
ぱああと明るくなり

「やった〜!テトラ、お兄ちゃんいないからずっとお兄ちゃん欲し
かったんだ!」

と抱きついてきた。

グッジョブ異世界。

グッジョブお兄ちゃん。

素敵。これ、なんてエロゲ？もしくはギャルゲ？？
リアル最高。

これでお姉ちゃんもついてきたら満足なんだが
とりま。テトラを膝にのせて頭をなでてやる

「オレは、深山功一…え〜と異世界から来ました。こいつは、友達
の田中彼方…って何してんだよ変態っ！！」
「心外な」

いつの間にかおっさんの挨拶が終わりこちらからの挨拶になってい
たようだ。

「いつ俺がお前の友達になった！」

「突っ込むところっちか！？」

他にどこがある…あ

「ちがうちがう、変態じゃない。変態という名の紳士だゾ」

「おせえよ！！しかもぱくんなよ！！」

いいじゃないか、世の中にはネタを回してこそ生きるものもあるん
だぞ…多分

「え〜と、新神様…この方は、ご友人でよろしいのでしょうか…？」

「ええ、ものすごく否定したいけど、そうです」

「あのお兄ちゃん、きもちわるいでちゅね〜？」

「お兄ちゃんの顔面白〜い」

「テトラ！どこに座ってるの！！危ないでしょ！？」

そういつて俺の膝の上から可愛い妹がさらわれてしまった。

っておいおい、危ないってなんだよ危ないって

まだ手は出さないよ。多分。変態じゃないから、紳士だからさ、俺。

「…は、話が外れてしまいました。新神様の御使命を説明させて
いただきます…」

「御指名？」

はて、俺の中ではそんな予定はなかったのだがな

自己紹介中の裏の俺（後書き）

幼女いいよね。幼女。

素直な子がいいよね。

ツンデレも捨てがたいけど。

ヤンデレはちょっとねww

夢で可愛い子と出会ってからの

オレは今、夢を見ている。

「ていうか、態度でかいぞ。君」

「でかくて悪いか、えらいんだに」

なんだこいつ人の夢に出てきやがって。
ちび。

テトラよりも身長は低いだろうな。

無駄に霧を出して偉ぶってるが、態度がでかいのが見てわかる。
てか、雰囲気でもう生意気。

「霧、雰囲気だからもういいに」

うざいという雰囲気ならいっぱい感じたぞ？

霧がどんどん晴れていく。

前言撤回。

可愛いかも知れん

パタパタ。申し訳程度の小さな翼。

自分の身長の三倍以上ある長い杖(?)

王様が座るような椅子にちよこんと両足を投げ出すように座っている。

アホ毛がくるんとたったショートヘアのお嬢ちゃん(見た目は幼稚園児)

きたね。幼女ぶーむ(オレの中で)
だって夢に出てくるぐらいだしね。

「これこれ、こっちに帰って来い。夢の中で妄想するなに」
「うむ。苦しゅうない」

はあ、と幼女にまでため息を尽かすくらいいい男と。

「わらわは、創造主たる神王神おつかみなのに」

「ふん。そーなのか」

「うん、でな。きみに言いたいことがあるに」

「なに？愛の告白？答えは勿論OKさ、三人目でよければ」

「違うにつ！！一番偉い人を目の前に三人目って舐めてるに！それ以前に人として変態に！」

「そうかに？」

「真々似々す々る々な々に！！だいたいわらわは見た目は幼女に！変態以外何でもないに！」

じたばたと地団太を踏む様子は可愛いの一言だな。

うん。サイズのあつてない着物の下にかぼちゃパンツはいてるあたりもいい感じ

グツジョブ アホ毛

「いいかに？」

喋ると同時に動くアホ毛。思わずアホ毛中心にしてみせまっせ

「この世界にはこの世界のルールがあるに」

ぴこぴこ…あゝ癒されるう

「この世界は大きな国が8つあつてそれぞれに異世界より召喚されたものが8人代表としているに」

偉そうにしゃべってるのにこのふにふにとのミスマッチがまたたらんのなんのつて

「……聞いているに！！？」

「うんうん。聞いているよ。その8つの国の代表者がお互いを消し合つて残った一人が真の神としてその世界を先頭立って指揮してくんだろ？ああ、可愛い…抱きしめてもええか？」

たしか、寝る前にアリアちゃんがそんなこと深山功一に言っていた

気がする。

「話を知ってるなら話は早いに…それにしてもムカつくのに」

じと目で見つめられてもうれいだけなのだ

ふははははは

「で？」

「君のおかげで新神が予定よりも早くこちらに来れたに」

「？つまり、もともと深山功一が選ばれたものだったのに俺が先走ってこの世界に来たと」

「そういうことに。その辺はこちらとしてはありがたいことだったのでお礼を言うのに。ありがと」

ふむむ、なんだか腑に落ちないな

「ちゆうことで、何かお礼してあげるから、そのお礼を受け取ったら元の世界に戻ってほしいのに」

「ふむふむ。どうせその辺は俺専用ハーレムとかなしの方向だろうな」

「人権は大事なのに」

「じゃあ、堅実なほうとして、大金持ちとか」

「それはおっけーなのに。そっちでいく??」

「だが断る」

「今までの流れなんだったのに??!!」

驚く顔も可愛いなくだが、こらえるところはこらえる男。田中彼方

「オレは、自分の意志でここに来た、なぜ帰らねばならん」

そう。俺は情弱な深山功一と違い、自らの意思と努力でここに来たのだ

最強になるために、ハーレムを作るために。

可愛い子を侍らせて、最強の子孫を残すためにっ!!

(? ? ? ? ? どんどん流れが変わってきている)

「え？邪魔しそうだからに」

……それは否定できないなw
「でも、よくわからん熱意は伝わってきたに…きみに少しだけチャンスをやるのに」

突如、杖でポンと白い床をつつくとそこからぼっふと箱が二つ出てきた。

小さい箱と大きな箱

「どちらかが、元の世界に帰る…ただ、元の世界は友人と共にかはおち状態だに」

「うっわきんも」

「どちらかが、この世界に残る…お礼の意味も込めてチート能力説明本プレゼントに」

どちらか、天国 どちらか、地獄…というか、身に覚えのないホルート

…。決めた！

「大きいほうだ!!」

オレは迷わず大きいほうを開けた。

ここで当てなきや、主役としてなしだろ！

「はずれ。帰還に」
あれ？

夢で可愛い子と出会ってからの（後書き）

どこまでも主人公らしくない男。田中彼方。

一体どこまで落ちるんでしょうね

あ、これ以上落ちないか。行くところまでいってるしww

オレの才能と俺の力

どうしましょうか。どうしょう？

主人公として一番外しちゃいけないようなところ外しちゃったぜ
ってまじどーしましょ

「てことで送還箱を開けてさっさと帰るに」

「異議あり！！」

とりあえず大声出して阻止してみた。

こんなところで物語終わってもしゃーないしな。てか、終わったら
困るしね。

これ、なんていうバットエンドルート??地味すぎね？

「もう、なんなのにな？チャンスあげたのにものにできなかった自
分の運命を呪えに！」

地味にきついこと言うなこの子供神たま。

ツンデレかこのやろう。それはそれでありだ。

「もう一つの箱が、本当に天国なのが保障されていない！だから、
フェアじゃないとおれは叫ぼう」

「我儘のあがきにもほどがあるに。わらわは冗談入ってもウソはつ
かないのに！」

「うそつきはみんなそう言うんだ。ちなみに俺は嘘つきだ」

「このタイミングで自己申告する意味がわからないに！！」

自分には正直だとはつきりといえる自信はあるぞ！

「分かったに、そこまで言うなら箱の中身を確かめてみるに」

「はいはい」

ってことで俺は小さな箱を開けた。

お…入ってる入ってる

なんか小さな手帳っぽいの

「ほら、証明されたんだからさっさと小さな箱を開けて帰るに」

「手帳の中見ていいかな？」

「む？うん…ま、どうせ才能ないとできないし、記念に読むだけ読むといいに」

「寛大な神様だなあ」

適当によいしょよいしょしておけば単純な子供神たまあっさり引っ掛かりそうかに？なんて照れている。

うわ照れ方可愛い？

「なになに…」

せっかくのチャンスを可愛いとはいえ神たま観賞でつぶすわけにもいかないのでパラパラとそれらしいものを読む。

……

……

…よっし。これだ！

「神たま」

「誰が神たまに！！ちゃんと…」【田中彼方は今から運命の箱を選びます】「…」

文句をいう神たまの言葉を遮り、その目をじっと見つめ催眠をかける正直チートまっしぐらの説明書だとしても神様に聞くのかどうか心配だったが。

「っていうことで、さっさと箱を選ぶに！！」

っていうことってどういうことだ？

子供って単純だから催眠かかりやすいんだよねww

簡単に引っ掛かり今から箱を選ぶという風にかえさせてもらった。

「小さいほうで」

「ぬぬぬあたりなのにな！！仕方ないから、このまま世界に居さ

せてやるのに！」

「あざっす」

ごめんな、ろり神たま。

オレだつて本当はこんなことしたくはなかったんだよ。

でも、催眠つてエロいことに使えそうな気がしなくね？

うはw考えたらずりたくなってきたww

∴いや、おれ無理やりとかあんまり好きじゃないからしないけどね？
しないよ？しないつてば。まじで。∴多分ww

「仕方ないから、そのチート本もやるのに。その本に書いてることは才能があれば何でもできるのに」

「才能つて何の？」

「その本を使う才能。ま、何千万人に一人いるかないかの確立だからほとんどただのメモ本なのに」

「∴へ〜」

やっぱ俺、才能あんじゃん？

「じゃ、そろそろ夢から解放してやるに」

「その前にひとつ」

「ぬ？」

「深山功一その他7名が神に選ばれこの田中彼方が選ばれなかった理由を教えていただきたい」

神たまは一瞬止まって考えた

「容姿が良かったから」

「オレが？」

「逆だよ」

まーじで〜？

……。

.....。

「そ…そんな理由だったとはあああああああ！！」

「嘘に決まってるに」

あ、やっぱり嘘か

一瞬悩んでしまったぜ。

何をつて？深山功一の顔面を潰すか深山功一の髪の毛潰すか

「ただの運だに」

それもどうよ

「ふん。ただの運など俺のカリスマとあふれる才能とほればれする

ような

「はいはいはいもういいに。さっさと起きるといいに」

最後まで聞いてほしかったな

オレの才能と俺の力（後書き）

ハーレム状態も目指そうかな

あはんなどこも混ぜようか考え中Wでもぼくへただだからな

そろそろ感想とか欲しいなあW Wとか呟いてみる

おれの愛人一号(？)

ちゅんちゅん、ほげ

遠くか？近くか？

とにかくものすごく変な泣き声で俺の意識は覚醒された。

(ほげーって)

「……は。…夢なのか」

座敷にしかれた敷布団

旅館のように寝心地は悪くはなかったが、深山功一の待遇に比べたら月とすっぱん。

その辺は気にしたら負けだ。

あえて詳しくは表記しないけど。しないけどね！！

「ん？…ふ…ふはははははは！！」

夢じゃない。夢じゃないぞおおおお！！

何故なら手元には実際夢を見たチートの本があったからだ。

ふふふ、勝てる…これなら勝てるぞおおおお

「深山功一、破れたり！！」

オレは布団をふっ飛ばす勢いで立ち上がり、朗らかな晴天に向かって高らかに笑った。

「おはよう！お兄ちゃん！！」

この声はっ！！

「おっは〜！テトラ！！」

オレの部屋の襖を少しだけ開いてそこから隠れるようにテトラが微笑んでいる。

ううwなんて可愛いんだ

「おっは〜？あは、変なお兄ちゃん。もうすぐご飯だよ！着替え持ってきたから着替えたら食堂に来てね！」

「ありがとう」

オレは、テトラから着物っぽい服を受け取り、お礼にそのキユートなでこにキスをした。

え？変態？違うよ。おれ、キリスト教だからさ

お礼だよ。おれい

「わ〜なんか、照れる！お兄ちゃんのエッチ！」

ちよつと照れつつも嬉しげに立ち去るテトラ

あ〜も〜マジカワイ〜癒されるう

「さ、さっさと着替えるか」

着替えて食堂（だと思われる）に行くと、オレは確実に食事にはぶられた状態。

つていうか、深山功一とその他の人たちがもうすでに食事中だった。

…ふっ慣れたさ。つらくなんてないさ。

「どうぞ！」

お嬢さん。かと思いきや、食事を運んできたのはおっさんだった。

「あ、ありがとう」

……なんか、いろいろ複雑。

食事は申し分ないが普通この作品の流れ上可愛いツンデレかドジっ子メイドさんとかじゃないの？

「午前はこの村の見回り午後は修行を行っていただきます」

「お？」

食事を終え、深山功一のところに行くときのおっさんが今日の一日のスケジュールを本当に簡単に説明していた

「案内や、修行のお手伝いはこの私がいたします」

「アリア…修行って何のこと？」

「新神様の仕組みはご説明いたしましたね？それは力を持って制することもあるのです」

もろ戦争。いい感じの物語っぽさだな

「つまり、新神様には他の神を上回る力を手にし、この村、この国を庇護してほしいってことか」

「あ…彼方」

「お付きの人…」

おいコラアリア。いつの間に俺はお付きの人になったんだ。

深山功一の服は異世界には似つかわしくない、袴姿。

神様にするのならいいのかもしれない。が、動きづらそうだ。

「今日は一日忙しそうだなあ、深山功一。だけど俺はついていく気がないから、さみしいからって泣くんじやないぞ？」

「寂しくねえよ！そうだけど、お前は一日何をする気だ？変なことしそうで心配なんだが」

「何々、ただオレはオレで村を回るだけだって…なんなら可愛い女の子を監視につけても構わないぞ」

「そうですね…貴方も新神様のご友人ですし、貴方にも部下を数人とえましよう」

「まじか、女の子でよろしく」

ものすごく不承不承な感じなんですけど、ま、たなぼたってことで我慢

お付きが来るまで待つっておけと言われ深山功一たちが出発してから数分後

やっとそいつは来た

「お…どお〜も〜」

「ん？」

「あんたが…お付きのひと？」

来た人は確かに注文通り、女の子。

肩で切りそろえられた蒼い髪どこかだる気で、知的な感じ……。多分こいつSだ。

「アカツキ・ユルギよろしく」

「ユルギか…よろしく。俺は田中彼方、最強になる男」

「はいはい」

特に突っ込まれもせず握手握手。

「私、この村出身者じゃないから案内はできても詳しいことは説明できないぞ」

「だろうな。というかユルギ。お前エルフかなんかか？」

「だろうな。というには理由が二つ。」

まず、耳が他の人とは違い長くてとんがっている。

そして、服装がこの村の人とは違って和風のものではなく、なんていうか、わぁ。近代未来的

みたいな身体にぴっちりした感じの…はぁはぁな感じの…服装だったからだ。

「そ、エルフ…今じゃ珍しいかもね」

おれの愛人一号(?(後書き)

エルフ。いいよね

知的な感じのS。いいよね

メガネにしようか悩んだけど、うん。
このままでいいや。

村っていつか森じゃね

「この村はぶつちやけ発展が他と違って遅れてるな」
歩いてても歩いても自然が目から出ては行かない。
うん。田舎に帰るうとかが喜びそうなところだね。

着物みたいな服装をこの村の人は好むのか、ほとんどの人がその恰好をしていた。

まるで、タイムトリップをしたような気になる。

ワールドトリップだけどw

「ユルギはどこから来たんだ？」

「他のところと違う文化の発達した所から来たんだ。エルフは独立種族どこの国にもいて、どこの国にもいない」

なんだか寂しげでどこか誇らしげなユルギの言葉に、ちょっと胸キ
ュンしちゃった。

「あつちに滝がある、少し休もう」

修行僧もあらびっくりなでっかい大きな滝。

そのふもとで小さな子が船を浮かべ遊んでいる。

「もう少ししすれば、ここで泳ぐものもいるらしい」

「なるほど、ところで、ここには水着という素晴らしい文化はあるのか？ビキニが重要なのだが」

「さあ、どうなのだろう…この前の秋に来たばかりだからな」
なるほど、エルフは渡り鳥のような者なのか。

子供たちが空気を読んだのかたまたまなのか、ちょうど滝から離れ

どこかへと遊びに行ってしまった。

…二人つきり。

これってあれですよ。チャンスってやつですよ。
神様ありがとうございます

「ユルギ…」

オレはユルギの手を握ってそっとその体を近づけあつういキッスをかわそうとした。

「一発くらつとく?」

ちよつと怒った気な顔をしたユルギは（もう照れなくてもいいのに）
てから小さな種のようなものを取り出した。

「ちゆう?」

どっかーん!!!

その種は急激に光り、爆発。

「…がはっ…なんて強烈な照れ隠しなんだ!!!」

「違うから。手加減してやったけど、本当ならこんなものじゃないから、以後慎むように」

「…なるほど、しかしすごい威力だ。…だが、キス拒否は断る!」

「……はあ」

キスをしないといろいろなんか、あれじゃないか!

とりあえず、女の子を知るにはまずキスからって言うじゃん!

え?言わない?いいじゃん、キス!

「その馬鹿な気迫に免じて今回はこれだけにしといてあげる…ほら、立ったら?」

そういつて黒こげでひっくり返っている俺に手を差し伸べてくれる。
うん。やつぱりいいなあ。

クールなのにたまに魅せる優しい一面。

ギャップ萌〜ww

「…やっぱり手を放してもいい？」
「だめ！」

顔が煤けたので滝の水で顔を洗う。

…チート本が燃えなくてよかった。焦げたのは俺の髪の毛だけのようだ。

「今の本当にすごかったな。なんだったのだ？」

「ん？魔法種マホウシユの炎の種だよ」

「マホウシユ？」

「そう、魔力や神力のないものが魔法を使うための道具」

そういつて先ほどの種を腰のポーチのポケットから取り出す
つまり、魔法道具ってことね。

「私たちエルフだけがこれを作り出すことができるんだ。…ちなみにエルフはこれ売って生計を立てている」

ファンタジックの世界もいろいろ大変なんだな

「つぎ行こう。時間がなくなる」

「了解」

この村は思ったよりも広くていろいろ回るところが多かったが、どこに行っても樹があるというのがものすごく特徴的だ。

なんていったって足もとが木の根もとでできるところもあったしな。

とりあえず。

愛人一号との村の見回りはそうして終えた。

どうせすることもないんだし、明日はユルギに教えてもらった人気がない空き地でチート魔法の勉強でもするかな。

ちなみに。

村っていつか森じゃね(後書き)

ユルギにたいする愛が膨らむ作者ですW
いや、でもやっぱリテトラが好きだな。
小さい子に慕われたいww

馬鹿と煙は高いところが好きらしい

この世界は八つの国で成り立っている。

そして、各国には異世界より呼び出されし八つの人が神と呼ばれ戦いの筆頭として担がれている。

彼らは、天帝の意により国によって己が才能を駆使し争いあい、その大陸の覇権を得るために己を磨く。

覇権を得た覇者は何でもひとつ望みを叶えられ己で命を絶つか殺されるかするまで老いることなく生き続け世界を守り続ける。

これが八神の世界での常識であり、其れが理

そらを自由に、とつびたっいな

ほっい。チート本

あっはっは。とっても楽しい、ちゅとほん

はい、てことで、俺は今空の散歩中です。

いやあ、便利だよ、チート本。

僕ってば才能あるみたいでなんでもできちゃうみたいw

はるか下の方では一生懸命深山功一がバカの一つ覚えのように剣を素振りしている。

がんばるねえ。汗臭そうだ

オレは樹よりも高く雲と同じくらいの位置…というか、雲の中で地

上を見守っている。下の人達は騒ぐことなく暮らしている。一人くらい気づいてもいいんじゃないかな？とか思っただけで少し切なく思う。

ま、ここにきて数週間、特に変化もなく平和に日々を暮らしている。チート能力を存分に体に付着させているから別に暇ではないが、なんとなくそろそろ何かを期待してしまうものだ。

たとえば、エロシーンとかエロシーンとかエロとかエロとかエロしかないじゃんって？

だってこの村健全過ぎるんだもん。

男の子の必須アイテムあはんな絵本がないんだよ？

こんな江戸時代的な（平安でもいいかな）ところにギャルゲとかあるわけないし…

ああ、そこは誤算だった！

禁断症状で手が震えそう

とりあえず俺は地上に降りると

「お兄ちゃん！」

「ん？ああ。テトラ」

ぴよ〜んと可愛い小さなテトラが飛びついてきた。

「おはようお兄ちゃん、早朝からいったいどこに居たの？」

「ん〜秘密？」

「え〜」

む〜とほっぺを膨らます様はマジサイコー

ほっぺにちゅーとかしちやおうかな〜

……ごめんなさい別に後ろから殺気を飛ばさなくてもマジ何もまだしないから…

「おはようございます、ご友人様」

「おはよう、アリア。何度も言うが、俺はお付きでもご友人でもなく、田中彼方という名だ」

「テトラ、新神様に水とタオルのご用意を」

「はい」

てとてとと走っていく可愛い妹ちゃん

妹に近寄る不審な男。

大事な主君のおまけの男と周りで言われているが、

アリアのこのちよつと一歩引いている態度はいったいどっちから来るものなのか：前者かなw

「おはよ、彼方」

「うるさい黙れ深山功一」

「いきなりか」

後ろから汗のくっさい匂いをぶんぶん漂わせながら、深山功一登場。出なきゃいいのに。

むしろ死ねばいいのに

「もう練習をやめるのか？」

「今日はな、というか、挨拶を返せ」

「死ねって？」

「おはようって」

持っていた竹刀で頭を叩かれるのを手加減して減速しているあたりを見越して受け流し、手首をひねりあげる。

「暴力はんた〜い」

「いででででで！」

実際暴力をふるっているのは俺なわけだけでもw

「新神さまっ！！？」

ミニス力巫女さんにたっぷり怒られました。

「よろしいですか？」

「はい」

俺たちは道場のようなところに連れてこられ、なんだか真剣な話を聞く。らしい。

なんか、自己紹介の時に聞いたなあゝ的なおっさんが大きな紙を持ってきて俺たちの前に敷いた。

……地図のようだ。

全部で大陸が8つ

ひとつの小さな大陸を中心に8つの国がドーナツ状に囲み、その東西南北に大陸がちりばめられている。

ちなみにこの国の名は、現樹あらいじゆらしい。

うゝん。なんだかへんてこだな。

「新神様にはこの真ん中にあります天帝の国、鳳来ほうらいへ行つていただきます」

「何のために？」

「使仕ししを確保するためです」

獅子？四肢？ししゝ

「使仕を確保できなければ、この戦いに不利になります」
死しかゝ？

深山功一が死んでも俺は構わんぞ。

「なるほど。戦力を取りに行くようなものか。腕が鳴るな」
しかし、よくわからんが、面白くなってきたようだ。

俺もししとやらに興味がわいてきたしw

ついていこww

馬鹿と煙は高いところが好きらしい（後書き）

いや〜忙しくて放置し過ぎてたねw

読者の皆さん。ごめんなさい。

つてことであつと物語が進む感じ

でもぶっちゃけ先のことを考えてなかったりしてw

雲で寝てみたいと誰もが思ったことあるでしょう。多分。

そんなことしたら死んじゃうけどねw w

オレは今世界の中心に居る（前書き）

サブタイトル

「オレは今世界の中心に居る。だからどうした」
が全文です
だからどうしたw

オレは今世界の中心に居る

使仕とはなんぞや？

答え「使仕とは、神たちの即戦力となる異形の獣たち。

強いものや使仕が沢山いればその分戦いに有利だが、使仕を得るためには闘わなくてはならないため（この辺ポケ　ン風）ほとんどの神が一匹得るので精一杯。

「以上、使仕の説明でした」

「おい、彼方どこ見てしゃべってんだよ」

えくと、読者？

それにしても説明が長ったらしくなっちゃった。

どうでもいいけど。

「それにしてもここに着くのになった1時間だなんて驚きだな」

「というか、テレポートがあるのに驚きだ」

「天帝のお力のおかげです」

説明

ここはこの世界の真ん中にある大陸です。

天帝をお願いしたらここにテレポートしました。

そういえば、今気がついたのだがもしかして天帝ってあれか？

あの神たまのことか？名前忘れたけどw

可愛かったなあ〜とくにあのほっぺww

「新神さま、お気をつけてください。使仕となる獣のほとんどは凶暴です。それにもしかしたら他の神もいらっしやるかもしれません」
運が悪けりゃ使仕手に入れたぜいえいえ〜いってところで武器なしの俺らを見ればオレなら喜々として襲うな。

うん。その設定いいな。それで死んでくれないかな、深山功一くん。

「新神様でございますね？」

「え？」

振り向くとなんだか威厳オーラあふれる女性が頭を下げている。うん。こういう隙のない真面目な女性は少し苦手だ。嫌いじゃないが。

「この度はお渡り誠にめでとうございます」

「あ、どうも」

深山功一も急いで頭を下げるとアリアもそれに続く。

「現樹国、新神、深山功一様にございます」

そーいえば、現樹？そんななまえだったな、あの国。

ちよつとまでよ・・・？村の名前力タカナじゃなかったか？

国はびつくりするぐらい当て字の漢字なのに。

「天子にございます」

天使じゃないのか。ちよつと残念

でもちよろりとのぞく白いうなじがセクシー！うん。いいね！！

「捕獲のため滞在できる刻は3日。その間は緑空宮で過ごされるがよろしいでしょう」

「ありがとうございます」

「なお、もし捕獲のさいに死亡してしまったり、他の神との戦いに敗れば、その時はその国はこの戦いから除籍されますので」

……なんだか、シビアだった。

「他の神はおいでになられておりますでしょうか？」

「それは申し上げられません」

アリアの質問は気になるところではあるだろうが、運営がそんなこと言う訳もないだろう。

深山功一ほか、数名はとりあえず日も沈むことだろうし、緑空宮へ休もうということになったが、俺は少し見て回りたいため謹んで辞退した。

「貴方は新神様と共に異界より参られたから、ここまで来るのに許可したんですよ？だから、変な行動は慎んでくださいね！」

「だ〜いじょうぶだって、アリアちゃん。周りを軽く見て回るだけだから」

「迷惑かけんなよ？特に女性に」

「だまれ、ウジ虫」

いろいろ言われたが、適当に聞き流して俺はさっき去っていった天子の女性を探し出した。

「あ、いたいた」

「天子さ〜ん」

「はい？」

緑空宮の周りは石畳などで舗装されているが、少しはいるともはや野道

住み慣れた技なのか長い足も見えないようなスカートをはいているのにもかかわらず天子は何でもないように動いている。

「その、使仕つてさ、俺でも捕まえることできるの？」

「できますよ」

あっさり。

「どうやって？ボールでも投げんの？」

「まさか、使仕が入るボールなどありません
ですよねww

つか、あれどっいう仕組みなんだろうね。

「使仕となる獣を斃し、その獣の一部を飲み込むのです」
え？なんて？

「獣を斃すと獣はその強さに敬服し、自身の一部を差し出してきます、それをのみ込むと契約となります」

わあ、かたん、とってもグロテクス
たとえば、トラだとしよう。

毛か？毛なのか？牙のが格好いいが涎ついてそう。

「ありがとう」

とりあえず天子さんにお礼を言っておく。
飲み込むのか？よだれは嫌だな？

オレは今世界の中心に居る（後書き）

女性ばかりが出てくる小説 W

かたよるなくキャラ。

主にロリ

好きなんだからしょうがない W だめか W W

大きな鳥でまよったゼーット

ポツリポツリと雨が降っている。

別に大降りではないし、傘をささずとも気にならない人は平気なほどの小降り。

しかし雨は使仕を明日までに捕まえなければならぬ身としては、重く、じつとりと気力とやる気を湿らせてきた。

「はあ〜」

思わずため息がこぼれる。

まだ朝には早いため太陽が現れたばかり…時にして4時から5時かと思われる

昨夜使仕と対峙した途端に腰を抜かし三日しかない大切な一日を無駄にしてしまった。

ここに訪れた日を入れれば今日で三日目。

今日明日で使仕を捕獲できなければ明後日の早朝には戦力のないまま下国させられてしまう。

「はあ〜」

昨日の御付きのものたちのあの落胆の顔と、巫の失望したような冷やかな目を思い出して私は再びため息をついた。

彼女の名は秋津沙耶

究温国^{きゅうおんこく}、宮神^{みやがみ}…其が彼女の肩書だった。

「参ったゼーット!」

…シーン

……今一人だから誰も笑わないが、誰か居たとしてもこのネタでは笑わないと思う。
じゃあ何で言ったんだろうね？多分寂しかったからじゃないかな。
不肖この田中彼方、まさか迷子になると思わなかったから、ちょうどしに乗っちゃった

このジャングルよろしくな森。
ターザンが出てきてもびっくりしないだろうな……いや、きつとびっくりする……とりあえずものすごく大自然。
すぐに使仕と呼ばれるモンスターが現れるのかと思いきやそうでもなくて、やっと見つけた大きな鳥？つばいのに襲い掛かった瞬間逃げられ、周りも見ずに追いかけていると、何か踏んでふっ飛ばされて木に引っ掛かってます。

「やれやれ……」

幸い大きなけがどころか擦り傷しかない神に愛されている男、俺。

「おや？」

今やっと視界に入ったのだが、旧中国の宮的な建物発見。
アレが緑空宮か？

頭に泥とかついてないか確認しつつも華麗に地上へと降り立つ。

沖縄のあれみたいだ。首里城

それよりも立派だけど

「あー!!」

ちょうど首里城（仮）のところへ向かってあの例の鳥？が優雅に飛んでいた。

「ここであつたが百年目!!」
とうつと適当につかんだ手頃な石を投げ
がっす

「……手ごたえあり!!」

墜落したであろうところへ、追いかける。

がさっ

「きゃああー!?」

「む?」

茂みをこえるところは首里城庭だったのか、女の悲鳴が聞こえた。

「あなた…だれ?」

黒い髪の少女だった。

自我が弱そうな、でもどこかしっかりしてそうな。

どこにでもいそいで、見かけない。田中は沙耶に対してそう思った。

「田中彼方」

「え?田中…?つて、もしかして日本人…神…?!」

名乗ると同時に彼女は顔色をさつと変え、どこか助けを求めるように周りを見渡した。

…なんか、叫びそー

叫ばれると困るので、挙手をして訂正をさつさと入れた。

「あ、僕日本人ですが、神ではありません。友人が神に選ばれたついでに巻き込まれてしまっただけなんです」

「…本当?」

「もちのろん。本気と書いてマジですよ」

ここまで言えば、向こうも安心したのか警戒を若干といてくれた。それにしたってこの子は用心がたりない。

今のセリフでは自分が神だといっているようなものだ。

それなのに本人の言葉以外信用できるものもないのに警戒を緩めるだなんて、ここにきて日が浅いのか、純粹なのか。

ピュアな子は大好物です。

「あ、私は秋津沙耶といいます」

「これはどうもご丁寧」

「…田中さんも、ついてませんよね…」

ちよっとうつむきながら沙耶は呟くように言った。

「……僕はともかく、君は神に選ばれているのに、「も」とはどういうことですか？」

「私なんて、神に選ばれても、特になにもできないし、昨日だって使仕狩に失敗して巫さんたちに白い目で見られて……」

なるほど、あの神たまは次の神候補たちを能力で選んだ訳じゃないらしい。

それにしてもこの子の落ち込みようを見ると、いじめたくなる……Mっ子か？

「くおおおおおん!!!」

「?!」

「!!!」

大きな鳥が一声鳴き、襲ってきた。

わあゝたんこぶできてるよw

怒ってる？怒ってるw

「きゃあああ!」

「よいつしよあ!」

沙耶の頭を抱え込んで翼で体当たり攻撃をよける

「なんでこんなところに……宮の近くは大丈夫だって言ってたのに……!!!」

「よけて!」

もう一度大きく戻ってきての体当たり

ごめんなさい、たぶん僕のせいです。

ちよつと余談なんだけど、さっきの攻撃よけるために押し倒したんだけど、ちよつとはあはあしちやいそうです。

我慢がまん 今リアルでそう言うことしてる状態じゃないから

大きな鳥でまよったゼーット（後書き）

他の神様も出してみた。

やっぱりというか、田中彼方使仕捕まえる気満々。

身体能力アップとか付属能力をチート本ですでに使ってるってこと
でw

ハーレム計画実施中？

なんともしつこいことにあの鳥は何度も旋回してこちらに攻撃を仕掛けてくる。

しかも、知能は高いのか建物に向かって逃げないように建物側から攻撃を仕掛けてくるという。

うっわ。うっぜ

「走って！」

とはいっても、あの首里城（仮）から沙耶の仲間が出てきても困るのは俺自身なので手をつないでなるべく森へと走る。

樹が邪魔で体当たりはもうできまい。はっはっは！ざまあ！

「ぜえっぜえっ…！」

「大丈夫？」

といってもこのまま見逃してくれるわけじゃないし、沙耶の体力は限界のようだ。

ここらでひと花咲かせましょうかい！

「これを握って？」

「へ？」

俺は沙耶にその辺に落ちていた長い木の棒を手渡し、その腕を支えてあいつのほうへ向けるようにした。

「【集え雷撃】」

お約束条項：これはチート本にあった簡単攻撃魔法の使い方によるものです。

ばちっばちちばりっ！！

木の棒の先に電気が集まる。

「なっ何これ何これ！！」

「はなて！！！！」

「きゃっ!!!」

俺の言葉が合図だといわんが如く、その先端の雷の塊は銃のようにまっすぐ放たれとりに直撃。

「きゅおおおおん!!」

「おゝ効いてる効いてる」

焼き鳥の出来上がりか?

「…あ…あなた、いつたい何者なの?」

「僕ですか? いやだなあ、僕は田中彼方…最強になる男、田中彼方ですよ」

「はあ?」

俺の言葉に不足なのかちよつと頭の周りに? マークを浮かべて彼女はジ―と俺を見ている。

いやあ、それにしても魔法を使うのって気持ちがいいなあ。

魔術師、いいなあ。騎士っぽいのもいいけど。

欲張って魔法剣士になろうかなあ。

「きゅううっ」

「きゃっ!?!」

「お?」

ぷすぷすと煙が立ちながらも、大きな鳥はよろよると起き上がり、その口から小さな珠を出してきた。

淡い光に包まれた珠…これが噂の体の一部なのかもしれない。

「どつぞ?」

「え?...だつて、これは」

「この鳥だつてどつちだか分かつちやいなから、出したまんま待ってるんだし」

俺は、この鳥さんとは相性が悪いらしい。

「どつぞ。あげる」

「ほ、本当に?...ありがとう!」

ぎゅーっと抱きつかれてちよつとラッキー。胸のあたりが寂しいの

は、我慢しよう。

やっとここにきて初めてなんじゃないかというような笑顔で彼女は鳥の珠を少し戸惑いつつも飲みこんだ。

「…そう、あなた。ツバサって言うの」

「きゅるる」

なんか、映画のワンシーン見てるみたいだ。

だけでもただけ。やることはちゃんとしないとな。

「沙耶ちゃん」

「はい？田中さん…？」

がくりと自分の腕の中で眠る少女を、そつと使仕の背にのせてあげる。

「まだ、この俺の力を他のやつに知られるわけにはいけないんでね」
俺と協力した苦労の末に倒したということにした。

「お前も、また黒ずみにされなくなかったら言うなよ」

「くるるる」

お？なんか好戦的な目だな。やっぱこいつ嫌いかも

「宮神様！」

「おつと！」

やっと仲間がいないことに気がついたのが、声が聞こえる。
見つからないうちに退散退散つと。

「お？いつの間にか、雨やんでら」

「宮神様」

「……ん？」

沙耶はぼんやりとする意識の中、男の声で目を覚ました。

「あ…巫…の、キリ…さん」

「宮神様、独りで出掛けることの無いようと、あれほど申したのに！」

「ごめんなさい」

究温国の巫は、赤毛の端正な顔立ちの男
よく失望されては、望みを押しつけられる

「しかしよくできましたね」

「へ？」

そんな彼の表情は、いつものがっかりしたものではない。

「使仕です」

そう、ツバサをみて、彼は微笑んでいた。

「よく頑張られました。さすが我が神」

「……うん」

私は、そつと溜息をついて、空を見上げた
雨は止んだが、まだ、空は曇っている。

「迷ったぜ」

てか、迷ってるんです。忘れてたぜ

野宿か？二日目の野宿か？

意外とここで野宿ってきついでだぜ？

さっきまで雨降ってたからじめってるし

すつ飛ばしてるけど、使仕を捕まえたからそろそろ帰りたいんだが。

「フィン、帰り道わかるか？」

『さあ？宮は結界に守られてて私たちにはわからないわ』

捕まえた使仕その？ 妖精フィン

『あの、陰気くっさい鴉にでも聞いたら？』

『なんだと？聞き捨てならないな！』

捕まえた使仕その？ 鴉天狗ヤト

「喧嘩しない」

『だつてえ』

『そつちからだろうが!』

あとはどSな妖狐と武器に変身するよくわからん生き物
最後以外女子オンリー

もう十分だから、いいんだけどなw
迷ってて帰れないぜ

ハーレム計画実施中？（後書き）

使仕。女ばかり。ですよねーw w

補足説明 妖精フィン。小さいけどポインちゃん

鴉天狗ヤト。ストーン

妖狐イノリ。女王様

よくわからん生き物。何でも武器になれる（飛び道具以外）スライ

ムっぽい

名前はない。w

はい。何の説明だよ。って感じだねえwでも、目を閉じれば見えるはずだw w

萌っ子と出会ってメガネからの

もののけ姫っぽい森をぐるぐる？

さまよつとります？

うう、なんだかなげでぎだ〜

「帰りた〜い…」

この世界には居たいけど。

緑空宮つてどんななんだつたかな〜？屋根とかが緑色しか覚えて無い
ぜ

『あつちに何かの気配を感じる…』

フィンがパタパタ

上からゆつくり下りてくる。

そろそろ夜が深くなってきたしフィンが感じている気配は使仕かも
しれない

「よし、案内してくれ」

が、それは人の気配かもしれない。

てゆうか、そうであつてほしい

「よつこいしょつと」

重い腰とか足とかを持ち上げて

フィンが指す方向に向かつて走る。

夜は辺りの灯りをどんどん消していくし、星の光は木々によってさ
らに微々たるものとなっている。ティンカーベルよろしく、フィン
の鱗粉のか弱い光を頼りに整備されていない野道をひたすら進む。

お化け出てきたらどうしましょ

「はらへりほ…」

いい加減限界。育ち盛りだもん。いくらチートでも腹はすく。チー
トで緑空宮行けばいいじゃんつて思ったが、本の暗くて字読めない
し。

え？も〜絶体絶命？

おずおずとこちらを見つめてくるのは、夢にまで見た獣っこ！！萌っ！

いや、妖狐の姉様も獣っこなんだけどね、こっ、ロリ系？っていうの？これよこれ！！

犬耳っ！！

「た、助かりました…ありがとうございます」

「いやいや、そんなことよりこの僕と契約しませんか？」

なんか、どっかの変態っぽくなったけど、気にしない

それにしてもこの足に当たったものはどうやら使仕のようだ。

野良だったら、これも俺ゲツチユウ？

こんな猿っばい大きくて可愛くも萌もないもんいらないよ

「よくも邪魔をしたな」

「あん？」

俺が滑ってきた崖の上にもう一人。人がいた。

メガネで気難しそうな男。うえ、嫌なタイプ

「誰だ。名を名乗れ」

先に切りだしてみた

「名乗ってから尋ねればどうだ？」

まあ、言われるのは分かってたけどね。

「この娘狙いか、メガネ！」

「さも俺をメガネという名前のようによぶんじゃないっ！！」

さりげなく、萌っ子を後ろに隠してボディタッチ。はあはあ。柔ら

かい。

っって違う違う。

どうしたものかな。

「俺は時間がない。強行突破させてもらっぞ」

言っが否やメガネの影から使仕？だと思われる黒蛇が現れた。

「二匹？」

「ふんっ驚いたか」

いや、僕もいつぱいいるんで二匹なのか聞いただけです。

蛇が腕に巻きつくときそれは形をかえ、やつけに精巧な剣となって一
気にメガネが襲ってきた。

「おや？」

俺はまるでダンスでも踊るかのように萌っ子と手をつないだまま避
ける。

メガネは俺を無視して萌っ子を狙ってきているようだ。

「驚いたか？武器に姿を变じることが出来る使仕はレアだからな」
そ…そうだったのか！

あの訳のわからない形のやつをそつと頭の端に思いつつ

そうか、お前レアだったのか。

ゲットしたとき踏んだだけなんだけどな。

「お前、どこの神だ？」

「尋ねるならまず、自分が名乗ったらどうだ？自分が言ったことだ
ろう？」

ぶっちゃけこいつ剣技がそんなにすくないので萌っ子と踊ってる
だけです。

でもメガネには必死に避けているように見えてご機嫌にでもなつた
のかやつと名乗った。

おおつかこう
「大塚晃…きりかみ錐神」

「深山功一。新神だ」

はい、ウソですけどね。

「…ふんっ宮神じゃないのか」

ぽつりとメガネ…えくと晃が漏らすが、すぐにまた攻撃を繰り返し
てくる。

「お時間です」

ふと、木の上から天子さんの声が聞こえた。

「…ちっ」

「ぜんっぜん惜しくなかったけど、残念だったね、錐神くん」
「誰だ」

天子さんの近くでもう一人の声が聞こえる。
隣に誰かがいるようだ。

「そうだね、挨拶にはまず名乗らないとね」

萌っ子が気がついたように敵意がないと示すためか頭をたれる。

「さくらへ ゆづり
櫻辺遊里」

萌っ子と出会ってメガネからの（後書き）

萌っ子は皆のアイドルです。

あいつ、すごかったんか？ by 田中彼方

名前、一応あるんだけど田中は呼ばない。

発音しづらいから

さらば鳳来。と、天子さん

「どこの神だ？」

「この世界に居る異世界人が皆神候補だとは限らないのを覚えておくんだね」

ちらつと俺を見ながら言うのをやめてください。

…知っているのだろうか？俺を？

「出口にご案内いたします」

天子さんが髯を掴んですたすたと帰って行ってしまった。

「ん〜今回も錐神が有力株かと思ってたんだけど……」
上から、すたつと降りてくる。

名前のとおり、女の子。

服はこのものなのか、よくわからない作りをしている。

…沙耶が来ていたものと酷似しているように思える。

耳に輝る赤い宝石のついたピアスがやけに目につく。

「君。候補じゃないのに面白いことしてるね」

「櫻辺、お前いったい何者なんだ？」

「…まだ、秘密〜、ま、候補じゃないとだけ言っておこうかな
そろそろ私も帰ろうつと」

くるりと回転して何も答える気がないといわんばかりに去っていく。
俺は呼び止めるということとはしなかった。

「あの…また助けて下さいました。ありがとうでした」

「いえいえ、それじゃ契約しませんか」

「ごめんなさい」

すごい勢いで頭を下げられる。

「私は弓良様に仕えているのでもう仕えるわけにはいかないのです
」

「……………あら。そうなの？」

「でもでも、お礼に緑空宮に帰る道をご案内するのです！」

『分かるわけないじゃないっ 結界あるのに』

フィンが影から出てくる。

彼女は滑っている間に影の中に戻っていたらしい。

「分かるのです。私には」

「分かった、それじゃ案内してくれ」

ふてくされているフィンの頭をなでながら、萌っこの後ろをついてゆく。

…思ったよりも近かった。

「あ、彼方！」

「やあ、久しぶりだな！」

ああ、知り合いに会えるって結構いいなあ〜それがこいつでも

「二日も何してたんだよ！」

「まだ夜だ。二日も経っていない」

「もう朝だよ」

「あ」

本当だ。夜が明けてる。

道理で明るいつて思ったよ。

それにしても深山功一もなかなか鍛えられたのかいい目をしている。どんなものかいい目なのかは知らんけど。

「で？そっちはどうなっていたんだ？」

「迷子でこんにちはでさようならだ」

「迷子だけ分かった」

そう言えばあの萌っ子はお礼を言う前に居なくなっている。可愛かったのにつ！！

「おれも、とりあえず使仕を一匹だけ捕まえた。後で紹介する」

「そうか」

「遅れてしまつて申し訳ありません、新神様」

「ぱたぱたと後ろからいつもよりも動きやすそうな巫女服
ちよつと露出多め？いいねえ」

「活動最終日ですから、気合を入れていきませんか！」

「おう。…彼方はどうする？」

俺か

「眠い。腹減つた」

「…そうか」

とりあえず緑空宮で食事をとることにした。

「フィン…あと、他のこも」

『なあに？』

影から返事だけが帰ってくる。

「深山功一に突っ込まれるとしつこいから俺が呼ぶとき以外は出て
こないように」

『はあーい』

勝手に出てくるのはフィンだけだしな。

食事を頼んで食べたあと、十分睡眠。

ベットふかふか。

なんとなく夢に神たま出るかと思つたけど、そうでもなく
目がさめると

深山功一らが帰ってきていた。

「ただいま」

「おう……」

「ずっと寝てたらしいな。大丈夫か？」

「寝過ぎで頭が少々痛む」

ところで巫女と神の距離が若干縮んだような気がするのだが、気の
せいだよな？

気のせいでいいんだよな？

「今日はもうゆっくりしたどうだ？明日の朝は早いらしい」

「そうしよう。…そういえばどうだったんだ」

使仕のこと

「今日はだめだった」

ちよつと苦笑い。でも何かは得たようだ。

必殺技とか？はんっ

次の日の朝。

天子さんがやってきた。

「では、最終登録を行います」

「はい」

俺はそれを欠伸をしながらみている。

「深山功一 4月15日生まれ。使仕は一頭。現樹国の新神……ただ今をもって正式にその位を授けます」

天子が何かを深山功一に授けた。

「証です」

「ありがとうございます」

透きとおった緑の小さな石がついたイヤリング

「……あれは」

櫻辺も深山功一のよりは大きいが似たようなものをつけていた。

「これにて登録を終え、現樹国にお戻りいただきませす」

足もとに魔法陣がひかる。

「貴方と、貴方の国に幸がありますよう」

深山功一は、しっかりとうなずいた。

小さなイヤリングを胸に抱いて

さらば鳳来。と、天子さん（後書き）

なんか頑張ってみた。

つづか12・13で一話だったんだけど長くなつたから二話に分割したw

やっと国に帰れるねーもっと早く帰りたかつたんだけど…

話変わるけど

そろそろ誰かイラスト描いてくれないかな〜秘密基地で頼んでみようかな??

どう思う?（知らねえよ

ただいま現樹国。 っておい村じゃないの?!

テレポートって便利だよな

だって気がついたら移動できるんだもんね。

でもさ、でもさ。

今、不思議の国のアリスよろしく

どうして俺だけさかさまなのかなあ??

「っつてことで、ぎゃあああああああああ!」

落ちます落ちますっ墮ちております!!

現在進行形で落下中!地面が近づいております!ご注意ください。

どうやって!?!?

「のおおおお!」

どうしてこう、毎回毎回俺だけにバットエンドフラグが立つものか?

神たまつては俺のこと嫌いな??

「おお?」

よく見ると、足元というか、眼前?には城のようなものが見える。

形はどことなく日本のような中国の城のような...

城を中心に多分街が広がっているのだと思われるが、なにせ樹が多

くてほとんど緑。

なるほど、現樹国。

樹が多いなあ。死にそうだなあ。

「そろそろやばいいい!ヤト!」

『お任せあれっ!』

ばさっ

再び頭がひっくり返るような感覚と一緒に気持ち悪い落下感が和ら

いだ。

「すまねえな。ヤト」

ばっさばっさと黒い翼。

別に鼻は長くないちよつと童顔のつるぺた鴉天狗。

胸に抱かれているが、そのつるぺたぶりにちよつと不満。

いや、彼女はつるぺただからこそ、活きるのだ!!

『大丈夫ですか？主。』

「え？あ。ああ、大丈夫ありがとう。ごめんなさい」

とりあえず落下速度は緩やかになったものの、やつぱ落ちてるネ

「どこかに隠れて着地できるところはないものかな？」

どうせ深山功一たちはあのでっかい木のある城の中にも手厚く歓迎されている頃であろう。

ていうか、元の村に戻ると思ってたのに！

城に着くなんて聞いてないよ！

てか、空に落とされるなんて聞いてないよ！

テトラとかユルギに会いたいよ!!

『あそこなどどうでしょう？…主？』

「はっ!!うん。そうしよう。大丈夫大丈夫」

いい感じな裏路地にこっそりと着地

「助かった、もう戻っていいぞ」

『はい、それではまた用がございましたら』

ヤトはそう言っつて影の中へと戻っつていった。

ヤトは、いい匂いがしたな。うん。

「さて」

ここから城に行くにはどうすればいいのかな？

久しぶりの地面だが、本当に樹が多い。

だけど、木々の隙間から光がさしているからまったく暗いとかじめじめとかそう言うのはなく

なんてーか、どっかの楽園の挿絵みたいなの？

ま、あんま町とか興味ないけど

「カワイコちゃんいないかな？」

いたらその子に城の行き方聞くんだけど

仕方ないから街にくりだしてみろぜ

大通りと思われる道にはさすがに人がたくさんいるしあの村と違って建物も少し近代的というかビルっぽいというか…なんだ。このミスマッチ感統一しろ。世界観！

「安いよ」

「おいしいよ」

などという掛け声が聞こえなくもないが

それにしても本当に樹が多いいな。空が隙間隙間にしか見えない。

ビルとどっちが大きいのだろうね。切ったら楽しいことになるかな。

てか、ここって火事になったら終わりじゃね？

「美味しそう」

ふと、小さなケーキ屋の前で14・5くらいの少女がじーっと熱心にタルトを見つめている。

なんだか、こういう風景に見覚えがある気がする。

そうだ。

3・4歳くらいの子供って、欲しいものがあるとそれをじっと見つめて、何を考えてか飲み込む。

その時のあれとよく似ている。

店員さんが注文を受けたタルトやケーキをカウンターの上に出した。シュバっ！ぱく！！

「あ」

「ああ！！」

やった。やりやがったあいつ。

食いやがった!!

「お客さん、困りますよお金払ってからじゃないと…それに順番つてもものもあるんだし」

「あむあむ…」

なんだか、この先の展開が目にもえてくるなあ。

「はあ。まあ、いいからお金を払ってくださいよ。2エムです」

えむってなんだ。マゾか

それにしてもやっと食い終わった少女はきよとんとした眼で店員を見つめた。

「お金?そんなものはないわ」

「ないって、あんたねえ」

やっぱりか。

しかたない。ここまでお決まりなパターンを見せていただいたんだ。助けてやるうじやないか。

「まあまあ、オヤジ。ここは俺に任せてくれないかい?」

「あんたは?」

「ふつよしな。名乗るななんてありはしないさ」

ものすごく不審者を見るような目で見つめてくる店員とお客と道行く人。

ただ、少女だけが喜んでる。

「あんたが代わりに払ってくれるのかい?」

「ふ、そのくらいお安い御用よ」

ガサガサ。

あ、そう言えば俺、この世界の単価もってないや

「……………」

「……………」

オヤジ、そんなに見てくるナ。視線が痛いぜ。

「……………出直してくらあ」

「あんたいつたい何なんだっ!!」

俺?俺か?

「俺は最強になる男だ。金がないがね」

「だめじゃんっ!」

そんなに言い切らなくてもいいのにな

「彼方さんっ?」

ふと、救世主の声が聞こえた。

「アリアちゃん!!」

「一体何をしているんです?姫さまと一緒に!」

え?

俺にぴったりといつの間にかくっついていてる少女はにっこりとほほ笑んだ。

「お前、気に入ったぞ」

とりあえず、俺よりオヤジのほうがびっくりしたことはまず間違いない。

ただいま現樹国。っておい村じゃないの?! (後書き)

チートは使えてもお金は出せません。

お金に変換する術はあるけど、見たことないので作れません。

微妙に不器用な男。田中彼方。

年下少女に好かれるらしい。

街で姫さんと出会って城へゴー

結局、お代と謝罪はアリアちゃんがしてオヤジも納得したようだ。まあ王族相手ではこの小さなお菓子屋のオヤジではそんなに強く怒ったり騒いだりはしないだろうな

「全くもう、姫様も彼方さんも城に帰りますよ！」

「はい」

やったw俺も城に行けるんだ？

城に向かう道中に車？のような違うような？

…そんな感じのものにのせてもらったのだが、その間中二人でアリアのお説教を頂いた。

意外と説教長いな

「そもそも彼方さんはっ」

あれ？そういえばなんで俺まで怒られてんの！？

それにしても窓から覗く景色は本当に緑！

樹が山林並みに生えている

樹と樹の間を物凄く器用に通って行く車？の運転手の技術に拍手！！

「だいたいですね」

説教終わると、城に着くのどっちが早いかな？説教かw

それにしても、お姫様か

隣でぴったりと腕にくっつく少女の顔をまじまじとみつめる。

「ん？なあに？」

姫様も気がついて俺の顔をガン見してくる。金髪の姫様…これがタテロールなら尚更良かったのだけれど、残念ながら彼女はショートヘアだ

「私の名前はサラムール…サラでいいわ。君、名前は？」

「田中彼方。宜しくサラ」

を？逆ナンか？

「功一とは大分違う人種のようなね」

どういういみ？

あれ？さっきまでいい感じじゃなかった？

「まあ個性は強いかな…そういえばサラはあんなところで護衛もなしに一人で何してたんだ？」

何してたんだって無銭飲食は見てたけどね。

「なにつて…決まってるでしょ？遊びに抜け出してたのよなるへ」

そして無銭飲食で迷惑をかけた、と

頼むから御付きの人を連れていってくれ

「聞いてるんですか！？」

「あ」

まだ続いてたのか。アリア説教。

「いいですか？」

と再び始まりそうだった説教は

「着きましたよ」

と運転手の野太い声で遮られた。

ノックが聞こえると同時に車？の扉が開かれる。

「おお」

目の前に広がる精巧な庭

大きくたたずむ立派な城

なんというか 裁判所に連れてこられたかのような変な緊張感が体にまとわりつく。

いいねえ

威厳ある風格の城。

いいねえ」

「そういえばアリアちゃんは俺を迎えに来てくれたの？」

テンションあがってターン気味に振り返ってみる

なんか若干置いていかれそうになつてた？俺？

二人とも少し遠くない？

「はい？あ…いえ、私は姫様の御迎えに」

左様ですか。

いや、まあそんなに期待はしてなかったけど…いえ泣いてなんか無いよ？

大きく頑丈そうな門をくぐり城へと入場する（笑）

なんかいいかんじ。

こんなところでハーレム気味に暮らしたいものだ。

「お帰りなさいませ。こちらでございます」

メイド！きたきたきたー！

ミニ！足綺麗！

「サラ様はこちらです」

「えー」

「サラ様」

がっちり両側を捕捉され諦めたように不貞腐れた顔をした。

両側メイドハーレム

羨ましい。

「お、彼方」

「っち。深山功一か」

角を曲がると深山功一がおめかしをして立っていた。

「っちつてなんだよっちつて！」

「あゝはいはい」

「ったく。一体どこほつつき歩いてたんだ？」

空です。

ちなみに言うなら好きで歩いてた訳じゃありません。

神たまか天子さんの陰謀です。多分。

ほらあれだよ。好きな子ほどいじめたいっていう

「まあ、いいか。いつものことだし。それより王様に逢うらしいから着替えて来いよ」

「いつものことでもない気がするがな。まあいいだろう。着替えてくる」

そうそう空から落ちても困るのだが

こいつはどうせおれの今までの行動を知るすべがないのだからどうせチンケな想像で物を終わらせているんだろう。

俺はそんな小さな人間ではない。ww

「こちらになります」

俺についでくれたメイドさんは小さいのに豊かな御胸様をお持ちの童顔の少女でした。

うーん。いい（グツジョブ!!）

って、これもロリの範囲に入るのか？
まゝいいか。

街で姫さんと出会って城へゴー（後書き）

どうも朝です。

違うか。

どうも（仮）です。

ロリ率の高いことに定評がつきつつありますww

だって好きなんだもん仕方ないよwww＃＃＃＃＃＃＃＃

あの子と再会！逢いたかったよw

用意された服は中華というか和服というか……

確かに手触りとか高級品っぽいんだけど

なんていうか、コスプレっぽいなあ。

ふむ

やけに似合っている自分が恐ろしい……

「はい、ご用意が整いました」

爆乳ロリメイドのミヤモが恭しく一礼して俺にっこりと優しく微笑んでくれた。

うーいい。可愛い。

襲ってもいいですか？

そのメイド服からこぼれそうなものにしゃぶりつきたいのですがよろしいですか？

「それでは、新神様のところまでご案内いたします」

「ありがとうございます」

ミニスカからちらっちら見える白い足と黒いストッキングの隙間。マジたまらんっ

これが特殊なゲームならここで即一発やっとか？状態なのに

一応これ、健全な小説だから自主規制

「失礼いたします」

何かいい感じの高価そうな扉を開けると、深山功一がなんかハールム状態で待っていた。

「てめえっ」

「は？いきなりかよ?!」

とりあえず殴ろうかと思っていたらてててと聞き覚えのある懐かしい足音と共に軽い衝撃が腹付近に伝わる。

「おにーちゃんっ!!」

「かわ…テトラ!」

思わず名前呼ぶ前に可愛いつて感想言いそうになったぜ
すりすりと頬ずりするようにテトラは小さな体で俺にぎゅーっと抱
きついている。

ああああ。幸せ。

「テトラっ!危ないから離れなさい」

こらこら御姉さんそこは失礼だから、とかじゃないのか

「あいからわず変態そうだね」
ん?

用意されているイスのほうを向けばユルギが目だけこちらに向けて
お茶を楽しんでいる。

「ユルギも来ていたのか!」

「ん。暇だし。王都に招待状ももらっていたし、あんたたちもここ
に来るって言うからね」

「つまり俺に会いたかったんだな!」

「……話聞いてた?」

照れなくてもいいぞ〜!

ちよつとほんのり頬あからめて本当に照れてるあたり本当にちよつ
と萌えるぞ!!

「お兄ちゃん!お兄ちゃんも碧玉神宮で暮らすの?」
↑
まきよくしんぐう

「ん?へキサゴン?」

「誰も言つてねえよ!!」

唯一このネタが分かる人は深山功一だけだったので他の人は?状態。
まあ、流しておこう。

「緑空宮の人界バージョンみたいなものらしい。つまり、神の城」

「ふ〜ん」

俺としては深山功一ではなくアリアちゃんに説明を受けたかった
のだが。

まあいい。

「俺もその碧玉神宮なんて発音しにくいところで暮らすのか？」

「新神さまが許可なさったら暮らすことができます」

「もちろん、俺はいいぜ」

へへ。俺と深山功一の立場が逆転してたら深山功一路頭に迷うところだったね

てか、アリアちゃんそこで残念そうな顔しない！

「準備が整いましたでしょうか？」

「あ、はい。よろしくお願いいたします」

「それではこちらに」

ベテランオーラをはなつおじいさんの後ろについて行く到庭に続く長く広く美しい渡り廊下についた。

その廊下には端に整列をした兵士や女官たちが頭を下げて我々に歓迎を示している。

渡り廊下の先にはあの大きな樹があった。

「樹に、扉……」

誰だ。こんな環境に悪そうなことをしたのは、といたいところだが、かなり合っていてそれ自体がもとの芸術品のように見える。

「ようこそ、いらせられました。新神様、我が主君」

樹の中に入ると、樹の中とは思えないような部屋。

数百もの兵士たちよりも数歩前に、王と思われる男が一人

そろそろうんざりしてきた大きく精巧な魔法陣の数歩後ろで礼を取っていた。

「我が名はアラジ。この国の王を務めさせていただいております」

現樹＝あらじゆ＝あらじ？

ゆはどこいった？

アラジという王としての貫録漂う初老の男は少し決まりごとなのだろうセリフを口にし深山功一に近づいてその手にキスをした。

おえええ

婦女子なら喜ぶかもしれない。渋いおじさんと若い男のラブシーン？ちがうか

俺なら手をさっさと拭くだろうが。功一はしっかりとうなづいただけだった。

「このものは末娘のサラムール。新神様に仕えるように躡けてまいりましたのでご自由にお使いください」

さきほどであったばかりのサラが綺麗な格好をしてこちらをちらとみた。

にらんだ。と受け取ってもいいような反抗的な目だった。

そりゃそうだ。つまりは生贄にされたようなものなのだから。

「俺は…」

深山功一がこういうのが嫌いだからなにか言おうとしたが、

「お気づかい、ありがとうございます」

とアリアちゃんが制したため何も言えなくなっていた。

へたれか。お前は。

そのあと、少し儀式的な形で進行され碧玉神宮についたのはだいぶ後になってからだった。

「ふっなんか、疲れたなあ」

「王族は形式を大事にしますからね」

碧玉神宮は異空間とでも例えようか

ここにあるのにはない。

あの魔法陣を介しないと入れない場所らしい。

それにしても本当にこの国は樹が多すぎる気がする。なんちゃって

あの子と再会！逢いたかったよw（後書き）

田中彼方フリーダム

じつは儀式中立ったまま寝ていました。w

特技の一つです。

ちがうかw

ニートとチートの発音が似ていると思う(前書き)

サブタイトル だからどうした。

ニートとチートの発音が似ていると思う

ニートとチートって似ている気がする。

いや、発音の話ですよ？

ぶっちゃけ何が言いたいかというと、暇です。

私はとても暇です。I am very free now

「ふあああ〜っ」

特にすることもなく最近見つけたお気に入りの樹の上でごろ寝。

何せここには樹だけは有り余るほどある。

春の陽気漂うばかばかした気温に時折肌をやさしくなでる程度のそよ風

ちよつと昼には厳しくなる日差しも樹の木陰でとても睡眠に快適。

つまり。暇。暇なのです（重要でもないけど暇なので二度言いました）

アリアちゃんと深山功一は仕事のお勉強やらお仕事やらで日々忙しいし

テトラもアリアちゃんのものものしもの時用について修行の毎日

ユルギは王宮の方で魔法種の研究に一人没頭しているらしいし

サラは深山功一のものだから他の殿方は控えてくださいってあわせてもらえないし

ミヤモは俺付きのメイドさんになってくれたらしいけど、忙しそうだし

……う〜ん。

そんなこんなで僕はここに来てからの半月ばーっとしたりゴロゴロしたりしています。

「なんか、面白いことないかなあ」

「それでわ御勉強でもなさってはいかがですかあ？」

「ん？」

「ついぼつりと愚痴をこぼすと

淡い橙色の髪の毛の少女がにっこりとほほ笑んだ。

小さいのにその丈に会っていない白衣とぶかぶかの大きなメガネうん。萌が分かつてる

ついでにもう一人チャイナ服の女の子もいる。

ショートでグレーの髪にちょっとつり気味の漆黒の瞳が綺麗だ。

「マリーナといます」

「ロット」

「俺は田中彼方。よろしく、二人とも」

とりあえず木から下りて握手

マリーナはにっこりと返してくれたがロットはそっぽを向いて終わりだった。

「私たちは今日付で貴方の専属の教師と護衛になりました」

「教師？」

「はい〜！」

なんか、アリアちゃん辺りが又考えそうなことだなあ。

「新神様とご一緒にこの世界に御帰りになったあなたにもこの世界の使命が必ずあるはずだと皆そう考え、それじゃあ外交官でもやってもらおうってことになったんです！」

「へえ〜まじか〜ちなみに外交官って命の危険あるの〜？」

「そりゃもう沢山」

今やっと名前以外にロットの言葉聞いたんだけどものすごく不吉な言葉だったね。

やっぱりね、そんな気がしてたんだよ。

「それで、各国のお勉強とこの国の歴史について学んでいただくと思いましてね！」

「まじか〜」

「まじですよ」

何か可愛いな、この子。

というか、マリナーはよく見ればエルフほどではないにしろ耳がこの国のものと違って若干とんがっている。長くはないが。

「あ、お気づきになられましたか？私、純人間じゃないんですよハーフェルフでして」

御爺ちゃんがエルフらしい・・・どちらかというと、クォーター？

「二重人格なんですね〜夜になると年相応の姿と性格に…あ、私21なんですけども」

「なんですとっ！！」

メガネロリっこ実はおねー様っ！！

「ロツトちゃんは獣人とのハーフなんです〜怪力さんなんですよ」

「……ふんっ」

残念ながら耳も尻尾もないようだが……実に残念だ。

「闘う時になると耳も尻尾もでて可愛らしい姿になるんですよ」

「ほほう 素晴らしい！！」

「マリナー！！」

でもハーフだから完璧な獣にはなれないらしい。

あの時出会った萌っ子は、それはそれは完璧な獣人なのだろう。

萌えれば俺的に何でもいいが。

「ぶっちゃん、ハーフが毛嫌いされて貴方のところに追い出されたって感じなんですけどね」

「やっぱり？」

なんとも世知辛いものだ。どこの世界も。

「ってことで、貴方の先生になるわけですから。明日からびしばち行きますので」

びしばちですか。びしばしではなく。いいねw

明日からということであえすもう一度樹にのぼってぐる寝を開始した。

『めんどくさそうな子たち。貴方はいつも貧乏くじをひかされるの
ねえ』

「そうか？ま、俺が邪魔なんだろう、新神信仰するやつらにとって
影の中からゆらりと妖孤イクリの気配が濃厚になってくる。

『消してあげようか？そんなやつら』

「おお。過激だねイノリ。でもダメだよ」

『え〜』

「今回のことはむしろ俺にとってプラスだしね」

『つまらないの』

どこかすねたように呟いて、『まあ、いいわ』と気配がどんどん薄
れていく。

「『まだ』駄目だよ」

まだ得られるものがここにはあるかもしれない。

切り捨てるときは俺に害が直接向けられるときか、俺がここを見限
る時だ。

「それまでせいぜい楽しむがいいさ。……なんてな」

ちよつと悪役チックな台詞をはいて俺はも青々とした空を見上げて
拳を空に突き出した。

ニートとチートの発音が似ていると思う(後書き)

また、キャラが増えた。

しかもまたロリ。

ダメだこの子。

深山さん主人公なのに名前しか出ず。

田中彼方、じつはダーク。

夜のレッスン っていい響き

せんせ

外交官ってなんですか？

美味しいんですか？

萌ですか？

「はい、そこ居眠りしない」

「先生、居眠りというか、がっつり睡眠学習です」

ただいま、午後11時

子供じゃないが勉強すると眠たくなる。

ぼんつきゅぼーん！！なボデー

がまぶすいゝ本来の姿のマリーナ先生は夜に俺に授業をしてくれる。

夜の授業

……魅力的な響きだが、エロな要素は先生の体くらいで授業はいたって真面目なものです。

因みに与えられた部屋はまさに教室みたいなものなので、入った瞬間眠たくなるのです。

黒板だし……ただし、チョークではなく魔法のステッキだが。

「それじゃ。問題です」

ただ〜ん ……違うか

「この国のもっとも近くにがある一番小さな国土の魔法が盛んな国は何というでしょう？」

「名光国。ちなみに神は鳴神」

「素晴らしい、正解です」

ぱちぱちぱちとマリーナが拍手をしてくれる。うれしいような、微妙なような。

「バカバカしい」

「む。バカバカしいとは何ですか？ロットちゃん」

毎晩護衛をしてきているロットちゃんはいつも不機嫌そうで眉をひそめている。

俺がそんなに嫌い？おれなんかした？ねえねえ

「外交官つてのは危険な仕事だがれっきとした国の代表なんだぞ」

「それがどうしたつていうの？」

「外交官は駆け引き・状況分析・利害計算・教養・人間性・責任感とか重要なんだぞ？お前にそれが一つでもあるつていうのか？」

冷ややかな目でロットちゃんは俺をじとつとねめつけてきた

「失礼なっ」

「そうですねっ！」

マリーナも慥然と声を荒げる

「状況分析と利害計算は得意だつ！！」

「人間性とかはいららないんですかっ！？」

驚いて今度は俺に対して声を荒げた。

自分で言うのもなんだが、女性に対して節操がないからなあ

はっはっは

「と…ともかく、こんなやつに外交官試験が受かると思わない」

「確かに」

それについては、俺もロットちゃんに賛成だ。チート使えば何とかなるが、めんどい。

「え？知らないんですか？もう外交官試験パスなんですよ」

「どえ？なんで」

「よっぼど嫌われてんだな」

「わざわざ私が夜にお勉強させていただいてると思ってるんです？時間が無いんですよ」

「初耳。しかも仕事入ってる系？まさかの？」

なんか、一気にやる気なくなってきた。

「来月。翠雲国にです」

え？どこそこ
っていうか

「外交官って交渉するんだろ？何すんの？王様に許可取らなくていいの？」

「王様からの申請が、これですから……」
「いったいどういう仕組みなんだこの世界。」

「ですから、お勉強お勉強！」

「うえ〜」

やる気満々のキラっとした笑顔のマリーナ先生は教卓の前で教科書を再び構えた。

「ん？」

ロットちゃんの頭の部分から、獣耳がぴよこんと愛らしく立った。うわっw萌える。

「とうか、今耳四つある状態ですか？」

「どうかしました？ロットちゃん」

先生がロットちゃんに意識が向いた状態。

今こそ俺は自由になるっ！！

田中彼方は逃げるを使った。

「って、おいっ！！」

ロットちゃんが怒鳴る。

「昼寝してたって太陽が沈めば眠たくなる少年なんだよ、僕はっ！！」

だから、一日中エロゲーとかギャルゲーとかできないんだよっ！！

ちよつと狭い教室の後ろのドアを開くと
どすっ

と壁に押し戻された。

「ぐふぁ」

「ん？」

反動で尻もちをつく。

尻いてえ

「すまん、大丈夫か？」

そいつって手を差し伸べてきたのは……マツチヨ……しかも何か少し好青年ってやつ？

「いや、構わない。それよりも俺を通してくれ」

無理やりでも通ろうとしたら「その人を捕まえてください」とマリ
ーナ先生に言われ

俺、あつさり確保。

この細マッチョ身長190で、名前はライズというらしい。

ロットちゃんのお兄ちゃんらしい。似てない。まったく似てない。

顔が彫り深い。ダンディ

こいつから猫耳とか生えてみる、全力でチート使って消してやるっ！

「逃げちゃダメですよ？あ、ライズさんありがとございました…

…何故こちらに？」

優しく「めっ」てするマリーナ先生。良い

「ああ、ラジエルもだが田中彼方に仕えるように指示されたんだ」

「げろ」

「まあラジエルさんまで？」

噂をすれば。とでも言おうかちよつと入ってきた。

ともすれば一見女性といわれても違和感のなさそうな細身の……っ
しゅっとした男だった。

赤みがかったショートヘア。女の子ならモチーフはリンゴちゃん。目が大きいのがさらに女性を思わせる……俺と同じような身長だけだ。

……今思ったのだが、この国の人髪の色とかカラフルすぎやしませんかね。

違和感とか無いのが天然のしるしでもいうのか……色別で国民集めて空見たら面白そうだな。

お、ラジェルと目があった。

「こんなやつに僕は仕えんといけないのかっ!!」

おいおい。一人称僕かよ。

自分も一人称コロコロ変えるけどね

夜のレッスン っていい響き(後書き)

毎回人が出てくる。

因みに次も出てくる。

はあゝ覚えられるかなあ W W

人は見かけじゃない。心なんだ。

だだだ

誰だ？

俺はまだ離れがたい微睡みと現実のすきまでこの部屋に近づくと足音に意識を向けた。

テトラだろうか？

いや、可愛いテトラはこんな足音じゃない。

「…………ふわああ」

まあいいや

どうせここが目的地なら自然と足音の持ち主も現れるだろう。

という流れでもう一度夢の世界へと…戻ろうとしたができなかった。

「朝だ！いつまで寝ている！！」
ばんっ

と不作法にもアルトの声音が響き渡った。…うるさかった。

「誰だよお前：基本俺が起きたらその時間が朝になるんだよ…」

そんなことも知らないのかよ

「寝ぼけるな！いいから起きろっ！」

だから誰だよお前…

なんか目を開けたら負けな気がするの、布団に潜り込む。

そうしたら勝手にひとの部屋に入り込み、俺の布団をひっぺがした

…あゝ去らば、我が休息地

「起きろって言うてんだろ」

光に包まれたら

「ぎゃああああああ！？」

盛大な天使？の祝福歌が爽やかな朝に響きわたった
うるさいなあ。

「なつなななな!!?」

「どうしたっ!?!」

誰かの悲鳴に反応して深山功一が走ってきたようだ。

俺はいい加減目も覚めたことだし、のろのろと起き上がってやった。

「やれやれ、挨拶もまともにできんのか」

仁王立ちで二人を見ると

「ぎゃあああ!!」

深山功一が同じく悲鳴をあげた。

「なんで素っ裸なんだよっ!!?おえ」

何故って、朝だからにきまつてるじゃないか。

「村では普通に服着てたじゃないか」

「他人の家で裸で寝るわけないじゃないか」

もう何も言うまいと深山功一は軽いため息をついてとりあえず俺に服を渡した。

「朝から気持ち悪いものを見た」

ああ、俺を起こしに来たのはラジェルだったのか。

青い顔してよろよろとかえっていった。

何を言う俺のお宝見ておいて。

改めまして

田中彼方起床11時ちょっと

きちんと服を着て食堂へと朝食を求めていく

…いや、どちらかという昼飯が。

食堂にはちよつと早い昼飯をもらいに来た人で結構人がいた。

「おはよう」

「もう、こんにちはよ。馬鹿」

ここ看板娘、ミツカ

長いエプロンが特徴的。着物ではなく短パンに上がスウェット。

この世界は謎が多すぎる。髪の色とか服装面とか
というか、着物きてるのはアリア・テトラの村出身者が貴族王族く
らいだったな。

下町のひとどちらかという現代風だったような。

「で、あんたに食わずものなんてないんだからさっさと失せなさい
よ」

明らかにめんどくさくと言っ顔で見てくる。

彼女はサボリ癖がある子なのだ。

「まあ別にミツカに会いに来たってことでもいいんだけど……一応
食堂だし食事も楽しみみたいんだがなあ？」

「だから、めんどくさいから失せる」

おおく超ストレート

「頼むよ〜お願い聞いてくれないといつまででもここでしゃべり続
けるぞ？」

おお。ものすごく嫌そうな顔をしやがった。ひでえ
茶色い髪色のみつあみをそっと掴んでキスをする。

「ね、頼むよ」

顔を見たらものすごくうざそうな顔をしてた。あれ？

「わかったわかった。ここでたまられる方がうざい。簡単な奴持っ
てきてやる」

「ありがとう」

俺はとりあえず微笑む。

……注文、聞いてくれないの？

やっと出てきた飯を食べていると昼を食べに来たのだろう深山功一
と、アリアちゃん。

それから、めっちゃドストライクの人。

「んぐっ！」

少し青みがかった長い銀の髪

ちよっと細長のセクシーな目に青い瞳

ちよつと身長は高めだが、どこかの神官のような神秘的で儂げな雰
囲気に柔らかない笑顔。

「素敵な人。あなたの名前はなんですか？」

そつとその白い手を掬いあげじつと瞳を見つめる

「おい。彼方？」

「うるさい」

「私はセジュランといいますジュラとお呼びください。彼方様
にっこりとほほ笑むその笑顔は、まさに天使……

「その人、男だぞ」

「!?!?」

な、なななんだって!?!?俺は素早い動きで後ろに下がり、敵との
距離を置く。

こんなに美しいのに?こんなに華奢な体なのに?

男だと?

そんな馬鹿なつ!!

「証拠はお見せできませんが、これでも男です」

ジュラはそういつて聖女もびっくりスマイルで俺に近づき手を取っ
た。

「王の命令で貴方の監視になりました。よろしくお願いしますね
しかも貴方敵なんですかつ?!」

アリアちゃんはそんな俺をみて、ちよつと何かを考えている。

「彼方!」

ラジエルが俺の腕を掴む。

「何してるんだ、そいつはお前にとって敵だぞ?」

何に対するなんの敵かは知らんが、俺の両サイド、美女系男子。
きもいよ

「彼ラジエ?ジュラ彼?」

ちよつ!今不吉な名前の配列したの誰つ?!

アリアちゃん?!

ちよつと頬をあからめて何か楽しい創造に走っているらしい。

待って待って待って待って！！俺はそっちのケはまったくいいほ
どないっ！！

女の子最高口りっこ最高！

頼む、誰か助けてっ！！

「三人で？」

その前にアリアちゃん止めてっ！！

人は見かけじゃない。心なんだ。（後書き）

田中は正真正銘女の子が好き。

アリアは深山功一が好きだけど、田中と他の男のからみを見るのが好き。

どんだんアリアが田中の苦手に入っていく。ww

授業終了やつ……だー

大事な大事な睡眠時間を削って行われた御勉強会のお陰でこの世界のことは代替理解できた。

なんてつたつてこの間受けた【マリーナ特製テスト】の世界史は満点だったんだっ

この世界の数学は赤点だったけど……

「勉強なんてできなくなつたつて生きていけるもんっ」

「カワイコぶるなっ！」

ばしつと最近多分きつと慣れてきてくれたと思われなくもないロツトちゃんがつつこみを入れてくれる。

結構痛かった……

「はい。やつと今日の分を含めて一応この世界の常識はおしまいです」

マリーナ先生が教科書を閉じると同時に微笑んだ。

「お疲れ様でした。今日で授業も終わりですよ」

「やつ……だー」

「なんだ。その微妙さは」

やつたーって言おうと思つてたんです。だが

「セクシーマリーナの姿をじっくり見られる時間がなくなるって言うのはなあ。それに、まだ知らないこともあるし……」

保健体育とか。

……もちろん、言葉には出しませんよ？

け、健全な男の子にはふつうのことなんだからねっ……

事実、マリーナも健全なほうで受け取ったのか嬉しそうにっこり微笑んでいる。

「まあ、ふふ。うれしい。でも大丈夫ですよ？」

俺もつられて微笑む。いいなあ。先生との禁断の愛…… おい
しかし、俺の笑顔は次の言葉で凍りついた

「もし足りない知識があればセジュランさんが教えてくださいますから」

セジュラン

…あれと二人つきりで授業。

暗い教室、二人っきりの空間。

ちよつと怪しげに見える指揮棒(?!)

『さあ、私と一緒に勉強しましょう……貴方の知らないことを、教えて差し上げますよ……』

『セジュラン……先生』

『足りない知識は、私で補ってくださいね……』

なんか、想像したら鳥肌が急に立ってきた。

「やつだああああああ!! あいつやだああ!! というか最近男いやああああ!!」

主にアリアちゃんのせいで昔の古傷えぐられたよ?!

最近トラウマがフラッシュバックしてくよ?

「ツレナイことを仰らないでください。彼方様」

「出たあああ!!」

白銀の儂い美女系男子。監視のセジュラン

見た目は、見た目は完璧なのがいい!

「今日は、あなたに報告することがあつてきたんです」

「報告……ですか?」

俺は素早い動きでマリーナの後ろに隠れると彼女が代わりに質問してくれた。

「ええ。明後日、仕事に行ってもらいます」
仕事。

なんだっけ?そうそう。

外交官

結局なに交渉するんだよ。

「その支度を整えてくださいね」
セジュランのやけに綺麗な笑顔が、少し陰って見えた気がしたが、
気のせいだろうってことにした。

『彼方ちゃん』

兄妹のように一緒に過ごした従妹の懐かしい声がする。

『彼方ちゃんってば』

一生懸命俺を呼んでいるが、俺は男友達とサッカーするのに夢中で
気がつかなかった。

『帰ろうよ、彼方ちゃん』

夢か。

結構すかすかなカーテンからはさすがに朝の光が燦々と俺の顔を
めがけて嫌なほど輝いている。

懐かしい夢を見たが、あれは果たして夢なのだろうか
ふと

ちゅんちゅん。ほげ

と遠くのように近くから何かの鳴き声が聞こえた。

やっぱりこの国では朝になるとあの訳のわからん声が聞こえるのか。
なんなんだあの生き物は。実に姿が気になる。ほげって……

貰ったばかりの新しい管服？仕事着？礼服？

まあ、そんな感じの服（やっぱり着物風…てか、陰陽師みたい）に袖を通す。

…いいじゃないか。

鏡の前で、ちよっと舞ってみようか。

でも扇子ねえ。欲しいな…あるかな…この世界。

こんこん。

と

ノックの音が結構広い部屋に響く。

「はい」

「準備、できたか？」

ロットちゃんのお兄ちゃんのようにだ。

扉をあける

「もちろん」

さあ。行こうか。

水の国……翠雲国へ

授業終了やっ……だー（後書き）

田中彼方過去をふと思い出す。

やっと20話！でもまだまだ本格的にストーリーに入っていないとい

うww

いや、入ってる……よな？

知らないやつと沈む俺（前書き）

珍しくシリアス

注意！！

知らないやつと沈む俺

翠雲国は鳳来のすぐ東にあり、河と海の面積が多く漁業が盛んな国である。

『我が国は、気候も国土も豊かではあるが、領海にあまり食に合う魚がないため

翠雲国から少しばかり輸出してもらえないだろうか。』

「これが交渉内容？」

高価な車だが道が悪いのかガタンゴトンとちょっと激しく揺れる。資料から目はずすと俺は現樹国唯一の他国へ行く船のある港街へと向かう道をぼんやりと見つめた。

「そうです」

俺の問いにそっけなく、初めて会ったおっさん…アステズがうなづいた。

最近気がついたのだが、現樹国の人はファミリーネームやミドルネームがないらしい。

「でも、俺がマリーナに教わったときこの国は本当に豊かで食料等輸入の必要がないつつつてたけど？無理に輸入しなくてもいいんじゃない？てか、手紙でよくネ？」

「それは貴方が決めることではありません」

おっさんは態度悪い。てか、なんか、とげとげしい。なにこのひと。

というか、周りに居る人も初めて見る奴ばかりだ。

ロットちゃんのお兄ちゃんとかがついてくるのかと思ったたら「がんばってこい」と苦虫をかみつぶしたような顔で見送られた。

なにやら、ハーフを国の代表として連れていくわけにはいかない。だそうだ。

やれやれ。

差別をして何が楽しいのかわからん。
敬われたら楽しいけどw

がつごんつ！

「ん？ついたのか？」

誰も答えてくれることのないまま、車の扉が開かれる。

「おお。海じゃん」

俺のいたところは山に囲まれていたが、海は近くなかったために
なかなか新鮮だ。

あゝうみっていいなあ

ちよつとテンションあがつて崖っぽいとこまで近寄ってみる。

ひょえゝたつけゝ万座毛みてえゝ…見たことないけど

ちよつと左を向くと結構大きめな街が見える。あれが港がある街か
もしれない。

「なあ、おっさんアレが港街？」

『主、危ないっ！！』

ふと、ヤトの声が頭に響いたが

俺の意識が理解するのには少し遅かった。

「……………な……………ん？」

「貴様がいると新神様の後の憂いとなるっ」
じんわりと、痛みが広がってくる。

『彼方になにをっ！！』

姐さんが怒っているのが伝わってくる。

俺の体に、剣が生えてら。

——そう、刺されたんだ。俺。

ざわざわと、俺の中の使仕たちが怒りに今にも出てこんとしようとしている。

だめだ。今出てきたら、こいつらをきつと殺すだろう。

(殺しちゃダメだ。こいつらには、生き証人として俺をこんな目にあわせた罰を……)

だんだん薄れていきつつ意識のなか俺は必死に使仕達をなだめる

「お前は、この世界に必要なはない」

無情にも、言い放つ声。

まったく、俺という個に関心がないような声で

おっさんはひげの濃い無表情の面をゆがめることなく、俺の腹を蹴つて剣を抜いた。

どっぴゅっ

「……あぐ」

冷たいものと温かいものが、体から出ていく。
体が宙に浮く感覚がした。

「海は異世界にもあるらしい、還るがいい祖国にでも」

やけにカツコいいこというおっさんだな。

結構、あんたのこと気にいつてきてたんだけどね。

ああ、だめだ。痛すぎてだんだん痛みすらぼんやりとしてきた。

心臓を一突き。しかも下は海。

あゝこれ死んだな

ばっしゃあああああん!!

『主！主い！！』

（油断してたな……おれ、まだ……若いんだけどね）
水面の光に向かって手を差し伸べてみたもの
あまりの痛さにオレは意識を手放した。

『彼方ちゃん帰ろうよ』

まだもう少し、ここに居たいんだ。

『彼方ちゃんつてば、今帰らないと後悔するよ？』

それでも、俺はまだここにきて、まだしたいことをしていないんだ。

『あとから帰ってきて、後悔してもいいの？』

あのあと、サッカーでドロドロになつて帰ると、

可愛い従妹によって俺の工口本とか宝本とかを全部BLものに変えられてたっけ。

しかも、変な噂まできつちり流して。

『それでも、彼方ちゃん帰らない気？』

うん。ごめんな

多分。今帰らなかつたら、またすごいことするんだろうな、お前。
きつと、神たまが言つてたあの噂の原因、お前だろ。

だから

だからこそ俺は帰らないよ

そして、死にもしないから。

ただ少しだけ眠らせてくれ

『彼方ちゃんの馬鹿』

兄妹同然の従妹は、ちよつとすねたような顔をして去っていった。

١١٥١١٥١١٥١١٥.....

知らないやつと沈む俺（後書き）

田中彼方死亡

って違うか。

珍しくシリアス入れてみた。

次からはまたほのぼのとやっています。

さー田中はどこに行ったのでしょうね。

死にません。一応主人公だから。

人魚姫の王子様〃俺（前書き）

人魚姫……ハーレムに入れてみたいけどいるのか?? by 田中

人魚姫の王子様Ⅱ俺

体中が痛い。

一度自転車坂道激走して垣根に突っ込んで入院した時くらい体が痛い。

「……………んあ」

なんか、やけに潮の匂いが濃い
目を開けると、そこは砂浜にある洞窟だった。

「いつつ……………俺は、人魚姫かっつての」
いや、打ち上げられてたのは王子様のほうか。じゃあ、ぴったりだな。

それにしても傷の痛み思わず顔をしかめる。

「あ〜」

そうだ。そうそう。知らないおっさんに刺されたんだっけ？

よく生きていたな〜俺

さすが最強。違うか

『彼方！！もう起きて大丈夫？』

『三日間寝たままで心配したのよ？』

フィンとイノリが影から出てきて俺の頭やら胸やらあちこち触れてくすぐりたい

三日もか。そんな感覚は一切ない。むしろ頭もすつきり。からだか少し痛むくらい。

「大丈夫。くすぐりたいよ……………」

『どこか痛いところない？』

「大丈夫だつて。うれしいけど、二人とも心配性だな……………それより、ここはどこだ？」

海に沈んだ記憶はある。だから、現樹国かもしれないし、そうじゃない国かもしれない。

どちらにしても、ここは洞窟だから、入口から海しか見えない。

『さあ、わかんない。相当流されたし』

「そっか、フィン達にも分んないか…とりあえず、ここがどこか確認して……っつ！」

起き上がるうとするだけでも結構のしびれが走る。

『致命傷に近い傷を妖精ちゃんが魔法を使って何とか一命を取り留めたのよ？無茶しないで』

「そっか、ありがとうフィン」

不安げに俺を見つめる小さな頼もしい仲間の頭をなでると、にっこり微笑んで

『任せてよっ！！』

と小さいながら豊かな胸をそらした。

『とはいっても、しばらくは安静にしてね。私にも限界があるから』
『食料と水はヤトが採りに行っているから心配ないわ』

そう言つて、二人にまた横にさせられる。

今気がついたのだが、布団のように下に敷かれているのはイノリの尻尾らしい。

道理でふかふかだと思った。どの高級毛皮もこの尻尾の毛には勝るまい。

「なんだか、子供か老人みたいだ」

悪く言えば、ヒモ？それは嫌だ。

『いいじゃない。男とケガ人は、いつまでたつても子供なのよ』

「なんだそりゃ」

でも、こう心配されて介護されるのは、たまにはいいかもしれない。つていうか、ここ女の子ハーレムでできることねえ？

そういえば、チート本は大丈夫なのだろうか。

アレがないと困るってか嫌だ。

懐に手を伸ばしてみると……ある。
少しも濡れていないし、破れても血に染まってもない
さすが神様製品

ふと

さっきまでにこやかにしていたイノリの表情が止まる。

「どうした？」

『誰か来るわ。ヤトじゃない』

あいつらかどうかはわからないが、イノリの表情からするに殺る気
満々のようだ

「そうか。危険な様だったら頼るから、それまで控えていてくれ」
殺しは困る　そう、暗に伝えると伝わったのだろう。「またか」と
いわんばかりの顔で頷いて影に戻っていった。
フィンも最後にもう一度、フィーリングをかけて戻っていった。

……たしかに、足音が聞こえる

「こつちかな」

男だ。しかし、まだ若いと思われる

「こつちだったと思いますけど？」

こちらは女のようにだ。同じく若く感じられる。

敵意は感じられないが、何かを探しているようだ。

「ああ、この洞窟の中じゃないかな？」

「そうかもしれませんがね」

見つかったのか？

というか、いったい何を探しているのか知らないが、いまいち必死
さが伝わってこないというか、マイペースだ。

足音もパタパタというよりはのろのろって感じだし。

なんか、かくれんぼしてたら待つてるほうがもどかしいっ！って
出て行ってしまつかもしれない。

「あ。いきましたよ。いましたよ。ルビア様」

ちよっと物思いにふけっていると、少女と目があつた。

黒い髪の黒茶の瞳　まるで、日本人のような顔立ちの少女と。

「ああ、いましたねえ。ありがとうございますハル」

どうみてもマイペースそうなお人よしそうな金髪青年。

「あいて」こちらによって来ようとして、飛び出ていた岩に頭をぶつけた。

ちよつと照れ笑いしながらこちらに寄ってくる。

悪い人のようには見えないし、敵意も感じられない
むしろ初対面としては好印象だった。

「こんにちは、君、田中君ですよね？」

「そうだが？」

何故か名前は知られていたけど。

というか、むしろその後ろの少女のほうから話をかけられたかった
のだが

「僕たちは、見ての通り敵ではありません」

ほら、武器を持っていないでしょ？

と頼りなさげな男は笑って手を広げ、また壁に腕をぶつけた。

人魚姫の王子様〃俺（後書き）

もちろん死なない男田中彼方一応主人公

新しい人たちは誰でしょね

てか、ここどこでしょうね

自分王子だなんて図々しいぞ、田中

大国に囲まれた小国

「貴方に危害を加える気はありません。ですから、どうか私たちの城に来てください」

俺は、疑う気にもなれずにその差し出された手を受け取った。

丁寧に案内され用意された室は怪我人の俺にはとっても快適な空間だった。

優しい程度の光と髪を揺らす程度の風。

窓からのぞく景色は、小さな街並みと海

ホテルだったら一流でも十分通用する。ま、城だけど。

「田中彼方つていうんですよね」

部屋に通されてしばらくしてからあのハルと呼ばれていた少女はこの部屋に入ってきた。

「そうだが？」と俺が返事を返すと「そっか」と意味もなさげに呟いてじつと見つめてくる。

そろそろ詳しい事情を聴きたいのだがと言つともう少し待ってと返されて1時間弱

じつと見つめられるのもあれだし見つめ返してみる

ちょっと黒というよりは茶の強い髪色。長さは肩につくかつかないか瞳は大きいが、活発だけどマイペースという印象を受ける。……と
いか実際そうだと思うれる

「なに？」

「むしろこちらが何？と聞き返したいのだが」

見つめていると質問されたので返すと嬉しそうに……何が嬉しいの

かわからんが、嬉しそうに笑った。

「すんなりついてきたわりには、結構警戒心あるんだね」

すんなりついてきたのは自分でも意外だが、そこまで心を開いてあの二の舞になるのはごめんだ。

「じゃ、待っている間に自己紹介しようか」

と、近づいてきて、近くの丸い小さな椅子に腰かけて俺にっこり微笑みかける。

笑顔が可愛いな。この子

「私の名前は更木遥サキハルカ……君、彼方クンでしょ？ 遥に彼方、遥か彼方ね。いいと思わない？」

確かに、漢字はあっているけど、何がいいのか？

海原ハルカカタ？ 違うか

「確かに、何か運命つけられてるみたいだネ」

俺はとりあえず適当なことをいってみた。するとすねたような顔で

「あゝその言い方思っでないでしょ？」

と口を尖らせた。

まーね。

これだけ待ったんだ俺はとりあえず気になることを訊ねてみた

「……どうして俺があそこに居ると分かったんだ？ 俺の名前をどうして知っている？」

「それは、この国の巫女が視たからですよ。名前はある人から教えていただきました」

ふと、遥の後ろから今入ってきたのであろうあの金髪の男が口をはさんだ。

「やあ、遅れてしまってすみません」

影も裏もなさそうな、屈託の笑顔で彼は謝罪を延べ、遥の近くに椅子を引き寄せ俺と向き合うように座った。

「何から話しましょうか？ とりあえず、自己紹介でもしましょうか」自己紹介はいいのだが、段取りが悪いな。

まあ、ここまで世話になっているのだし、何か裏があるのは分かる

がここは我慢しよう

「私の名前はルビアド・ラックファンといいます。この国、名光の王を一応しております。彼女は、ハルカ……鳴神メイカンをしてもらっております」

「あ、言い忘れてた……してます」

え？神だったの。君。言い忘れてたじゃないよ？！

「で、その鳴神ともども俺に何の用だ？」

「はい、実はですね。ご存じのとおり大国に挟まれた小さな国です
確かに、南は一番の面積を誇る究温国

西は、最も科学が発達している未来的な大国 西国さいこく

東には俺が元居た現樹国 北は……詳しく忘れたが、厘石国りんせきこく
とこの名光は一番多くの国に囲まれた、一番面積の小さな国だ。

「いつつも戦争になると、一番にこぞって責められるんですよ〜」
そりゃそうだ。

といたくなるのをこらえて「大変ですね」とだけ言っておいた。

「でしょう？そんなときにですね、巫女が夢を視ましてね 貴方が流れてくると」

「ほう」

確かにそのとおり、俺は刺されここまで流れてきた。

「もうこりゃ運命だろうってことになりました」

うん。ここでいきなり話がぶっ飛んできたね

「私の代わりに鳴神でもやってもらおうかと思いましたが」

「お願いしてみるわけなんですよ」

お願い、つい今されたんですけど。しかもぶっ飛んでるのだが

「いやいや俺は、神候補に選ばれていない」

「それでもここに居るのですから、資格はあるはずですよ」

俺は少しだまってマジマジと二人の顔をよく見てみた。

うん。目がマジだ

「……残念だが」

だから、俺も真面目に返事をする

「俺は、親友を裏切れない。だからこの話は断る」

「……そうですか」

ちよつとがっくりしたように遥は肩を落としたがルビアドはまだ引かなかった。

「まあ、待つてください。彼方君。私たちはなにもこの国を優勝させようとしている訳じゃありません」

「……どうということだ？」

「この国の、秩序さえ守っていただければ」

「それなら、遥がいれば十分じゃないか」

「私ではダメなの」

遥がちよつと切なげに呟いた。

「貴方が新神と仲がいいのも知っています。勝利や利益をあちらに回しても構わない。二国で協力し、他の国の侵略からこの国の秩序を守って下りさえすれば私たちは満足なのです」

「そこまでして、守りたい秩序ってなんだ？」

「それは私が説明しよう」

閉じていた扉が開いた先に居たのは

現樹の城で別れたきりのユルギだった。

「久し振り、と言わなければならぬな」

そう言つて、ユルギはやんわり微笑んだ。

大国に囲まれた小国（後書き）

いつもより少し長い

ちよっと内容が真面目でつまらないかも???

はやくはっちャけたい。

世界の昔の話

「守ってもらいたいののは、私たちなんだ」
ユルギはそう言って手をぎゅっと握った。

「この国に、私たちの国があり、ハーフたちもこの国だけが差別されないんだ」

この神候補闘い制度ができる前

それまではこの世界はラビイトウルという始祖神様が他の世界より人を選び依代として政治をしていたらしい。

神が飽きて他の人を選ぶたびに世代交代が起き、その度に新しい大陸が生まれ新しい国が生まれた。

そして、7代目の神様が選ばれたとき

「混種・異種・混血を特忌み嫌うべし。という命を出したんだ」

私たちをストレスのはけ口に選んだのだろう。

7代の神はハーフ以外にとってはとてもよい王でほとんどのものが素晴らしく働いた。

喧嘩もない、仕事は世代制。誰も反論も謀反も他宗教もしないし、娯楽もほとんどない。

平和すぎて、素晴らしすぎてつまらない。その時の人は何もかもが腐っていった。

まるでロボットのような人々の生活

7代の王は絶望した。

自分が望んだのはこんなものではないと。人間味が全くないと。

そんなとき、ラビイトウル神が前任の神を降ろすことなく新しい神を連れてきた。

「それが、究温国の神。……当時は、宮神などではなく、各神が色で例えられその色を神以外身につけるのは禁止されていたといわれている」

7代目神は藍の王……今は大国 桐文きりふみを創ったもの

8代目神は紅の王……今は大国 究温きゅうおんを創ったもの

真面目で神経質な天才の藍の王は 機械と化した民を皆消そうとした。

子供だが、純粹で行動的な紅の王は そんな藍の作った民を嘆き、人間味を取り戻そうと戦ったそうだ。

「それからこんな偏った考え方がなくなるように、さまざまな神を他から召喚するように制度変をしたのは紅の王らしい」

それからラビイトウル神や藍の王紅の王がどうなったのかは誰も知らない。

「紅の王は、他国にも英雄と崇め奉られているが、差別をなくしてはくださらなかった」

第一回の神様候補の戦いするとき、鳴神様が優勝を果たし

我が国だけは差別を許さず、私たちエルフが他国に放浪することを許可するように命令を下して下さったおかげで今がある。

「この国だけじゃなくて、他の国も強制的にそうすればよかったのに」

俺がそう言つと、ユルギはゆっくりと首を横に振った。

「もともと差別の命は伝説的な藍の王の命令だったから、神としては若輩の新神さまがそこまでいい浸透させる力はなかったらしい」

なんだか、簡単なようで複雑な話だ。

「で、そこでどうして俺が必要になってくるんだ？」

「お前なら、口がうまいから他のやつを言いくるめることもできるだろう」

……正直なところ自信はある。

「そして、現樹ならこと違って国庫も豊かで兵力も十分戦うにはいい素材がそろっている」

つまり

「深山功一を勝たせてこの国のこの秩序を守るように口添え手欲しい、と」

「そういうこと」

遥がうんうんと頷く

「なら、神じゃなくてもいいじゃないか」

「私が神じゃダメなの」

また、切なそうに遥が同じセリフを呟いた。

「遥じゃ、ダメだって言う理由はなんだ？」

「それは……」

言う気がないのか、言えないのか。

どちらにしる、遥は口をつぐんで目をそらした

「頼む、田中。どうか、私たちを守ってくれ」

「私からも、お願い！」

女の子は大好きだ

可愛いし、エロいし、癒されるし

でも騙されたり利用されるのは嫌いだ

面倒だし、辛いし、癪だし

でも

「いいよ」

目の前で可愛い女の子がっらい目にあっているのを、放置できるほど俺は人間くさっちゃんないと思う

「本当!？」

「ただし」

わっど歓声を上げようとする二人の前に一本指を立てて静止させる

「あくまで、神候補に選ばれたのは遥だから、俺は裏方として働かせてもらう」

それなら、直接深山功一と戦わなくても済むし、俺は身軽であちこちの国に行ける

「でも……」

遥がすこし言い淀むが「そうじゃなければいけない」と少しきつめに言い切った。

可哀想かな、とも思ったが、理由が明白じゃない以上向こうの言い分ばかりを聞いてはられない。

ちよつと考えて、「うん。まあ、いいか」と笑って

「お願いしますっ!」

と俺の手をにぎった

「本当にありがとう、今度、私の故郷に案内するよ」

とユルギも珍しくデレ状態でぎゅつと抱きついてきた

「はは、まあ。二人とも嬉しいのはよくわかるのですが」

さわやかな青年は、マイペースに微笑んだ

「とりあえず、彼が人が人ということを出してあげましょう」

「あゝ」「あ……」

俺はうれしいやら痛いやらでいろいろいっぱいいっぱいだった。

世界の昔の話（後書き）

説明が大半

読んだ人、乙（・W・）yでう。

田中、結局女の子に弱い。っていうね
それが田中だから。いいの。田中だから

入院中につき安静に

一つの国に一人の神候補がいてその候補が神の座を争うなんてちょっと変わった世界に自分から舞い込んだ割には神候補の座を友人にとられた田中彼方（18歳）は知らないおじさんに刺されて海にけつ飛ばされたのち他の国に流れ着きその国の神候補の女の子に候補の座を譲られ仕方ないから裏方ならやつたるかーってところである。以上今までのあらすじ

「ちゃんとした仕事をする以上、もっとこの世界について学ばなければならぬ」
「が」

「その前に、体を直さなければならぬ」
「まずここ忘れちゃ困るよー」

田中彼方

現在入院 4日目

「みんな忘れてないかい？僕、刺されて体に穴開いてんだよ？貫通したんだよ？」

「軽く重病人だよ？いや、けがは軽くないんだけど。」

「普通に重い話とかされたけど重病人だからな？」

「……病院というのは、いつでも死の匂いがして、静かなもんだ……」

「とかかつこよくつぶやいてみる」

「ぶつちやけ城の中の医療室のほうに移動させられただけ。」

「そして部屋には使仕たち以外俺しかいない」

それにしても病室つて本当、見るとこないよな。
ナースさんの姿と窓の外くらいか？

あゝ窓の外を見てみると、あの『ちゅんちゅん。ほげー』が恋しくなってくる

結局あれ何の声だったのだろうか

フィンがちよろちよると体の周りをまわって、目の前にきて腰に手を当てふんぞり返った。

『だいぶ良くなってきたの〜。ふふん、フィンのおかげなんだから！』

「まじか。サンキューフィン頼りになる妖精だなあ……精霊だっけ？」

どっちでもいいか。よくないか

それにしてもこの……バカな子が大したこともしてないのにふんぞり返ってる……みたいなこの間抜けな顔を見ると本当に愛らしい。というか、ほっぺたを掴みたくなる。

こんこん

「ん？」

フィンのほっぺをつまもうとした矢先にノックが来たので手を引っ込める。

俺は視線でフィンを戻らせて扉の方へ「どうぞ」と返した

「こんにつちわ〜。お加減どう？」

「遙か」

入ってきたのは遙一人らしく、飄々と入ってきて椅子に座る

「なにになに？なんですか？その言い方〜残念そうに聞こえるー」

「そうでもなくもないこともない」

「どつち???!」

思ったよりも反応が速くて俺はつい噴き出した

「あっ！笑ったあー。もしかして、脈あり？」

「死んではないからな」

「もう。そう言うことじゃないって知ってるくせに！……今は別にいいですけどあー」

ここに一番よく見舞に来るのは遥が断トツで一番だ

暇なのか、サボっているのか。そんなに俺のことが好きなのか。違うか

「今日は、ルビ様と来たんだあ」

「ほほう。あのマイペース青年？今はいないようだが？」

「彼方がいつ退院できるか聞きに行ってる。ついでに、ルビ様あぁ見えて今年で32だよ」

「まじかっ！！」

見た目と違うな。童顔か？

とうとう退院か。そろそろ退院してもいいとは思ったよ。

「失礼します」

噂の童顔 じゃなかった。ルビ様登場。

「お医者様の話では、化物じみた回復力で明日には退院しても構わないと……どういう体のつくりをしているんです？」

「はっはっは」

化物とは言ってくれるねえ。医者

思ったよりフィンのお陰で早く退院できそうだとは思ったが、こっそも早く治るとは。

あとでいい子いい子をしてやるう。

「それですね、病み上がりで申し訳ないのですが、明日逢って頂きたい人がいましたね」

「あ、明日は大丈夫なんですか？」

「うん」

俺に会って頂きたい人？

「女でしょうか？」

「ええ、女性です」

ならば逢いましょうとも。今すぐにでも!!

あ、でも

「若いですか?」

「若いですよ」

ルビ様の言葉に俺はがっちりその手を握った。

あんたいい人!本当いい人!!

「良いでしょう、逢いますとも!ぜひつ!!」

「ちよつと彼方。それどういう意味?!」

だつていいじゃん。少しくらい。期待しても。ねえ?

「だめだよ、手え出したら!相手は巫女さんなんだから!」

「え?巫女?.....腐女子の方?」

「ええ、可愛い婦女子ですよ」

「いや、そうじゃなくて腐ってるほうの」

「ゾンビじゃないんだから腐ってるわけじゃない?」

だ、ダメだこいつら、なんとかしないと.....!

じゃなくて、伝わらない。この気持ち(.....)

だって、異世界人ならわかるけど、遥までマジな顔できよとんってしてるから知らないんだろっなー

アリアちゃんが特殊なんだと思うことにしよう。

なんていったつてテトラは普通だったしな。

とりあえず俺はいつまでも握ったままだった手を放した。

入院中につき安静に（後書き）

田中彼方なんだかんだで完治

書いてないけど今のうちにチート本読破

理解できたのは少しだけどねw

外見によって人は判断される

「良い天気だなあ」

どうも

最近萌とかその辺が遠のいてる上におっさんに刺されてみちゃったりした（根に持っている）ちよつと不運な田中彼方君だよ

今日はやつと退院できたのだけれど、さっそく用事を入れられて金瑠きんろう訪宮ほうきゅうに赴いてるところだよ。

動くのはまだ本調子じゃないんだけどね、その長つたらしい名前の建物には若い巫女さんが待っているって言うんだから行くしかないじゃない？

でもね。

歩いて行かなくてもいいんじゃないかなあ??

「【この国の人と交流を持ってもらいたいから、私の絵をヒントに金瑠訪宮を探してね】ってか」
ちなみに

発案者は遙です。あんちくしょー

まあ、病人をそんなに歩かせるわけないだろうということとで近くでつかい建物を探せば何とかなるだろう。

正直、絵、下手だし。

なに、この桃色ペンギン。地味に可愛いんだけど。テトラ思い出す。どっちかっていうとテトラは猫だ。

子犬というよりは、子猫だ。

べつに気まぐれとかそついうことじゃなく…なんていうかな〜わっ

かないかな

そうそう、ちょうど、あの道の角に居るウサ耳的な感じで猫感が……ってをい

「ううううううさあああああああ！!?」

ウサ耳バニーちゃんか?!マジか。

動物ハーフ万歳!!しかもミニスカ万歳!!

お近づきにならねばっ!!

だっしゅっ

「こんにちわっ!!少しお聞きしたいことがあるのですがあああああ
あ!!!」

「……はい?私ですか?」

!?!?!?!?!

な、なんだとー!!

「お、男おおおおお!!」

「いかにも、私はまごうことなき男ですが、なにか?」

男!!しかもどちらかというと、漢おとこ!!

何というトラップ!

精神というか、いろいろ持って行かれそうになったよ!?

僕のこの気持ち、分かる?

美少女だと思って振り向いたのはさらさらヘアのミニスカ天然ウサ耳オヤジ

しかもその顔はどここの艦長だよっていいなくなる。

恰好がアシなのに髭を生やすなああ!!なら、足の毛を剃るなああ
ああ!

なんで、何で足のモデルできそうなくらい色白の上に細くてつるつるなんだよおおおおお!!

「いえ」

俺は急いで目線と体をそらす。

変なフラグを立てるな、俺！！

もう遅い気がしなくもないが、やればできる。やればできるんだっ
！！

いやだ、こいつがレギュラー化とか、悲しすぎるっ！！

よく見ると、肩幅とか身長とか余裕で俺よりある。

なんで下半身だけ完璧女性なんだよ！てかスカートはくなよ！

なんで、ニーソなんだよ！！

なんなんだよ！おまえ！！

といたい言葉は呑み込んで、逃げる体制をとる。

止めて、おっさんのレギュラー化。それだけは勘弁マジ勘弁。ごめ
んなさいごめんなさい。

「ふむ。おぬし……巫女のところに行きたいのだな？」

「図星いいいい！！？」

ななな、なぜばれた！！

ばれる要素など、ミジンコほどにもないはずだ！

「田中、彼方殿だろう？噂はかねがね」

おっさん兎はそのサラサラのショートヘアを風になびかせながら、
不敵に笑った。

「我が名は、モエルン・リジール。巫女付きの護衛隊隊長を務めて
おりますな」

仁王立ちが似合う顔だが、格好が伴わなさすぎて突っ込むべきか悩
んでしまった。

「というか、モエルン……？」

その顔で？むつきむきボデエで？

「うん。モエと呼んでくださっても構わんぞ？」

「否。断じて否。リジールと呼ばせて頂きます……！」

萌の要素が格好と耳だけだというのに、名前が萌なんて、許せない。

だから俺は些細な抵抗として、リジールとよぶことにした。

「あ、きたきた 遅かったね、彼方〜」

結局街の人と交流することなくムキムキウサ耳おっさんに強制連行で金瑠訪宮に連れてこられると、早速遙が飛びついてきた。

「げほっげほげほ!……うう。急に跳ねたからむせた〜こほっ」

「ごへっがは……あほう。首に入っつてむせたのは、こっちじゃ!」
飛びついてきたのがちょうど首に直撃したためお互い涙目。

「けほ、あ。リジールさん。ちわ〜」

「ああ、お久しぶりですな、ハルどの」
リジール縮めてリジルか。

大した差がないように思うのだが。

それにしても、やっぱり遙もモエルンとは呼ぶのに抵抗があったの
だろうな。

「やあや。きましたね彼方君。病み上がりなのに遙がいたずらをし
て歩かせてしまって申し訳ない」

「大丈夫ですよ。リジールさんが車牽いてくれましたから」
半、強制的に乘せられて。

「でも、あの車すごいですね。磁力もないはずなのにほとんど地面
についていませんでしたし」

「あーあれねーすごいよね。エルフたちの魔法種を科学で取り込ん
だやつなんだってー」

遙も思い出したのかうんうん頷いて「あれがあるから他の国もここ
を狙ってるんだよねー」っと珍しくまじめな話をした。

「そういえば、その服でよかったの?彼方」

「ん?あ、ああ。俺はこの服が今のとこ異世界で一番しっくりきて
るからな」

現樹国でもらったあの服。

穴が開いていたところをごまかしているので少し柄が派手になって

しまったが、まあ何を着ても俺は似合うから大丈夫だろう。

「それに、一応これは正装らしい。巫女にあうならそれらしい格好しなくてはな」

「一応目の前に神様居るんですけどぉー」

「まあまあ。巫女が再び伏せてしまっ前に参りましょうか？」

ルド様がゆっくり歩みを進める。

「では、私はここで」

リジールがそう一礼して去っていく。

俺はそれを一瞥してルドの後についてゆく。

寝殿造りのようなその宮は、迷子にならなさそうだと。

けっこう大雑把な庭のつくりをみて一人ひっそりと笑った。

外見によって人は判断される（後書き）

人を見た目で信じたらいけない。けど。

また騙された田中彼方

馬鹿。

でも後ろ姿はマジ美人。……肩幅あるけど

未来を告げる巫女？

「ようこそいらっしやいました」

まるで子守歌を歌う母親のような澄んだ声が耳に心地よく届いた。通された部屋は広々としていて、入って真正面に簾があり、声の主はその奥に居らっしやるらしい。

ルド様が優しく微笑んで一礼した。

「ご機嫌いかがかな？アマリア」

「ありがとうございます今日は大丈夫よ、ルド……皆さん、お座りになってください？」

ふわりと鼻についたのは、紅梅の香りだろうか。

確かばあちゃんの家にあったものと同じ匂いだと思うが。

「どうぞ」

「ありがとう」

巫女の傍女だろうか。

俺たちのところに座椅子？を持ってきた。

座布団よりは高く、椅子よりは低い。とだけ言っておこう。

遥は慣れているのか、傍女にもらったらお礼を言ってさっさとその場に座り込んだ。

どこに座ればいいのかいまいちわからないから、遥の隣にとりあえず座った。

「はじめまして、田中彼方さん」

物に例えるのなら、彼女の声は「月」のようだとおもった。

温かくて優しく、そこにあるのに透明で手が届かない

「鳴神の巫女をしております、アマリアといいます」

「はじめまして。といえるのかな？まだ対面していないが」

姿が見えず、会話する。というのも変わったもんだが、まあ電話と思えばそう不快でもない。

だが、不快ではないが美少女と会えると思っていたのに声だけかよってという不満はなくもない。

「ふふ。たしかにそうですね……しかし、私事で申し訳ないのですが、私は今、床に居る状態でも皆様にお見せできるような格好ではないのです」

「ああ、そうゆうことならば構いません。俺ってフェミニストなんです」

ちよつと話題をルド様に預けて

「おい、遥」

「なあに、彼方ん？」

遥の肩をつつきながら小声で話しかけると遥はきよんとした顔で見えてきた。

「なんだ、そのくいたん的な言い方は「ん」をつけるな。大体、最後が「たん」になるのは可愛いキャラとか萌キャラの……」

「何言ってるのかおんなじ世界出身なのにわかんない」

……女の子って、純粹な子か腐女子しかいないのか？

アリアちゃんとか従妹もどちかっていえば後者だったし……

「で。なに？」

「いまさら何だが、なんで俺アマリアちゃんに呼ばれたんだ？」

「それくらい自分で聞きなよ〜しかも、さっそく親しげにアマリアちゃんなんて呼んでるしっ」

「俺は、フェミニストでナイーブなの！」

ひそひそ喋っていると

「分かりました、ではそのようにします」

ルド様との会話が終わったのか、ルド様が遥の手をとって退室の礼をとったので俺も真似て立てると

「ああ、いやいや。彼方君はいまからですよ」

「まじすか」

二人きりすか。マジすか。

緊張するなあ〜w

「え〜じゃあ、私も〜」

「ハルはダメですよ」

遥が文句をたれていたが、ずり〜と引つ張られて去っていった。

居なくなったのを確認して、アマリアちゃんが口を開いた。

「じつは、私は夢を使うことで未来を視ることができのですが…

…あなたの夢を視ました」

「それは、あの海岸での出会いのことですか？」

遙やルド様は確かそんなことを言っていたような気がする

「それもですが、未来のことです」

未来……

命中率100%の占い師なんて出会ったことも視てもらったこともないのでいきなり言われるとなるとドキドキするなあ……でも聞きたい乙女心ww違うかww

「それは？」

「それは、貴方が」

巫女は少し考えて答えた。

「貴方が、この世界の大陸を自由に行き来する夢でした」

大まか過ぎて、いまいち伝わりません！

「えつと……何といえればいいのか……確かに貴方の夢を視たのですが、妨害波といえますか」

ちよつと唸りながらも必死で考えている。

大陸を自由に行き来する夢というのも結構考えてからの結論なのだろう。

……ん？もしかして妨害してんの、俺のチート本じゃないか？

「すみません。もつとうまく説明したかったのですが……」

「いえ。未来は自分で見てこそです。気にしません」

ちよつと気になってるけど、そこは流そうぜ

「すみません……あ、彼方さんにここで暮らすための家をお渡しすることになりました」

「家？myハウス？」

「はうす？……ここからも城からも街からも遠からず近からずの、申し訳ありませんが、少し小さい家です」

「なんで、家もらうの俺？」

「いらねえよお前的な？」

「後日、必要なものを運ばせますので本日はここにお泊りください」

「えー……と。ありがとうございます？」

「ちょっといい加減足しびれたのを気にしながら頭を下げる。

「なんで家もらえるんだろ？しかも小さいの？」

「本当に今日は御呼び立てしておきながらうまく説明できませんすみません」

「いえ」

「病み上がりでつらいでしょうから、本日はもうお休みください。そう言われると、たしかに体が少し痛いかもしれん。

「そうさせていただきます」

「では、案内を……モエルン」

「！！！」

「ぞわわと鳥肌が一気に泡立つ」

「お呼びですか！巫女さま」

「彼方さんがお休みになられます。案内をしてあげてください」

「かしこまりましたぞ！」

「なんて野太い声なんだ、リジールさん！」

「頼むからレギュラー化はしないでくださいっ！！」

「そして腕を掴んで引きずらないで！！」

未来を告げる巫女？（後書き）

巫女さん姿なし。

そしてまた来たリジールさん

彼は何故ミニスカなのか、僕が聞きたいWWW

1LDK庭付き一戸建て

1LDKの庭つき一戸建て
ちよつと和風

お風呂が外付けに設置されていてちよつとした露天風呂付（ただ、移動の間に外を通るので湯ざめする可能性大）

ただ、ちよつと文句をあげるなら、何故かトイレも外付け

それが俺に用意されたマイホームだ。

俺は仁王立ちしながら自分で磨いた便器（なんと水洗なのだ）を見ながら頷いた。

うぬ。なかなかいい感じだ。

「彼方キュン！お布団干したよ〜」

「御苦労、遥。あとは中の掃除だけだな。というか、キュンをつけるなキュンは胸キュンの時だけだ」

「いいじゃん」

ちよつと唇を尖らせてすねたように見せてから、ちよつと思い出したのか

「あ」

と手をぽんつとうつた。

「そういえばーリジールさんが掃除の手伝いに来てくれるって〜」

「いら」

「参上しましたぞおおおおー！」

いらんといいたかった。

阻止したかった。

何故フラグを立てた遥。忘れたままでよかったのに！

「こんにちわ、ごきげんよう。彼方殿！」

「……やあ。リジールさん。今日も元気そうで何より」
残念だよ。

「はっはっは。こう見えてこのリジールだてにエプロンが似合うだけあって、掃除も得意なのですぞ！」
そうですか。

「いつかまずそのエプロンの意味を教えてくださいたい。」

「ははははー頼もしいなー」

「彼方君。棒読みに近いよ」

なるべく感情が出るようにしたつもりだが、本能が拒絶しているらしい。

遙、この男をどこか遠くに連れて行っておくれ……

「ということ、彼方殿」

ちよつと突っ込みたいのだが、そのホウキやらなんやらは一体どこからだした？

いつの間にか完全武装じゃないか。

「なにか？」

つつこんだら負けな気がするので黙る。

遙も突っ込めよ。ぜんぜん気にしてないのはなぜだっ！！

「ここはこのリジールに任せて、出かけてはどうか？」

「いや、でも悪いですよ……」

できればそうさせてもらいたい！

だが、一応そう素直に言う訳にもいかないだろう

リジールはあいからわず顔だけだどどっかの艦長みたいながついで顔で俺を見つめている。

「ああ、いたいた」

「ふえ？あ、ユルギちゃんだあ〜」

聖女光臨！！というか、助けて女神さま！！

「どうした？ユルギ！俺に用か？俺に用事があるんだな？！そうだとら！？」

「あ…うん。どうした彼方？目が血走ってるぞ気持ち悪い」

はっ

俺としたことが、みっともない。

それだけ精神的に追い込まれていたということかつ……！！

「で、どうしたの？」

遙がじとーと俺の後ろでユルギを見つめる。というか、にらむ。

「ああ、彼方と前に約束していただろう？……私の国に招待すると厳密に言つと、国と認知しているのはこの国の人だけらしいから正しくは集落らしいが。

「あゝ。それでか。誘いに来てくれたのか……ありがとう」
心から、ありがとう。

ちよつと申し訳なさそうに

「それじゃあ、リジルさん。お願いしてもいいですか？」
と試みてみた。

内心嬉しくて仕方がなかったのだが、それは秘密だ！

「うむ。構わんですぞ？いつてきたまえ」

「じゃあ、私も！！」

「遥殿は、午後から用事があるではないか」

「うううう〜！」

何故か恨めしそうに睨まれる。俺。

はっはっは。

俺は自由だ。

「忙しいなら、別に」

「いや！行こう！女の子からわざわざ誘ってくれたのに断るなんて無粋な勿体無い真似この俺がする訳ないだろう？そうだろう！じゃあ行こう！すぐ行こう！さあ行こう！！」

ここで断られても困る！

逆に俺が腕を掴んでユルギを無理やり連れ出すように引っ張って逃げるように……いや、実際リジールから逃げた。

むり

あの人生的に。

せめて格好いい軍服ぐらいきてくれれば全然OKなのに！
なんてもったいないんだ。

とりあえず、遙が追ってきてリジール地獄に舞い戻りたくないのだから一刻も早くリジール射程距離から離れなければ！！
持ちやすいようにユルギの手をしっかりと握りかえる。

「何をそんなに急いでるんだ？そんなに急がなくても乗り物に乗るから夕方になる前に着くぞ」

「いや、もうなんていうか、俺、必死？みたいな」

「それは見たらわかるが」

この男はいつもわけがわからない。

飄々と余裕ぶってるかと思っただらちよつとスケベだったりこいつなりに必死だったり

ちよつと魔法種で頭でも冷やさそうかと思っただが

「……………」

ぎゅっと握り直された彼方の手

(……………ああ、あつたかいな)

その温かさに少し懐かしさと愛しさを覚えてなんとなく嬉しくなっ
た。

(まあ。別に早く着くのも悪いことじゃないし、いいか)
ちよつと微笑みをもらして彼方の手をつよく握り直した。

田中彼方がその微笑みに気がつくことはなかったけど。

1LDK庭付き一戸建て（後書き）

六月ももう終わりですね。さらば 〓 3

最近、お気に入り100件超えました。皆さんのおかげです。本当に

ありがとうございます！これからもご愛読よろしく願います。おまけに評価とか感想とかくれたら嬉しいです。〓 〓 〓

魔法樹の国

「もうすぐだ」

よくわからない、バイクのような……【WA】というものに乗って
少ししてユルギがそう言った。

「それにしてもすごい樹だな」

ユルギの言う方向に進んでいくといつの間にか森に入っていて、そ
の森の樹は色とりどりの光を発光している。

写真を撮ったらオーブとかになって写りそうだww

「魔法樹。魔法種が育ったもので、これからできる実はとても体に
良いんだ。それに、この樹自体綺麗だろう?」

「ああ夜とか花火なんて目じゃないぜ」

「花火?」

この世界にはないのか。首をかしげるユルギに何でもないと同じく
首をかしげて返すと目を殴られた。

「きゃあああ!!」

「!?俺の悲鳴じゃないぞ!」

「そんなの言わんでもわかる!」

ふいに、遠くから大勢の悲鳴が聞こえはじめた。

「つつ! 私たちの街からだっ!」

ユルギはWAのスピードを上げ ここが日本の高速だったら軽
く捕まるくらいの 街へと向かう。

「!みんな!!」

大丈夫だ。と励ましてやりたかったが、あまりのスピードに振り落

とされないようにするのがやっとだった。

「ああああん!!」

「マナ!」

ついたと同時に揺るぎはゴーグルを投げ捨て泣きわめく子どもの名を呼びながら抱き上げた。

「姉様が姉様が!!」

「姉様が!?……彼方。この子を頼む!」

姉様という単語を聞いてユルギは少女の頭を撫でて走っていった。

「おいっ!ユルギ!」

向こうの方で火が見える

生々しい匂いはまだしないのが救いか、それともそれはアニメなどの世界の中だけなのか

「ねえ、君!どうした!?何が起こったんだ?!」

「攻めてきたの!軍が!ひっく。うう……」

軍!

とうとう動き始めたのか。

まさか現樹国 深山功一じゃないだろうな

とりあえず小さいエルフの子どもを抱きかかえて頭を撫でて落ち着かせる。

「皆はどこに居るんだ?」

「あつち。みんなで、姉様をお守りしてる」

指さした方向は炎の塊。なるほど、あそこが戦場か

「分かった。君は安全なところに避難するんだ。いいね?」

「うんつ。でもみんなは」

「皆助けるから、な?」

「約束だよ」

口から砂を吐くような勇者のセリフを吐けば、少女は微笑んで安全

な場所　　つてどこなんだろう　　へと向かっていった。

「さ、て、と……」

俺はゆらりと立ってにやりと笑った。

そこに誰かがいたらお前が犯人だとしても言われそうだな。

「俺の庭を荒らしてくれたお礼をたあ　　つぷりしないとな」

俺の庭つて具体的にどこまでよ

そんな俺の眼に見える範囲に決まってるジャン。

懐から久しぶりの相棒を取り出した。

「姉様!!」

ユルギはまっすぐ姉のいる社へと向かったが、そこへ行く途中にも怪我している人々や旋回している敵兵がいてなかなか思うように進めず、魔法種でなんとかたどり着いた時にはすでに姉は敵に囲まれてしまっていた。

「来てはなりません!ユルギ!」

「お逃げくださいっ!」

姉や側近たちが私に気づいて逃げるように叫ぶが私は気にせず敵に向かって魔法種をかまえる。

「だめだっ!姉様たちを捨てて逃げるなんて!」

「おまえもエルフか!ちようどいい、生け捕りにして本国に連れ帰れ」

リーダー格の男がにやりといやらしく笑って合図して私は敵に囲まれる。

「ついカツとなって一人で乗り込んでくるからだ、馬鹿め」

魔法種を放とうとするとその手を掴まれもう一人の奴が迫ってくる。

「っ!?!」

「まてまて〜い!〜!」

「誰だっ!空気読めてないやつは!」

敵兵が何人が驚いてつつこみながら振り返る。

「いつだって、ヒーローは遅れてやってくるものさ。それを先走るうものなら主人公から外されちまうからな　ちなみに、これは経験談だ」

「おまえ本当に誰だ!!」

誰だ

なんて聞かなくても声を聞けばすぐにわかる

田中彼方。

あいつしかこんなわけのわからない空気の読めないセリフを吐いたりしない!

仁王立ちしてきーらんっ　と歯を光らせる

「悪役らしい質問ありがとう。そしてはじめましてさようなら。異世界から自力で来たのにおまけ扱い少しかわいそうな本当の主人公、最強になる男、田中彼方様だ!!　って最後まで聞けよ!!」
長い説明を聞くわけもなく敵兵たちは精練された動きで田中を囲む。

「うるさい!いかれた男めお前に用などない!さっさと死ね!」

「短気はよくない。ただでさえモブは死亡率が高いんだ」

「ごちゃごちゃうるさい!かかれ!」

号令と共に兵が武器を構える。
が

田中は気にもせず手を振る

「やれやれ。ここまで思い通りに動いてくれるとむしろ嬉しくて笑っちゃうぜ　はっはっは」

ぢゃぎっ

と嫌な金属音と共に彼方に剣が襲いかかる

「彼方　っ!?!」

……どろっ

「なっ!」

剣は彼方に触れることなくドロドロに溶けてなくなった。

「大丈夫だ心配ないぞ?ユルギ」

どこから取り出したのか扇子で己を仰いで隠し切れていない笑みを一層深くする。

「おまえらは俺の新しい庭を見る前から汚してくれた。お仕置きだ

イノリ、やれ」

『その言葉、ずっと聞きたかったの』

田中の蔭から、すと現れたのは

大きな尻尾が9本ついた、大きな妖狐

金毛九尾!

《ああああああ!》

「ひっひえええええ!」

その一鳴きだけで10人余りの兵は脱兎のごとく逃げだす

「ま。ままま、待てっ!またんか!」

「あゝ大丈夫大丈夫。お友達にはちゃんとして待っててもらおうから
彼方にはにんまりと笑ってリーダー格の男の首を掴んで外を見せた。

「ほら、ちゃんと外で待つてくれてるでしょ?」

「……………!」

外にはヤトと俺の姿をなしている、えつとあの名前の長いスライム
が敵から奪った剣を持って敵を無表情で捕まえては縛り上げている。
ん?おれ、無表情のほつが格好良くないか?

「さてさて。兵隊さん?死にたくなければ俺の名を称えて尻でも舐
めてもらおうか?ああ〜ん?」

「ひっひいい!」

おっさんの顔は浮気がばれた中年の親父みたいなひどく情けない顔
でおもしろかったが、逆に飽きてきたのでイノリを影に戻させる

「あんがと」

『せっかく食えると思つてたのに、つまらないわ』

「思つてたよりも腑抜けだったんだよ」

妖狐はつまらなさそうにため息をついて素直に陰へと入つていった。

『主どの、敵兵は隠れていたものも含め全て捕獲しました』

「んむ御苦労下がつてよし」

ヤトは一礼して陰へと戻る。

フィンはまだまだお仕事をしておいてもらつたため残しておいて、えーと名無しのスライムを呼び寄せナイフへと形を変えさせにっこりスマイル0円でちよつと肥満気味のおっさんの髭を掴む。

「き、きさま、貴様何者なんだつっ!」

「自己紹介したじゃんよ。ちゃんと聞いとけよ」

「ばばばけもの!」

「ちげーし。つか質問すんのこつちだから」

あゝあ。歯あがちがち言わせちゃって、まさか洩らしたりしないよな？

止めてよ、俺汚いの無理だから

「ちゃんと答えてくれないといういる失つちやうぞ?」

コクコクと必死でうなづく男を見ながらちよつと笑いが込み上げてきた。

人間、死を前にするところまでプライドがなくなるものなのか。

ユルギ達がお互いの無事を確かめ合つているのをちよつと後ろの気配で確認した。

よし、まああの少女との約束は守れたみたいだな

幼女との約束はなるべく守りましょう

魔法樹の国（後書き）

ちなみに

現樹国のひとときわ大きなあの樹も魔法樹です。

というか田中彼方楽しそうww

まだまだはっちゃんけっぞー！

そして僕らは動き出す（前書き）

サブタイトルを格好良くしてみたけど内容はそうでもありません。
ただ、思いついたんだ。
後悔はしていない。

そして僕は動き出す

「……ってことがあったんですよね」

前回の件を上の人たちに一応ご報告

「……まじで？」

遥がアイスを食べながら、その口にくわえたスプーンを落としそうになりながら聞き返してきた。

「残念ながら」

「……思っていたより少し早いですね」

遥と一緒におやつを召し上がっていたルド様はきちんとおやつから手をはなして俺の方をじっと見つめた。

「被害はどうですか？」

「どうだろう。とりあえず死人はいない」

「軽傷のものもあわせると結構な数だが重症のものは数人だ。被害は軽い方だといえる」

姉様とやらを病院に送ってきたのかユルギが途中から俺の情報を付け足す。

「彼方のお陰だ。ありがとう」

目を見つめられてお礼を言われるというのは、なかなか温かいものがあるな。

……かなり照れくさいけど！

「……っむ」

俺の腕に遥が何故かむくれた顔で抱きついてくる。

「神としてお礼を言うね！ありがとう！」

「ん？うん」

なんだ、やきもちか？可愛いが腕にあたる胸の感触をもう少し欲しいところだな。うん。

「それですね」

俺はとりあえずルドに提案してみる

「仕返しを明後日しません？」

「は？」

「だから、明後日行きましょう。報復に」

俺の庭を汚した罪は軽くはないんだよ。わかるか？

「なあに。相手は北方にある小国、厘石国らしいですから大丈夫ですよ」

「前回も使用したお気に入りの扇でばたばた仰ぎながらはっはっはーと笑うが誰も一緒に笑ってくれない」

「な。何言ってるの？無理だよ！相手は一軍じゃないんだよ？一国だよ？国！」

「名光なみつは国内の民たちを養うので手いっぱいで軍事費がほとんどないんです。明後日など……とてもむりですよ」

「いくら彼方が強いからっていくらなんでも無理だ！皆に口々に反対される。」

遥は俺が寝言を言っているとでも思っているのか俺の頭をぺちぺちと叩いてくる。

ええいやめい！

「確かに、軍力は十分じゃないでしょうし俺がいくら強くても一国相手じゃ負けるでしょうね」

「じゃあ、大口叩かないでよ」

その言葉に少しルドが苦笑いを浮かべる。

遥、地味に厳しいな。

「だから、敵の本陣ほんじんに一気に攻め入ろうと思う」

をした。

思い通り元気に嘖き出してくれたので僕はとても満足です

「か、彼方！お前！一体今までどこに！？」

「わー深山功一くん、久しぶりだねー。あいたかつたよ」

「棒読みというか、発音がおかしい！」

どうでもいいけどこの世界の満月でかいね。

めっちゃ近く感じる。……重力とかどうなってるんだろ

「じゃなくて！お前」

「ここで俺の扱いが死んでんだか逃走者なんだか知らないけど。お前に用があつてきた。だから聞け」

ちゃんと地面に着地してこれ以上大声を出さないように深山功一の口をふさぐ

「……！」

少し驚いたように目を開いたが少ししてうなづいたので手を離す。

「本題に入るまえに確認したいことがある……俺達、親友だよな」

「ああ……当たり前だろ」

そう言つて深山功一がさわやかに微笑む

「照れくさいけど……何か困つてることがあつたら、助け合つのが友達だよな」

「もちろん。なんか悩んでんなら力になるぜ！」

「なんでも……？」

「水臭いぞ！俺とお前の仲だろ？なんでも協力するって」

《何でも協力するって》

キュウピーン！

その言葉を待つてたのだよ！！

口をがつつと掴む

「言つたな！何でも協力するって。ほんじゃあ明日戦争するからよ

お前んとこの兵力少し貸せや！」

「んんむ！？んんんんむぐぐ！！！」

何か怒っているようだ。口をふさいでいるために人語になっていない。「おまえは普通にお前の名目で厘石国を攻めてくれりゃいいんだよ。それなら他のやつらも反対しないだろ？んん？」

怒っているのか相当のちからで外そうとしている

力ではもちろん敵わないので相手いる手でちくつと軽い麻酔を注射
「ん”！！」

「大丈夫体がしびれるだけだから」

ものすごく睨んでいるがそれもすぐに弱弱しくなっている。

「ちなみに」

俺は懐からアル物を取り出して深山功一の目の前に差し出した。

「もし達成できなきゃこれを現樹国中にばらまいてやる」

深山功一 中三までの心の日記

かなり何か言いたそうだったので手を放してやる

「な…んで、捨てたはずのそれお前が持ってんだよ！！」

「気分」

「どんな気分だよ！」

「とりあえず達成できたらうちのところと同盟結んでやるから、な」

「うちのところってどこだよ」

「気分」

「だからどんなだよ！」

とりあえず。明日の予定。

厘石国、侵略

そして僕らは動き出す（後書き）

うわー久し振りだね深山功一君。

日記なんて付けてたんだね。

名前とかつけてそうだね。うんで、書くときとかに話しかけてそ
うww

彼らは笑うにやーっと

鈴神が筆頭の厘石国は石や玉で有名な財政裕福な国家だ。

戦力はないが、小さい国ながらも八国一の防御壁を国に築き上げており、とても攻めにくく守りやすい形に自慢の石塀を高く積み重ねている。

「やっば無理だつてー……」

橙色の軍服をまとった遙が明らかに不安そうな顔で俺を見上げた。ちなみにマントと上半身はまともな軍服だが、下はスカートだ。ミニのな。

その辺は勿論俺の趣味以外の何でもない。

「大丈夫だ。俺を信じる。トップが不安げだと下の者も不安になるぞ？」

もう何回目だろう。同じことを再び言うが遙は「でもお」と不安げな表情のままだった。

「たった、30人だよ？」

「少数気鋭のほうか俺は楽なんだ」

その中に何故カリジールがいるのは目をふさごう。見ちゃだめだ。俺の士気が下がる。

ちなみに今夜は新月。

光は街からこぼれる程度のもの。

首都までの距離はかなりある。

「だって、現樹の人は外から船で砲台撃って攻撃仕掛けてくるだけ

「なんでしょ？」

「十分だ。それにそれはもう始まっている」

俺たちからみて南の海でいくつかの火の光が連続的に轟音と共に続いている。

ちなみに東西南北いろんな方向からどっかんどっかんしてるよ

「これだけ騒いだら、『侵略しに来ましたよ』って言うてるようなものじゃない?!」

「いやいや遙君。何を言っているのかね。これでもまだまだ足りないようなものだよ」

先ほどから地域軍が必死で応戦しているようだが、現樹の兵のほうが有利。

それに名光の軍も遠くからそれそれと砲台ぶちかましてんだから地域の軍でどうにかなるわけがない。

「厘石本体の軍を出させてどうする気ですか？」

ルド様が温かい飲み物と共にこちらに寄ってくる。

「首都を空にして一気に攻めるんですよ」

「だからーそんなの無理だって……きゃっ!!」

どっん

と一つ大きな音が近くでなった。ここまで被害が強くなったらそろそろ出てくる頃だろう。

「俺たちの出番ももう少しですねー。それじゃそろそろ首都の城へと移動する準備をしますか」

目立たぬように静かに動き樹と石の間の草原に降り立つ。

「ヤト」

『はっ』

もはや闇と同化した影に名を呼びヤトを喚ぶ

「そろそろ移動するから準備。距離北に109人数30着地座標4

49くらいで」

『分かりました！お任せください』

そう言つてヤトは目をつむると風を起こし俗に言うミステリーサークルをいうか魔法陣を草に描く。

うむ。見事だ。

しかし、やっぱり短パンじゃなくヤトにもミニス力をはいてもらおうか……と思案中。

『できました。あとは主の台図のみです』

「りょーかい。あんがと、ヤト」

『いえ、これくらい……それでは戻ります』

嬉しいような照れるような

そんな表情でヤトは影の中へと再び帰っていった。

俺はそれを確認して名光の少数特設軍隊の30名のところへ行つてにやりと話しかけた。

「さて、ほんじゃー皆さん行きましようか？武器は構えてね？今から簡単な作戦言つて向こうで実践。オーケー？」

遥だけがオーケーと返してくれた。

鈴神を務める男、長竹 仁『しのぶ』は髭が伸びた40代の気の荒い、短気な男だ。まあ、そんなことどうでもいいのだが。彼はこの世界に来てからもいらついていた。

軍力が他の国に比べて優れていないのもそうだが、国土面積が2国

めに小さいというのも気に入らなかつた。

どちらかというとなつたためにはやや不利の国。

世の中には平等というものなどないのだ。

仁はすこしいらいらしながら先日つくらせたばかりの玉のはめ込まれた王座に力を入れた。

向こうの世界でも自分ももっと才能があるはずなのに無能の上司のせいで失敗続き。

この世界でやつと主人公のようなスポットを浴びるのかと思えばどちらかといえは貧乏くじ。

そのうえ大きな国ならともかく同じような中小国が自分の国に攻めてきている。

もともとちよつとしたことで切れる彼は今のこの状況を快く思っているはずがないのである。

「ええいつ！軍はまだつかんのか！街が燃え尽きるぞ！」

正直あの街など燃え尽きようが壊されようが気にしないのだが、あそここの周辺にはよく玉が取れる樹がなっているのだ。あれが燃えてしまつては……と気が気じゃない。

「しかし 国軍を東西南北に全軍をバラけて動かしたために戦力も分散され、なかなか敵を静めることが困難の様です」

「ち！役立たずどもめ！」

怒りを隠そうともせずには彼は報告に来た部下の頭に手に持っていたグラスを投げつけた。

「まあまあ。そうお怒りにならずに冷たいものでもどうです？」

「いらん！下がっておれ！」

「そう言わずに、ほら」

「いらんといつて……」

仁は自分の後にいるしつこい男を殴ろうとして、固まった。後ろに居た男はさも嬉しそうにやーと笑って《冷たいもの》を彼の首の近くまで近づけた。

「そう言わずに、黙って冷たいもの受け取ってよ？降伏してくれるんなら除けてやってもいいけど？」

冷たくあやしく光る鋭利な刃物をもって、田中彼方は微笑んだ。

「逃げてても無駄だよ。ここにはろくな軍が残ってないし、うちの有能な子たちが相手してくれてるからね」

遙も田中によく似た笑みで仁の髭を撫でた。

彼らは笑うにやーっと（後書き）

遥結構つられやすい子。

田中彼方。人を追い詰めると快感を得るSな子

どっちもやだねーww

国獣は鹿！

本陣しほはもう落ちた。

となれば俺たちの勝利は目に見えている。

にやにやしながら偉そうにふんぞり返っていたおっさんの席にあえて座りつつ話しかける。

「こんなに思い通りにひっかかるなんて……おっさん、馬鹿？」

「んん！んんん！！」

あえて口も体もぐるぐる巻きにしていればおっさんが口うるさく怒鳴っていても何を言っているのかわからず静かなものである。

いいねーその屈辱にゆがんだ顔。

「勝った勝った勝った」

遙はうれしそうにぴよんぴよんはねている。

ここからの指揮はルド様に任せることにした。

だって俺別に軍師でも何でもなしね。

「厘石国国王をとらえました」

「どっかの馬鹿なおっさんと違ってなかなか捕まんなかったね」

厘石国王は馬鹿な鈴神よりも威厳がある立派な御爺さんだ。

髭がいい。髭が。サンタクロースみたい

「……殺せ。我が厘石国はもはや負けだ」

兵士につかまれた状態でうつむいてそう王は呟いた。

カッコいい。なんだろうこの人カッコいい。

俺も負けたとき使わせてもらおうかな……あ、でも俺別に所属国ないから言えねえや。

「ねえ、いろいろ思考トリップしてるみたいだけど彼方君」

「初めのころに比べて君も言うようになったねえ遙君。で？なんだ？」
「具体的になにをどうしたら勝ちってなるのかな……次なにするの？」
「ここまで来たら勝ちじゃね？それは一目瞭然。
ただ、この戦いはゲームみたいなものでもあるからどうにかそれを知らせなきゃいけないんだよな……多分。
どうやって知らせるんだろうね」

「ルド様に聞いてみよぶ」

「ぶ？うん。まあ聞いてみようか」

「その質問にはこのリジールが答えましょう！」
出た。

巨人兵。いや、そんなにでかくもないけどオーラが出てんのよ。
何故か遥と似たような形の軍服。

ぶっちゃけて言ったらミニスカートをはいているのだが、どうして？
なあ、どうしてそこまではくの？！

「勝利の鹿を鳴らすのです」

「いや、鹿を鳴かす、じゃないのか」

突っ込んでみたものの別に気にも止められず

「リジールさん、鳴らしちゃってください」

とルド様の言葉でリジールは外へと出る。俺たちもそれに続く。

懐から……よくあんなでかいのはいつてたな……鹿の絵柄が彫り込まれた鐘を取り出し、鳴らし棒に力を込めて一撃を放った。

「ふんぬああああああああああああああああああああ」

きいんこー……………ん！！

すごく大きな澄んだ音が戦場を駆けてゆく。

その音に今だに頑張っていた雑兵たちが武器をおとしていく。

どうでもいいが、リジールの気合いのほうに俺にはでかく聞こえた。

「おおおおおおおん」

「！？なっなんだ！」

鐘が鳴り終わると同時に後ろから大きな声が轟く

振り向けば都市を覆わんがごとく大きな牡鹿が猛々しく啼いている

「勝利の唱だ！」

戦場から歓喜がわき起こる「名光の勝利だ！」と歓声が起こる。

「てか鹿でけえ！」

よくその角を見ていると人間よりは大きい、鹿に比べるとだいぶ小さな猿がひっかかっていた

……なぜ猿がひっかかっている？

「アレは名光の国獣です。猿が厘石の国獣で、あの様子は名光が厘石を倒したと鳳来に伝えているのです」

以上解説ルド様

「へ〜」

「知らなかったな」

つて遙も知らなかったのか。

俺もそこまでは習ってなかったな〜

「あ、あのう」

「わっびっくりしたっ！」

声はすれども姿は見えず……ん？この声聞いたことあるような

「お久しぶりです」

下を見ると

「あ、居た」

あの萌っ子がいた。

あのメガネと取り合った可愛い子w

「あれ？君このおっさんの使仕だったの？！可哀想に！」

「い、いえ。違います。鈴神には使仕はいませんし」

……おっさんが弱い子でも一匹は持つてるのに何してんの

「鳳来からの、お使いです」

「誰が？」

「私が」

「マジで」

「はい」

……世の中、狭いねー

「鳴神と鈴神……あと、新神をここに集めてください」

「現神……となると、あいつか」

「国の外に居ますから、ここに呼ぶのに時間がかかりますよ」
「ルド様がそう萌っ子に伝えると困ったように耳が動いている。
可愛い。すっげー可愛い。触ってもいい？触ってもいいよね？」

「じゃあ、あの。こっちで呼びます」

とことこと少し離れて

「えい」

「！！！？なんだっ！ここは！」

はい、新神様トージョー

「はい、お決まりのリアクションとか誰も求めてないからねー」
ものすごく戸惑ってる深山功一の頭を叩くと、ふと、一緒に来たの
かアリアちゃんと目があう

「きゃあああああ！生きてたんですか！？」

それは喜んでるととってもいいのだろうか？

よし、喜んでるってことにしよう。

てかおれ死んでたのかー

「えっとその、調印しますから来てください」

神様三人集合

一人ぐるぐる巻きの介

「厘石国を脱落とし、現樹・名光にその国力を分散して与えることを命じます。なお厘石国鈴神は敗北者としてこの世界から追放させてもらいます」

「んん！」

まだぐるぐる巻きのおっさんのおが明らかに青ざめる。

時間たつてるし、会社とか首だろうね。ご愁傷様

「現樹・名光はほぼ半分ずつの戦果なので……こつ……どうわけます？」

仕切るのかと思えば聞いてきたwwかわゆす

「一定の金額さえもらえれば、俺達はあとはいらぬ。国の植民地権もそつちにやる」

「本当にいいのか？」

深山功一がちよつと複雑な顔で聞いてきた。

「そういう契約だっただろ」

「じゃあ、そう言う風にします。これにて緒戦を終了とします」

そついつてとこととあるいて「えい」といつて消えていった。
可愛かつたなー

「あ、深山功一」

「あいからわずフルネームだな。なんだ？」

「同盟結ぶからちよつと明後日くらいにうちにこいよ」

「ものすごく軽く言うけどすごい重いことだからな？」

「良いじゃん別に」

「それに、別に同盟については反対しませんが、同盟を結ぶのなら格下のそちらがこちらに来るべきです！」

心外なといわんばかりのエリアちゃん。

格下ってそんなに堂々と言わなくてもいいのに

「うへえ。彼方君。あの子髪の毛ピンクだよ。叔母さん年齢とかになつたらきつくないのかな」

「男の夢の中では女の子はいつまでたっても女の子なんだよ?」

「そこ、聞いてますか!」

怒られた

特に疲れてないけど疲れた人もいるだろうからとりあえず帰国することにした。

結局同盟を結びたいなら現樹にこいだつてさーBOO

移動面倒なんだよ。海渡んなきゃいけないしさー

国獣は鹿！（後書き）

そういえば、最近ロリがおろそかになっている気がする。
だそう。ロリ

やっぱりこの作品ロリがないとダメだって。

なめんなよ(前書き)

ながい

いつもに比べたら長い

二話に分けようか悩んだ末、まあいつかーってなったww

なめんなよ

この世界の月はとても大きい。
だからこそ、満月じゃなくても結構足下とか見える程度の淡い光が
今も満ちている。

「さあ 鬼ごっこの始まりだ」

月をつまい具合にバックに背負った鬼は
ひどく嬉しそうにかなり楽しそうに
にやりと笑った

「お前が、入らないなんて変な話だな」
「ん……？ ああ、ユルギか」

現樹国はその名に樹が入っているようにやたらめったら樹が生えて
いる。

適当な樹を選んで俺はだらだらと寝ていた。

「同盟を結ぶときにお前がいなくても、いいのか？」
ふわっとユルギの匂いがする

近くに座ったのか、俺はちよつと伸びをしてユルギを見た。

……逆光で顔がよく見えないが、ものすごく近い。ちよつとドキドキ

「いいんだよ。だって俺あれじゃん、一般人」

ひざまくらしてもらおうと頭を近づけたらチョップされた

「……心配じゃないのか？ 不利な条約をつけられるかもしれないぞ」

「んー大丈夫じゃね？ ルド様あみえても切れ者だし、深山功一はそういう卑怯なことを嫌う正直者^{バカ}だし」

オレはオレでルド様にしてもらいたいと思ってること耳打ちしてるしねー

「ああ、本当です！」

「んあ？」

影がかかったと思つたら、ぽわんつと魅惑的な感触

「ずっと心配しておりましたっ！」

息が、息がっ！ ずっと夢見ていた状況ではあるが、結構苦しい！ もちろん比例して気持ちいいが！

「ぶあっ！ ミヤモ！」

爆乳ロリメイド。ミヤモじゃないですかっ！

そついや俺付きメイドさんになったのにほとんどお世話される前に居なくなつてたっけ？

「お元気そうだなによりです」

樹の下のほうで声があるので覗いてみると白衣とぶかぶかのメガネをかけたマリーナ先生とそつばを向いたロットちゃんとその他男たち^ちがいた。

「皆久し振りー元気そうだなー」

「そつくりそのまま返すゾンビ野郎」

あいからわすツンデレだなーロットちゃんは！

「生きてたんだなあああ！！彼方ああ！！」

「ぎゃああああ！！」

ものすごい運動神経で一気に樹のうえまで飛んできて俺に抱きついてきた。

「鳥肌で死ぬっ！きもいから離せラジエル！！」

何故か涙涙の男をはがし呼吸困難で死にそうだったのでユルギにもたれる。

「まあまあ、ラジエルはお前が死んだのは一緒について行かなかった自分のせいだと思ってるんだ」

ライズが今だに俺に抱きつこうとするラジエルをはがいじめ状態でなだめながら苦笑いを洩らした。

「それにしても、本当によく生きてたな」

「まあ、俺最強だからな……今死にそうだけど」

いくら木の枝が太くて大きいといってもさすがに全員も乗れないので下に降りる。

「ミヤモ。飲み物全員分持ってきてくれ」

「え、あ、はいっ！すぐにお持ちしますね」

「で、ここに居る皆は仲間だと思ってもいいんだな？」

腕を組んで威圧的に微笑めば、緊張が走ったかのようにみんなまじめな顔になる。

「そう思うのも、無理がない」

ラジルがそう笑うが、目は笑っていない。

「だが、信じてもらいたい俺達はお前の味方だと」

「根拠は？おれが翠雲国に行くことを知っていたお前たちもグルつてこともなくはないぞ？」

「彼方」

ユルギが制する声を出す、気にしない

「信じてください」

「今は、そうとしか言えません」
マリーナ先生がじつと俺をみてる

……
…… かわいいなあ

「いいよ。全然信じちゃう」
誰かからか溜息がこぼれる

正直、犯人すでに見つけたからさもともと信じてたんだけど、一応チート本つかって敵発見器を創ってたから大丈夫だとは思ってたけど。ちなみに敵発見器、見た目はピアス。俺おしゃれさん!!!
一つこれの問題をあげるとしたら、このピアスの敵の定義はいつたいどの辺なのだろうか……

「仲間ってことで、信じるからさ。手伝ってよ」

「手伝うってなにを？」

胡散臭そうな顔でロットちゃんが見上げてきた。

「鼻かんでもいい？おいしそうだから」

ライズがロットちゃんを自分の後ろに隠す

「兄的にアウト」
つち

「何をつて、あれだよ……俺が世界の頂点に立つお手伝い」

この世界は俺が生きるには少し面倒くさいから、俺が作り替えてやろうじゃないか。

神になるうってんじゃない。最強になるうっていつてんの。

「今日はさ、この国に泊まるからさよろしく」

マリーナ先生の手をにぎにぎする

「もち、夜這いとか全然オツケーだから」

「わかりました。彼方さんの部屋は離れにしておくようにアリアさんに忠告しておきます」

「……さすが、先生つれないなあ」

ふああ

あくびをして、伸びをする

「？今日はやけに眠たそうだな？風邪か？」

ユルギが俺の額に触れながら首をかしげる

「いんや、ちよつと昨日張り切り過ぎてね」

にこーっと笑って寝るから膝貸してっていうとまたチョップされた。

……飲み物。遅いなあ

「本当に、離れにしてやんの」

風呂からあがって案内された部屋は前俺が借りてた部屋よりもせまいところだった。

あーでも風情があっていいかもー

「さっさと寝よ」

よく分からない光る球体をつついて光を消す

光がきえてだいぶ時間がたった。

殺すなら、今だろう

「いけ」

小声で指示を出すと両サイドから気配と共に手下たちが入っていく。自分も遅れないように部屋へと侵入する

「……！！」

「やあ、待つてたよ？寝ながらだけどねー」

眠そうに眼をこする男 田中彼方は私のほうを見てにっこり笑った。

「こんなに簡単に引つ掛かるとはねー。この世界の悪役馬鹿ばっか？」

田中の周りには手下たちがうめいている。

田中の後ろに、何かがいる

「昨日の夜、君の部下と鬼ごっこしたら教えてくれたんだー君のこと。それにしても残念だったな。あのおっさん結構好きだったのに」雲に隠れていた月が現れ、部屋を照らし、田中の後ろのものを明らかにする

「最後まで口割らなかったしーかなり傷めつけたんだけどね、他の奴がげろっしてくれたからまあいいかって」

金の毛が月に照らされ妖しく輝く

金毛九尾！

「君が本当の黒幕かどうか知らないけど、どこまで傷めつけたらげ

ろってくれる？なあ　　ミヤモ！」

「つつ！！」

私は急いで踵をかえして逃げる体制に入る
やばい、このままじゃ、逆にやられ……

「逃げられると思った？おあいにく」

扉にも田中がいる

無表情に私を睨んでいる

「で、夜は長いわけだけど俺眠たいの。早くげろっちゃってくれる
？」

「……………あ……………あ」

私は唇をかんで、覆面をのけて後ろに居る田中のほうにだきついた

「彼方様」

「お？」

胸を精一杯押し付けて涙を浮かばせて見つめる

「ごめんなさいっ私……私、頼まれて仕方なかったんです」

「頼まれた？」

「そおなんです……だから、わたしのこと、許してくれませんか……？」

手を掴んで、自分の胸にそっと添える

「もし、許してくれるなら、私……あなたに何されても……いい」

田中の顔を見ると、にやーっと口の端を持ち上げて、指に力が入った

…………… 良かった！

今はとりあえず、つないでおいて、また今度殺すチャンスをつかが
う……………

ゆっくりと布団の上に押し倒され、そっと首をなでられる

「残念だったな、俺はだますのは好きだが、騙されるのは嫌いなんだ」

「……あつ」

撫でていた手は、そのまま首を絞めてくる

「犯してからでもよかつたんだけど。一応これでも好青年で通ってるんでね。他に姉さんがたもいるし」

不機嫌そうな狐が田中の頭をこずく

「なに、意識を手放したら苦しくなるなるさ」
使仕をかくして外に出てアリアを呼ぶ

「まさか、本当だったなんて」

アリアちゃんが部屋に居る者たちの顔を見る

「……」

「知ってる？こいつらがどのものか」

「いえ、どこのものかは 私も、地方から出てきたばかりです
でも」

ミヤモのほうを少しみて、呟くように

「この国のものです」
とだけ言った。

「……ま、いろいろやっちゃったし、今回はこれだけで許してやる
よ」

気絶しているミヤモのほうをつついた。

「ミヤモは、殺さずつと牢に入れといてよ」
きつと、親玉がいるなら彼女を始末するだろうし彼女が親玉ならその
のままそこで一生を過ごしてもらおう

「言つとおりにしてくんないと、深山功一にいろいろちくつちやう
よ？困るでしょ？この国の筆頭にこの国のこと嫌われちゃ」
アリアちゃんが苦々しくうなづいたのを確認して、にっこり笑った

「アリアちゃんはまだ俺の敵じゃないのわかってるから何もしないけど、俺の敵になったら痛い目見るからよく覚えておいてね」

明日は早くから名光に帰るんだ

あと何時間眠れるかなー

あくびをしながら、俺はもともと用意されていた部屋へと戻った

「……………やっぱり、少し惜しかったなー」

ミヤモのおっぱい……………

ちよっと名残惜しかったけど、顔に油性マジックで落書きしただけで今回は赦してやった。

女の子には基本優しいの

『あれも食べたかったのに』

影からイノリの声が聞こえる

「だめだめ」

他のやつらがどうなったか

それは想像にお任せするってことで

なめんなよ（後書き）

仕返しを詳しく書こうかと思ったけど、グロってどこまでおきな
か分んなかったから、スキップ（ーーー）
期待してた人がいたらごめんね

流れ星に願え！

同盟も無事に結ばれ、みごとに凱旋を果たします。
よかったな、俺。

潮風びゅーびゅー

うわぁ、髪痛みそう

「うまいこと行ってよかったー。マジありがとですよ」

「いえ、これも彼方くんの尽力あつてのことだよ」

ルビ様に親指をたててグツジョブとすると？マークを浮かべながらも笑う

「いや、本当に、こつちからは誰が行ったのかは知りませんが、まさか本当にテトラをこちらに連れてこられるとは思いませんでしたよー」

「おにーちゃんったらくすぐったいよー」

同盟といえば、これ、人質交換

大海原の波に揺れる船の甲板で腕の中にいる桃色の髪をなでる

「いえ、意外と簡単でしたよ。こちらからは私の親戚のものを送りました」

「お兄ちゃん、ほらみて国が見えてきたよー」

嬉しそうに楽しそうに見えてきたばかりの名光国を指さすテトラの頭を優しく撫でる。

見た目の割にはやりてなのね、ルド様ったら。

ああ、それにしても本当に幸せ。

「もう少しでつくからなー。船旅は初めてだよな、船酔いは大丈夫か？夜風は寒くないか？」

「大丈夫だよ」

この世界特有の大きな月が回路を照らす。

風が少し冷たいのでテトラの背中に自分のうわぎをかぶせる

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「ねえねえ。彼方君が子供好きなのは意外なんだけど、少しくつきすぎじゃないかなあ？ねえ？」

遥がぐいつと俺の腕を引つ張る。

その顔はどこか怒っている。

「子どもが好きなんじゃない。どちらかといえば好きだが、だからこれはどちらかといえば萌えだ」

「いみわかなーい」

ぷーと頬を膨らませて俺の腕をぐいーっと自分の腕の中にしまい込む。

萌がわからないなんて、おこちゃまめ。

それにしても、この状態まるでギャルゲでいう幼馴染が新しい女の子相手してる主人公に対して嫉妬している状態みたいじゃないか？結構楽しいかもしれない。

「しかも、他国の人を連れて戻っちゃうしー」

「マリーナ先生はハーフェルフだから名光にはぴったりだろ？」

そうそう、いい忘れていたけど、現樹国から連れてきたのはテトラだけではない。

もつと勉強をしなくちゃなーと思ったので先生を連れてきた。

他のひとも連れてきたかったけど、スパイとして残ってもらったことにした。

だってあのガチホモっぽい動きする人とかついてきそうで怖かったからさ。

「そろそろつきそうかしら？」

「うわっ！だれ！？」

後ろから現れたのは上品セクシーな夜バージョンのマリーナ先生。

昼の幼女バージョンしか見たことのなかった遥はびつくりしたようだ。

「マリーナですよ。昼と夜で姿が違うんですの…彼方さん、そろそろテトラちゃんは寝かせたほうがいい時間です」

「えーまだ眠たくないのにー!」

テトラを抱っこしながらマリーナ先生はにっこり笑ってためですよーとテトラを部屋へと連れていった。

ちよつと、名残惜しいのですが。

「ハル、彼方君。少しいいですか?」

「ルド様?なんですか?」

ルド様が少しこちらに寄ってくる。……顔が真面目だから真面目な話なんだろう。

眠たいから頭がちゃんと動くかどうか分からないけどうなづいた。

「我々は、彼方君の不思議な力と発想により、厘石国を倒し現樹国と同盟を成した」

「そういえば、彼方つては何で使使もつてんの!?!」

「捕まえたから。つか、その話は後でな」

視線をルド様に向けたままちよつとつるさい遥の頭をぼんぼんと叩く。

「ありがとうございます」

なんなら、と遥の口もふさいだが、やりすぎかとすぐにはなしてやる。

文句ありげに見上げるな。

「名光は勝利を挙げました。しかし、その利益はほとんど現樹にいった」

責めているように聞こえるが、責めているわけではないだろう。利益は向こうに行くことは事前に話し合いお互いが納得した上でのことのはずだ。

「つまり、名光はもともと抱えていた負債を解消できたわけですが、国力・軍事力が上がった訳ではない」

すこし冷えてきたからだがぶるつと震える。

「大国に比べるとその差は歴然。闘いが始まった今、大国も動き始めることでしょう」

「それって」

遥がすこし察したのか顔色が悪くなる。

「大国がこぞって動き始める、その対象はきつと中小国　つまりは我々と翠雲国」

戦いの火ぶたを切つて落としたのは、この俺。

「きつと、これから戦いの矛先はこちらに向けられるでしょう」

現樹と協力戦線を固め、厘石の力を取り込んだ三国分のちからはいくら大国といつてもない。

だが、不意打ちを食らつたらおしまいだとルド様はいいたいらしい。多分。

「ましてやうちは大国に両ばさみされている……彼方君、君なら次をどう攻めますか？」

「そんな言い方つまりで彼方に責任とれつて言ってるみたいですよ、ルド様！」

俺はため息をひとつ深くついて空を見上げた。

うん、結構晴天？月満天だね。星とかもすげー多いし流れ星とか半端ないくらい落ちている。

「私はただ、責任者としての彼方君の意見を求めているだけですよ。墮ちるまでに三回お願いしたら望みがかなうかなあ。」

あほか、あんなスピードにくちがついていけたら人間じゃねえよ。

「あーまあ、そうですね。いまピンチ　って感じっすねー」

俺は頭をかきながら視線を元に戻した。

「作戦とか、あつたらいいですねー」

「彼方」

遙が少し戸惑ったように顔を見つめてくる。

「流れ星とかに、お願いしてみたらー……案外叶ったりするんじゃないですかー」

俺はそれだけ言うとニツと笑った。

「流れ星。　お願いしてみたらどうです？叶えてもらえるかもですぜい」

「……そうですね、ではお願いしてみましようか」

ルド様はそう言うと困ったように笑って空を見上げた。

「あ、具体的に小さい目標でお願いします」

俺が小声でつぶやくとルド様はさらに困ったように微笑んだ。

「難しいですね……では、翠雲国をこちらに取りこめれますように」

「なんで、あえて中小国の翠雲国チョイスなんですか？」

「大国が吸収してしまつてはこちらの打つ手がなくなるからですよ」

「普通に攻めに行けばいいのでは？」

遙はちよつと世界地図でも思い浮かべたらいいと思うよ。

「星にたよらなければ地形的に翠雲国は名光から攻めにくいどころかたどり着くことも困難ですからね」

信じているのか信じていないのかルド様はそれだけいうと

「では、味気ない話をしてしまつてすいませんでした。おやすみなさい」

と部屋へ引つ込んでしまった。

「彼方、星の代わりに自分が叶えてあげようとか思つてたでしょ」

「あ、ばれた？」

俺は頭に腕をくんで口笛を軽く吹いた。

ちよつと覗むように見てくる遙から視線を逃す。

「今回はうまくいったけど、次はうまくいかないかもしれないだよ」

「当たり前だろ？おお。寒い。そろそろ俺も部屋に戻ろうかな」

「ゲームじゃないんだよー！」

遙が何かぎゃーぎゃー言ってたけど気にしない。

さて、翠雲をどのように攻めるかな。

きつと現樹は自分でトリに行くために協力してくれないだろう。

名光の軍は長距離移動が苦手だし、翠雲にむかうには大国のリスクが大きい。

さてさて、流れ星〓俺はどう動こうかなと

流れ星に願え！（後書き）

思い出す 船酔い気分 悪すぎる

いや、これは（仮）のことですけどね。

アスビヤムツ

夜中の間に上陸し、各々とりあえず家もしくは借家に戻り就眠。

朝になってもう一度集まることになっている。

だが、深夜12時過ぎくらいに帰って寝て早朝5時に起きるなんて僕にはできない。

でもそんなこと口にはできない俺だから。

普通に寝坊してしまつて社長出勤よろしく、ちゃんと集会に出れた頃にはすでに10時過ぎでした。

「すいません。おくれますつたああ!?!?」

「いつやぁーん! タナたんつてば、じらすのうまいんだからああ!?!」

兵隊さんに案内された部屋の扉を開くや否や急に何かに抱きつかれ押し倒される。

つていうか、タナたんつてなに!?!?

「ふおおおお!! 後頭部へすごい衝撃があああ!?!」

「うふー私の愛、ちゃんと受け止めてくれなきゃいやよ?」

なんか、すごく甘い匂いが胸の上から香ってくる。

「ココア、失礼ですよ!」

やっと上からのいてくれたので体を起こすと素直に美人といえる人がいた。

ゆるいパーマがかかった橙色の髪の少女だった。

歳は20台前半くらいでそのボデエラインは夜バージョンのマリーナ先生に勝るとも劣らない素晴らしさだった。

「いつてててっぁーくらくらする」

「私の魅力に？」

「否定しにくいのですが、とりあえずどちらさまでしょうか？」
頭を押さえつつ聞くとにこーっと笑って彼女は答えた。

「私の名前はココア・ラックファンよ。歳は22でスリーサイズは上から」

「そこまで言わなくてもいいですよココア！すみません、彼女は僕の腹違いの妹なんです」

ぶーっとココアはすねたようにそっぽを向くとまた俺にくっついてきた。

豊満な胸が！！

「良いじゃない、別に自慢したってえ！それよりも、タナたん、二人つきりになれる場所に行きましょう……？私、タナたんに見えるのずっと待ってたのよ？」

「マジすか」

「止めておいた方がいいですよ、彼方君」

頭が痛そうナルドさまが少し意外な感じでももしろかったが不安を感じてその顔をじっと見つめる。

「ココアはDSなうえにDMですよ。SMプレイがお好きなら止めませんが？」

この世界アニメとか無いのにそう言うのは存在すんの……？

「ぼ、ぼくそつちの道は初心者なので遠慮させていただきます」

「えー優しく教えてあげるのにい？一緒に気持ち良くなるっ？」

甘く耳にふっつと息を吹き込まれるとちよつとふらふらっつと行きそうになる。

「だめ！！ココア様っ！彼方を誘惑しないでください！いつの間に

帰ってこられたんです!？」

「ただだー!と驚きのスピードでかけてきた遙は俺をココアから引きはがす。」

「あん。もう!遙ったらまだいたのね」

「当たり前です!」

「あーなんかバトル始まつてるね!」

「妹は遙が来たばかりの頃にそろそろ戦が始まるのを予感して究温国にスパイとしていつていたんだよ」

「一応王族ですよねこの人」

「すごい行動力だ。」

「というか、大国に潜り込めるほどとは能力も高いのだろう。」

「こうしてみると結構なエロティックな格好しているSM女王だが。」

「いつ殺されるかわからないという緊張感が気持ちイイらしい」

「ルド様、ココアが現れてから、頭が痛そうだ。」

妹か、ちょっと従妹をふと思い出す。

最後に見たときにはあいつに部屋のエロ本ぜんぶBL本にすり替えてほくそ微笑んでた顔だったかな。

あいつ、金にがめつい癖にこういうときだけ行動力というかすっぱりしているというか。

ああ、思い出して落ち込んできた。

あれ、期間限定品だったのに……。

「そういえば、今日の集会ってなんのはなしだったんです?」

「今後の方針の話し合いだったのだが、とりあえず軍力を整えるということではばらくすることにしたんだ」

「そうですね。今度は遅刻しないようにします、すいません」

「いや、なに慣れてない旅の疲れだろう。次から気をつけてくれたら構わないよ」

「ありがとうございます　　なんか、俺ここに居たらいろんな意味で危険なので失礼します」

斜め右を見ながら俺は少し後ずさった。

「うん。いいよ早く逃げなさい」

ココアと遥の話の流れがどちらが俺のものにふさわしいか、ということらしくどういう方法かわからないが二人で何か俺に試すという会話に発展している。

「でわ、遠慮なく」

まだギヤーギヤーいつているのを尻目にこっさりなるべく音をたてないように扉を閉めた。

これから手もちぶさただな。

うむーどうしたもんかなー！。

そう言えばこの城のなかをよく見たことなかったのでうるつくことにした。

感想広い

だが現樹の城のほうが広いつちゃあ広い。

こついうのは比べるもんじゃないが城っていうのは威厳を示すものだろうから結構重要なんじゃないだろうか。

現樹はコレでもか！！ってほどの樹があちこちに生えていたがここは普通に自然豊かな感じでなかなか住みやすい環境だ。

「中庭か　気持ちよさそうだな」

どれどれと手入れされた庭を散策する。

「やあ。期待の新星くん？いや、神星のほづが似合うかな？」

「!？」

振り向くと天井のところにあの少女がいた。

紅い宝石を身につけた鳳来で出会った子。

名前は確か、遊里。

正体不明の謎の少女だ。

「君はなんなんだ？」

警戒し、なるべく逃げやすいところへとにじり寄る。

「ん？んー気にしないで！っていつてもだめだよー。名前は好きなようによべばいいよ」

「答える気はないと？」

「質問の内容によるよ？そんなに緊張しないでよーこっちまでそういう気になっちゃうじゃん」

けらけらと笑う少女に悪意はないようだ。

俺も覚悟をつけて腰を据える。

「お？本当に座っちゃってんの？君って本当に面白いよね」
ちよと意外そうな顔して少女は笑った

「俺には優秀なボディガードがついてるからな。で？用件はなんだ？」

「んー別に用っていうか暇だったから君と話したいなーって思っただけなんだけど？ねえ」

語尾は誰かに話しかけているのかのような口調だった。

「誰かいるのか？」

「誰か、か。いるといえるのかなー？」

この少女はどこかのりくらりとしていてわからない。
だが、この少女にはどこか底ぐらい恐ろしさを感じる。

「で、本当は何の用なんだ？」

「だから、暇だから来たんだってば……遊んでくれるなら遊んでもらいたいんだけど？」

その目に陰るのは好奇心。

遊ぶって言っても本当にカードゲームとかそういうものじゃないの
だろう。

「あんまりじらされるとお兄さん、切れちゃうかもな」

「うわぁ。こわーい……やれるものなら捕まえて尋問でも拷問でも
かけてみる？」

思わず立ち上がり殺気をこめて彼女を見つめる。

「ゲームの始まりだ。鬼ごっこ？いいね！」

なんだか俺は体から疼きあがる興奮でわくわくしてきた。

「イノリ・ヤト・フィン」

影から三人が現れる

「あいつを捕まえろ」

「捕まえる気できても捕まえられないよ？殺す気で来なきゃ」

彼女はイノリ達が迫ってきているのにもかかわらず動かない。

「それに、だめだね。君と彼女たちは出会ってまだ日が浅い」

イノリ達の動きが急に止まる。

「僕の制御を越えられない」

パチン

指の音が響くと同時に影の中へと戻っていった。

「な！！」

「きみ自身が来ないとねーって言っても無理だよな。ふふ。その焦
った顔好きかも」

少女は意地悪く笑うと降りてきて俺の近くまで寄ってくる。

「っ！」

捕まえようと手を伸ばしても空の羽のように手に触れられない。

「あー、その顔その表情、あの人そっくりだ」

「どこの男と間違えてんだよ！」

ちょっと不意を狙ってみてもよけられる。

「うーん昔の知り合い？」

ニコニコしながら答えるその顔はまだあどけない子供そのものだったけど。

「残念だったね。今回僕と出会って得られたものは何にもない」

そついうと大きく後ろに跳び挑戦的な笑みで俺を見た。

「もっともつと精進したら？そんなのじゃこのゲームに勝てないよ？」

「うるせ」

手を伸ばし掴もうとした瞬間に後頭部に強い衝撃を感じた。

「だめじゃない、ヴィ」

朦朧とする意識の中少女の声も遠のいた。

また、後頭部ですか。

馬鹿になったらどうすんの。

アスビヤムって(後書き)

彼女のこと思いだしてほしかったのであえて出したただけww

じつは一日たってます(前書き)

ちよつとシリアス。

嫌いな人は飛ばしても可。

じつは一日たってます

「彼方くん」

ん？

「彼方くん！」

「う……」

「彼方！起きた？」

「つつー！起きたってか頭いてえ」

目がさめると空がドーンと広がっている。

心なしか空がすこし明るく見える。

遥が安心したように俺のほほをさすった。

ん？よくこの感触を味わうとこれはひざまくらではありませんか。

「よかった、彼方。起きてくれて……いま、お医者さん呼んでるか
らね」

「ああ助かる」

遥の体温が、匂いが伝わってきてなんだか安心する。

「彼方つてば丸一日ここで倒れてたんだよ」

「まじかよ！数時間後じゃなくて24時間後！？」

「この警備どうなってるの！？」

ルド様にもう少し警備網を見直すようにきつく訴えておかねばなる
まい。

「あのさ」

遥が少し言いにくそうに口を濁しながらつぶやいた。

「彼方はさ……死ぬのが怖くないの？」

……。

どこからそうなる？

「怖いに決まってるんだろ。ってかどこからどうきてそうなった？」

その表情を見ようと顔を上げたが逆光でうまく見えない。

「だって……あんな少人数で攻めに行ったり、今だって何時敵が来るかわからないし。実際彼方襲われたわけだし」

「まあ。あの時は勝てるって確証あったしな」

「そう言われると俺は案外能天気なのかもしれない。」

「私は、怖いよ。死ぬのが怖い」

「遙」

俺は起き上がって遙を見つめた。

目からは大きな粒がぼろぼろと流れている。

俺はとりあえずどうしたらいいかわからなかったから抱きしめた。

「本当はね、彼方が神職引き受けてくれるって言ったら、本当に鳴神を譲れたの」

「どうやって?」

「鳳来へいって神様のトップをお願いするんだって」

「それって神たまのことか?」

「私じゃ、名光を勝たせてあげられないから」

「遙だって頑張ってるじゃん」

女の子が戦に出ること自体もうすでに認めてあげれるだろう。

なのに意地になったかのように遙は首を振って否定する。

「だめなの」

「前も言ってたよな?」

「わたし……」

「彼方さん大丈夫ですか?」

てほってほと前大けがした時にお世話になった医者がちょっと肥満気味のその体を右に左に揺らせながらかなり間の悪い時にやってきた。

「っちい」

かなり明らかに舌打ちしてやる。

「ひどい!こんなに急いでやってきたのに!私くらいの体系になるとですね、表歩くだけでもすごい体力が……ってあれ?ハルさんなんで泣いてるんです?」

不思議なことに汗はかかないのか　　はあはあいながら遙を見て少し驚く。

「あ……あはは！ちよつと目にゴミが。ガッチ先生、気にしないで彼方を見てあげてください！」

「そうですか？」

ちよつと気にしながらも俺の頭に聴診器的なものを押しあてる。

結構これタコの吸盤みたいにすいついてきて結構痛いぞ。

「彼方さん、私、苦勞して大きな体に鞭打って急いできたのに女の子泣かす元気があるなんて私がつかりですよ」

「うるせえ。医者ならもう少しスレンダーな体になれっただ」

ガッチ先生。38歳。向こうの世界ならがっちりメタボ。

「やれやれ。はい、大丈夫です。軽い脳しんとうを起こして誰にも発見されずずっと寝ていただけでしょう」

「そつやつて説明されると俺、可哀想」

きゅっぽん！

と勢いよく外される。

絶対鏡で自分の顔見たら後付してるんだろうな！

「先生、彼方大丈夫なんですね？」

「うん。ハルさんが心配するような怪我もありませんよ」

「大丈夫だつてさ」

俺が少し肩を回すと遙は安心したように笑ってくれた。

「まる一日寝てたんですから、水分と食事をとっておいてください
ね」

「へいへい」

そつというと医者はカバンを持ってめつちゃスローペースに歩いていった。

つか、おそ！

それをなんとなく見送っていると遙が突然叫んだ。

「あ！私、仕事あるの忘れてた！」

「あ？遙仕事してたのか？」

からかうというよりはマジで聞いてみる。

「失礼な　してるよ！一応。午後から巫女様と約束してたんだつた！ちよつと、いつてくるね」

「おう」

走っていくスピードをみるとさっきの医者を抜けるんじゃないかと思う。

「あ、彼方！さっきの話を続きは、またこんどするから！」

「おう」

俺はあえてなんでもないような返事で返した。

……めっちゃ気になる。

でもこういう風に引つ張ると切つて結構何でもないこと多いし。深く気にしないでおう。

食堂というか、あえて下町の店に出向いてみた。

お金？

ちゃんともらってきたぜ

「いらつさあせえー！」

店員が元気に掛け声をかける……元気なのだがいろいろ違う。

「一名様ですねー！！お席ごあんないしあーすー！！」
ほとんど大声で投げやりな感じもする。

俺的に言わせてもらえれば「いらつしゃいませ」と普通に笑顔付きで行つてもらつた方が嬉しいのだが。

席についてメニューを開く。

座席かー。いいなあ何か和つて感じで。

「御注文お決まりでしょうか？」

先ほどの元気いっぱい男の男の従業員ではなく今度は可愛い感じの女性の従業員がやってきた。

「えーとなんか、お勧めのやつちようだい。飲み物も付けてね」
どれも初めて見る奴だから分からないしねー。

「かしこまりましたあ」
「エプロンが似合う可愛い子だ。」

「お待たせしましたあ」
しばらくしてやってきたのは巨大肉まんのようなものだった。
なかを割ってみると中からコメのようなものがホカホカと艶めいて
いる。

「うん、うまい」
新感覚。

結構いける。

お金を払って店をでる。

「どこいこつかなー」

遊びにでも行こうかな？

「あっちなんだ？」

適当に街をぶらぶらつらつらついて城に帰る頃にはもうすでに夜になっ
ていた。

じつは一日たってます（後書き）

なんでこの話書いたのか自分でもわからない（・・）
シリアス書きたい心境だったのかな？

デ、デジャブ

朝ごはんを食べた後、俺は部屋に行ったん戻って置き手紙を書いた。

【ちょっと行ってきます。心配ご無用】

軽いノリという訳でもないがちゃんとした計画もなく。

俺は今、翠雲国に居ます

「翠雲国かー嫌な感じだなー」

だって元はといえばここに来るつもりで刺されたわけだし？

国の雰囲気としては悪くないんだけどなー。

この辺の海はよく魚が取れるのか魚市場が盛んで日本のとあるところを思い出す。

いいねー盛り上がってんねー。

ちよつと青みがかつた髪の毛のおっさんやつるつるのおっさんの頭が忙しく移動している。

魚市場を抜けると街の商店街のようだ。

歩きながらいろんな店が見えていいねー。

「このっ！くそガキ！！」

「ん？」

訂正？雰囲気良くないかも？

声のする方向を向くと果实屋のようだ。

この国は果实があんまり取れないから結構いい値で売っているらしい。by授業の結果。

まあ、そんなんさておいてやっぱり子どもが店のものに手を出したらしい。

なんか前にもあつたなーこれ。

「ちくしょう！食いすぎだろ！はなせ！」

「……むぐ」

確かに口いっぱいに見た目桃っぽいものを2〜3個ほおばっている。しかも他にも何かを食べたあのような食べかすがいくつか床に散らばっている。

「……完璧あの子供のほうが悪いな」

子どもは真っ黒ローブに身を包んで明らかに逃げる体制だ。

「金あるんだろうな！！」

「んぐんぐ……金か」

周りを少し見回して俺を見つけて指を突き付けた。

「こいつが私の保護者だ」

「あ？」

後ろを向いてみてもみんな俺見てるし。

「てめえか！14エルまとめて払いやがれえ！」

「マジかよ」

おっさん的には金を払ってもらえればそれでいいのか？！

まあ、お忍びの身だしこれ以上巻き込まれるのも嫌だからしぶしぶ金を出した。

あーあ。これでせつかく他国の歓楽街とかで遊ぼうと思ってたのに……。

「ふう。それじゃあ」

「ってちよつとまてえい」

そそくさと逃げようとする黒いフードを掴んで引きずる。

「わ、わわわ」

ちよつと脇道にそれてなんかいい感じに置いてあつた樽の上に置く。

「で？お前はなんなんだ、コソドロか？泥棒にしては犯行が堂々としすぎてんだよ」

「……君も他国のもののようにだし答えてもいいかな」

ちよつと考えてフードを取る。

真っ黒の髪とちよつと茶色かがった眼

人形みたいに色白の肌で髪がぱつぱんに切られているがそれすらもまた愛らしさを引き出している。

「僕の名前は村野晶むらのあきここ、翠雲国の神候補さ」

彼女は無表情のまま堂々と胸を張って嘘をついた。

「うん。ウソつけ」

「別に嘘じゃないぞ」

まだ続けるか。

俺だつて用意もなしに忍び込んだ訳じゃない。

ちゃんとした調べはできてある。

「替神は男だろつが。だいたいポケットから落ちかけの手帳のこの名前欄に「村野歩むらのあゆみ」って出てんぞ」

「あ!!」

もうほとんど落ちかけの手帳をもう一度深くポケットに突っ込むが見てしまったものは見た。

「歩ね。あゆびよん」

「気持ち悪い呼び方するな変態。大声で叫ぶぞ？」

そんなに嫌？結構可愛いと思っただけど。

しかしほとんど無表情だなこのこ。

「あのね、君その恰好からするにお忍びでしょ？叫んでもいいならこつちから叫ぶけど？」

やっぱり子どもなのかとやんわりと諭しつつ圧力もかける。

「……………」

「で、替神がこんなとこで何やってんの？」

「……………僕は……………替神じゃない。さつき君が言ったとおり替神は男だ」
そんな先生に叱られてる不良みたいな態度しないでよ。

俺だつてそんな優等生じゃなかったんだしさ。

「あゝそうだったそうだった。んで？」

「僕は、慧神あきりの妹だ」

「……あれ？」

また引つ張られたパターン？

ちよつと多すぎやしないかい？

いや、引つ張られたのはこの子で俺は自主的だから……。神ちゃまっしかりー。

「なんだ？」

「ああ、いやいやこつちの話、で？何したかったわけ？」

「いや、なに。簡単な話だ」

歩はそう言ってもう一つ隠し持っていたらしい桃っぱいものを食べた。

「この国から逃げようと思ってな」

「……は？」

ああ、でも気持ちは分かるかもな。

俺も殺されかけた訳だし。

「もうじきこの国は侵略者によって滅ぼされる。そんな危険なところに居たくはない」

「つて。そつちかい」

うまそうにもぐもぐと食っている場合かい？

匂いはびわっぱいな。

「兄さんにも一応進言したものの「神は民を見捨てない」などといいくさっていたので放置してきた。元はといえばしがない学生が大した能力も才能もないのに気合いだけでどうにもなるものか。現実はそのままで甘くない」

「兄さん全否定だね」

つていうか、この子見た目14くらいなんだけど一体としいくつな

んだろう。

やけにひねくれた考え方をしているな。

「だから、私はここから逃げる。もしも兄さんが殺されても仇を討てるようになるまで身を隠すつもりだ」

兄思いなんだかなんなんだか。

「兄さんはさ、頂点でも目指してんのか？」

「いや、野心家という割にはへたれだからな、防衛さえできればと考えている」

へたれと聞くと深山功一を思い出すな。

何故だろうww

「なら、どこかに属するとかそういうのは？」

「兄さんは考えているが周りのものがプライドがどうだと反対している。この戦乱でプライドなどといって国を失っては元もなしと思うがな」

最後にハッと鼻で笑う。

ねじれてるな！。

「君はどこかの神か？なら兄さんを殺さないでくれ」

「俺は神じゃない。それに無駄な殺生する気もない」

「なら、君は誰だ？」

「俺？俺は」

俺は一旦にやりと笑って数歩下がった。

「俺は田中彼方。最強になる男だ！」

とポーズを決めた。

本当はバツクに月を入れたいところなのだが、あいにく狭い路地なのでつきどころかバツクは壁だ。

目の前の少女はかなり白けた顔をしていた。

「……君はいくつだ？こんなファンタジーな世界なら何をしても許されると思うなよ？とりあえず最強になる男というくだりは全く必要ないな」

……うん。

反応が思った以上に冷たかった。

デ、デジャブ（後書き）

新キャラまたとーじょー
多いなあ。しかも女率たけえなあ

運がいい？いい悪いです（前書き）

更新、間が空いてすみません（・・・）

運がいい？いいえ悪いです

「ああああああああ！！！！」

名光国・金瑠訪宮の少し外れ、彼方邸にて。

遙は机の上にある置き手紙を見て叫んだ。

「る、ルド様　！！彼方が、彼方が一人で特攻しに行ったああああ！！」

手紙をぐしゃっと握りながら急いでルド様のもとへと急ぐ。

これって巫女様にも助けを求めるべき？ああ、でもまだお目覚めじゃないかも！

遙の心配をよそに田中はただ今。

「いらさーせー」

バイトをしていた。

「……君は何をしているんだい？」

宅配ですがなにか？

それにしてもまさにつな井があるとは。

俺の食指もびんびん反応するぜ。

「情報収集するには市場に居るのが一番なんだよ。世間話程度で情報集めてても怪しくないしな」

「聞きたいことがあるなら、僕に聞けばいいじゃないか。いちいちここで無駄に時間過ごしてもいいのか？」

歩はさもどうでも好さそうな顔で俺を視た。

「まーな」

「ちゃんとした理由があるんだろうな」

さも当たり前のように聞かれますが、ぶっちゃけ期待ほどのものは
ありませんね。

「あるといえはあるし、ないといえはない」

「聞こう」

配達してきた入れ物をその辺に降ろす。

「その？城に正面から入りたいからな、お前に城でここを指定で注
文してもらおう。宅配ついでに俺登場」

「そんなにうまくいくか？というかこっそり忍び込め」

「えー」

神経衰弱はすきじゃないんだもん。

「その？どっかの誰かさんが食べた分を支払ったことにより減った
資金の現地補充」

「……」

そこは謝るところだろー！。

けちな男と思うかもしれないけどな、こっうところはちゃんとし
ないといけないんだよ！

「その？これが一番大きな理由だ」

俺は、従業着をびしっと伸ばした。

「これが着たくてバイトしたかったんだ！」

「……」

ばっこーん！

と歩に何も言わずに鰻を淹れる桶で叩かれた。
だって、だって格好良かったんだもん。

結局、俺に協力してくれたのか、王宮から出前が来た。
王宮から出前って考えてみたらかなりシニールだよな。

「まじかよ!」

って店長もビビってたし。

ちよっと誤算だったのは、店長が行くと主張したことだ。

「頼むよオヤジー俺も連れてってくれよ」

すがりつくように必死に頼み込んだら連れてってくれるようになったがそういう風になるまでにかかなりの時間土下座させられた。

「晩飯にうな井を頼むのは分かるが、神様も召し上がるとは思わなかったわい」

「まったくつすね」

城のなかに入って何故か縛られています。

毒を入れてたらいけないからだそうだ。

「毒なんてまずいものを淹れるわけないと思わんか、カナ」

「味わう前にあの世息ですよ、オヤジさん」

ちなみに俺の名前はナンダ・カナ

もちろん、なんだかなーを変えたただけだ。

「お前が、リズ食堂のドット・リズか」

「へえ」

土下座しようとしても、体が縄でくくられていてうまくできずに頭だけ下げる。

真面目そうなとくに特徴もない男は下っ端なのだろう。

うな井をあけ、少しつつく。

主人のものつまんで悪いんだー。

毒身なのだろうひとが出てきて食す。

うまそーい。

そつえば俺、食ってないもんな。

「うむ。しばらく時間をまつ」

「ちよっとまつてくれ!」

食べた人の経過を見るのだろうが、オヤジはそれに待ったをかけた。
「あんまり時間を経過させたら俺の超絶うまいつな井が普通においしいつな井になっちまう！」

「なにおう？」

お、オヤジィ……。

オヤジのそのつな井に対するプライドと愛情が俺にはひしひしと伝わってくるぜ。

「……ふむ、そこまで言うのなら信用してやるう」

もはやオーラをとみえる気迫に兵士も納得したのか、思わず許可をだす。

見張り以外去っていった。

それにしてもだいぶ誤算だ。

まさかついてそうそう縛られるとは思わなかった。

それともこういうのが普通なのだろうか。

まあ、どうでもいいや。

こっそりしたくねーとか思ってたけど、こっそりいくかあ。

俺は少し足を動かして「あのお」と小声で雑魚を呼んだ。

「なんだ」

「あの、おいら、ちよつと、その……」

もぞもぞと足を動かすと「ああ」と思いついたのか

「案内してやれ」

と言われてトイレに案内してもらおうトイレの中までついてきた兵に振り返り、少し困ったかのような顔を作る。

「なんだ？あやしいうごきをするとう痛い目みるぞ」

したつぱらしいちゃつちい武器をちらつかせる。

あんまり怖くない。

「ひいっ」

けど一応びびったかのような反応をすると満足そうにフンツと鼻をならす。

俺ってば演劇部はいれるんじゃない？

「あのう……おいら、ちよつと腹の調子が……」

簡単に言つとゲリピーだから個室入るよ？と聞いてみる

「……早くしろよ」

ヘタレを演出したかったからわざわざ許可とつたけど、逆に怪しかつたかな。

まあいいや。

とりあえず個室にはいつてスライムと入れ替わる。

スライムは表情まではまだ完ぺきに擬態できないようなので怪しまれるかもしれないので俯いておくように指示した。

ま、それも時間の問題だろう。

出ていったのを確認して素早く移動する。

いやー。他のところもそうだったけど、どうしてこつ城ってやつはどこも似たような迷路的な作りなんだろうね。

こつこつよー。

一人見張り兵を発見し、倒して服をひんむいてお借りする。

不意打ち上等！

うしろからなぐつてごめんねw

「さて、どこへいったものかなー」

そついや、目的ってなんだっけ。

ああ、あいつの兄さんと二人つきり（もしくは妹込）で対談したかつたんだ。

こんな面倒なことになるならちよつと武勇伝を増やそうとか変なやる気出さずにあゆびょんに連れてきてもらえばよかったー。

曲がっても進んでも似たような通路ばかり。

「あー」

結構鎧って重い。

下っ端だからよけい安い分だけ重いんだろうな。

「ん？」

微かに話し声が聞こえるのでそちらへと進む。

特に見張りとかないから、神候補たちはいないだろうが侍女とかいるかもしれない。

そこの扉を開いて入ってみた。

「ん？」

「うわっはー！」

女性の生着替え中でしたかwwこれはラッキー……いや、まずい。まずいぞ。

「……あなた、どこのもの？」

ココアなみのグラマーな女性は淡々と服を着て、防具を着こむ。

ヤバイ この、感覚。

「どこのスパイか、言ってくれるならもう少しまともに逝かせてあげるけど？」

そういって、武器を掴んでにっこりとほほ笑んだ。

とてつもない殺気を含んで。

多分、將軍ランクの人間だ！！

運がいい？いい悪いです（後書き）

みなさまのおかげでお気に入り160きましたー！！
ありがとうございます。ありがとうございます。

中途半端な数字報告ですいません（＾Ｏ＾）

男を魅せる？

武器はRPGとかでよく出てきそうな感じのスマートなデザインの
ソード？

レインスピア？

名前なんて知らねえよ。

おれ、エロゲー専門だし。

痛いほどの敵意。

体にビシビシと突き刺さってくるような。

「答えないのなら、苦しんで死ぬけどいい？」
よくない。

そう答える前に、彼女は俺の死角に回り込んでいた。

「つつ！！？」

本能的に体をそらす。

びゅっ

風がほほを突き抜ける。

チート本によって上げていた能力アップのお陰で間一髪でよくれた
ようだ。

ていうか、僕、チート能力アップ人間なんですけど！
見てよけることですら精一杯な状態なんですけど！！

彼女は一旦俺と距離をとって値踏みするような目で微笑んだ。

「あら？外した？……もしかして、貴方結構やるの？」

「……………」

軽愚痴をたたきたいのはやまやまだけど、今はとてもそんな気にならない。

明らかに自分に向けられた達人級の殺気。

初めてこの世界で対峙する身体能力がばけもの並の人間。

一言で今の気持ちを言い表すなら　怖い！

「ちがうわね、たまたまね。だって貴方、そんなに震えてちゃだめよ」

彼女はまたトントンと踵でリズムを刻んで次の瞬間にはまた俺の懐に入り込む。

俺の360度から痛いほどの殺気が向けられ、彼女がどこから切りかかってくるのかはほとんどわからない。

とまれとまれとまれ！

震えていちゃこんな重いだけで性能悪そうな鎧付きでこの女性の攻撃をよけられない！

集中しろ！

後ろから

右

左

右

上

右

鋭く、容赦のない剣激が絶え間なく降り注いでくる。

重くデザインもいまいちな奪った武器でぎりなタイミングで防ぐ。

「なかなか当たらない……よけるのだけは認めてあげる。でもこのままじゃ結果は変わらないわよ！」

無駄のない動き。

力のないぶんスピードとテクで補っているスタイルで俺も勉強させられる。

ぶんっ！

「っ！」

肩に鈍い痛みを感じる。

貫通じゃない。かすっただけだ。

なんか、嬉しくなる。

この人は本物の強さを持っているっていいことが！

「あら？また震えているの？」

手が小刻みに震えてなかなか止ろうとしない。

「……震え？違うね、これは武者ぶるいさ」

その深い色の瞳が獲物をとらえる獣のように鋭く俺を突き刺して離さない。

俺もそれに挑発的に返す。

部屋はせまくはないがそれほど広くもない。

なにが変わらずにこれだけの剣劇を繰り広げるこの人のテクニックには本当に感心させられる。

避ける自分もすごいけどね！

「あんたはさ、美人なねーちゃんってだけじゃなさそうで、俺嬉しいよ」

「それはほめ言葉としてうけつつっていいのかしら？」

俺は口角を釣り上げてたのしくて楽しくて疼く手を強く握った。当初の目的なんてほとんど残っちゃいない。

「もちろん、むしろ誇っていい。だって俺は最強の男だから」
重みだけの使い勝手のわるい武器を投げ捨てる。

「あら素敵。じゃあもういいから死んで」
せめて鎧も脱ぐのも待ってほしかったけど、まあそこは戦場ってことで。

また俺の視界に素早く潜って下から切り上げてくる。
素晴らしい動きに感服。

素直に食らう気なんてさらさらないけどね。

がぎいいいい

「え!?!」

「いらせませ。マイ武器くん」

彼女の剣劇を止めたのは勿論名前の長いスライムクン。
by楯モード。

今のうちに急いでよろいを脱いで楯モードから刀モードに切り替える。

相手の方が刀身太いけど スライムだしはこぼれとか無いよな？

「さあ。闘うか」

軽くなった体を軽くほぐして構える。

「貴方が何者かますます気になるけど 強敵みたいだから今のうちに死んでくれる?」

彼女もいったん呼吸を整えて再び構える。

「…………?!」

よく似た音の二重音声での静止命令。

彼女は軍人スキルらしくちゃんと武器を止める。

俺もびっくりしてると空気を讀んだスライム武器が自分で空中で停止。

おお。目の前に武器あるし。こえー

あんだだけのスピードで切り出したのにすんでのうちに止めるこの人ってマジですごくネ？

マジ尊敬ー。

「…………どうなさいました？ 慧神様。危険ですので下がっててください」

「なになにーあゆびよん。見て分かんない？ 青春してんだから邪魔しないでよ?」

彼女はいまだ俺に武器を向けたままで主に視線だけを向ける。
もちろん、それは俺も同じことだけどね。

「リユーム。彼は妹の友人らしい。武器をおろしてくれ」

「あゆびよんって呼ぶなアホ男。なにしてんの」

この兄妹そっくりだなー。

姿が。

兄貴のほうが少し身長高くてアホっばいってくらいか。

「はっ」

彼女はなんの未練もなく主の命令通りに武器をおろし、だんだん快感にすらなってきたいた殺気も和らげた。

ちよっと残念。なんちゃって。

「怪我してるし……」

あゆぴょんがバカを見るような目で俺の傷口を見つめるのに気がついてにかーと笑ってみせる。

「あーしてたね、怪我。忘れてた」

「ンなわけあるか馬鹿」

若干本当なただけどね。

「怪我を見ますからどうぞ」

そう短く医療班的な人たちに囲まれたので大人しく治療してもらうことにした。

男を魅せる？（後書き）

戦闘描写の書きかた誰か教えてください

消えたナンダ・カナーの謎？

「いちいち」

医療室に連れていかれて処置してくれたのはいいけど、まさかかすり傷だと思ったら毒入りの上に2針も縫っちゃったよ。部分麻酔のせいではらく方は動かないな。

「どうもー」

かなり疑り深い目でじろじろ見られているから俺も感謝の言葉を適当に返す。

毒付きの武器ねー。

良いんじゃないかな。

俺も採用しようかなー。でもスライムクン毒まで作れるのか？

『最近、私たちの使用がすくないんじゃないの？』

イノリの声が影からひそかに聞こえてくる。

「ははは、奥の手安売りするほど馬鹿じゃないってね」

『また、うまいこと言っでごまかそうとして』

でも、悪い気がしないのかそのまま静まった。

「こちらへどうぞ」

にっこにっこと愛想のいいちょっと兵士とは違う感じの若い男が俺を呼んだ。

「どこに案内してくれんの？」

「もちろん客間にございますよ。客として扱うように申しつけられておりますので」

にっこにっこ裏を感じきれないあたりルド様そっくりだ。

小柄な男はあくまで低姿勢を貫くようなので大人しくついて行くことにした。

どうせ、俺が本気になったらここくらいさっさと抜け出せるしね。

「あゆぴょんに会いたいんだけど？」

「客室でしばらくお待ちしておくようにと妹様からの伝言をいただいております」

「ふーん。それって、信じていいんだ？」

「もちろんでございます」

軽い圧力をかけても動じることなく男はにこにこしたまま答える。食えないやつだねー。

なんだかこいつ気に入ってきた。

「お前って、名前と職業なに？」

「はい。私めはジェイ・カシと申します。ここでは妹様の執事という形でお世話になっております」

「へえ〜」

案内された部屋はまぎれもなく客室で少しリラックスすることにした。

「ジェイ。でいい？」

「はい」

「ジェイさ、その長い髪うざくない？」

肩くらいの長さまである茶色い髪をソファでふんぞり返りながら訊ねてみた。

「このようにリボンで結んでおりますから、それほど気にはなりません。妹様にもいわれましたが、五深いなら切りましようか？」

「いや、いいよ。ちよつと気になっただけだし」

うーん。執事。

どちらかといえばメイドのほうが好きだけど、こういう忠実な部下欲しいかも。

でも俺フレンドリー精神あふれるからヤトとかフィンとか部下だけ
と友達みたいになってるしな！。

「で、妹様っていつくるの？」

「さあ、もうしばらくかと。……お茶でもいかがです？」
「いる」

見るもんなくて暇だからお茶淹れる過程を意味もなく見る。

「毒なんか入れんなよ？」

ちよつとした牽制をふくめて言うтусこし笑ったようにジエイはお
茶を差し出してきた。

「まさか。……先に毒見をしましょうか？」

「いい。暇だから言ってみただけだし」

……コーヒーかな。

「失礼する」

あゆぴよんが現れジエイは頭を下げる。

「あゆぴよん、ちゃんとノックはしようねー」

「君に人の礼儀マナーを正す権利はないと思うが？」

まあ、人様のうちに無断搜索したうえに武器振り回してるしね！。

「……怪我は？」

「聞いてよ。2針も縫ったし。痛いはずだね」

「まさかとは思うが、君はMなのか？」

にやにやしながら言っているのがあやしく思ったのか変態を見るよ
うな目で見られる。

「ん〜最近否定はしきれないけど、攻めるほうが断然好き」

「そうか」

流した。

流したね、あゆぴよん。

「それで、君は一体何をしたかったんだ？」

「んーそれなんだけどね。途中で全部どうでもよくなっちゃったあはー」

「あはーじゃない！この国最強のリューム將軍に挑んで命があるだけましたと思え！」

あ、やっぱあの人この国最強なんだーすげーな。

「ジエイ。アホの相手御苦労さま。休んでもいい」

「いえ、失礼します」

一礼して去っていく。

「いいねー。彼」

有能オーラが出てるっつーか忠犬ほいつつーか。

「なんだ？君はホモなのか？」

「断じてちつがう！！！」

全力で叫んだらびっくりしたのかあゆぴよんは目を開いて頷いた。

「うん、分かった。わかったが、そんなに全力で否定すると逆にあやしいぞ」

「その手のネタには若干トラウマがあるんだ！」

「すまない。もう触れない……多分」

多分って何？

こんこん。

「どろぞ」

あゆぴよんが応えると慧神としての兄貴登場。

ついでに護衛なのかリ्यूム將軍セット。

「改めまして、はじめまして慧神の村野晶です」

「どーも。あゆぴよんの友達のナンダ・カナーです」

握手に差し出された手を握るとあゆぴよんに足を全力で踏まれた。

「！……なんだよあゆびょん兄貴と握手したからって嫉妬するなっ
てっついてててて」
さらにぐりぐりされる。

「違う！ちゃんと本名を名乗れといたいたんだ！あとそのふざけた
名前で呼ぶなー！」

「足じゃないからってけが人に容赦ないなああゆびょんはっ！！い
たい！痛いよ！」

ということ、改めまして。

「田中彼方、18歳。好きな食べ物はたこ焼きの蛸のないやつ。嫌
いな食べ物はプリンのカラメル。絶賛ハーレム拡大中です」

「よ、よろしく」

兄貴と將軍は俺の真向かいにあゆびょんが俺の隣に座る。

それにしてもなんとというか、本ばかり読んでましたって顔だなー。

細いから良いけど太ってたらをたくまつしぐらだな。

神様ルックが妙にミスマッチしてるね。

「で、そっちの美しい女性の自己紹介も聞きたいんだけど？できれ
ばスリーサイズも込みで」

勿論女將軍さんに目配せを送ると射るような視線で返された。

切れ長の目だからよけい怖いね。

「そうね、貴方がちゃんと自己紹介をしてくれたら私もしてもいい
かもね」

「したけど？」

「大事なところが抜けてるわ。どこからなにをするために来た何者
なのかってね」

「あっちから来たうな井宅配便ですけど？」

「それに、うな井屋の隣に居たはずの貴方が突如消えたって話はど
う説明してくれる？」

「うん？その人は夢でも見ていたのかなあ？」
白々しい

そうあゆぴよんが呟いた。
君がつぶやいちゃだめでしょ。

「さあ、楽しい会話しんもんを始めましょうか？」
女性の笑顔は綺麗だね。

まいったね。あはは！。

消えたナンダ・カナーの謎？（後書き）

手術した後はすぐに動かなきやいけなくなる田中の不思議

番外編つつーか宣伝？（前書き）

宣伝です

番外編つつーか宣伝？

番外編だよつつーか宣伝だよつつーことで。

「第一回最強になるうのキャラクター人気投票〜！」

わーわーぱふーぱふー！

「って盛り上がって見たものの、本当にぼちっとしてくれる人がいるのかって話」

「言うな、あゆぴょん！小説の下のほうにある『最強になるう キヤラ投票』つつー文字ぼちっとしてくださいお願いします！今ならもれなく深山の功一くんが土下座して貴方の足をおなめますから」

「するかっ！！」

……。

……。

「わー！！お兄ちゃん！現神さまの頭を地面に押し付けちゃだめだよおー！！」

「現神さま！！！」

わーわーぎゃーぎゃー

「…………ふう。だれも投票してくれなかったら、深山功一のせいって

ことで」

「なんでだよ!！」

「現神様、顔に泥がついてますよ」

「ふむふむ。一位になったらそいつ主人公の番外編を書くつもりらしい。もちろん、一位はこの田中彼方様だから、対していつもと変わらん」

「とか言ってロリキャラとかにとられるんじゃないの?」

「遙、自分は人気ないだろうからってそんなにいじけるな」

「地味にひどいよ彼方くん!！」

ということで、別に怪しいサイトに飛ぶ訳じゃないので

・なんとなくやるかー

・仕方ねえ、やったるか

・暇だしぼちつとすつか

・べ、別にあなたの小説が好きだからやるわけじゃないんだからねっ!

というかた投票という名の慈悲をください。

「私、彼方くんとラブ・ロマンスな番外編書いてほしいな!」

「でしたら、私も現神さまと……とか」

「俺は、他の神候補とか知りたいかも」

「俺、夢落ちでもいいからガチハーレムっつかあはんしたい。あはん」

「彼方君さいてー」

「あはんてなあに?」

「テトラは知らなくていいんです」

ということではほとんど会話で占めたので誰が誰かわからないかもしれませんが、なにとぞお願いします！

期限は、一時期10月までっていつてたけどあんまりなかったからもう少し延ばします(・:~;))

もう期限を伸ばして12月25日までってことで。

なぜクリスマス。

意味はない。

集まらなかったら1000人答えてもらえるまでってことで

どうかよろしくお願いします!!

携帯版でもできるようにしました

いやあ、よく見たら普通にやるとこあったしw

ってことで携帯で見てくださっている方もよろしくお願いします!

携帯だと少しやりずらいですが(・:~;))

その他を選んでいない場合もしくは特にない場合は何も書かず

OKボタンをクリックで進んでください。

お願いします。

番外編 つーか宣伝？（後書き）

マジでお願いしますバイ（仮）

下の文字からぽちっとちよちよいとよろしく

別に正義の味方じゃないし(前書き)

ケータイじゃぽちっとできないみたいですよ すいません。
PCお持ちのかたはどうぞよろしくお願いします) - - - (

別に正義の味方じゃないし

「仕方ないから、ぶっちゃけますけど敵国のスパイです」
笑顔でそう言い切ると、空気が固まりました。

あたりまえだよーあははww

「ばか……！」
あゆびよんが隣で俺の口を急いでふさぐけど、言っちゃったもんはしかたないよね。

「そう、なら生きて返すわけにはいかないわね」
いったいいつの間にか動いたのか女將軍さんの得物が首元を狙って振られていた。

俺は口をふさいでいるあゆびよんの腕を強く引っ張って楯とする。

「……！」

ピタ。

思ったとおりあゆびよんに傷一つつけることなく凶器は空に停止する。

「……！！ってこら！人をなんだと思ってるんだ！」

自分が楯にされたと気がついたあゆびよんは青くなったり赤くなったりとりあえず怒ってる。

まあ、あたりまえだよー！

「……なんのつもりです？」

お兄ちゃんも当たり前だけど怒ってるね。

でも見たまんまのこと聞くなよ。

「なんのって、もちろん人質のつもりだけど？」

別に俺、正義の味方じゃないもん。

「僕は今君にとても失望しているのだが」

「あゆびよんつてば素直だねー」

そんなに短時間で人を素直に信じすぎるほづが悪いんだよ。
俺も人のことそんなに強く言えないけどね。

「それじゃあ、まあ。妹様に危害が及ぶ前にその厄介なもん後ろにやってくれると嬉しんだけど？」

「私の抜刀と貴方の運動神経どちらの方が上かしらね？」

また、あの鋭い殺気と共に武器を握る手に力をこめる。

「おっと、挑発してきてもむだだよ？君ほどの手誰なら俺が他に何か隠し持ってるのわかんてでしょ？」

だから、迂闊に攻めてこないんでしょ？

まーぶっちゃけるとここでえいつてされるときゃーってなるのが真実なんですけどね。

ここまで牽制しとけば妹を傷つけるリスクを考えていまここでは攻撃してこないでしょ。

お兄ちゃん役に立たないし。

今のうちに武器たかりショートナイフバージョンを召喚してあゆびよんの頬にぺたぺたと叩いて威嚇する。

殺気がないと目の前の將軍が何か策を思いつくかもしれないからで
きるだけ真面目に作ってみる。

「……要求はなんだ。今すぐに歩を放せ！」

おいおい。声が裏返っちゃってるぞ？

そういうのも嫌いじゃないが、神候補を名乗るくらいならもう少し
覚悟が無ければならないんじゃないか？

ぐいつとあゆびよんの首にナイフをきれない程度に押し付ける。

「歩!」

お前はヒロインか!とつつこみたくなるような悲痛な声をあげて兄は今にも泣きそうな顔で叫んだ。

「さつきも言ったけどとりあえず將軍さん下がってくれる?武器はここに置いてってね。そしたらあゆびよんにナイフ押さえつけるのは止めたげる。どう?」

「言う通りに!はやく!」

「承知しました」

主の命にはあくまで忠実とでもいうのか。

ここで引きたくはないだろうに顔にも出さずに武器をその場に置いて隅へと下がる。

顔は無表情だったけどね。

「じゃあ俺もほい」

あゆびよんの体を拘束するように抱えていたのを普通にカッブルが肩を組み合うような体系に変える。

これはこれで俺的につれしい。

「君は一体何がしたいんだ」

じゃっかん呆れ気味にあゆびよんが呟く。

「そんなに自分の国に勝利が欲しいか。友をうらぎって人としての尊厳はどうでもいいのか?それでよく神候補として立とうと思つな

これだから、戦争は。そう最後に締めくくった。

そんな哲学者みたいなこと、人質状態でよく考えつくね。

「そうだなー。勝利は欲しいが、前にもいったように俺は神候補じゃない」

「は、どちらでも同じようなものだ」

神候補とはすなわち敵どちらも侵略者としては変わらんか。

「まいったなー俺、あゆびよんには嫌われたくないんだけど？」

「こついう行動してからいつてもなんの説得力もないのだが？」

正論っすね。

俺よりも身長の高いあゆびよんの表情は見えないが、かすかに体が震えている。

怖いのか、悔しいのか。

とりあえず謝っても許してくれなさそうだ。はあ。

「てつとり早くいうならさ、ここ名光国と同盟結ばない？今ならもれなく平等な立場でおっけーなんだけど？」

「それは」

「だいたい、自国の力だけで勝とうつていう考え方がナンセンスなんだよ。大きい国ならまあ夢くらいは見えるかもねーだけどさ。あんたら小国なのわかってる？」

「そ、そんなことをいって同盟を結んだと勝手に態度を変えるんだろー！その手には乗らんぞ！こ、この国は大海原で鍛え上げられた精鋭ぞろいだ！この国だけで最後の決戦まで残った歴史さえあるんだ！」

……なんじゃそりゃ。

多分この国の重役の爺さんあたりにでも耳にたこができるくらい言われ続けて洗脳でもされたんだろうか。

なんか、可哀想になってきたかも。

「だいたい、名光国といつたらここから遠いじゃないか！あそこは金がないし援軍を頼んだところで遠くて間に合わないし、そちらの軍力はよわい。同盟を結んだってこちらに利益がない！」
まるで歩く教科書だな。

きつと通知表の上だけでは優等生だったんだろうな。

たぶん、クラスの友達にこいつといっても面白くねーと思われるタイプってやつ？

顔が真っ赤になるほど必死に言わなくても。

「兄さん……」

妹さんが何か憐れむような声で兄の名を呼ぶのが可哀想さをさらに醸し出してるからやめたげて。

「軍力ねえ……！っ！」

後ろからの奇襲を武器を振り回して防ぐ。

「ジエイ！」

あちゃー。

あゆびよん盗られちゃった。

「残念です。お客様、尊敬に値する人物だと思っておりましたのに」
あくまで低姿勢に。

256

「排除させていただきます」

「ほー？つてうをつ」

がっぎいん！！

反対側から隙を見つけた將軍さん再び武器を手に襲ってくる。

下っ端の兵士たちもわらわらと寄ってくる。

「あー。俺、穩便に行きたかったんだけどねー」

「どこが穩便だったんだ！！」

あゆびよんのつつこみって的確だけどなんか胸にくるよね。おれだ
け？

「えーと。じゃあ、こうしよう。兄さんや」

「な、なんだ！」

普通はシカトしてもいいところなんだけどね。

「このやつら全員倒せたら条約結んでもらうよ？」

「え？いや、できるわけないし……えっと」

「そこは出来るものならやってみろ！とか言えよ！」
ホントはつきりしないな！。

「わ、分かった約束する」

大声出したのにビビったのか約束しちゃったよこの人。
俺ならあの手この手で流すけどな！。

「將軍さんもそれでオーケー？」

「主が決めたのなら従いますわ」

「オーケーオーケー。んじゃ、どこからでも来な
ただし

「俺も全力くらいで活かせてもらうからさ」

ここじゃ狭いかな？でもまあ別に壊れたって知るもんか。
俺は侵略者。

こここの敵。

戦争に正義なんてないんだし、卑怯もくそもない。

「さあ　でてこい。パーティの始まりだぞ？」

続々出てくる下っ端兵士たちよ。

何人尻尾をまかずに残れるかな？

影から出てくる可愛い手下たちはいつにない戦闘態勢で。
きつと俺の殺気につられていられるのかもしれない。

別に正義の味方じゃないし(後書き)

まとも何かきたいよー(´・`・´)

早く日常編に戻りたい。

でもなんか最近田中のセリフがかっこよくネ？
そうでもない？そうですか……

翠雲国の精鋭（前書き）

な、長い……（当社比）

翠雲国の精鋭

「俺は思ってたんだよね」

向こうの常識や道徳なんて、今ここではほとんど意味をなさない。

「地獄の亡者に目の前に免罪符たらしめて話し合いで誰かに譲りましょつっても意味ないようにさ」

たとえば微妙。

自分でそう思っちゃったら仕方ないね。

「戦争を話し合いでかたづけようなんてできっこないよね。皆が皆、聖君じゃないんだしさ」

イノリのプレッシャーで誰も動けずただ俺をにらんでいる。なるほど、精鋭ぞろいねー。

誰も逃げはしない。

殺気だけで人を殺せるなら俺は今頃八チの巢だろうね。

「侵略者らしく力で攻めたほうがよっぽど速くて後腐れもない」

「遺言はそれでいいかしら？」

忌々しそうに吐き捨てるように言い放つ。

俺は肩をすくめ返した。

スライムクンを武器モードから動物モードタイガーに切り替える。

なんでタイガーモードかっていうとカッコいいから。

久しぶりにチート本を取り出す。

「俺たちの体力だって無限じゃない。ここは君たちの本拠地だし自負しているように君たちは精鋭ぞろい。持久戦だところちの方が不

利だよね」

將軍やジェイの腕は文句なしだな。

「俺はこの本を使うと遠くの軍を一瞬にしてここに連れてくることができる。本当は話し合いで決着をつけたかったからこんなことはしたくなかったんだけどさー？」

言いたいことわかるよね？

「できるわけないわ」

「やれやれ。リユーム將軍、ウソだと思うのなら俺が力貯めてる間ほっておけばいいよ」

実際目の前でスライムクン（武器バージョン）を何も無い空間から出したり消したりして見せてたんだから可能性は捨てきれないよね。っていうかあれとはまた原理が違うけどさ。

ヤトの協力があれば10分でできるんだけど、そこは早いとつまんないし。

「制限時間は30分もないけど、自慢の精鋭で頑張ってみてよ」

言いきると同時に將軍が剣を振るう。

それをヤトが錫みたいな武器で防ぐ。

「イノリ・ヤト・アルファルドカーナデフォー やれ」

『了解』

名前初公開だと思っただけど、スライムクンのことです。

うっん長い。

やっぱりスライムクンでいいよ。

「軍を呼べ！部屋には数人ずつ、負傷者と交互には入れ！」

やっぱりここは戦うには狭いね。

狭いのが不服なのか、イノリは変化して部屋の中で動ける程度のサイズになる。

『おおおん！』

イノリの雄たけびにビビらず立ち向かうものは何人いるだろうか？

びうおんー！

『させん』

ぎいいいいん

「ちいつ」

俺の態度とチート本の禍々しいオーラであの言葉がハツタリではないと確信した將軍は俺に目標を絞り攻めてくるが、ヤトがそれを許さない。

ジエイも来るかと思ったが兄ちゃんの護衛をしている。

アレでも一応総大将だからねー。

て、あれ？あゆびよんは

「やああ！」

「あ、いたいた」

後ろから現れたあゆびよんは不意打ちのように後ろから体当たりしてきたが、避けて腕を掴んで拘束する。

うわ、ナイフなんかもってるし。

危ないから没収！

殺気も何もないしヤトとか忙しいから相手にしなかったのだろうか。「勇気があるのは評価するけどさー。こうやって足を引っ張ること

もあるってことを自覚しようか？」

「うるさい！ナイフを返せ！君は汚行をしてまで勝ちたいか！」
汚行ってなに？

「世の中そんなに甘くないってことよ」

怒っているのかもものすごい睨まれています。

「妹様！」

リユーム将軍があゆぴょんを見つけて叫ぶがヤトはなかなか道を開けない。

兵も次から次へと増えてきているがどんどん倒されて交代されている。

兄ちゃんあたりを安全な所に移動させたいが、たった一つの入口が兵士たちの通路と化しているので逃げ出せないでいるらしい。

ぱっリーン！！

兄ちゃんのとりの窓にイノリが投げた兵士さんが飛んでいった。
顔が今にも倒れそうになってるぞ兄ちゃん。

「うおおお！！」

中級クラスくらいか？

一人の兵士が俺に切りかかってくる。

あゆぴょんをいったん押しつけて剣劇をよけてから隙ができた横腹にキックをくらわす。

「ぐあっ」

~~~~~

足いてえ。地味にこつちもダメージきてるんだけど。

やっぱり一発で倒れちゃくれないか。

もう一度構えて攻撃の体制に入るとスライムクンが横から敵に体当

たりしていった。

「あー。ビビった。本片手じゃまともに反撃もできんな  
できればもう敵も来ないといいんだけど。」

「　　ってあゆぴょん何してんの？」  
俺の腕を引つ張りぐいぐいと本を取ろうとする。

「僕とてこの国にお世話になっている身、これくらいの貢献はする  
！」  
「一度見捨てて逃げようとした人の言葉とは思えないーって止めて  
地味にそれ困るから」

腕をひきはがして高い所に持ち上げる。  
なんかブーメランみたいなので叩き落されそうで怖いんだけど。

「　　！！？」  
急に現れた鋭い殺気に腕を引っ込める。

びゅん！！  
腕があつたところに一陣の閃光が走る。  
あぶねーグロテクスになるとこだった。

「ジエイか」  
兄ちゃんを他のものに預けてこちらに来たらしい。

「ジエイ！兄さんを守れと命じたのに！」  
「申し訳ありません、しかし………」  
俺の方を見る。

「俺と闘りたいってか？」  
「はい、できることでしたら」  
「いいぜ？あと少しだけど、溜まるまで相手してやる」  
「では……いざー！」

びゅん！

高速移動なみのスピードでリーチを詰めて攻撃が撃ち込まれてくる。  
武器は短剣。

一撃一撃はそんなに重くないが早い。

ま、將軍さんに比べたら全然軽い。

がん！！

ぎいいん！！

あゆびよんから奪ったナイフで応戦する。

「片手じゃあなかなか動きづらいな」

びゅおんっ！！びゅっ！

右をよければ左から絶え間なく攻撃が繰り出される。

「おっと」と

死角から死角へと移動されくるくる回っててなんだか酔いそうだ。  
スピードだけなら將軍より早い。

右に左に

ガンガンと金属同士が競り合う音が耳にひどく残って不愉快だ。

「あ、そろそろ溜まりそう。んじゃ、こっちも終わらせようか？」

「なにを……あなたは防ぐので精いっぱいじゃないですか」

「まあ、そっちの俺はな？」

がっ！

「な……っ!?」

俺を見つめたままジエイは体を崩す。

「田中が……二人っ!?!?」

あゆびよんが驚きの声をあげる。

「多重影分身の術。だつてばよ。ってか?」

ジエイも忍者のように身代わりの術のようなことをして遠くに居る。

「遊びは終り、妹様返すからじっとしてろ」

あゆびよんをジエイめがけて押す。

「会場を広げるイノリ」

『わかつたわ』

イノリは口を広げるとエネルギー砲よろしく口の前に輝る球をつくる。

「っ!? 逃げる!?!」

將軍の声を聞いて何人かは逃げたが何せ人が多くて思うようにいかない。

ツシュ。

どおおおおん!?!

一瞬エネルギーを密集させ。それを前方に放つ。

がががあああ!!

「広くなつたな」

前方がすぐ外につながっていたので被害はこの部屋だけで済んだ。とはいってもよけきれなかった人や隣の部屋に居たものは重症どこ

ろの話じゃないけどね。

「田中っ!! 貴様!!」

あゆびよんが怒って俺を掴む。

「許してとはいわないけどさ。これが戦争ってやつだよ?」

誰一人として殺してないのは俺の甘さかな?

あゆびよんがいなかったらやるけど。

兵士たちは圧倒的な力をみて停止している。

「召喚」

広く広がった庭に円陣が浮かび上がり、そこから名光の兵士たちが現れる。

「ゲームセット」

俺はリューム將軍のもとへと向かう。

ヤトとの戦いでボロボロだ。

「降伏せよ、リューム將軍。あがいてもあとは時間の問題だぞ?」

兄ちゃんはすでに腰を抜かして気絶までしている。

「まだやるのなら、彗神を殺す」

一瞬武器を振るおうとしたが將軍は力なく武器を手放し一度つつむ  
いてから俺をまっすぐに見据えた。

「……分かった。降伏しよう」

翠雲国の精鋭（後書き）

田中、主人公です。

いや、まあね。いいんだけどねw

やっと戦争編一時終了。

次からほのぼのだといいなー（＾O＾）

## 名光軍、ポッカーン

「……分かった。降伏しよう」

その言葉を聞いた時、俺は勝利の喜びを味わった。

なんていうか、レベルぎりポケンの四天王倒したくらいの喜びだ。

「っていうか、話が全く伝わってこないよ!!彼方くん!!」

現実に戻ったのは遥のそんな叫びからでした。

急に、宣言も何もなしに名光国から翠雲国に強制的に瞬間移動させられた兵士たちはお茶を片手に持った人やズボンに手をかけている人、ティッシュで鼻をかんでいる人などさまざまな形で呼び出されており、まともな装備をしているのは訓練中や警備中の人くらいだった。

よかったね、トイレでう子してる場面じゃなくて。

「ここどこ!?しかもこの壊れてるっていう家はどこの人?!あれ?何か日本語変?!とりあえず説明して!」

本当に混乱している遥は何故か握りしめている小刀を振り回している。

「落ち着きなさい、ハル。潮の匂いが強いですから、ここは多分

翠雲国では?」

「あつたりー。さっすがあルド様博識」

「え!?敵国!?ぎゃー心の準備してないよお!?!」

ふむ。納得がいったように頷いて遥の肩をぽんぽんと叩いていた。

「大丈夫ですよ。きつともう終わってますから」

「ですよ?」

と確信をもって俺に目配せしてきたから口角をあげてニッと笑って

返した。

「え？じゃあ何で私たち呼んだの？」

「あれだよ、あの勝利のやつやってもらう為」

まあもう一つの理由は完全制圧だったけど、それももう終わったしいいか。

今のうちにどさくさにまぎれて使仕を影に回収する。

お疲れさん。

後でえらいえらいしてやろう。

「じゃあ、リジールさん呼ばないと！」

「なんでっ！?!？」

せっかくあえてはぶつたのに??!

「本当なら勝利宣言をあげるのは巫女の仕事なのですが、うちの巫女は眠り巫女ですからね……リジールが巫女代理ですからリジールでなければ鳴らせないのです」

なんという……!!

「仕方がない。呼んでささつと済みますか」

本をもう一度手に広げる。

「ちよっちよつとまで!!」

と唾然としていたあゆびよんがまた飛びかかってきた。

今度は抱きしめて受け止める。

「むっ」

遥が何かいったけど、気にしない

「なに？あゆびよん」

「放せ！変態」

どっすっ！

グーパンチがあごにクリティカルヒットしたから放してあげるって  
いうか逃げられる。

「あのだな」

「いてえ」

普通に話進めてくるけど痛いんだよ、これ。

「彼方くんになにするのよ!!」

怒った遥がまた出てきて俺の腕にくっついてくる。

「君の?ふん。彼が誰のだろうと関係ない。ともかく今僕は彼と会話しているんだ君は引っ込んでいてくれないか」

「だめー!彼方くんに害を加える人に彼方くんを渡してなるものですか!」

若干話がかみ合っていないぞ。

つていつか遥がかみ合っていないぞ。

にらみ合ってる睨み合ってる。

話が進まないから苦笑いのルド様に遥をパスする。

遥が何か文句言ってるが、まあ後でかまってるでしょう。

「すまん、で?」

「いや、かまわない。それで本題なのだがずばり、勝利宣言をする」と元の世界に戻されるんじゃないか?」

えーっと。

あの厘石国のおっさんの時と当てはめるとー。

「そうなるだろうな」

帰ってったもんな。

「元の世界に戻ったとき向こうの世界の時間はどうなっているんだ?」

どうなってる?」

「進んでるんじゃないのか?」

確か……思い出したくもないが、今、向こうの世界での俺と深山功一は行方不明で二人で愛の逃避行中説が持ちきりらしいな。

「もしかしたら止まっているということもあるのか?」

「いやーうちそんなんしらへんで?」

その辺のくわしいことはあの神たまに聞いてみないとねー。

「もし時間が進んでいなければ、困るのだが」  
未だに気絶しているなさけない兄の方を少しチラ見しつつため息をつく。

「なんだ？事故にでもあつていたのか？」  
通学中のバスや電車の交通事故とか？

「ブスバスガイドのバスガス大爆発？」  
ルド様から逃げてきたのか遙が横やりなんだかよくわからない早口言葉を言ってきたので頭を軽く叩いた。

「いや、事故というよりは犯罪かな」  
「……へえ」

しみじみというからなんとなく返事しにくいので流しておこう。

「まあ、このままじゃあさ、話進まないからとりあえずリジールっていうおっさん呼ぶわ。嫌だけど。本当に嫌だけど、見たらきつとあゆぴよんもビックリするよ」

「そんなにすごいのか……？」

マジで嫌だけど我慢してリジール召喚。

「んむっ!!?!?ここは一体!!?!?」

何故か汗だくで上半身裸のリジール巫女護衛隊隊長はそのウサ耳をぴよこんと動かしつつ周りを探っている。

「んぐああああああ!!」  
目が腐る

なんで下はスカートプラスストッキングのままなんだよおおお!!

「リジールさんってはその恰好どうしたんですか？」

「おお、ハルどの！トレーニングしていたら不意に……ここは一体どこですか？」

トレーニングの時ぐらいジャージとかなんか着替えるよお!!

「やや!! 彼方殿!! どうなされた!!」

「ギャー!! 頼むからこっちにくるなあああ!!」

一部男を出してるあたりいつも以上に精神的にくるんだよおお!!

このままでも話が進まないの、ルド様に話をしていただく。

「なるほど、なるほど、心得ましたぞ!」

「ちゃんと説明しましたから、二人とも、ちゃんと戻っていらっしやい」

俺と「視えない、なにもみえない」とうわごとを言っているあゆぴよんはこわごとと戻ってくる。

「でわ、力いっばい行きますぞおおおお!!」

どこからか、本当にどこから出したんだ……鹿の絵柄が彫り込まれた鐘を取り出し、鳴らし棒に力を込めて一撃を放った。

「お願いしまっす!!」

遙の元気のいい掛け声に合わせて野太い奇声が放たれる。

「ふんぬああああああああああああ」

きいんこー………ん!!

すごく大きな澄んだ音が戦場を駆けてゆく。

「いつも思うのだが、あんなに気合い入れて叩く必要があるか?」

「ないんじゃないかな?」

「おおおおおおおん!!」

遠くから前のように鹿が轟く。

その角にはひものようなものが引っ掛かっている。

「蛇かな?」

「みたいだな」

前回は歓声とか聞こえたが、何のことやらさっぱりわからない名光の兵士たちはポカーンとしている。

翠雲国の者たちは悔しそうにはしているが、街の人は今頃パニックを起こしていることだろう。

いつの間に！？みたいだな。

名光軍、ポツカーン（後書き）

あちゃー余計なの書きすぎて次にまで流れちゃった（-|-;-）  
反省

神たまと通信（前書き）

久し振りだね。

## 神たまと通信

「あろう」

大きな鹿を眺めていると、服の端をくいくいと引つ張られているのが気がついた。

「ああ、萌っ子ちゃん！久し振りだねー」

「萌っ子…？　ひとまず、勝利おめでとうございます。つきましては、前のように神候補同士で集めていただけると嬉しいのですが」「りょーかい」

今だに目を回しているけど、まあいいか。

將軍たちも立ち会いのもと、遙は晶のもとへと近寄る。

「そういえば、そっちの王様立ち会わなくていいのか？」

「我が国は王族はいません」

ふーん。返事短つ。

「君が天帝の使いか」

「あ、はい」

あゆびよんががちりと萌っ子ちゃんの肩を掴む。

「ならば頼む、元の世界に戻されても構わないが、時間を進めてからにしてくれ」

「え、うわ。わ、私に言われましても。私には何とも」

困っているのか、耳が垂れていてもものすごくキュートなのですが。

「ねー？時間とまったらどうなってるの？」

俺も気になっていたところを遙も突っ込んだ。

「殺される」

あゆびよんの一言はものすごくあっさりとしたものだった。

「いや、殺されるって」

ちよつと乾いた笑いを浮かべる遙にあゆびよんは真顔のままつづけた。

「ちようど、この世界に来る直前に家に侵入してきたヤンデレ気味の継母予定の女性が『あんたたちがいなければ！』と叫んで包丁を振り回してきていてな」

「デ、デンジャラスな人生送ってきたんですね」

確かに戻りたくないわな、そんな家に。

「そこんところうなんだ？」

「そ、そんなこと言われましても……時の流れは一定ではなく、主にお伺いしなくてはならないので……」

「それじゃさ、俺が神たまに聞きたい。呼んでよ、今から寝るからさ」

久しぶりに会いたいしさ。

萌っ子の返事を待たずに目を閉じる。すると、

思ったよりも早く閉じたはずの瞳に光が差してきた。

「神王神をなんだと思ってるに！」

「出てきてんだから良いじゃん？」

ぷんぷんとアホ毛も揺れる、愛らしい神様。神たま。

「でさーさっそく本題なんだけど」

「うぬ、話は聞いてたに、あの二人の兄弟の元の世界とのタイムラグは5分程度、たぶん生命の危機は脱出してないに」

あちゃー。時間進んでるといえば進んでるけど、これじゃー意味な

いね。

「関係ないけど俺と深山功一は？」

「君たちは自力で来たから、タイムログはほとんどないに」  
君たちというか、俺はね。

「時間進める、とかできないのー？神様でしょー神王神でしょー？」  
ちよつと意地悪だけどつついてみる。

と案の定怒ったように長い杖をぶんぶんと振り回してきた。  
うを、地味にあぶね！

「うーるーさーいに！この世界の神であって向こうの世界の神じゃないから難しいの！」

「つてことは、できるんだ？」

難しいのであつてできないわけではなさそうなのでもうひとゆすり。  
ちよつと難しそうな顔をして神たまは杖をいじる。

「まあ、一応時間さえくれればに、でも二人も時間をずらすことなんてできないに」

そついうことなら、問題はないだろう。

「じゃあ、あゆぴょんは後からつてことで」

「毎回思うけど、本人の意思は全く無視に？」

「負けた方が悪い」

しかもここまで交渉してあげてんだからむしろ感謝してほしいくらいだね。

「分かったに、それじゃあ、こつちの世界で1時間くらいしたら送るに。それまでは終戦宣言してもその場に残るけど気にしないでほしいに」

「あゆぴょんはどのくらい？」

続けて聞いてみると視線を明らかにそらし、地面をけり始める。

「もう一人は……気合いと根性を相乗計算しても7日以上はかかるに」

「つまり、つかれてしばらくサボる宣言？」

「うつつるさーい！に。用事は終わったんだから、帰れに！」  
杖でごすごすとつかれる。

地味に本当に痛いんだけど！

「いてて、最後にひとつ質問してもいいか？」

「何？」

「あの、櫻辺ってやつは何者なんだ？」

「！？」

櫻辺、という名を出すと一瞬だけ停止し、またすぐに何事もなかったかのように

「知らないに！さっさと帰るに」

とだけ言って杖をどんっと地面につついた。

何か知っている？

「んつまぶし」

「どうでした？」

目を開けると、萌っこっちゃん心配そうな顔でこちらを見上げてる。

抱きしめてもいいですか？

ダメですよね、はい。

「とりあえず、終了宣言しても言いそうだ」

このままでもお互いの軍が神経すり減らすだけだし、さっさと終了させる。

「条約の内容だけど、こちらの資金を一部こちらに回すこと、こち

らのピンチには有無を言わず協力をすること。あと、他の国を攻めるときは拠点にする時もあるかもしれないけど、その時は快く受け入れること」

これさえ守ってくれば関税自主権とか領事裁判権とかそんないいらないからさー。

「負けたのだから、文句は言わないわ」

とは言いつつも顔がものすごく不満そうだけどね。

あゆびよんに兄貴のことを伝え、ついでにもその間の面倒は翠雲国が見るように將軍さんに伝える。

「今だに目を覚まさない兄に、心配を通り越してあきれてきた」とあゆびよんはいま端の方で肩の力を抜いて座っている。

遙はちよつと怒ったような顔で俺のほほをつねる。

あんまり痛くない。

「彼方くん、もう無茶はしないって約束してよ？」

「しないしない。多分もう通用するような国ないだろうし」

大きい国ほど防御も高いつてホントずるいよね。

遙を安心させようとして頭をなでてやる。

「ん〜。さつてと、俺も疲れたし、そろそろ帰ろつか？」

「うんっ！」

「でも、どうやって帰るんです？」

「あ」

そっすいえば船ないんだっけー？

この国の船も特産みたいなものだからそれに乗って帰っても良かったけど、早く家に帰りたいなもんだからヤトに陣を作ってもらって帰ることにした。

チャージ中

体操座りで待機中。

あゆびよんが寄ってきた。

「ところであのむつちよなおかまおじさんは、なぜ女性の格好をしているんだ？そういう趣味か？」

「視えないふりは止めたのか。」

もちろんリジールのこと。

「趣味じゃないのか？」

すると今度は遥がきて一言。

「あれ、うちの巫女さんの代わりをしているから女性の格好しないといけないんだって、趣味でもあるらしいけど」

「まじかつ！！」

でもどちらかといえばきつと

趣味：義務 が 7：3

の割合だと思われる。

うーん。まずハーフだからあのウサ耳がインパクト強いんだよな！。

神たまと通信（後書き）

意外とスリリングな人生歩んでるね、さすがあゆびょん。  
リジールの女装の理由意外としよぼかったりw

あいつ今何してるかなー

「うーまんごっ」

「!?!?」

こんな始まりで失礼。

田中彼方18さい。

真面目で健全でイケメンな最強の男だよ。

「うーまんぼう。じゃないのか。どっちにしる変だけどよ」  
頬に感じる自分の涎をぬぐいつつ起き上がる。

あーやべえ色男台無し。

昨日の夜帰ってそのままボタンキュー気味に布団にダイブしたから、  
体が埃っぽい。

そういや、向こうのバイト服気に入ってたのに置いてきちゃった。

それに、翠雲の兵士の服着たまま帰ってきたけど…ま、いいか。  
肩のところが服破れてるなー。

そういや肩やられてたなー。

もうどうせ傷ほとんどふさがってるし、まあいいかー。

まだなんとなくボーとしてる頭のまま風呂へと向かう。

「うっうまんごー!」

あれ、何の泣き声だ？

あれか、現樹の「ほげー」の親戚かなんかか？

てか、縮めんなよ。

伸ばせよ、うーって。

風呂、どこだっけ？

ああ、外から行かないといけないんだった。

「ふああああ」

伸びをしつつ扉を開けると

ウサ耳のおっさんがいた。

「ふぎやあああああああ！！！！！」

「んむ？おお。英雄殿かなたおはようございます！疲れていらっしやるとは申しても少し遅すぎますぞ？」

「リ、リジルさんっ！！なんでこんなとこにあんだよ！！」

あ、あるじゃなくて居るか。

どっちでもいいよ！！

あ、今日の格好はナースさん風だ！……白衣の天使汚すなやつ！！  
「お疲れでしょうからな、食事やお洗濯掃除に……おお、湯を沸かしました故にどうぞ入りくだされ！」  
素直にありがとうといえないのはどうしてだろう。

「……どうも、ありがとうございますー」

ウサ耳を微妙にリボンで可愛くしてる……ってそんなとこまで細かく見てしまう自分がものすごく嫌。

そこまで細かいくおしゃれするなら、髭切れよ！

と、まあ突っ込みは心の中だけにして、風呂へと走る。

外からじゃないと風呂に入れないのが、本当にちょっとアレだけど  
い。

「うーあー。いい湯ー」

軽くに体に湯をかけてから一気に湯船につかる。

はぁービバのんのん。  
うーん。

微妙に肩の傷に染みるが……後でフィンにでも見てもらおうかな。  
…これくらいいいか。  
このていどの傷があっても俺は男だし…むしろ、勲章？

体を洗って十分お湯につかって出ると、新しい服が用意されていた。  
中国系。

チャイナか。

あちよー。

オレンジがいいねー。

「ご飯ができておりますぞ」

「あ。どうも」

まだ居たのかりジール。

まさか一緒に食べるつもりじゃないだろうな。

家の中に入ると確かに料理ができている。

見たこともないような料理だが、朝食だったのか量がそんなに多くない。

「吾輩はそろそろ巫女様のもとへもどりますゆえ、食事がすみましたら流し台に片付けられますように！」

「いや、子供じゃないのでちゃんとしますよ」

きらーんとどつかの某少佐のように輝きを放ってから、やっとリジールは帰っていった。

ふう。

あの人がいるだけで通常の三倍はつかれる。

「……いただきます」

料理が普通にうまいのがまたなんとも言えない空しさを生むんだよ

な！。

「や。英雄」

「んむ？」

魚？ぽいやつの頭をかじってたらふと窓からユルギが手を振っている。

「ユルギか。久しぶりだなー」

お箸をおこうとすると手で制したのでそのまま食い続ける。

「私の仲間が皆退院したのを伝えたくてな。…それにしてもまたやんちゃしたらしいな」

「やんちゃっていうな……入ってこいよ」

お箸を加えたまま招く。

「いや、城に用があつてついでに顔を出しただけだから」

「そうか、あ、お前のいう姉様によろしく伝えといてくれ」

「ん」

そういえばちらっとしか見てないな！。

俺って切れたらある意味一途になるからな！。

それにしてもこの魚？ぼいのうまいな！。

時間だ、と去っていくユルギに手を振り。

食事を終えて流し台へと皿を片付ける。

うーん。洗わないといけないのだろうか？めんどろだな。ほっと。

さて、何をしようか。

ユルギは用事があるらしいし。

テトラにでも会いに行こうか。いや、でも城に行くとココアに会っしー。

へたすりゃまたリールとも会っしな！。

エルフの国に行ってマリーナ先生を尋ねようか。

ああ、でもそこに行くならユルギの姉様に会いたいからまた今度にしよう。

あーどうしようかな。

ううまんじ。の姿でも探しに行こうかな。

……あ、深山功一にでも会いに行こうか。  
生きてるかなー。  
生きてるかー。

よし、逢いに行こう。

「えー？深山功一居ないの？なんで？」

「さあ、お父様ならともかく、私に教えてくれるわけがないわ」  
ここは、現樹国の城。

深山功一の部屋に行っても居なかったので練習場やここにひそませている仲間たちに聞いても首をひねるので、サラのところに入る。

「ここに居ないことは確かなんだ？」

「他の者はともかく貴方にウソをつかないわ。……新神様いつも私に挨拶しに来てくれるの。それで、この間しばらく来れないと言っていたから確かだと思うわ」  
ふーん。

女の子に律儀に毎日挨拶してるんだ？  
不器用なりにマメな奴だね！。

それにしてもサラはあいからわず無茶をしたのか、反省部屋と書かれた部屋に閉じ込められていた。

とはいっても中は普通に高級なもので埋め尽くされていたので問題はないだろう。

本人いわく「独身時代の自由を満喫してるのよ」なんていつていたが。

「どこいったんだ？」

「他国じゃないかしら？挨拶に来た時に何度か難しい顔で話し合いでなんとならないか、とか言っていたから。……可能性としては低いけどね」

いや、十分ありだな。

あいつの性格上周りをしぶしぶ説得させて挑戦する。  
そんなやつだよ。

「どこの国に行ったんだろな」

オレがつい最近行った言葉で戦争止める奴いねえよって言葉を見事に覆させられたな。

いや、たぶん無理だろうけどな。

「ま、こっちもいろいろ用意しておくか……？」

取り合えず、失敗するのは目に見えているし。

どことやり合うのかは分からんが兵力を急いで固めておいても損ではないだろう。

「じゃ、サラまた来るよ」

「ちよっと、ここまで協力してあげたんだからここから脱出するの

助けてよ！」

「だめ、ちゃんとここで反省してな」

さてさて、時間はまだあるだろうしのんびり帰るとするか！。

あいつ今何してるかなー（後書き）

深山功一のこと、忘れないであげて。  
一応準主人公のつもりだから。

シスターですから(前書き)

深山フラグだけで終了ww

## シスターですから

深山功一どこ行ったんだろうね。

でも探すのも面倒だから帰ってきてから聞こう。  
と思つて放置してます。

「お大事に〜」

「ありがと〜」

スマイル満開の顔で薬を受け取る。

白衣の天使（本物）がいる病院で一応肩の傷を見てもらうとやっぱり軽度のかすり傷だったらしく針を縫うこともなく解放された。  
フィンのおかげというところもあるだろう。

城のほうに行けばタダだけどもまた大げさにされるのも嫌なので街に行つてみたが……いい！

いいよ、いい！

本物のナース！

可愛いよ、はあはあ。

「あとう」

「ん？」

大通りで人通りが多いし、誰かに呼ばれたような気がしたけど気のせいかな？

「あの、そこのあなた」

ちよいちよいとほっぺをつつかれる。

つてうを、前に居たのか！

つてうおお！！

し、シスター！！

「ちょっと、そこで話でもしていきませんか？」

そういつてにっこりと公園のベンチを指さす彼女は、まさにシスタ  
ーそのもの！

優しい微笑み、完璧な着こなし、和らげな物腰、聖書付！

「もちろんですとも！！」

俺は彼女の手を取って公園のベンチへ直行した。

「どうぞ」

ベンチへ座るよう促すとやんわりとほほ笑んだ。

ああ、癒し系。

「ありがとうございます……いきなり声をかけてすいません、シスターのシスティアコール・C・シュバラムといます」

名前なツが。

この国のものじゃなさそうだ。

「俺は田中彼方といいます。それで話とは？」

目の前で子どもがぎゃーぎゃー遊んでいたって構うもんか、このま  
ま二人でメルヘンでロマンチックな世界へと……！

「はい、宗教勧誘です」

……ですよね。はい。

いいじゃん、夢くらい見ても。

「えっと、宗教はチョットーって、あれ？」

ここの国ってか世界の人って自分の国の代表神信仰じゃなかったっ  
け？

そんなのわざわざ勧誘するのか？

「ラヴィトウル信教です」

まったなんか噛みそつな名前だな。

ん？どこかで聞いたことがあるような気がする。

「ラビトウル？」

「ラヴィトウル神です。この世界のもとを創った偉大なる存在です

よ

あー聞いた気がする。

「だいたい、よく考えても見てください。どうしてこの世界をおつくりになつた方ではなく、後付けの方を信仰するのでしょうか？もつとも感謝し、愛するべきなのは始祖様ではないでしょうか？」

この人、誰も突っ込んだんじゃないところをつついてるんじゃないだろうか。

話を聞いているとあ たしかにと思うところもあるけど作風的にいいのか？

「あー。はあ」

あいまいな返事で返すとシスターは青い瞳でじつとこちらを見つめた。

いくつくらいだろう。

顔的には童顔で……胸の方は結構なものですが！

「そうです。始祖様は今の世の中を望んではいなかったはずですよ」

「というと？」

「神という名と権限を振りかざし、暴力を持って血で地を奪い合うそんな争いにどう平和が保たれるでしょう？」

あーはー。

なんか目が怖くなってきたよー。

「私は、始祖様のお心のままに、この神候補制度を否定するつもりなのです」

何か新しい人来たよー。

始祖の心分かるの？

「だから、貴方も抹殺おしおきさせていただきます……！」

「へ？」

びゅんっ!!

本能というか、影の中の使仕の誰かに引っ張ってもらったおかげで頭と胴体が離れることはなかった。

「……!!?」

ちよ、ちよつとええええええ!!?

シスターなのにちよといかつい感じの槍を持っている。

目が微笑んでいるのがものすごく嫌です。

てかどこにそんな武器仕込んでたよ!?

「(頭の)悪い子にはおしおきです」

なんか、今、言い含みがあった気が……。

「つてうをつ!!」

びゅっ

ぶんっ!

「なんで俺が狙われなきゃいけないんだよ!」

「貴方が暴力で国を獲ろうと画策していることは承知済みです!」

なんでばれてんだよ!?

「証拠は!?!」

「シスターですから」

い、意味わかんねえ!!

ぶんっ!!

ざっしゅ!

こんな子供の多いところでそんな武器ふりまわすなよシスターなんだから!

というか背景の木とかベンチとかバターみたいに切ってますが！  
この国財政難なんだからやめたげて！！

「きゃー！！」

「わあああん！」

子どもや保護者は案の定悲鳴を上げて避難してゆく。

だれかー通報してこの人。

そしてヘルプミー王宮の方。

「子どもおびえて泣いてるぞ！いいのか、シスター！」

「大丈夫です、きっとその子たちは多少のことではおびえない強い子になるでしょう」

「すげえポジティブ思考！」

前々回の櫻辺との戦闘

前回の女將軍との戦闘

今謎のシスターと戦闘

なに、何これ俺って女性との運命悪くない？

「シスターが人傷つけていいのかよ！」

「お仕置きですから、それに」

滑り台的なものの影に隠れながら叫ぶと彼女は微笑んで言いきった。

「シスターですから」

「シスターだからこそいけないこともあると思います！」

びゅっ！！

「うおお！」

体の動きを感知すると同時にしゃがむと首のあったところに、無慈悲にも一陣の閃光がほとばしる。

あわれ滑りだい、すっぱーん。

「ここ、何度も言うけど財政難なんだぞ！あやまれ！

髪の毛は大丈夫かちよつと確認。

「シスターだから大丈夫です」

「何がどう具体的に大丈夫なのか教えていただきたい！」

さすがに女性に攻撃するのはいささか萎える。

女将軍みたいに緊急事態とか櫻辺みたいに変な恐怖心とかもない。

こちらのテンションが上がるような殺意さえもない。

ただ、彼女にあるのは宗教上の神の代行的な業務心。

でも若干楽しそうに感じるのは何故だろう。

「わっおう！」

足を狙われたので縄跳びの要領でジャンプして避ける。

「暴力反対しているシスターが暴力で物事をかたずけていいのかよ！シスターだからって理由以外で答える！」

「……（頭の）悪い子はみんないなくなれば素敵な世の中になると  
思いませんか？そのためには多少の贖……犠牲は神様も認めてくださ  
るはずですよ」

「その考え方って、今の神候補たちと同じようなもんじゃねえか！  
！」

「違います、始祖様とエセ神ですらない候補たちと同じにしないで  
ください！」

とはいっても同じだよね。

これ以上遊具で隠れてもどうせ壊されるだけなので広い所にでてよ  
ける。

よ。

ほっ。

とお。

……この人やけにうまくないか？

「彼方殿！大丈夫ですか！？」

何人かの兵士たちがやってきてシスターはやっと武器を下ろした。

「あれ、以外。暴れたり逃げようとかしないんだ？」

ちよつと肩で息をしながら兵士の一人からタオルをもらつ。

「私は宗教勧誘が目的でここに来たのですもの、なにも悪いことしてませんわ」

にこりと。

天使の微笑みで代弁者は言い切つた。

ここまで清々しく黒い人初めて見たよ。

武器は預かり、聖書はいらないので彼女に持たせたまま城へと連行された。

はーやれやれ。

たまの休日もゆっくりできやしなない。

シスターですから(後書き)

いつものことながら、ぐでんぐでんしてますねええ

最近アンケートのカウントが少ないのでどうかお願いします)(  
・

## シスコとあゆびょん

前回（というか毎回）の反省。  
人を見かけで判断しちゃいけない。  
これとても大事。テストに出すよ。

可憐な幼女だって偉い神様だし、うさみみ生えててミニスカ穿いて  
たとしてもおっさんだ。

顔が俺的ドストライクフェイスでも男だし、桃色の髪で純粹そうな  
顔でも腐女子だったりもする。

だから。

シスターの格好で愛を伝えながら暴力で訴える人がいたって不思議  
じゃないんだ。

「てことでコラ！シスコ！」

前回のあの後普通に抵抗もなく捕獲されたシスコの牢の前へといく。

「おはようございます、田中さん。シスコとは何でしょう？私はシ  
スターですよ？」

のんきに牢屋でお茶をすすする自称シスターはにっこりと挨拶をした。  
「おはようございますシスコさん。本来のシスターは武器を携帯し  
振りまわしたりしません」

むしろこの世界のシスターがみんながみんなこんな性格ならすごく  
嫌だ。

というかシスターが居たことが驚きだ。巫女だけだと思っていたか  
らな。

「システィアコール略してシスコ、エセシスター感もほんのりして  
てまさにぴったり」

少しおどけて笑ってみせるとシスコは少し眉をひそませた。

「まあ、エセだなんて。私は真正正銘の信心深いシスターですよ？」  
信心深い慎ましいシスターさんは、武器を振り回したり人をお仕置きという名の暴力で抗議したりしません。

牢屋に入ってもニコニコしてるのは、反省してないからだろう。

「聖女スマイルで誘惑してもだめだぞ！！」

ビシッと指をさすとシスコは少し反論してきた。

「そんなことしてませんわ。暴れてしまったことは反省してますもの」

ちよつとまで、暴れてしまったものは？

じゃあ俺を襲ったことにたいしては反省してないってこと？

殺気がなくてなんか性格があれだから俺もイマイチ緊迫感とか感じなかったし襲われること若干慣れつつあったからそこまで気にしてないけど……一応傷ついたんだぞ。

いや、でも襲われることに慣れを感じていいものか…？

俺ってそろそろイカしてるひとの分類に入りつつある？

やばい、か？でもどっちかっていうと前回のコメディチックだったし、セーフか？

いや、アウトだろ。

まあそれは今のところ放置しておいて。

「こっちは色々ネタが上がってるんだぞ！ヒントは仕込み先。厘石と現樹、翠雲からです」

国の名前を聞いて、一緒だけ目を泳がせたが、またすぐ取り繕いごまかす。

「さあ？確かにそれらの国に訪れたことはありますが……身に覚えがありませんわ」

ほほお、まだ誤魔化すか。

少し叩くだけでこんなに埃が出てきたのに？

俺は少し咳払いしてできたての書類をひろげる。

「他国で盗賊がフルボッコにされ無一文の状態で捕まる被害が多発しているらしい」

「大変善いことではありませんか」

被害のところはスルーですか。

どうだ。といわんばかりにニッコリ満面の笑みのシスコ。

可愛いけどいつまで保っていられるかな？

「ところがどっこい。その中には市民に親しまれている義賊や疑わしいという噂だけの善良な市民も居たらしい」

「あら……まあ」

笑顔が少し強ばる。

「しかも、倒すたびにあたりの建物や畑を破壊して大変な被害が出ていると書かれているなあ」

「ど……ドジっ子さんなんですね」

ドジでは済まない被害額だな。

「目撃情報によると、犯人は自らシスターと名乗り始祖神信仰を進めていたらしい」

「まあそれは…同業者でしょうか？」

どンドン白々しくなってきたぞ？

「そしてそいつは聖書のような分厚い本を常に持ち歩き戦闘時の武器は槍らしい」

「あらー……」

「ここまで詳しく面割れてるんだ。諦めて自白しろ」  
もはや笑顔が固まってるじゃないか。

「お前、さてはシスターの愛の使命によって盗賊討伐とか大きなこと言いつつ追剥で生計立ててるだけじゃないのか？」

「ぎく。って違いますよ」

ちよつと咳ばらいして姿勢を正す。

「私、本当に（頭の）悪い人が許せないんです。だからついやっちやうんですよ」

「殺っちゃうのか？」

（ ）の中の声が聞こえる気がするのはチート本の効果なのか、俺の慣れなのか。

「おい。田中。来たぞ？」

ちよつと狭い牢屋に声が響く。

「おう。いらつしやいあゆびよん」

「君、仮にも元敵の妹を軽々しく利用するんじゃない」

翠雲国の神候補に選ばれた兄におまけ同然にこの世界に連れてこられた少女。

村野歩は少しというかかなり不満げにこちらへと寄ってきた。

「敗北国のものは勝利国のもんってこと。ほら〜機嫌を直して結局お兄さんも怪我ひとつすることなく元の世界に戻してあげたんだしさ」

頭を撫でようとするのと叩き落された。

「確かにその辺は戦国の世にしては、と。感謝はしているけど。戦いの果てに君が翠雲国にした被害を僕はちゃんと見ているんだ。そう簡単に心から許したりは出来ないよ」

「じゃあ本当は義理とか無かったら許してるってこと？」  
ぎりりつと腕をつねられる。

「いててて!!」

「あのう。私は放置ですか？お二人の夫婦漫才のそけを見ているのはいささか恥ずかしいのですが」

「誰が夫婦漫才か?!」

らちが明かないのでさっさとシスコの顔を見てもらおう。

「あゆびよん、どう？」

「うん。間違いないと思うよ？」

じーっと見つめて頷く。

「君を、刹寒国で見かけたよ」

自称シスターはその微笑みを引っ込めた。  
無表情のその顔は、シスターというよりも、雪女。

「直接出会ってはないけど、そうだよな？シスリティア・S・アル  
フレンド嬢」

なんとなく同じだが、システィアコール・C・シュバラムっていつ  
てなかったか？

自分で言うのもなんだけど長い名前なのによく一度聞いただけで覚  
えれたなあ。

## シスコとあゆびょん（後書き）

殺気がないと戦闘してもすることがいまいち現実として実感できていない田中。

強いていうならゲーム感覚になるという。

それはやっぱりチートという安心があるから感じれるのですが。

チートでもやり過ぎせれないとか、あると逆に初陣のようにへたれるかもね。

明確な殺意とかを感じるとやっと殺気を持って返す人。

でも若干やっぱり変人なのかな？

## シスリティアの本音

シスリティア・S・アルフレンド

それが目の前の牢屋のなかに閉じ込められているえせシスターの本  
来の名前。

「……確かに私、刹寒国に居ましたわ。出身国ですもの。でも、だ  
からと言って私が貴方が言う人とは限らないのではなくて？」  
また、すぐに笑顔の仮面を装着する。

「僕が、君を見かけたのは、刹寒国にある唯一の港。君は周りを必  
要以上に見渡し警戒していた」

北極にある国。刹寒国。

広い大地に恵まれた美しい北の大地。

一年のほとんどが雪が舞い、その土地でしか育たぬ鉱石や植物はと  
ても希少価値が高い。

寒さに強い動物たちで生計をつないでいるが、北の海は薄い氷があ  
り魚はわずかにしか取れない。

中央北海で少しは取れるがすべての人にまで渡らない。

だから漁業が盛んな翠雲国に輸入をしていた。

「僕が刹寒国に訪れたのは神が下りたことにより輸入をどうするか  
会議するため」

本来ならあゆびょんが行くべきではないのだが、興味があったらし  
くりユーム將軍におねだりしたらしい。

「リユームが『血の匂いがする』といていた。それに城に行くと  
『シスリティア嬢が逃げた』とバタバタしていたからね。安直かも

しれないが間違いはないと思うが？」

「……はあ」

シスリティアは軽いため息をついた。

その表情にある感情は一体何なのか？

「私とそのシスリティアだとしたら何なのですか？」

「シスリティアは刹寒国の巫女の一族だと聞いた」

「そうですね。でも当代は妹が継ぎましたけどね」

肩をすくめておどけて見せる。

「それが何なのです？今の私は一介のシスター。異端信仰で殺しますか？」

目に少しばかりの殺気がひかる。

おお怖。

あの時の戦闘とは大違いのオーラだ。

「お前のここに来た目的は本当に信仰のためだけか？」

「それ以外に何が？」

「新しい刹寒国のスパイ方法かもしれないだろう？」

「まさか。大体の国で異端信仰として殺される可能性があるのに？」

そんなに目立つ方法でスパイするような馬鹿に見えますか？」

まあね。

でもいろいろあるしさ。

一応の確認だよ、一応のね。

「それに、先ほども言われたとおり祖国に命を狙われている身。そんな義理立てしませんわ」

「それは本当か？始祖神様に誓って？」

「誓えますわ。私はあの国とあの国の神候補が大つきらいですもの。死ねばいい。滅べばいい」

……えーと。

キャラ壊れますよ？シスター？

「ごほん。んなら、命を助けてやる代わりに手伝え」

「え？」

「はあ？」

あゆびよんもそこ驚く？

あゆびよんにはこいつの顔を確認するために来てもらう時に襲われたことも説明したから。

（ちなみに本来は面識がありそうなりユーム程度に来てもらおうと思っただけ）

「普通自分殺そうとしたやつ助けるか?!」

あゆびよんの言葉は確かにそうだけだね。

「あれ、どう考えてもここに入るための演技だろ」

「はあ?! 殺されるかもしれないのに？」

あゆびよん、ちよっとテンション高いね。

「あらあら。ばれちゃいました？」

また、につこりとシスターになりきる。

いや、自称シスターだけど。

「公園で襲われた時に殺気がなかったし、俺が避ける反応が遅れたとき、シスコの腕でなら致命傷の傷を与えたにもかからわずわざと外した。まるで誰かが俺を助けるのを待つように」

「はあ〜？」

そして、シスコの腕ならあの程度の兵士ものの数分で倒せたにもかからわず、大人しく抵抗すら見せずに来てきた。

今までシスコは追剥まがいの盗賊討伐を繰り返してここまでやってきた。

だが、この国にはシスコにとって大きな問題があったんだ。

この国は他の国に比べて圧倒的に盗賊・山賊その他もろもろの悪人が少ないということが!!

「シスコ! お前お金が尽きたからわざと寝床プラス飯がもらえる牢

屋にはいつただろ!!」

「うっ。そこまではれました?」

「しかもこの国は神様信仰よりも巫女信仰のほうが強い。それにエルフとか自然信仰してるやつとか数多くの信仰があってお前が異端信仰で殺されることはまず可能性としては低い」

「もし、殺されそうになっても直前で逃げだす自信もありますわ」

いや、そこはにこにこされても。

「君たち、馬鹿だろ」

いや、俺は馬鹿扱いされても困るっ!

「頭痛い。僕はもう帰らせてもらっよ」

あゆぴよんはすたすたともと来た道に戻っていったがまあ気にしま  
い!

「この国に、というよりこの俺に尽くせ」

「頭悪いんじゃないのです?」

こら、三白眼で睨むんじゃない。

「俺なら三食昼寝付しかもお風呂も一戸建てもプレゼント!」

「貴方じゃなくてもいいんじゃないのです?」

確かにね。

「別に、名光国でもいいけど。もともと王宮から追い出されたんだ。いい気はしないだろう」

「貴方でも同じじゃなくて?」

う。たしかにね。

「断れば殺されますの?」

「いや、下町で思う存分ご奉仕作業してもらっ。とりあえず壊した公園直しか」

遙は人を殺めるのを極端に嫌う。

罰はちゃんと与えなきゃいけないというのもわかっているが、今回俺が向こうが手加減していただろうことを伝えたら、俺も怪我してないし殺すまではしたくない。と言った。

俺もできれば女性は殺したくない。  
男なら牙をむいた時点で終わりだけだな。

シスコは少し考えて微笑んだ。

「ひとつ…条件を飲んでくださればいいですわ」  
「条件？」

「刹寒国に攻め入る時に私を同伴し、特定の人物を殺させて下さる  
なら」

シスリティアは今まで以上の笑顔を見せた。

「その条件。受け入れよう」

俺は牢屋の鍵を取り出し、鍵穴に差し込んだ。

## シスリティアの本音（後書き）

（＾Ｏ＾）ノシスター怖

エセシスコ。仲間になるー。ってね。

って次50話じゃん！！すげー。

浦島太郎の誘惑？（前書き）

いや、浦島太郎ほとんど関係ないんですけどね。  
ほとんどっていうか全く。  
サブタイトルのネタ尽きた。

## 浦島太郎の誘惑？

夢だ。

夢を見ている。

そう実感する夢を見るというのはまた不思議なもんだ。  
白い霧もや。

夢ならもつとええもん見せんかい。

《くすん》  
ん？

誰かが泣いている。

誰だ？

女の子というのは分かる。

《ぐすつ》  
とても悲しそうに泣いている。

誰だ？俺はこの声を知っている。

尋美？尋美が泣いているのか？  
どうして泣いている？

《うっうっう》

霧が晴れた向こうに居たのは

「おはようございまーす！彼方くん！」  
ぱつと目に光が差し込み、ぶわあつと布団がはがされた気配がする。  
声からして遙だろうか。

「きゃあああああああー！」  
遙は朝から元気だなあ。

なんか、前もこんなことあつた気がする。  
デジャブ？

「か、彼方くん！は、はははだか！？」

「ふああ〜。うるさいなー朝から騒くなよ」

「とりあえず！隠してよ！変態！」  
変態？！失礼な、自分からはがしておいて！

布団をぶつけられるように投げつけられたので仕方ないのでそれを  
体に巻く。

「で？」

「へ？」

なんで顔真っ赤なんだよ。

いや、これが普通の反応か？

「何か用？」

「とりあえず着替えてからにして！！」

枕で頭をばーんつと叩きつけられ出て行かれる。

…鍵、かけてたはずなんだけどなー！。

とりあえず最近お気に入りのチャイナ風の橙色の服を着る。靴はサ  
ンダル。

面倒だもん。

「ふああ。で、なにかよう？」

「顔洗って髪整えてきなよ」

「お前が来たからできないんだろ。飯も食いたいんだけど」

とりあえず涎の気配を感じたので服の袖でふく。  
汚いっつと遙に言われたけど気にしない。

「あのね、えっと」

もじもじとされてもわからない。

「ご飯作ってきたの！一緒に食べよう！」

そういつてジャ　ンと出されたのはお弁当。重箱。

なぜ、重箱。

「向こうの世界でもあんまりしたことないし、ここのお料理初めてだからあんまり自信ないけど」

「味見した？」

「え、あ。してない」

「じゃあいらねー」

「ひ、ひどい！ー！」

「冗談だよ」

半分。

ひとまず部屋に戻って、お箸などの準備をする。

女の子の手料理食べれるとは、夢にも思わなかった。

「いただきます」

「召し上がれ」

見た目はうん。ファンシー。

この世界の料理だからだと願いたい。

ピンク色の大根の煮込みっぽいのをちよっと口に入れる。

「……」

「……どっつ？」

……まずい。

どうこたえるべきか。

うまいと答えて下手のまままた持ってこられても苦痛以外の何物でもない。

だからといって不味いと言いつ切るわけにもいかない。

とりあえず、答えずにド緑の豆腐っぽいのに手を出してみる。

「…」

「…どうなのよー」

お前も食べてみるよ。

これってこういう味なのか？こういう触感なのか？

この世界ではよくできているのか？

まずい。

俺は何も言わずにとりあえずすべてのものに手をつけていった。

全体的に、まずい。

いくつか食べれる物もあるが、おいしいとはかけ離れている。

リジールのもののほうがうまい。

「どうなのよ！」

だからお前も食べてみるよ。

「食べば分かる」

「え」

遥は明らかに目を泳がせて「さて、そろそろ帰ろっかな」なんていうから手を掴んで座らせる。

「食べ。何なら今ならあーんサービス付きだぞ！」

「ぎゃー！ごめんなさい！」

作ってきたのに謝るといいうのも変な話だな。

食べれる物だけ一応食べて食事終了。

「御馳走様」

「うう。もう少し上達して持ってきます」

「おう、頑張れ待つてるから」

とりあえず腹は膨れたのでよしとしよう。

「ん？何照れてんだよ遥」

「あ。あははは〜好きだなーって思って」

「この料理が？」

「違うよ！」

午後から用事があるのか遥は重箱を持って帰っていった。

俺はどうしたもんかな。

…顔を洗って髪を整え、ねっ転がる。  
エロゲーみたいに選択項目でないかな。  
でないか。

「寝るか」

でもそれじゃあ誰も来なかったとしたら話にならんし、仕方ないから動くか。

主人公も楽じゃないぜ、全く。

ああ、そうだ。

エルフの国にでも行くか。

「ヤト、よろしく」

「御意」

場所分んねえからヤトにテレポートしてもらった。  
これ続けたら絶対太るよな。

木。

樹。

気？

あいからず光る木でいっぱい。

綺麗だなー。若干この間の戦いで焦げてるのもあるけど。

「あ、お兄ちゃんだ！」

「あれ？テトラじゃん」

てててて。とテトラがこちらにやってくる。

ポス。

うー可愛い。

「彼方。来たのか」

「おう、ユルギ。なんでテトラいるんだ？」

「元の国の知り合いがないのが寂しくなったらしくてな。私のと

こにきたんだ」

「ふーん。俺のとききたらよかつたのに」

「次からそうするねー！」

あああかわええ。これなんていきもの？

類ずりしてたらユルギにチョップされた。

「せっかくだ。姉様に会って行きなよ」

「ん、そうする」

テトラを下ろして手をつないで社に行く。

うん。半壊してたところがだいたい修復されている。

木の階段つていいよな。

なんかカツコいい。自分の家にいらないけど。

一畳間、まっすぐ広がる広い部屋の一番奥に姉様がいらっしやった。

「姉様、田中だよ」

「まあ、ようこそいらっしやいました」

「おじやましまーす」

「まーす」

テトラも真似して語尾だけエコー。

「その節は本当にお世話になりました。本来なら私たちからお礼に参らねばならないというのに、申し訳ありません」

御簾の向こうに居るためにいまいち顔が見えないが、ユルギに比べてなんと温和な気配だ。

「いえいえ、お礼ならユルギがしましたから」

「それでも何かお礼にプレゼントさせて下さい」

え、じゃあユルギさんをください。

「姉様、アレでいいじゃないか？」

「そうね、ユルギの思う通りになさい」

俺の不穏なオーラを感じ取ったのかユルギがテキパキと進め始める。

あれ、でも俺ユルギが欲しい。

「ほら」

ぐいっと渡されたのは箱

「なに？開けたら老人になるとか？」

「どんな呪だよ。中には種が入っている」

浦島太郎だよ。

「あの魔法ドつかーんてできる奴？」

「アレとは違う。その種は木と会話できるすぐれものだ」

「へー」

そりやすげーファンタジー。

ん？これ使えば盗聴しまくり？

「ども」

さっそく種を一つ掴む。

「飲むべき？」

「飲んだら消化されるにきまつてるだろ。それを持って話しかけるだけでいい」

「ふーん」

ト　口もびつくり。

お、これ使ったらトト　も見つかるんじゃないか？

だめか子どもの時にしか見えないもんな。

姉様にお礼を言っつて、フローリングなみの綺麗な木の床をつるーと滑りながら退場。

ユルギとテトラはこれからピクニックらしいのでそれについて行くーと思うたら、見た目からして標高高い山に行くらしいので辞退した。

テトラ大丈夫なのか、あの山で。

帰るのは別に急がないからだからだとエルフの森を通って帰る。

おー光ってる。淡く発光してんね。

夜桜ならぬ夜光る木で月を肴に宴会したら楽しいかもね。

《主》

影の中でヤトの声が響く。

「なんだ」

《現樹国に置いておきました仲間スバイから連絡が》

現樹で連絡が来るとしたらあの情報しかないわな。

「……深山功一が戻ったのか。どこへ行っていったんだ？」

《はい。それは》

浦島太郎の誘惑？（後書き）

祝50話

よかったねー自分。

なんとというか、いらぬ文章もある気がするけど。

それも味なんだよ。

つてことだから読んでくださいますようお願いします(^o

^)/

平和のために、何人殺せますか？（前書き）

珍しくシリアス。

シリアス注意！（どう注意するんだ）

平和のために、何人殺せますか？

雨雲の隙間からうつすらと光が漏れている。

ここは現樹国。神の住まい。

朝早く、当りはまだ薄暗いというのに深山功一は出てきた。

「よお、功一」

「彼方」

パラパラと雨が降っている。

傘をさした深山功一が屋根の上で待つていた俺を見上げる。

「雨の中一人でしけた面して散歩か？」

「彼方こそ、何してるんだそんなところで。それに功一って呼ぶなんて」

この世界でも雨は降るのだとすこし意外に思う。

この世界はあちらの世界に似てるのに似てないから。

「じつはさ、お前が究温国に同盟を結びに行ったのを聞いてさ」

「誰から聞いたんだよ？あいからわすの情報網だな」

「企業秘密。んで？」

少し、じつと俺の眼を見つめて悩んで答えた。

「…同盟は成された。宮神は俺の考えに同調してくれた」

「ほお。お前のバカげた平和論でか？」

頭の中であの意志の弱そうな宮神、秋津沙耶を思い出す。

ここにきて結構な日数が過ぎたが、人はそう簡単には変わらない。

「戦争を話だけでかたづけようなんて甘いんだよ。いつかは一番を決めるために綻びが出るにきまつてるだろ」

甘いんだよ、秋津沙耶も、お前も。

見下すように睨んでも功一はにらむようにこちらを見つめて視線を外したりしない。

「ここはそういう世界だ。お前が成そうとしていることは世界の理

を曲げようとしていると同じだ。どうせ無理だけどな」

雨がほほを伝うがそんなの気にもならない。

「間違ってたんだよ、お前は」

「つつ！」

深山功一は傘を投げ捨て怒りのままに叫んだ。

「違う！」

叩きつけるように言い放つ。

「こんな歴史たとかいを続けること自体間違っているんだ！！神などいらない！皆で頑張っていくのが普通じゃないか！」

俺には小さな子が親に願いを聞き届けてくれないもどかしさからわめいているようにしか見えない。

「お前の考えじゃ、死ぬよりつらい思いする奴がいる」

「…それでも、お前よりましだ！」

「一人を殺して正義を得ようか？」

「他を守るためならそれも仕方ない」

「それがお前の正義か」

功一と仲たがいをしたのは本当に久しぶりかもしれない。

いや、ここまで深刻なのは、初めてだろうな。

「異世界ちよこに来て、この世界で神候補に選ばれたのは、何か使命があるからだ！俺の使命はきつと、戦争をなくすことなんだ！」

「そうか」

功一の考えは、間違っていないのかもしれない。

功一らしくて。そしてこいつにはそれを実現する実力も運もある。

だから。

「じゃあ、俺はおまえを倒さなきゃいけない」

なるべく、感情を押し殺し言い放つと、功一はショックを受けたように目を見開いた。

「彼方　お前は普通のじゃない環境でいいのか？！」

「なら……！！」

なら、お前は

「貴方の世界で普通を凶られちゃ困るね」

「!?!」

俺と功一は二人して近くにある樹を見つめる。

そこに雨の中佇む、櫻辺がいた。

「また現れたな、悪趣味な女め」

「まあそう毛嫌いしないでよ。物語の動きには結構毎回いるんだよ?」

「物語:??」

俺の呟きに近い質問には答えない。

「君か、深山の功一君」

ふわっと降りて、功一の近くに顔を近づける。

「君みたいなのは何人かいたけど、皆、叶わなかった。どうしてだろうね?」

「君は一体:?!?」

俺は懐からチート本を取り出して今度こそ櫻辺をとらえようとした。

「おっと。彼方くん?それ私には効かないから」

「お前、本当人間離れしてるよな?」

「知ってるだけだよ。いろいろと」

功一が櫻辺を捕まえようと動くが、俺の時と同じように櫻辺は捕まえれやしない。

「今回はちよつと忠告したいから出てきただけなんだけど」

「ああ?」

俺はあえてガラ悪く答えても櫻辺は嬉しそうに笑うだけ。

「功一くん」

功一の顔をガツチリ掴んで告げ口をする学生みたいに囁く。

「君がその選択をすることで悲しむ者がいることを、知っておいて?.....それと...」

後半は本当にささやきで俺には聞こえなかったけど、功一は目を見開いた。

「意外とそれは早いかもね」

櫻辺はそういつて功一から離れた。

「放置プレイしてごめんね、もう帰るから」

「ふん」

どうせ止めたところで捕まえれやしない。

櫻辺は手をひらひらと振って悠長に歩いて帰っていった。

雨はまだ降りやまない。

激しくないのに、確実に俺たちを濡らす。

「彼方：」

功一は下を向いたまま力なく言った。

「ここに来た、本当の理由はなんだ…？」

櫻辺が何か余計なことでも行つたのか…？

俺は何も言わずに功一を見おろす。

「俺に戦争しろって言いに来たわけじゃないよな？」

気がついたのか。いや、気がつかされたのか。

「何しに来たんだよ。なあ！彼方！！」

俺は何も答えず屋根から降りた。

ぱしゃっ

功一が俺をにらむ。

「お前は、本当に俺の敵なのか！」

戦争は、遊びじゃない。

平和論者じゃ生き延びれない。

「ごめんな、功一」

俺はニコツと笑う。

細かい光が、パラパラと風に舞い雨と交わる。

「な………に？」

「フィンの毒粉」

フィンが俺の方にとまる。

「大丈夫死にはしない。すこし意識が遠のくだけだ」

肌から水に含まれた毒も吸い取ってしまうというすぐれた性能。もちろん主の俺には効かない。

「か…なた…」

「いま。同盟組まれたら名光に攻めてくるだろう？」

現樹と同盟を成したと言っても功一だけの意見で決めたようなもの。国のものは 特にアリアやセジュランは簡単に名光を裏切るだろう。

調印は今日の昼行われるらしい。

なら、その間功一を預からせてもらおう。

考えたんだ。

俺を見捨てた現樹を勝たせなくても。

俺を受け入れ頼ってくる名光国を勝たせればいいのだと。

正義感が無駄に強い深山功一よりも無垢な遙のほうが思い通りに動いてくれる。

なら、いいじゃないか。

現樹国がどうなるうが。

この国にも知り合いはいるが、戦争の世だ。諦めてくれ。

「戦争にうんざりしたはずの、前回の神候補の優勝者は、どうして戦争制度を中断しないのだと思う……？」  
薬が完全に回り倒れた功一を担ぐ。

本当は、本当に勝ちに行くつもりなら、ここで功一を殺せば楽に現樹は手に入る。

でも。

「むりだなあ」

俺は苦笑いしてヤトを召喚した。

俺もやるべきことを見つけたんだ。

だから、もう迷わない。  
例えおまえを踏み台にしても。

雨はまだやまない。

平和のために、何人殺せますか？（後書き）

な……なんだこの空気はっ!？

しかたないよ、曲りなりにも戦争してるもん。

アンケート、携帯からもできるようになりましてー!

そちらもぜひぜひご協力お願いします

なにか問題でも(前書き)

## なにか問題でも

雨がざあざあと耳障りに「今日は土砂降りですよ」と主張している。

やれやれ。なんと雨はこうも悪いことばかり運んでくるのか。

スーツに泥が跳ねれば泣くしかないし、女性で言えばせっかく決めたパーマも台無しにしてくれる。

遠足だつて延期になるし、運動会は下手したら中止になるかもしれない。

本当に雨はろくなことを運ばない。

いや、違うな。雨は時にロマンチックな雰囲気も作り出してくれているし、恵みの雨といわれるほどだ。そんなに悪いものではない。

とまあ、意味のない現実逃避をつらつらと並びたてるのはそろそろやめようか。

「……………」

俺は飛ばしていた意識を元に戻し、目の前に居る人物を見据える。

「もう一度、ちやぁんと説明してくれる？彼方くん！」

名光国の神候補。鳴神、更木遙。

彼女は腕を組んで俺の目の前で仁王立ちしている。

その表情はとてもじゃないが楽しそうとは言い難い。ぶっちゃんけ怒っている。

「だからーあー」

俺は正座したまま左右に視線をさまよわせる。

右はルド様、左はココア。後ろはエルフのお姉様とユルギ。

かごめかごめよろしく俺を取り囲んでいる。

彼らは怒っているのだ。

何に？

理由は明白だ。

「どうして、現樹国の神候補をさらってくるのよお！！」  
そう、深山功一誘拐事件についてだ。

ちなみにここは巫女様の部屋。

巫女様も珍しく起きていらっしやるのか、御簾の向こうでかすかに  
心配がする。

「だからー放っておいたらいつかはここに攻めてくるじゃん？」

「同盟の人質だっているじゃないのよ！」

「セジュランって人、冷たそうだし〜アリアだって妹を切り捨てる  
くらいの覚悟を持つてるはずだって」

「こつちの人質はどうするのよ！」

……あ。ごめん。

俺はとりあえず肩をあげておどけて見せた。

「反省の色がない！ひどい！ひどいよ彼方くん！」

遙はもうほとんど泣きかけのまま叫んでいる。

「まあまあ、あんたも神候補なら一応落ち着きなさいよう」

ココアが遙の肩を掴んで強引に座らせる。

「だって」

「私は、彼方んの行為はあながち間違いじゃないと思っわよ？」

遙が信じられない。という顔でココアの顔を見つめる。

おお、思わぬ助け舟。

「まあ、生きて連れて帰ってくるというのはどうかと思っけど

こちらが先手を打てば向こうだって攻撃しずらいわよね？そういう

計画？」

「こちらは連勝したとはいえ、国の財力はまだまだ不足。そんな  
か自らことを起こしたのには何かわけでもあるのですか？」

「それに、あの男を連れてきてどうするつもりだ？」

皆つぎつぎに問い詰めてきたので遙の時と同じように肩をすぼめる。

「なあ」

「貴方は なにかしたいことでもあるのですか？」

少しピリピリとしてきた雰囲気の中に、巫女様の言葉が入る。

「 さあね」

俺はまた同じように肩をすぼめた。

「俺は俺の好きなようにさせてもらっただけさ。そういう契約じゃなかったっけ？」

「でもっ……！」

「そうですね」

遙がなにか反論しようとする、ルド様がそれを制す。

「今までの勝利も君の自由ともとれる行動のおかげ、今回も何か考えがあるのでしよう」

その目は、信用というよりも俺を挑発するかのような目だ。

「現樹でも、滅ぼしますか？」

ルド様の声が、部屋を支配する。

……現樹国を滅ぼす？

「 はあ？しねえよ？そんなん」

俺はこの空気をふっ飛ばすくらいの勢いでなるべく軽い口調で笑った。

「犯人の痕跡は残さずに拉致ったんだ。現樹国がここを犯人と断定できるまで向こうもさまざま理由をつけて新神不在を隠すだろう」  
「いいがかりをつけられればおしまいだけどね。」

正座がとうとう辛くなってきたので胡坐をかく。

「現樹なんていつでも潰せる。現樹の動きを封じ そうだな、次

は大国でも責めてみるか？」

「大国？では、究温か西臥さいが？」

ルド様がそう呟くとココアもすこし考えるようなしぐさをする。

「たしかに、今なら究温の神候補が雑魚だから叩けるかも……でもさすがに国土の差があるし」

「西臥の神候補は静観主義のようで、共倒れを狙っているようです

よ

「私……自分から戦争を起こすのは少し  
三者三様。」

いろいろな意見があるのは大いに結構。  
だが残念。」

決定権があるのは、俺だから。

「じゃあ、間とって刹寒国攻めようぜ」

俺が笑顔で言うと、襖がすっぱーんと勢い良く開く。

「とつてもとつても賛成です！さすが彼方さん！素晴らしい意見で  
すわ！」

システィア改めエセシスターはこれでもかといわんばかりのイイ笑  
顔でグツジョブポーズしながら叫んだ。

「いつ行きますの？もちろん私も行きますからね！」  
よくわからないけどヤル気満々で楽しそうだ。

女の子って怖い。

「エルフは彼方の意見に従う」

ユルギがポツリそういう。

「自分たちじゃどうしようもないしな」

「じゃあ、決定」

ルド様や遥が何か言いたそうだったけど、俺は席を立つ。

「刹寒と桐文きりふみが戦争中らしいから、急いで。ちなみに戦争らしく堂  
々と背後から狙うつもり」

「どこが堂々なのよ！」

遥が怒りながら突っ込むけど気にしない。

「そういうもんさ。ってことで、最終会議は明後日しますから、集  
合よろしくね」

そのままエセシスターを連れて部屋から出ていく。

「勝てればいいんだよ、勝てばね」

「私は刹寒国が滅びればいいんですよ」

……隣の子、恐ろしい子！

ルド様達は勝てばいい主義のはず、この国の神候補の権限は弱いからきつと遙が反対してもこの計画は可決されるだろう。

「やれやれ」

遙には悪いけど、できるだけ早く終わらせたいんでね。

そういえば、遙の秘密ってなんだったんだ？

> i 1 2 8 8 2 | 1 4 4 5 <

なにか問題でも(後書き)

シスターウキウキすぎ。

田中は何を考えているのだろうかね。

適当だけど地図挿入。

和解と幼女（前書き）

幼女はオプションですW

## 和解と幼女

「よお深山功一、しけた面してるなあ」

きんろう ほんじょうきゆう  
金瑠訪宮の中心部。

一番警護が強く安全な部屋に、深山功一を閉じ込めている。

「彼方……」

「嬉しくないのか？こんなにハーレム状態にして接待してやってるのに」

俺は室に入ると女の子たちに手を伸ばす。

「……お前の好みをどうこう言うつもりはない。 だが人質の部

屋に幼女を10人も一緒に閉じ込めるなあ！」

「いーじゃん、癒されるっしょ？」

頭なで撫で。

深山功一と同じく部屋で過ごしてもらっているのは5〜10くらいの少女たちが10人。

おもちゃとお菓子できゃあきゃあ楽しそうにしている。

「エルフからハーフ、獣っこにノーマル幼女。ここまでフルコース準備したのにどこが不満だ」

「根本的にな！部屋ピンク一色という時点でつらいわ！」

「はっ！分かったぞ。つまりツンデレが欲しいと？この年齢の子は純粋な子が多いからツンデレは少し難しい注文だ。だがまあ貴様がそこまで望むなら頑張らんこともないが」

「違うだろっ！！」

深山功一が叫ぶのとおなじように腕につながれている鎖がじゃら、となる。

部屋の中心に杭が打ちつけてあり、部屋の端までは自由にできるが、部屋から外は出られない仕組みになっている。

もちろん、そこはヤトの能力を応用しているので見たことないが深山功一の使仕が出てきたところで鎖すら外すことはできない。

「冗談だつて」

俺は追加に持ってきたお菓子を机の上に置く。  
女の子たちはうれしそうにそれに手を伸ばす。

「女の子たちと少しは仲良くなつたか？」

「彼女たちはフレンドリーだからね」

隣に座ると少し複雑そうに深山功一が言うのでその口のなかにクッキーをつっこんだ。

「で？一晩経つて、俺の考えについて何か感想は？」

「……お前がイカレてるわけじゃないつてのはわかった」

遥たちにはまだ言つてはいないが、深山功一に俺の本当の意思を伝えると、少し疑いつつもあの敵対モードはといてくれた。

かといつて前のような気軽さはイマイチ戻つてないが。

昨日の12時間に及ぶ説得はなかなかいい感じに聞いたみたいだ。

もともと深山功一は人を憎んだりするのは苦手ですぐに信じたがる性格だしな。

「お前の考えには俺も反対しない。だが、それには終わりが無い」

俺が少し困つたように呟けば、深山功一は真剣に呟く。

「目標をかなえたければ、勝つしかないということか」

エルフの女の子を一人膝にのせて頭をなでる。

「ま、そういうこと。だからつとり早く戦争を終わらせようつてはなし」

刹寒国を急いで責めるのは、ただシスターとの契約をかなえるためなんだけどね。

どうやら桐文の方が優勢みたいだから急がないと捕られる。

「なら、俺も覚悟を決めて戦う。だから現樹に返してくれ」

「あ、それは無理」

「なんでだよっ!？」

深山功一の大声に驚いた女の子たちがシーンと静かになってじーっと俺たちを見つめている。

膝にのせていた女の子なんて泣きそうだ。

「あーよしよし。怖くないよー。君たちも遊んでいいよ」  
なるべく優しそうに声をかけて微笑んであげる。

「……俺が現樹に戻って、他の国攻めたほうが早いだろうが」

深山功一も反省したのかちよっと歪な作り笑顔のまま小声で言う。

「むり。お前が戻ったとして、アリアとかセジュランが勝手に進めるとも限らない」

「なにを？」

「究温との同盟。それからの名光侵略」

「名光とは同盟を結んでいるじゃないか」

「究温は宿敵ともいえる桐文をはやく倒したい。そのためには翠雲国の土地が欲しい。それを今所持しているのは名光<sup>つむぎ</sup>。じゃあ名光を吸収してやるうってね」

膝の上の女の子が他のこのところに行ってしまったので、楽に座り直す。

「現樹の王は名光が気に入らないみたいだしこっちとしてはそんな危険に身をさらしたくないわけだよ」

「王が名光が気に入らないなんて聞いたことないぞ？」

「木に聞いた」

「はあ？」

自分で持ってきたお茶に手をのばす。

うん。うまい。

「じゃあ、究温と名光も同盟を結んで土地を貸せば」

「どうせこの戦いで同盟を結んだってどこかで一番を決めるしかないんだ。それに、現樹が究温と手をくみ、名光に対し、友好的に結んだとしても今まで静観主義だった西臥も名光を攻めに来るだろう？」

この世界の地図がいまいち頭に入っていないのか首をかしげる。

近隣諸国くらい覚えとけよ。

「いくらお前でも大国との同盟を直前で蹴ることはできない。同盟結ばれると困るのは名光。だから君はここで幼女たちと一緒に監禁」

「幼女いらなくね!？」

なんてことを言うんだ、これが一番のみそなのに!

「でもこのままだとアリアも心配するだろうし」

「君馬鹿あ?アリアに「俺、名光に居るから心配すんな(きらーん)」

なんていったらうちが速攻攻め込まれるだろうが」

「確かに……」

まあ、そんなこんなだからさ。

「しばらくハーレム楽しんでろって」

「幼女いらないって」

だって、幼女居たほうが無茶できまい。

脱走防止の一部なのだよ。はっはっは。

「現樹には残っててもらわないと困るかもしれない事態が来るかもしれない」

「「かも」がいやに多いな」

それは遙次第だからな。

「とりあえず、俺明日からちょっと刹寒国攻めてくつから大人しく待ってるよ?」

「ちよつと出かけてくるレベルで何すげえこと抜かしてんだよ!」  
気にしたら負け。

扉を開けて新たな幼女たちを今までの幼女たちと入れ替える。

「新たな幼女たちと新たな世界を築くがいい!……あ、言葉にできる範囲でな」

「言葉にできないようなことを幼女にするかあ!」

とりあえずくすつと笑って扉を閉めてやった。

さてさて、準備をするか。

きつと今頃シスターがシスターの皮を殴り捨ててすごい装備をしているんじゃないだろうか。

男に比べたら女の執念って本当に怖いよな!。

おれは出来るだけ急ぎ足で家へと向かった。

和解と幼女（後書き）

一旦シリアス脱出。  
シリアスって嫌だね。  
次回、戦争かも

マイクがあると、こつなる。(前書き)

マイクがあると、なんかテンションあがらない？

マイクがあると、こうなる。

「あゝあゝあゝ。ごほん、テストス、テストス。マイクのテスト中  
きいいと少し高めのあるとの声とともに金属音が入り混じる。」

「みなさん聞こえますかあゝ？」

マイクの割には少しお菓子のお棒を思い起こさせる円錐形のそれを握った田中は、上機嫌で翠雲国の城に向かって手を振った。どうせ見えやしないのに。

「ちよつと歌つてもいいですか？母国の歌なんですが……あついた！ごめん！ごめんって真面目にするって！いててて」

後ろからエセシスターに聖書もどきの角でぐりぐりされてちよつと反省する。

「えーと、閑話休題！今から、僕たち名光国のものが、そちらを攻めさせていただくので桐文に落とされるのと、名光に落とされるのどちらがいいか選んでください。てへへ」  
最後のでへへは余分だけど、まあいいじゃん。

マイクを半分奪われる勢いでシスターに奪われ、それを部下に渡す。

しばらくはどちらかが動くまで暇なのでそのまま甲板に座り込んでもう一枚毛皮の毛布を体に巻きつける。

「しっかし、刹寒国は本当に寒いね」

海の潮風が冷たく体の熱を容赦なく奪っていく。

この世界式とか季節感とかなくて、常にその国特徴の季節らしい。名光以外。

目の前に居るシスターはやはり出身ということだけあって平然としている。

一体どういう仕組みなのか。

右に左にゆったりゆったりと揺れる戦艦に俺達は今待機している。

色は紺色。旗は名光カラーのオレンジ。

旗には鹿の絵がデフォルトされていて可愛くなっている。国旗がそれでいいのか。

「それにしても彼方くん、あんな大声でアピールしてもいいの？」  
めっちゃもこもこのコートは何重にも重ね着した遙は、まるで別の生物のようにのっそのっそと船の中から現れた。

「なんだ、その恰好。ペンギンかお前は」

「だって、ルド様が着てなさいって言うから」

肌がちゃんと外に出ているのは目だけで、後は全部服の中。むしろ暑すぎるだろ。

先般に今いるのは、見張りのものが数名と、俺とシスター、遙だけで後の人は寒さに弱いため艦内でじっとしている。

「名光の人は、温かい気温になれてるからきついんだって」

「名光は四季あるんじゃないのか？」

「あるよ、冬以外」

それは四季とはいいません。

「あら、今日の気温は刹寒国では温かい方ですよ？これくらいで弱音を吐かれては、闘いが不安ですわね」

刹寒国は常に氷点下以下の温度をマークしており、常夏の究温国の人は責めてきた記録がない。

船から国に攻めるといふ手もあるが、刹寒国のひとは、国外への攻撃の砲撃が他の国よりも特化しており、船が射程距離に入る前に撃ち沈めることで自国の守りを固めているらしい。

たとえば、国内に攻め込まれたとしても、寒さで思うように動けないのでそこを責めて追い返すらしい。

攻め入るのは苦手だけど、守りの攻撃は強いという国獣は亀だといふからなんとなく納得してしまう。

「亀なんてどんくさい生き物、私は嫌いですけどね」

なんてシスターは笑顔でいつていたっけ。

「それで？大声で攻めますよ 宣言した理由は何？ルド様が気にな

つてたみたいなんだけど」

「ああ、あれね。大きな意味ではお茶目だよ」

「はあ!?!」

だって、この世界にマイクあったんだぜ?

使ってみたいじゃん、マイク。

本当は歌いたかったんだけどさ。

「おお、こんなところにいられましたかハル殿」

船内から出てきたのはいつものごとく、鐘ならし担当リジール。

今は寒さゆえにトルコのおじさんみたいな長い帽子とコートを着ているために、頼もしいダンディな艦長となっている。

顔にぴったりだ。

こんどからリジールを刹寒国配属にしようかなんて本気で考えてしまっ。

「温かいココアをどうぞ?」

「ありがとうございます」

シスターがにこりと微笑んで受け取る。

俺ももらうが、ココアは正直得意じゃないんだがなあ。

「ありがとうございます」

温かさだけでも味わうか、ととりあえず受け取っておく。

「ハル殿、熱がおありなのですから船内で大人しくしておいて下さい」

「あ?熱あるのか?」

目しか見えないから全く気がつかなかった。

ふらふらしても船が揺れてるから分らないし。

だれ?熱あるのにつれてきた人!

俺?

「微熱微熱」

「ここ最近ずっとですぞ?奥で休んでください」

気配的に多分へらっと笑っているだろうが、結構きつそうだ。なんで気がつかなかったかなーおれ。

「ずっと微熱だったんなら、無理せず名光で休んでてもいいんだぞ？」

「ん〜でもみんなで戦争するっていうのに筆頭の私がないとダメじゃん？」

「そりゃ、いないよりはいるほうが全然いいけどさ。お前が倒れたら皆心配するだろ？」

手袋をはずして服の中に手を突っ込んでおでこに手をあてると、結構熱い。

「ヤトで送るから一旦帰れ、な？」

「ん〜でも〜」

そりゃ皆がもこもここと着せていくわけだ。

目が涙ぐんでいてとろんとしている。

「ちゃんと勝ってきてやるから」

「……ん。わかった。」

頭をばんぼんと撫でてやるとぼすすと俺の胸にもたれてきた。

「怪我、しないでね」

「もちろん、俺は最強な男だぞ？」

広い甲板にヤトが円陣を作り上げる。

「病院の先生のところへ送るから、ちゃんと見てもらえよ？フィンも一緒につけとくから」

「ん、ありがとー」

やっぱり病人にはこの気温はつらいのか、どんどん声に張りがなくなってきた。

「気づかなくてごめんな、遥」

「いいよいいよ。私も隠してたわけだしさー」

最後にマスクを除けてにへっと笑う。

「早く帰ってきてね、彼方くん」

「おう」

ヤトの円陣がひかり、遥の姿が消える。

「遥が名光に帰ったことをルド様に伝えといてくれますか？」

リジールにそういうと、リジールは頷いて中へと戻っていった。

「ところで、彼方さん？マイクの理由の本命を聞いてませんが？」  
今までの間にココアはすっかりと冷え切ってしまった。

ちよっと切ない気持でココアを握っていると、シスターが俺のココアを奪いながら問うてきた。

「ああ、桐文への挑発。こっちにも気を配るために兵を増やしてきたら、翠雲国兵士が桐文に攻め入ろうかなーって……そのココアどうする気だ？」

「なるほど」

シスターが頷くと、いつも持ち歩いている聖書もどきを開いてなにかごちゃごちゃというときまたココアから白い湯気が立ち始めた。

「はい、どうぞ　もし、兵を増やさずこちらを無視してきたら？」

「ありがとう。その時は普通に刹寒国を攻めるだけさ　これどうやったの？」

ほかほかなこれを持ってシスターを見つめるとにつこりと返された。  
「これが、うちの巫女の特性ですわ。そして、私が巫女になれなかったのもう一つの理由です」

「もう一つの理由？」

「飲んでみてくださいいな」

「？」

言われたとおりに飲んでみると、中身は冷たかった。

温かいのは、外のコップだけ。逆に器用な。

「私、下手なんですよ、魔法が」

少しも残念じゃなさそうにシスターは外の海を見つめながら笑った。  
それだけ武術ができれば十分ですよ、と思ったけど本人もその辺は自覚しているみたいだから特になにも言わずに、温かいコップで手を温めた。

……いや、むしろ魔法が下手だから武術に特化したのか？？

うーん。シスターって面白いな。

マイクがあると、こうなる。(後書き)

最近、アンケートがいい感じに集まり中。

まだまだ募集してるので、ぽちっとよろしくお願いします

よろしくね

## 遙がないと二つなる

船の上で一日待ってみたものの、刹寒国でいかく砲撃がされただけで桐文からアクションは一切なし。  
どういうこと???

「桐文の野郎、こちらの相手する気ないな」

戦艦内であつたかいミルクと分厚い毛布をかぶりつつ、俺は小さな窓から刹寒国を覗いた。

除いたからといってもちろん見えるわけではない。ただの気分。

「まあ、こちらのことは弱小と思ってるわけだしねー」  
実際、何もかも向こうのほうが有利なわけだけど。

つていうか、今思ったんだけど、このゲーム国によって圧倒的なハ  
ンデ大きくない???

「でも、一度ずつくらいはどの国も勝利しているという不思議」

「いいえ、そうでもないですよ。厘石国と西臥国は勝利したことは  
ありません」

俺の言葉に反応して、ルド様が説明してくれた。

「厘石はなんとなくわかるとして、西臥国は？」

確か面積は3か4番目くらいのでかさだったと思うが。  
特に問題も聞いた覚えがない。

「西臥国の民は理系文系のもが多く、体育会系が少ないため【戦  
争反対！やるなら外で好きにしてくれ】精神でいつも見守り体制な  
んです」

……アホだ。

いや、いいのかもしれないけど。

それで最後のほうに一気に攻められる、と。

「しかも科学が発達していて責めるのも厄介」  
めんどくさい。

なんていう国なんだ。

「おや、刹寒国の方でまた交戦が始まったようですよ」

望遠鏡をのぞくりジルさんの声を聞いて窓をのぞくと、たしかに島でちかちかと赤い光がついたり消えたり。

「そろそろ俺たちも動きませんか」

「翠雲の者たちはいつほど動かしますか？」

「もう動かしても大丈夫だろう。じわじわと、ばれないようにな」  
今言つべきことじゃないのは分かるが……やっぱ軍服のリジルさんは頼りになる。

見た目が違うだけでこんなにも安心感が生まれるものなのかっ！！  
ウサ耳もすっぽり帽子でつつみこんだノーマルリジルはきびきびと部下たちに指示を回している。

うーん。やっぱり頼りになる！！

名光に帰るとまたあの格好なのかと思うと多小うんざりはするが。

あ、やっぱり置いて行こう。そうしよう。

独りでうんうん頷いていると、横からシスターにつつかれた。

「痛いです。エセシスターさん、なにかようでも？」

「エセをつけないください。何か一人妄想に浸っていたところ申し訳ないのですが、このまま待ついても名光国の人たちの体力が削られていく一方なのですし、さっさと攻め込みませんか？」

過激な発言ありがとう。

そうそう、妄想……じゃない思考に沈んでばかりでも仕方がない。

さっさとアクションでも起こそうじゃないか。

……でもぶっちゃけどうしようか？

厘石国のように城内にレポートというのもありだけど、巫女の術が魔法系統なら避けた方がいいかもしれない。

うーうーうー。

「ところでシスターさん」

「なんでしよう？」

特に思いつかない。

暖炉の前に居過ぎたせいで背中が熱い。

燃えてたら困るな。萌えるのはいいけど。

「こっそり亡命用の通路とかないの？知らない？」

あゝでも、知っていたら自分で使うか。

あゆぴょん情報によると普通に使っていたらしいし、ダメかもしれない。

「しってますわ」

「そっかーやっぱり知ってる　のっ!？」

普通の平然とした表情で結構重要なことさらっていったのけるね、  
きみ!

「はい、知ってますわ。これでも一応巫女のはしくれですからね」  
巫女のはしくれだったりシスターだったり忙しいねー君ねー。

「じゃあ、なんで自分が亡命する時に使わなかったわけ？」

「すぐに目星をつけられて見つかるからにきまってますわ」

決まってるのねーはいそうなのねー。

このシスターさんなめたらいかんのねー。

「ソウデスカ」

思わず片言になったけど、まあいいか。

取り合えずいい加減熱くなってきた毛布をルド様にパスする。

「じゃあ、そのルート通って逆攻めで行きましょう」

「外から通れるんですか？」

え？問題あり？

一人テンションあがっていると、ルド様が鋭い突っ込み。

すると、シスターが少し渋い顔をした。

「外からだ、結構な労力です……私は大丈夫ですが、寒さの弱い  
方や体力のない方は少し無理かもしれません」

「じゃあ、今のところ行ける条件を満たしているのは、シスターと  
俺と……」

なんとなく、リジルさんのほうをみてしまう。

「このリジール、体力には自信がありませんぞ！なあに、寒さなど体を動かせばすぐに温まりますぞ！」

頼もしい一言だ。

だが、三人しか該当者がいない。

……使仕たちいるし、大丈夫かな。

「じゃあ、この三人で行きましょうか」

「いくらなんでも少なすぎませんか？」

心配そうにシスターが言うのもわからなくはないが、使仕いるから大丈夫。

まだ言わないけど。

「大丈夫大丈夫。ルド様達はここから向こうの射撃圏内に入らない程度に威嚇射撃を適度に繰り返して、隙を作ってください」

やりすぎるとばれるけど、その辺は有能なルド様だ。なんとかうまくいこうとするだろう。

「では、夜になるのを待って決行しましょう」  
俺が腕を高く掲げると……意外と誰も乗ってくれなくてしーんとなった。

おれ、今やっと遙の大切さを感じた気がするよ。

なんて遠い目をしていたらシスターが嬉しそうにっこりしながら武器を磨きはじめた。

……シスターなんて怖い子。

あ、この終わり方前もした気がするw

遙がないとこつなる(後書き)

誰かのつてあげてWWW

寂しいじゃないかWWW

寒いからよけいに寂しく感じる。

寒いのはリアルも同じ(ー・ー)

## ただの世間話といついで

「……」  
「……」

田中たちが、船の上で行くか？誰行くか？よし、夜に行こうか。なんて話を繰り広げているとき彼らはじつと無言でお互いを見ていた。

いや、片方は若干目がうつろではあつたけども。

いやがらせのように（いや、半分以上が嫌がらせなのだが）部屋の中のものがピンク一色でコーディネートされている、なんとも乙女チックな部屋。

その部屋の中心には鎖で足を拘束された深山功一と。何故かこの部屋にきている風邪状態の更木遥がにらみ合っている。とはいっても、遥は風邪のために体がゆらゆらしている。

「あかさ、何しに来たのか知らないけど、とりあえず病気なら帰つたらどうだ？」

至極まともな意見を深山功一が言ったが、遥はゆらりゆらりと体を揺らしつつも頭を縦には振らなかつた。

それでも、いつもは部屋の中にわんさかといる田中曰くより取り見取りの幼女たちは今は遥の命でない分、気を使っているのだろう。彼女は一体何しに来たのか、本当にわからなくて深山功一はただただ彼女を見つめた。

年齢が自分と同じか、少し下くらいのこの少女も神候補。

興味がないわけではないが、病人相手にどうしようという気は起きない。

「……ごほつごほ！けほつ……んんっ」

「苦しそうだな。水はあるが、薬でも飲むか？」

肝心の薬は自分で持っているだろうし、とりあえず彼女の背中をなでながら、水差しを手に取りコップに注いで彼女に渡す。

「ん」

ちよつと気だるそうに受け取り薬を取り出すべく、左手をポケットに突っ込み探る。

本当に何しに来たんだろう。

なんだかそれだけで深山功一は疲れてきた。

もともと、自分は女性と触れ合うというのが、苦手な方だ。

それに今はアリアと……その、友達以上の関係上、女性と二人つきりというのもなんだか浮気みたいで複雑な心情だ。

もちろん、田中はそんなこと一切考えはしないけれど。

「あのお」

ひどくか細い声で、遙はやつと口を開いた。

「深井……功一さん？」

「深山です」

病人にも容赦なく、するどく突っ込む。

遙はそれを聞いて「はあ」とだけ言って座椅子にもたれかかる。

……あれ？座椅子なんてあつたっけ？

なんて深山功一は考えたけど、聞いたところで答えしてくれる人などここにはいないのである。

「この国の話を知っていますか？」

唐突に、そう話を切り出してきた遙を怪訝そうな顔で見つめる。

「一応……それが？」

「深い意図があるわけではありませんが。シスターなる人が現れたのでふと気になっただけです」

「シスター？」

気がついたら、遙のおでこにいつのまにか冷えピタシートのようなジェルっぽい何かはられている。

……いつの間に。

どうせ聞いても答えてくれないだろうから、静かに返事を待つ。

「始祖神を崇める人だそうですね」

「始祖神……たしかラヴィトウルとかいう？」

ただの世間話ですから、深く考えないでください、と遙はいつてから話し始めた。

「この世界では、【神】といえば、私たちを指します」

私たちが、それはつまりこの国に召喚された異世界の者。

遙は、少し痰でかすれた声を一度、咳をして整えてからつづけた。

「それ以上の存在といえば、【天帝】と呼ばれる鳳来に居らっしゃる神様」

使仕を捕獲しに行った時に確かにその単語を聞いた。

でも、民はみな神【じぶん】を一番に崇拜している。

「この国の人はとても神信仰に熱狂的なのになぜ、始祖神様はこんなにも影が薄いんでしょうか？」

「ただの、宗教の違いじゃないか？身近な方が信じやすい」

「確かに。そうとも言えますが、ただ不思議なことにこの始祖神の話を知っているのは巫女や王族ごく一部の物だけ何です。まる

で、故意にその存在を薄めているようにすら感じませんか？」

そう言われれば、そうとも思わなくはないが。

どこかこじつけともとれるような感じもしなくはない。

「なんともいえないな」

優柔不断をも言われそうだが、結論を出すには早いと判断し、そうとだけ言った。

「名光国は唯一の多信教です。だからいまいちわからないのですが、現樹でもし始祖神信仰が流行ったら、貴方はどう思いますか？」

「どうって 別に何も思わないが」

「……そうですか」

どうやら、その意見を聞きたかったのか少し落胆したように溜息を吐いた。

くちゅん。と一旦くしゃみもしてから。

「あゝ無理をし過ぎたようなので、もう帰ります。 じほっつー！」

「大丈夫か？この鎖のせいで体を支えることができないが一人でも平気なのか？」

「大丈夫です」

ゆっくりと立ち上がって深山功一をみてにつこりとほほ笑んだ。

「世間話ができてよかったです」

「意味深な世間話だったようにも感じられたがな」

それには微笑みだけで返事はしない。

「このこと、彼方くんには内緒にしてくださいね。私が病気なのにうろろろしてたことばれたら、きつと怒られちゃうだろうし」

それに、と続けたのでそれに？と尋ねる。

「深井さんと二人つきりつてばれたら嫉妬しちゃうかもでしょ？」

「なるほどね、ご馳走様……ちなみに、俺の苗字は深山な」

と訂正をいれているうちにすでに彼女は出口の近くにたってこちらに手を振っている。

彼女のこの自由さは、なんとなく田中の悪影響な気がした深山功一であった。

ただの世間話というところで（後書き）

浮気なの？

後半よくしゃべったね。

水飲んだのがいいの？薬は結局飲んだの？

やんまじくたぢな、田中です。(前書き)

あ、今日はポッキーの日ですね。

どうもこんにちは、田中です。

「こんにちはは、田中です。今から刹寒国にこっそり侵略に行きたい  
と思います」

カメラないけど、カメラをあるという意識で空中をガン見する。

「準備物はこちら」

船の上に無造作に置かれている、短剣・ライト・ボンベ……嫌な  
予感しかしません。

「えーでは、経験者の方にお伺いしましょう。自称シスターさん？」

「自称じゃありませんわ」

さも不満そうにやってきました、今回のナビゲーターのシスターさ  
んです。

「こんにちはわー」

マイク（スイッチは切っている）をシスターに向けて挨拶をする。

「なんですの？」

挨拶のくだりスルーされましたー。そうですかー。

しょんぼりしてもアレなので、早速質問に入りたいと思います。

「あのだ」

「はい」

「もしかしてただけだね、潜っていくつもりなのかい？」

「はい」

……！！（＝＝）

はい、しか言っていないじゃないかっ！！

もぐるだど?!この寒さのなか、防寒スーツもなく?

しかも、昨日サメカイルカかどっちか分ないけど背びれ海面から  
出てるの見たぞ?!

また、カメラがある設定の方向を向く。

「なんとということでしょう。今からこの寒さの中海に潜れというの  
です」

「誰と会話してるんですの？」

いい加減本題に戻るべくシスターに視線を戻す。

「寒いだろ。ていうか、こんだけ俺は着こんでいるのにスーツもなしに死ぬだろ」

「あら？スーツなんて必要ありませんわ。：動きにくそうですからもう少し脱いでいただく必要はありますけど」

リジールさんもなんだか心なしか逃げ腰だ。

それも仕方ないか。名光の人は冬には苦手らしいから。

「あかさ。サメとかはどうすんの？」

「サメ？ヤラレル前に殺るだけですわ」

やっぱりいるのね。そんなきはしてましたがね。

「はっはっはっはー」

俺は舟にしがみついた。

「何をしていますの？」

「いや、なんていうかさ。無理」

僕、死にたくないもん。

あ、久しぶりにチート本使ってどうにかしようか。

最近チート本のくせに応用きかなくて存在忘れてた。

「問題はサメだけですのよ？」

「<sup>シスター</sup>刹寒国民って肺呼吸以外にもえら呼吸できるのか？」

ばっちゃん。

……叩かれた。半分冗談だったのに。

半分本気で信じたけど。

「ちゃんとこれがありますの」

そういつて差し出されたのは、風船

「……」

いかん、思わず遠い目になってしまった。

リジールは寒くなったのか船内に逃げている。

「これを」

説明しようとするシスターを手で静止、続きを俺が引きつぐ。

「膨らまして中に入るんだな」

「その通りですわ」

「ただけなんだよ。肺活量半端ねえよ。」

「風船を手を持って、しみじみと思う。」

「海に向かって投げてもいいですか？」

「どうやって膨らませるんですか？」

「何故いきなり敬語……普通に、息を吹き込むんですわ」

「まんまじゃないか。やっぱり肺活量半端ないよ。」

「お手本お願いします」

「なんかいちいち聞くのもあれだから実際に目に見ることにした。」

「シスターは慣れた手つきで風船に空気をふうーっといれる。」

「と、一息入れた後は勝手に風船がひとりで膨らんでいつている。」

「途中でシスターがボンベとライトを手に取り、風船を踏む。すると、」

「シスターを飲み込み、風船はそのままシスターの身長を一回りした」

「くらいのサイズで止まった。」

「どうです？」

「質問が三つある」

「どうぞ？」

「その？サメが来たら逃げるしかないか？」

「風船が割れたら死ぬしかないし。中から攻撃しようにもナイフさし」

「たられるじゃん。」

「この風船は内側はものすごく頑丈ですから大丈夫ですわ」

「なら最初から外側を頑丈にしる。」

「その？船の上で風船に入るとして、どうやって船から降りるつも」

「りだ？」

「結構跳ね増すから心配ご無用ですわ」

「そういつてびよんぴよんと跳ねて見せてくれる。」

「おお、結構楽しそう。……遊ぶ分には。」

「その？口臭気にならないのか？」

「ばきっ！！」

「あつ！ー！！」

腰をけられて悶絶する。

「ごちゃごちゃ言ってるんで、男ならさっさと行きますわよ！これだけちんたらしていたら夜が明けますわ！」

ふざけ過ぎましたごめんなさい。

リジールも呼び出して、風船のやり方を説明し、いざ行かん！海。

とうっ！

じゃっぱーんとはいるのかなと思っただら地味に浮いて、じわじわと沈んだのでちよっとテンション下がった。

海の中は暗い。

昼だといい感じの海底の散歩が楽しめたかもしれないが、夜だから何も見えずライトで照らして道に行く。

岩場の影に居るカニっぽい。

たまにぶつかる魚っぽい。

なんか、それっぽいのがたくさんいる。

あ、サンゴっぽい。

風船の中は思ったよりも暖かい。やっぱり口臭効果か？！

「あのだ」

「なんですの？」

ボンベつけているせいでシュコーシュコーというのがなんともつとつとらしい。

「リジールさん歩くの早くネ？」

「道わかるのかしら」

今のところ道は間違っていないようなのでシスターもあまり突っ込まない。

いや、分からないと思うよ？歩くのは早いというか、流されている？

つて、その上に影。

「ッギャー！サメ！リジールさん危ないっ！」

「多分あの距離じゃこの声は聞こえませんが、波の音も大きいですし」

シスター「たら随分余裕ありげに言いますね。」

リジールさんは気が付いていないのか、気づいたのかどうかかわからないけれど。

突然

「ぬうおおおおおおお！！」

と手を振り上げはじめた。

ばっこんっ！！

風船が突如リジールさんが伸ばした腕と同じ方向に延びてさめを殴った。

ど、ど、どという現象っ！？

「風船の部分に当たらなければ破れませんわ」

中で動けばそれに反応して風船が伸びるのね？！きもいぞ！？

と、とりあえずさめを撃退したがリジールさん、大丈夫か！？

よくわからないけどとりあえず陸を目指そうぜ

どつもいんたちは、田中です。(後書き)

時間帯でいうなら今晚は

夜の海歩くのって怖くないか!?

## 同情してあげて

恐怖！水中散歩！

を早歩きで駆け抜けて、やっと洞穴らしき入口にたどり着いた。

「もうひとつ思いついた質問があるのだが」

「あらなんですか？」

水中なのでリジルさん（気力が尽きて体操座りでいじけた）をシスターに任せてすたすたと歩いてきたが、ふと疑問。

「刹寒国の人ってさ超緊急事態の時ここ通って逃げるって言ったな？」

「そうですね」

せつかく俺が入口で止まっているのにシスターはすたすたと俺を無視して洞穴に入っていく。

ちよ、まっつてよ。

下の方でうのようにうごいているわかめに足を取られないように気をつけながら後を追う。

「常にこの風船常備してんのか？」

「まあ、逃げる入口に置かれていますわね……3人分くらい。私が逃亡する時にすべていただいてきましたけどね」

3人分。

俺、シスター、リジル。……わあ、ぴったりだ！。

ああ、そういうことね。

わかめとかの海底がなくなり、洞穴のごわごわしたところを転がるように上がる。

「さてと、水面がやっと見えましたわね」

え？水面？

まったく光とかが見えないのだが。

……じゃっぼんっ！！

「うをつっ！」

水面がどこにあるのか意識する前に、水の力によって水面より上にはじき出された。

おお、陸があるよ。陸だーあははー。

「現実逃避してないで、さっさと陸に上がりましょう」

「して、どうやって出るのですかな？」

先ほどまで体操座りしていたリジールさんがいつの間にか元気に立ち上がっている。

「こうやってですわ」

どうやったのかなんて一切わからないが、普通にジャンプして陸に上がる。

「なるほどー」

「分かったのか!？」

陸に上がると強い男リジール。

「ふうんなあああああああ!！」

と気合い十分に陸に上がり、シスターに蹴られる。

「私たちは、隠密行動中ですよ!？」

「う…ううむ。申し訳ない」

ごめん、リジール。俺も忘れてた。

普通にジャンプすればいいだけのようなのでジャンプして陸に上がる。

意外と操作方法は簡単です。

久しぶりの陸。

久しぶりの外の空気。

……さむ。

「って寒い!」

なんだかんだで風船のなかって風ないし、自分の体温で徐々にあつたかくなってきたんだよな!

「さ、これからが大変なんですから、行きますよ」

もはや引率の先生にしか見えないシスターの後をのろのろとついて行く。

あ、リジールさんが寒さで気がめいつている。  
気持ちにはわからんでもない。

っていうか、分かるぞー。

行きついた先は、壁。

はるか上のほうにジミーに光が見えるか見えないか。

嫌な予感がマックス。

「で？上るんだな？」

先に嫌な予感を聞いてみた。

シスターは頷いてにっこりと俺に手袋をよこしてきた。

ああ、やっぱりね。

ところどころにくぼみが空いていて、そこに手や足を引っ掛けて登るらしい。

ロクククライマーだったかな？あれに近い。

っていうか、あれの命綱なしバージョン。

なにこれ、なんていういじめ？

おれ、最初何しにここ来たんだっけ？

俺の世界。ハーレムに作りに来たような…。

それも若干違うような。。

チート本により肉体強化しているために登れるから良い物の、普通のボーイだとしてもじゃないが登れないだろう。

シスターはなんで登れるの？

リジールさんは体を動かしているとあつたかくなってきたのか再び

絶好調モードですすいすいのぼっていつている。

ああ、ここでヤトが使えたら一発でいけるのに。

ここの巫女の力が魔法じゃなきゃなー。

「あ、そういえばさ」

「登りながら平気で会話できるなんてすごいですわね」

あんたもな。

声には出さないけど。

「なんでここの巫女の力が魔法なんだ？魔法は名光国の十八番だろ？」

「どうやらハンデを公平にするために能力は毎回ランダムみたいですわ」

この世界の仕組みってちゃんとしているんだか適当なんだか、わからんなー。

「刹寒国の本来の能力は結界を張ることらしかったですわ。今はどこの巫女のところに宿っているかは知りませんが」

「どの周期でランダムするんだ？」

「おお、光が見え始めましたぞー」

先走って登っていつているリジールが控えめなトーンで上からいつてきた。

「そうかー」

とおざなりに返事を返しておく。

「歴史書では闘いが始まる度だとか。本当に迷惑ですわ。始祖様が考えなされた素晴らしい秩序を乱すなんて」

あ、また始祖宗教のお説教がはじまりそうだったので壁登りのスピードを上げる。

さかさかと登りきると先にリジールが既にいた。意外と狭い。

小さなたいまつがそこに一本あり、それ以外は暗くてよく見えない。ライトで照らすと細い通路がある。

逃げる時にもなんと不便そうなところだなーとしみじみ思った。

だれだ、考えたやつ。

後からシスターも上ってきた。

「休憩をはさむか？」

「いいえ、このまま行きましょう」

ということであまり細かい道を進む。

人一人分くらいしかとてもじゃないが通れない程度の細さなので、シスターを先頭に。

俺後ろに斜め歩きするリジールが続く。

ちよつとまで、肥満男性でも通れる細道にしておいてやれよ!!

いや、リジールの場合、肩の骨なのだが。

なんかうしろでがりがりたまに言うのはきつと肩を擦っているんだと思う。

可哀想にリジール。同情だけはしといてやろう。

先頭にたつシスターは後ろの巨体など気にもせずたすたと先を急ぐ。

後の人も思いやってあげて。

言わないけど。

同情してあげて（後書き）

リジールさんかわいそう。

彼と刹寒国は相性が悪いのか、シスターとの相性が悪いのか。  
どちもっばいw

潜伏。でどうしようか（前書き）

スランプで停滞してましたーすいません。  
まだ本調子ではないですが、どうぞよろしく

## 潜伏。でどうしようか

いるいる。

俺とシスターは忍者よろしく屋根裏でしたの通路を監視している。ちなみにリジールは大きくてじゃま…もとい、潜伏には向かないので、隠れてもらっている。

「結構いるなあ、あの部屋が作戦会議室とかか？」  
とある一室の前に兵士さんたちが5・6人

多すぎて逆にここに主要人物がいますよーと教えているようなものだ。

「あそこは、司令室ですわ」

……なにがちがうのかさっぱりですが。

まあ、とりあえず中に誰かいるのだろう。

いないまでも、重要機密の書類はあそこにあるはずだ。

「ってことで侵入？」

「んーそうですね、私個人としては、ここで大騒ぎは起こしたくないのですけど」

「お？意外。なんで？片っぱしからぶつつぶすキャラだと思ってたんだけど」

「失礼ですわね。……それもいずればしたいと思ってますけど」  
思っているんかい。

それにしても、密室でさつきからこう、シスターのやわ肌とかがこう腕とかにこう……こう、ね！

こんな状況でも楽しめる俺ってすごい！

「今、騒ぎを起こしたら、私だとすぐに伝わるでしょうね」

「だろうな」

「そうしたら私の本来の獲物が逃げてしまいますわ」

「君は母国でどれほどの被害を出して逃げたんだ？というか、やっぱりえせシスター」

睨まれた。

なのでとりあえず一旦リジールのところに戻ることに。

「でもさー重要機密欲しいし、変装して侵入でいいじゃん」

「刹寒の者は特徴として肌が白いですからね、そんなどすくろい色じゃすくばれますわ」

「いや、俺は黄色白人<sup>ニホンジン</sup>……」

なんだか、心が切なくなる言葉でしたね。

「それでは、問題にならないスピードで敵を倒して素早く頂くものを頂くというのはどうですか？」

リジールにも今までの話をしたら、そういった。

「素早くネー。防犯カメラとか無い？」

「そんなハイテクなもの、桐文国ぐらいにしかありませんわ」

むしろ、あるのか。

この世界観をもう少しきちんとしたほうがいいと思うぞ？  
不思議の国の彼女もきつとびっくりだw

「では、肉体言語ということでもよろしいですか？」

「それでいいのかなー」

うきうきとりリジールが腕を鳴らしている。

うーん。なんだかやる気だが、俺はあんまり乗り気しない。

時間的タイムリミットあるのって苦手なんだよね。

プレッシャーよくない。

「あら、乗り気じゃないですね」

「んーまーねー」

面倒くさいっていったらしばかれるかな。

「まさか、怖気づいたんですの？情けないですわ」

「それこそ、まさか。怖いことには怖いが、ここまで来て怖気づいたりしないさ……多分」

ここでぐでぐでしていても仕方ないということで、多数決でさつとやってさつと戻るに決定。

さきほど潜伏していた天井まで移動してふと気がつく。

「探し終わった後に、他の兵士が気付いてもどうせ騒ぐよね」

……一瞬シスターの動きが止まったが、すぐにこちらに微笑む。

「だから、兵士が気付く前に重要機密も奪って、殺りたいやつもやるんですわ」

「……う、うん」

かなりいい笑顔だったので怖かった。

シスターの合図で襲いかかる。

降りる時にリジールが詰まったらかなり恥ずかしいし困るので、シスター俺、リジールの順で襲いかかることにした。

「行きます」

そう、かすかに呟いて、下におりる。

「！お」

ざっしゅっ！

降りながら、気づいた兵士の体を切り裂くシスター。

どこからその得物を取り出したのか。

まさに神業。

「きさまっ！」

他の人も気がついて襲おうとするのを俺も蹴り飛ばす。

応援を呼ぼうとしていたやつもリジールさんが拳一発で黙らせる。

おお、すげえ。

リジールさんの戦闘ってよく考えたら初めて見るかも？

なんだか、うじうじ考えていたのがあほらしくなるくらい簡単に敵を倒した。

「さ、さっさと済ませましょう」

血がついた武器を振って、またどこかへとしまっ。

どうやら特殊な武器らしい。羨ましい。

部屋のなかをうかがってみたところ、人気はない。

どうやら誰もいないようだ。

「探しといて」

どうせおれ見てもよく分らないし、リジールとシスターに任せて、俺は兵士のほうを見る。

なるべく見つからないように、兵士を壁にもたれらせて見る。うーん。やっぱり、生きてるようには見えないか。

俺とリジールは一応打撲で済ましたのだが……いや、リジールの場合のどっかの血管ぶちきったような感じもするけど。

シスターのは間違えることなく死んでいるだろう。だって血の量半端ない。

こういうのを見ると背筋がぞわつとする。血が見つければ一発の終わりだろう。

足もとにたまりつつある血液にタオルをおとして拭き取る。

「何しているんです？」

シスターが中から出てきた。

「見つかった？」

「ええ、とはいっても、大したものじゃありませんが」  
ぴらぴらと何枚かの書類をフル。

「ん、じゃありジールはそれをもって船に先に戻っていてくれ。それみてルド様と一緒に攻める手だてを考えてささーっと迎えに来てくれ」

「祭りでもするので？」

「ルド様たちが作戦立てるまでは待つよ、な？」

「えー」

ちょっと可愛くいってもだめだから。

その間にこの兵隊たちは見つかる気がする。

「こいつら片付けて、身ぐるみ奪って立つとききます？」

リジールが兵士を見ていう。

「兵士三人くらいどこ行った？ってなるけど、まあいいか」

「あら？私は獲物がどこにいるのか情報を集めたいのですが？」

「あーもう、ややこしいなー」

とりあえず、リジールを先に戻らせることは確定。

「わかったわかった、先にドンパチするから、ルド様迎えに来て。以上」

「そう伝えます」

リジールは神妙にうなづく、その紙を懐につっこんできた道に戻っていった。

あのほそ道でまた、ああ、狭い。ってなるんだろうか。

彼を一人である海の道を歩かせるのはなんだか不安だから、海までいけたらヤトに迎えに行かせるようにしておこう。

「んじゃ、探そうか？」

「ええ」

とりあえず、俺たちももう一度天井にのぼって忍者よろしくとことこと人物探し。

「一番の狙いは、巫女ですわ」

……ってそれ、妹じゃないのかい？

と思ったけど、口には出さなかった。

いろいろ怖いからね。

潜伏。でどうしようか（後書き）

うーん、文をひねり出すことにここまで時間がかかるとは思わなかった。

過去最高かもしれない。

スランプって、こえええ（@|@。

もう一つの進行(前書き)

祝・60話w

終わりが見えないまだまだ続く。

## もう一つの進行

彼方たちが潜入を成功した日よりも少し未来の時間。

「……」

「……」

遥と功一は再び顔を合わせていた。

といっても、ただ熱が下がっただけの遥が功一を訪れただけではあるが。

「……で？」

「でって？」

お互いが向き合うそこに、子供たちの姿はない。

遥が人払いしたのもあるし、さすがにいい加減もういいだろう、と昨日から子供たちを見張りとしてつけるのをやめさせたのもある。

「これを除けて、俺にどうしてほしいわけ？」

深山功一は、いままで腕に重く冷たくつけられていた手錠をじゃらつと持ち上げて見せる。

そう、遥は突然来て、田中に内緒で手錠を離す鍵を持って来たのだ。そして、そのカギをいま目の前でぶらぶらさせている。

「別に。除けてほしいかなって」

明らかにそれだけじゃないだろうに、遥はそう呟いて口笛を吹く。やけにへたくそで、ふうふうと息を吐いているようにしか聞こえない。

「……なら、除けたとしたら俺の使仕も解放されて、俺が自由になるってわかってるのか？」

「自由になったら、どうするの？」

質問に質問を返す。

「明かさない。」

彼女の顔は、何んとも読めず、笑っているのに、どこか無表情だ。

「……どうするって、そりゃ逃げるだろ」

もちろん、逃げるといふ選択肢以外にも、目の前に居る鳴神ナルカを殺して名光国をリタイアさせるといふ手もあるのだが、功一にはその考えすら浮かばない。

「ふうん、そっか」

そう呟くと、遥はうつむいて、そのまま手錠の鍵を外した。

「……っ!？」

「ほら、除けたよ」

淡々と遥がそういうと、足元の陣が淡く光り、影から功一の使仕がぐわっと現れた。

狼。

ぱつとみそう見える功一の使仕は再び主人と触れ合えることに喜び、遥を威嚇する。

「いい……影に戻れ」

そういうと、しびしびながらも影へと戻る。

「ああ、よかった。殺されちゃうのかと思った」

遥の肩でもなにかがいたような気がしたが、今はもういない。

安堵のため息をつく、立って出て行くこうとする。

「さてよ」

「……」

まだ絡みついていた手錠を放り投げ、遥に声をかける。

「これ、彼方のかけたやつだろ? なら、お前がしたことばれるんじゃない」

「そう、彼方さんに君を逃がしたことが伝わるから、早く逃げたほうがいいんじゃないかな?」

なんだか、あやふやのやりとりばかりで、なかなかちゃんとした会話が續かない。

一体遥が何を考えているのか計りかねる。

そう思いはするが、どう尋ねたとしてもどうせあいまいに流すのが関の山だろう。

彼方とはとうに和解している。

いまだ、少しの意志の相違があつたとしても、あの時ほどの憎しみはもう抱いていない。

人間はそう、許し合い協力していくものだと思っているから。

だが、彼方はまだ功一を現樹国に戻す気はないといった。それなのに、彼女独断でこんなことに出ても平気なのかを知りたかつたのだ。

「……それじゃあ、遠慮なく逃がさせてもらうが」

とはいっても、全くここから現樹にもどる手立てを思いついてはいないのだが。

「その前に何故俺を逃がすのか聞いてもいいか？」

無駄だと思いつつも最後にもう一度訪ねる。

「……君のためじゃないよ、彼方くんのためだよ」

ちよつとだけ、ちよつとだけ振り返って彼女はほんのりと笑った。

「それってどういう」

「現樹と貿易をしている小売商の船が2隻くらいあるから、そのどちらかにもぐりこめれば帰れるんじゃないかな」

功一の言葉を伏せるように、彼女は早口でさういふと、今度こそ出て行った。

残された功一は、すこし首をひねりながらもとりあえずこの城から早く脱出することを選んだ。

少し時間を戻して一方田中たち。

「いやあ、まいったねえシスター」

「そうね、まいったわね」

当たり前というか、なんというか、侵入者がいるということがばれたらしい。

予想外の早さだったが……多分、リジールは無事に脱出できたと思う。

天井というか、すっかり慣れてきた通気口の上で二人してうーんと悩む。

「きつと死体がみつかったんだな。シスターなのに無益な殺生なんてするから」

「なーむーと適当に拝む。」

「あら？多信教なんて始祖神様の敵、排除しても構いませんよ」

「おおう、でた。始祖神様。」

二人でひそひそと喋っている間にも足元のほうであっちへこっちへと忙しく兵隊さんたちがうろちよろしている。

「んで？どうすんの？」

「そうですね。私の仕業とは気がついてはいないようですし……セーフですね」

「質問の答えになっていないし、どこがどうセーフなのか分らないんですけどー」

「おりたくても降りられない。」

「しかもターゲットはどこに居るのかわからない。」

「通気口は全部一本につながってるわけじゃない。」

「参ったNE。」

「で、どこにいるわけ。その憐れなターゲット達は」

「なんだか、面倒になってきて、投げやりに言っとシスターは少し考えてから指を三つだした。」

「心当たりがいくつか」

「三か所か」

「こついうのってゲーム的に言ったら最後のところにいるんだよな。」

「遠い？」

「どうでしょうね。あなたと私じゃ体力が違いますからね」

「言うねー」

「内心面倒くさいと思ったのがばれたのか、シスターが挑発的な顔で微笑む。」

「俺はその指を全部握って口角をあげて笑った。」

「んじゃ、まずはどこから行く？」

「正直、行くのはいいんだよ、行くのは。」

ただね、あんまりおくまでいくと脱出面倒でしょ。

面倒、簡単。

この二つがうまく組み合わさると、何でも面白くなるんだけどね。シスターが満足そうに足を動かしたのに合わせて、俺も座りこませた腰を浮かす。

さてさて、このゲームはまだ続くのかな。

## もう一つの進行（後書き）

そろそろアンケートの締め切りが近いです。

まだの人はぜひやってみてくださいね。

やってくれた人ありがとうございます！（＾o＾）

## アンケート結果!! (前書き)

アンケートご協力ありがとうございました。

## アンケート結果!!

アンケートにお答えくださり、ありがとうございます。  
その結果をまとめたいと思います。

思ったよりもたくさんの方が来てくれました。

質問事項はこちらです。

- 1 好きなキャラ
- 2 友達にしたいのは
- 3 苦手、嫌いなキャラ
- 4 くっついてほしいカップリング
- 5 この人を出してほしい

でした。

「ってことで結果はっぴよおおお!!!」

いちばん好きなキャラの一位。堂々の主役！田中彼方くんです!!!

「うおおおおおおおおおおお！きたああああ!!!」

「せっかくのクリスマスなのになので終わるの？」

「遙シヤラップ！まあ、とりあえず理由を聞こうじゃないか」

理由（一部のみ）

・軽く卑怯なところがいい

「卑怯なところがほめられているのは、人間としてどうかと……」

・おもしろいからです

「うん、なんか切なくなるけどありがとございます……」

ちなみに2位が 遥 テトラ 神たま が同点でした。

ちなみにテトラと神たまの理由が『幼女』『幼女萌え!』でした。

「ロリと同列」

「彼方くんうるさいよ!!」

友達にしたいのは？

……これも一位は主役の意地？田中彼方！

ちなみに作者だったら絶対友達にしたくないです

「友達以上のほうがいいなあ…あ！もちろん異性限定で！」

理由

：一緒に居て飽きないから

「まあ、当然だな！飽きる前になんかハプニング起こしてやんよ！」

「人間としてよくないと思うな！」

2位 更木遥

「おお、ミス2位だな！」

「どついう意味!？」

『気を使わず日々楽しく過ごせそう』だって

「本当に?!うれしい!ありがとうー！」

「いやいや、でもこいつたまに家まで押し掛けてくる」

「彼方くん!!!」

苦手、嫌いなキャラ

「これは一位とりたくないな」

一位は深山功一!

「うえ!?お、俺?…俺かあ」

「ハハハ、俺とは天と地ほどの差があるな」

「うん、とりあえず独りでひっそりと死んでこい」

理由

・典型的な主人公属性だから  
狙いました by 作者

・まっすぐで、つかれそう

「なんだか、性格全否定されたような気がする」

「気のせい気のせい」

ちなみに2位はアリアで3位がリジルでした。

現樹勢不人気ですね でもリジルさんは名光ですが、容姿的に怖いとww

アリアさん妹さんは人気2位ですが、これについて何かひとつ

「別に、ノーコメントですけど？」

そうですか！。

続いて、なってほしいカップリング！

「遙と彼方くんよね！！」

「ちかいちかいちか！！」

一位 田中彼方と神たま

「えええええ！！ロリコン！！」

「いや、神たまだから一応年上？」

「別にまだ結婚してないだろ！？」

2位田中とテトラ 田中とあゆぴょん

「初めて名前が出たが、私はここで名前を呼ばれたくはなかった」

「ツンツンばつかなーあゆぴょんは！」

ちなみに田中とハーレムとか

っていうか早くデレろみたいな意見もありました 是非参考にし

ますw

「ハーレム上等！ぜひしてくれ！」

「しなくてもいい！」

「ていうか、私はいつも出れてるよ！彼方くん！私もツンしたほうがいい？」

「真顔で聞くなー！」

最後にこの人を出してほしい。

「俺はつねに出てるからないな」

一位神たま

「んお！？なんなのに？」

「神たまだつてさーまあ、人気2位だしめったに出ないしね」

「おお、そうなのにく〜どんどん、活躍するにー！」

作者次第ですがね。

ちなみに2位は使仕たち

3位テトラ

でした。

「この小説は、ロリに支えられているといっても過言ではあるまい」  
「まあ、人数的に考えてもロリばっかだしね」

最後に

貴女が今後最強になろうに求めるものは？

で書いてくださったことをなるべく実行できるようにがんばります。  
最強になろうなのに最強になってないという意見が多いようなので  
善処します

ちなみに挿絵希望の方もいらっしやっただので、挑戦してみようかと思っっています

が残念クオリティなので嫌な方は挿絵非表示をお願いします。

では、本当にアンケートにお答えくださりありがとうございます。でした。

しばらくは放置しておきますので、暇な人は答えてみてください。見るだけみて励みにします。

## アンケート結果！！（後書き）

一位になったキャラの単独ストーリーでも書きたいと思っています。  
内心、田中かよ、なんて思ってます！！

番外編（前書き）

アンケートお礼に書きはじめたはずの番外編

## 番外編

少し昔の話をしよう

これは、田中彼方が少年の時の話である。

田中彼方14歳

思春期真っ盛りで運動にも女の子にも情熱を注ぐ、ごくごく普通の少年でした。

「なんだあれ？」

部活でサッカー部だった田中彼方（しかし引退する前に退部します）は帰宅の途中で犬が変なものを加えているのを発見した。

「んー？」

犬はのらというにはなんとなく綺麗なような気がするが……犬種なんてよく知らないが見たことのない犬のようにも見える。

まあ、田中が気になっっているのはそんな所じゃない。

「……あの本なんとなくビニ本の様な気がする」

加えられているせいで、よく見えないが若干人間の肌っぽいのが見えたと気がする。

というか、あの薄さは思春期の男なら手に入れたいあれっぽい気がする。

「うーうーん」

思わず犬をガン見する。

首輪はされてないようだが、逃げ出したのかもしれない。

でも、まあ、あの本がまさかあの犬が買ったものじゃないだろう。

「もし……」

あれが、もし……そうならば。

「そうなら……欲しい」

幸い、あまり汚れてなさそうだし……よだれは、表紙だけだろうし。  
(田中の的に)都合のいいことに、今は誰もいない。

男の子として女体の神秘に辿りたい、だけど、本屋で買うにはいささか勇気がわかない。

それが、思春期というものなのだ。

(もちろん、ここまで異常な反応を示しているのはこいつだけです  
ので、一般の人として認識しないでください。)

「犬から盗つても泥棒にはならないよな？」

盗る気満々です。

犬も何故か田中をみていて逃げる様子を見せません。

どことなく呆れているような気がします。

だれかどっちかを突っ込んであげてください。

じりじりと近づくと、意外と犬は素直に力パッと口を開けてだつと走っていきました。

「おお、なんだ素直じゃないか犬！さすが哺乳類賢いな！」

そこで哺乳類が出てきた意味がさっぱりですが、14歳の田中青年はそれどころじゃありません。

試合でボールを追いかけるぐらいのスピードで走って本をスライディングキヤッチします。

普通に拾ったところでだれも横から取ったりしません。

ちなみに彼はキーパーじゃありません。

「よっしゃあああ！ゲットおおお！！！」

歓喜の声で本を掲げて、気づく。

「ってなんだよ、これ二本じゃないじゃん」

捨てようかと思って投げようと思ったら、さっきの犬を発見。  
なんだか、じーっとこっちを見ているような気がする。

「……返そうか？」

そつとおこうとしたら、犬はダツシユで去っていった。

「……なんなんだ、あの犬」

とりあえず、期待のものじゃなかったし、これは捨てよう。

そう思つて投げるポーズをとる。

「なんだ、彼方まだ帰つてなかつたのか？」

「つうおつー！」

思わずびっくりして本を鞆に隠す。

後ろを向くと、深山功一がいる。

「なにおどろいてんだよ？……先に帰るつて言つてなかつたっけ？」

「あーああ、言つた？ていうか、ほ、ほら先に帰っているじゃないか？」

「？なにどもつてんだよ」

恥ずかしいですね。

アレな本だとおもつて犬から本を奪つていたなんて言うなんて。

「あーあーあー！じゃ！俺もう帰らないと尋美が待つてるからな！」

田中は大声を出して逃げるように走つていった。

「……なんだあいつ、いつつも変だけどいつも以上に変だな」

残された深山功一は首を傾げるしかない。

ダツシユで家に戻つた田中はカバンの中につ込んだ本を見て

「どうしたもんかねー」

と唸つた。

とりあえず内容を見てみたものの……うーん。

なんだかよくわからん言葉の羅列が並んでいて何が何やら。

だいたい表紙からみて何語なのか分ないし。

イラネ。ととりあえず投げる。

「彼方ちゃん！今日は早く帰ってきてねっていったのにいいいい！！」

投げたと同時に一気に扉（襖）が開かれ尋美が入ってくる。

「……なにこれ」

そしてその投げた本は尋美の足元に落ちる。

「……また工口本買ったのね！この間せっかく全部捨てたのに！」

「やっぱりお前のせいか！」

その本を再び投げつけられる。

「ぐっ」

顔面に直撃。

「もういいよ！せっかくおいしい料理作って待ってたのに！」

「ちよつとまで！お前体の調子悪いから病院に付き添ってもらいたいから早く帰ってこいつつてたじゃん！？」

「どうせ私なんて工口本の次なんでしょー！！！」

襖を力いっぱい閉じられる。

「おじさんに言いつけてやるー！！！」

そして向こう側での捨てゼリフ。

……ハートフルないとこだぜ。

なんとなく手持ちぶたさで本をもう一度開く。

「……お？」

たった一行だけ日本語で書かれている。

「なんだ？……URL？ググれって？……異世界へ行く方法？！」

そのURLに入ると本当にあやしげなサイトがあった。

「そのあと、それを4年かけて深山功一の部屋の床にこっそりこっそりかいていったということだ」

「へー不思議」

あんまり興味なさそうに、遙が相槌をうった。

「というか、落ちが弱い気がしますね」

シスターがちよつと面白くなさそうに呟いた。

「じつと聞いていて損した気分です」

そこ微笑みながら言うところじゃないぞ。

「おまえらが何か聞きたいっていうから昔話にしてやったというのに！」

「面白かったよー」

テトラが嬉しそうにこしにくつついてくるから撫でてあげる。

「せっかく人気投票一位記念に束の間のハーレムでも作ろうと思ったのに作者が「ハーレムでどこまでエロだしたらいいかわかんねえしまとめ切る自信ないからパス」とかいうから」

「やだよ、ハーレムなんて。二人つきりがいい」

「遙さんってこの人のどこがいいんですか？」

「ちよっシスター失礼それ」

だから、その白々しい笑顔が逆に怖い。

「あらあ？私だったらいつでもおっけえですけど？彼方ん」

右腕にポインな感触がっ！！

「あ！ちよっココア様っ！離れてくださいー！」

「お兄ちゃん」

「あらあら、よかったですね、彼方さん。ハーレムで。巨乳お姉さまに同世代年下ジャンルがほっふですね」

「ちよっちが。これなんか違う！」

というところで、今年も最強になろうっよろしくお願いします

番外編（後書き）

いい加減本編もすすみますよー！！

そうだとおもったよ

「そっちはどうだ？」

刹寒国の城つきになつて2年目の兵士は、同僚に声をかけた。

この間結婚したてで絶賛幸せ満喫中の彼は、仕事もまじめで仕事仲間からもなかなか信頼を得ていた。

「……」

今日もいつもと同じように真面目に勤務していた。

戦争中だから、いつもよりもより真剣に取り組んでいた。

本来だつたら、彼の警備区域ではないのだが、自分の警備地区は交代になつたので、同僚のところの不備がないか聞きに行ったのだが、その同僚から返事がない。

「どうした？」

そう、扉を開けたとたんに、影から何者かが現れ、背中をけられ地面にたたきつけられる。

「なっ！」

何者だ、という前に彼の意識は途絶えた。

最後に、血の匂いが脳を満たしたことだけははっきりしている。

「ごめんねー俺達正義の味方じゃないからさー」

南無！と田中は自分の足元で伸びている男に手を合わせた。

脳天けつたのは、やりすぎたかな？

鼻血のりょうが半端ないけど、まあ、殺されないだけでしたと思つてよね。

同僚くんはシスターがやつちやつたし。

「はずれでしたわね」

武器に付着した血を吹きとりながら、面倒くさそうにシスターは舌打ちをした。

「だな。ていうか、血の匂いに慣れてきたんだけど、どうしてくれるわけ？」

足元の兵士を端っこによせて、意識を取り戻してもすぐに動けないように掃除用具につっこむ。……これ、ぶっちゃけちよっとした嫌がらせて意味なんてないよ。

感覚麻痺したバーサーカーなんかになる気はない。

「あら、いいじゃないですか。戦争に血はつきもの。ビビって死ぬよりは慣れている方が便利ですわ」

その笑顔で、男だろうが女だろうが兄弟だろうが容赦なく切っていくんだからすごいよ。このひと。すごいこわい。

「はあ。で、つきはどこ？」

「そうですねー。せつかくですから、二手に分かれます？」

「ええーそういうのって、絶対おれの方があたり引くんだからやだよ」

そういうもんなんだから。

「ですけどね。一つ一つやっていったらさすがに時間がかかりすぎますし。逃げられたら元も子ありませんし」

どがんっ

とどこかで爆発音と振動が微弱ながらも届いた。

「仕方ないなー。他の国も来てるし、そうするかー。じゃあ、おれ近場ね」

「どちらでも」

情報管理室だか何だかの部屋から拝借してきたこの城の地図を広げる。

シスターがしるしをつけたところを覚えて、向う。

他の所に比べるとなんと狭い部屋だ。

もしかしたら個人の部屋か客室なのかもしれない。

それはあっているのか、警備が強くなっている。

なんか、あたりっばくてすごいやだなー。

それにしても、廊下の各場所に兵士がいて、とてもじゃないが、入

れそうにない。

まいったなー。

おれ、そんなに強くないんだって。

チートで時間止めるとかないわけ？

久しぶりにチーと本をめくってみるものの、読めるページと読めないページが交互に。

んー。読めるページは今は使えなさそうなもんばかり。

こんなことならもつと真面目に魔法の勉強してればよかった。

使仕たち手に入れてからおれ直接動かなくていいか、とか思って魔法練習サボりまくったからなー。

「……あ」

うまくいくか知らんが、思いついた

「よう、オツカレ」

「ん？ジジュじゃないか、どうした？」

俺はにつこりとほほ笑んだ。

「実はだな、秘密任務を受けたわまってな、この部屋に入れてもらえないか？」

老年のおじさんの肩をがっちりつかんで小声で言つと、うなづいてくれた。

「そうか、中に巫女がいらっしやる。大丈夫だと思うが、粗相のないようにな」

「わかつてるよ」

まさかの大当たりか。

おじさんにお礼を言つて部屋に入る。

「失礼します」

とそこまできつかり演技をして。

掃除用具入れに突っ込んだこの男、どうやらよっぽど仲間に信頼されているんだな。

俺はスライムくんで擬態した自分の姿を見て笑った。

「だれ？」

シスターとよく似ている声がする。

「將軍？王？神様？」

部屋の奥の壁に、なにか紋の描かれた垂れ幕が堂々と掲げられている。

それはこの国の国獣をかたどったものようだ。

そのしたに祭壇があり、その前に彼女はいた。

振り返った、彼女は首をかしげる。

「なんです？なにか緊急のようでもなければこの部屋にははいる」とは禁じられているはずです」

その顔も、しぐさも口調もシスターによく似ている。

なるほど、シスターとしまいなのだということは、否定する必要もないだろう。

「失礼します、巫女様」

俺は顔のスライムくんをはいで、にっこりと笑った。

「！」

「あなたのおねえさまの協力者ですよ」

叫ぶ前にその口をふさぐ。

「んんう、んん！」

おれのうでの中で身をよじり逃げようとするが、そこは男と女の差、逃がしはしない。

「まあまあ、落ち着いて、殺しはしないから」

俺はね？

落ち着いて、手をぼんぼんとたたくので、手を緩めてやる。

「……どうせ、あの人の所に行くのなら、同じようなものでしょう」「おお、姉の性格をよくご存じだね」

それにしても、シスターをちっちゃくしたみたいなの愛らしさだ。

彼女は少し考えて、おれにくっついてきた。

「お願い、あの人の所につれて行って」

「それはできない……ってはい？」

あれ？つれていけないで、じゃなくて。つれてって？

「あの人の所に、つれてって」

妹はもう一度同じことを言った。

「いや、まあー頼まれなくても連れて行くつもりですけどー……」

こう、悪役っぽく

「つれてって」って言われて「それはできない、おれは悪者だからな」とか言ってみたかったんだけど、この姉妹って本当におれの思い通りに動いてくれないよね。

「あのさ」

離れてもらって、ポケットから地図を取り出す。

「ここってどうやっていけばいいの？」

おれ、地図読むの苦手なんだよね。

そつだとおもつたよ（後書き）

寒くてキーボードうつ指が死にそつでう

まじやばい。

春早く来い

ちなみにリア充もはやくこい

## 姉妹

もくもくと、堂々と敵の本拠地の廊下を歩く俺。  
と、シスターの標的いもつと  
どうなっているのか、おれもわからん。

最近物事が思い通りにいなくなつて、田中さんいやらなつちやうぜ。  
「で？」

前をすたすたと迷いなく歩く妹に話しかける。

「で？……とは？」

これから、殺されに行くようなものなのに、平然と歩いている。  
兵士が気がついておれに攻撃しようとしても手をあげて制する。

「殺されたいわけ？」

「私がマゾヒストのようにみえますか？」

「……」

それについては、ノーコメント。

見た目で人を判断してはいけない、と経験上で学んだ。

気がついたら右に曲がっていたので慌てて追いかけて曲がる。

「お前の姉ちゃん、おつかねーぞー」

小さい子相手のようにならかうように脅して見る。

うん、おつかねーぞー。本気で。

「あなたよりは存じますけど」

この一族かわいげないな！。

きつぱりと言い切られて取りつく島もない。という感じ。

嫌いじゃないけどね！！

「ねーちゃんは、自分が来るとわかったら逃げるだろつって言うって  
たけど？」

だからこそ、ここまでこうしてまどろっこしい方法で侵入したりした  
たわけー！。

「……すでに察した親族は逃亡しているかもしれませんが。戦争中なので、仕方なく残っている人もいるでしょうが」

「君は？あえて行く理由」

「やっとなり返ってほほ笑む。」

「秘密です」

笑うと、えせシスターそっくり。

「秘密。ふーん。そっか」

なんだか悪寒がするから目をそらす。

シスターの話からしたら、肉弾戦系じゃないらしいけど。

ちよつとだけ、距離を離しておく。

「ここです」

妹は、開きっぱなしの扉を指さした。

開きっぱなしというよりは、破壊された扉ですでにいやな予感。

なかは、バイオハザードもびっくりな血みどろなのかなー。

いきたくねえ。

それでも、妹をつついてはいるように指示する。

「シスター？」

一緒に、おれも入る。

思わず目を細める。

「……わお。すごいね。シスター」

みんな血みどろ。白かったであろう服も真っ赤だ。

「……う……あ」

でも死んでいるわけではないらしい。

「むごいことを」

妹が眉をひそめ、つぶやく。

もう今更のつつこみだけど、妹の方がシスターらしいよね。巫女だ  
けど。

部屋の中にいた13人が、みんな等しく血だらけで。

赤い水たまりに沈んでいる。

「あら、あらまあ……彼方さん」

奥から、ずるずると男を引っ張ってきながら、シスターが出てきた。そのまま、倒れている男たちの上へと突き飛ばす。

「この人たち、お知り合い？」

あえて、軽く聞いてみる。

血の匂いで頭の芯がじんとする。

「ええ、まあ。……しいていえば 親戚、ですね」

逃げ切れなかったのか、ここで隠れていたのか。

「一撃必殺が得意なのに、一応皆さん生きているのは、お情け？それともあえての拷問？」

ここまで来たら、一息に殺した方が楽な気がする。

助ける気もないが、このままだと無情すぎる気がする。

「神と呼ばれる患者の居場所を聞いたのですが、誰も教えてくれなかったのですよ……やさしく、聞いたのに」

その、やさしくの意味を詳しく教えてください。

いや、やっぱりグロそうだからいいです。

「あなたのような、侵略者に神の場所をそうそう教えたりしません」

俺の後ろから、妹が凜とした表情で言い放った。

うん、この構図からすると俺ら、かなり悪役。

「神？それは始祖神さまのことを指す以外あり得ません」

「まだそのようなことを言っているのですか？始祖神さまが神様にその仕事の位を授けたというのに」

「だからと言って、始祖神さまをないがしろにした罪はぬぐえません」

「おーい。話が宗教系にいつてるよー」

おれ、無宗教の多神教だから。

「それもそうですわね。……彼方さん、ありがとついでいます」

「え、いやあ。……なにが？」

「それを連れてきてもらって」

ああ、納得。

いきなりお礼言われても分かんなかったわ。

「では、彼方さん、ここは私に任せてもう一度先ほどの部屋に戻ってもらえますか？」

「はえ？なんで？」

瞬間、後ろから殺気を感じて本能的によける。

目の前に閃く切っ先。

ナイフを持った、巫女。

「あつ…… あつぶね！ぶね！ちよ、おれなんかした!？」

あ、侵略したね。

心臓どきどきめっちゃ言ってるんだけど。

「元姉妹的な思考から言えば、あの部屋に神がいて、自分を身代りにそのすきに逃げてもらっている……ですね」

「わあ、的を射たお言葉。おれ、気がつかなかったわ」

シスターもいつもの武器を取り出す。

「じゃあ、おれ、かわいい女の子が死ぬと子は見たくないからその神ってとこいつてくるわ」

しゃきーんと手をあげて部屋の外を目指すと、影から無数の手が出てきておれのからだをつかみ上げ、さかさまにぶら下げられて。

「……あれ？なにこれ」

軽くトラウマになりそうな画だ。

無数の手って怖いよね。

ていうか、ぶら下げる必要なくね？頭に血が上るんですけど。

「行かせません」

この世界の、異世界人かみに対する忠誠心ってやつがよくわからない。

あとから来たような人間にそこまでできるのだろうか。

あ、忠誠してないところもあったな。

やっぱり人間性??

妹がまた何か唱えてシスターの上空に無数の岩が現れ、降ってくる。

「……こんなもの」

シスターは武器を振り回し、自分の上にあるものだけ破壊し、退け

る。

残りの岩は、哀れ親族たちのとどめになったかも……。  
やっぱこの姉妹似てるわ。

「彼方さん？早く行つてくださる？」

「え？ああ、はい。すいません」

戦闘モードのシスターはいつもと大差ない顔してるけど雰囲気がいぶ怖いんです。

「ヤト、あの部屋に戻せ」

《御意》

「使仕?!させませんっ!」

妹が振り向こうとした瞬間姉のひざ蹴りが腹部に命中して吹っ飛ばす。

わあ、容赦ねえ。

「じゃあ、またあとで、シスター」

俺は最後に微笑んでいるシスターを見て目を細めた。  
怖すぎるって。あんた。

姉妹（後書き）

シスターこええ

慣れつつある田中もこえええ

よいではないか

ヤトのワープには、ワープしたという実感がわかないことが難点だ。いや、別に難点っていうほどでもないけど。

前置きはさておき。

とりあえずワープ終了。

「ん？んー」

目の前は妹を見つけた部屋　確か、祝詞部屋？とか書いてたようなそつでもないような。

部屋にいちいち名前書くのも面倒だね。

「……さて」

よく考えたら、ここに来たつつつてももう既に逃げてる可能性も大きいよな。

シスターのところ行くまでにやたら遠回りしてたような気もしなくもない。

うーむ。

とりあえず、奥の方へ進んで見る。

なんてこともない。

祭壇があつて、あとは壁だけ。

……隠れるところなんてどこに。

座布団をけつとばしてみる。

隠し通路なんてないしな！。

祭壇の後ろ？

スライムクンを扇化して風圧でぶっ飛ばす。

ああ、これ気持ちいい。

祭壇はすごい音をたてて壊れた。

今ふと思っただけだけど、生き神信仰なんだから祭壇とかいらなくね？

ま、いいか。と壁の方を見る。

……何もなし。ただの壁のようだ。

床もない、壁もない。  
じゃあここにいない。

「どこに隠れてたとかどうでもいいや……シスターのどこ帰ろうかな」

踵を返して部屋をでる。

「とみせかけて」

数分してまた戻ってくる。

が、変化ない。

「本当にいないのか……」

とか呟いて座布団の所に座って見る。

「……とか言ってもつまんねえし」

スライム扇をバサツと開いて殿様のように仰ぐ。

「……出て来いよ。姿は隠せてもにおいは消せてないぞ。おれの使

仕は鼻がきくんだ」

「……つちえ」

窓辺の方で声が聞こえたと思ったら、姿が出てくる。

「においも気配も消せる使仕じゃなかったのかよ、てめえー」

カメレオンがずいぶん丸くなったやつのような使仕をなぐる。

「お前、どこの国の神？」

染めたのがとれたのか、何なのか。

てっぺんから黒髪が出始めている金髪の少女。

いかにも不良の女子高生ってかんじだ。

「俺か？俺は神候補じゃない。ちなみに使仕が鼻がきくって言うの

も半分嘘。匂いもなかったって」

「はあ？じゃあ何しに来たんだよ。てか、何で使仕持ってんだよ」

「はっはっは」

スライムクンを仰ぐ。

「使仕は、べつに神候補じゃなくても捕まえられるんだお」

「なんだそれ、うぜー」

女子高生がそんなこと言っちゃだめだぞ。

秋津沙耶みたいなタイプも女子高生こうタイプも女子高生。女子高生よりも女子中学生の方がすきだなあー。

「ああ、何しに来たかって話だったなー」

俺は、立って金ぱつ女子高生のとこに一気に距離を詰めて喉に扇を突きつけた。

「！」

「決まってるだろ？侵略だよ。もっと明確に示すなら巫女一族消却とお前の殺害」

一気に顔が青くなって震え始める。

「わ……わたし……」

「明確に示した行動については実行するのは俺じゃないけどねー」と、離してやる。

力尽きたようにその場に倒れる。

覚悟のないものは突然のことに弱い。

ずっと城で姿を隠して。

身代りに巫女がおとりになったというのに兵士を呼ばずここですつと隠れて。

將軍クラスはいま外で戦っているだろうから、弱い兵士を周りの護衛に使うより一人隠れている方が安全とでも思っていたのだろう。

「なあ。まだ生きていたよな」

そういえば、まだ名前も聞いていない少女を見下ろす。

「なら降伏しろ。名光に下れ」

「……」

彼女は一瞬こちらを見た。

今にも泣きそうな顔で。

その顔が急にゆがみポケットからナイフを取り出して切りかかってくる。

それをよけると、姿をまた消す。

「……その答えは、死にたいってことでいいのか？」

正直、このタイミングで逆らうのは意外。

ここで攻撃してくるなら最初の時点ですてこいよ。  
後方からナイフが飛んでくる。

投ナイフか。

そんなのもってたのね。

よけながら姿の見えないあいつを探す。

「兵士！兵士早く来て！来い！早く！」

「あ、てめ呼びやがったな」

声に反応して雑魚たちが5・6人入ってくる。

「仕方ない　イノリ」

《了解》

イノリが影から出てくる。

……なぜかビーストモードじゃなくてヒューマンモードで。

「ちよ、イノリさん？そんなんじゃないやみんなビビってこないよ」

「だって、こんな狭い部屋で本気でしたらあなたまでつぶしちゃう

わよ」

「そつすね」

よく考えたら、そうですね。

なんとなくながつくししているとイノリがじんわり近づいてきて顎をな  
でる。

「大丈夫、この姿でもーっても強いから」

「……そうだな」

「ひるむな！数はこちらが上だ！」

兵士が誰かそう言っつて襲ってきた。

やれやれ。おれは戦闘は得意じゃない。

徹底的な破壊は得意だけど。

「んじゃ、応戦よろしく。おれは神候補捕まえるから」

「任せて」

もともと長い爪を鋭く長くのばし、狐火をぶあつと飛ばす。

おーかっこいいい。

神候補捕まえるといった宣言をしたからか、武器が飛んでくる。

「おいおい」

ナイフ尽きるまでよけまくってもいいけど、そこまで待つのも面倒なので彼女に向って走る。

あいつが曲がったので、おれも曲がる。

あいつが窓の外へ逃げたので追いかけて窓の外へ出る。

「……な、なんで見えてるのよお！」

また、泣きそうな声で見えざる姿のまま叫ぶ。

「いや、おまえは見えてない」

「じゃあなんでそんなに的確についてくるんだよお！！」

「お前にこの扇の一部を付着させたから、本体と分身を導かせたらお前にたどり着くという寸法さ！」

「ぎゃああ！きもい！」

きもいつてなにが？追いかけられることが？付着物が？

「あははは。わめけ、逃げ回れ！」

とりあえず雰囲気ぴったりなセリフを叫んでみる。

城の庭を走り回る。

あああ。寒い。

また雪が降っている。

と、そろそろ疲れてきたのか姿を現す。

「ああああ！だれか、助けなさいよお！」

その声を聞いて、いろんな兵士がやってきた。

「ヤト！相手してやれ」

《御意》

あ、しまった。こんなことならヤトとイノリ変えときゃよかった。

ヤト出している間にも神候補がダッシュで逃げている。

陸上部か？！体力すげえな。

やっと追いついて腕をつかむと一層切り裂くような悲鳴を上げる。

「きゃあああああああ！助けて」

どうして、こういうときだけきゃあって可愛く出るのか。

「……あ。ぐへへ。おとなしくしねえか」

「ぎゃあああ！きゃあああ！助けて！いや！いやああ」

……なんだよ。少しネタしただけジャンよ。

「とりあえず、痛い目見たくなければささっと降伏  
どがああん！！」

！？」

とやけにでかい粉塵まきちらしながらシスター妹。

満身創痍で登場。

じゃっかん血みどろです。

「はあ……はあ……！ご無事ですか！」

……シスターから逃げてくるなんて……すげえ！

よいではないか(後書き)

バレンタインチョコだれか義理でもいいのください。

## 振りかぶって からぶった

シスター妹。

満身創痍なのにまだまだ戦う。

「魔法つて厄介だよな！」

俺とシスターはなかなか勝負をつけられない。

うだうだしているうちに兵士がわらわらと寄ってきて余計に手が出せない。

ヤトとイノリもなかなか決着付けられないのか戻ってこない。

「まったくですわ」

イライラを隠そうとせずにシスターはまっすぐ妹を見据えたままその返事をした。

「シスターも魔法つかえばいんじやね？」

「あら？私が聖書を読んでいる間ひとりでもちますかしら？」

「自分下手なのを棚に上げてよく言うよね」

「え？先にやられたいのですか？」

……ごめんなさい。

刹寒国の神と巫女はなかなかあきらめない。

そりゃあ命かかってるんだからそうなるわな。

《主！》

ヤトがやっと戻ってきたかと思うと、声色からしていい状況じゃなさそうだ。

「どうした？」

《究温国が攻めてきました！》

「え？まーじでー」

いつの間に。

というか、あの少女は動く意思があったのか。

まいったなー。

「ルド様たちを急いで名光に送って。あと一応現樹にも援助頼んで」

《御意》

すっからかんといいわけじゃないけど、さすがに究温に目の敵にされたんじゃあ危ない。

「でもちやんと現樹国助けてくれっかなー。翠雲も行かすべき？」  
でも翠雲回すと桐文一気に来ちゃうしなー。

ああ、くそつ。こんなことなら厘石の軍力も少しはもらつときゃよかつた。

《主》

頭のなかでヤトの声が響く。

「なに？」

また更に兵士がぞろぞろ出てきて、まったく、やってらんないよ。

《桐文が刹寒国の首都まで侵入してきました》

「まじで？ちよつとちよつと刹寒と翠雲のやつらちゃんとしてくれよー」

刹寒のやつら俺らのせいで警備手薄にしちゃった感じ？

逆に利用された感じが………そういうのめっちゃ嫌い！

「あーうぜーまじうぜー桐文のあのメガネマジ殺す」

スライム君に結構気合い詰め込んで、シスター妹の魔法陣を破る。

「でもまーこの子やつちゃえば俺らの勝ちだし！」

刹寒国の神候補に向かって、刃を振る。

「させませんっ！」

また、妹が新しいのを展開して防がれる。

「あー！もっ、急いでんのにー！」

「彼方さん、イライラしてるとし損じますよ？」

よーし、もうこうなったらとっておきの必殺技見せちゃうぜ！

懐に手を突っ込み、懐かしのあの本を取り出す。

ちやらららら〜チート本〜。

でもどれが役に立つか分かんないんだよなー。

「今そんなの読んでいる場合ですか！」

シスターに怒られた。

自分の聖書と似たようなものなのに。

「まあ、まあ。これはすごいやつなんだって」

ふと、影になっっているのを感じく。

上から射撃隊！？まじそんなんいんの？

さすがに過信しすぎた？

「つつ！」

当たる！！

と思った瞬間、体が光った。

「なっ！」

「え？」

シスターが振り返って驚いた顔をした瞬間に俺は戦場からその身を消した。

「どういうこと？説明プリーズ」

目をあげると、あの白い靄が沸き立つ夢の現実のはざま。

つまり、神たまroom。

「助かったっちゃー助かったけど、今忙しいの、助けてくれてありがとう、では御帰還ってことにはならないよね？」

神たまは椅子に座って長い杖に体をしがみつかせて口を尖らしている。

正直、めっちゃかわいいです。

「わらわだつて本当は呼びたくなかったに。でも頼まれたから仕方ないに」

「会いたかったよ、って一言言ってくれたら怒ったりしないよ」

せつかく齒を光らせていってあげたのに半眼でにらまな〜い！

「で、頼まれたって誰に？」

「いろいろに」

いろいろにか。

「わからん、フォーエグザンポー？」

「フォーエグザンポー？」

ルー語だよ。

「たとえば？」

「私だよ」

神たまの椅子の後ろから出てきたのは遙。

「おま、何してんだよ」

病気治ったのか、顔色が良い。

「私ね、そろそろ限界かも知れない」

「なにが？」

「病気」

「なぜ……とかじゃないよな」

遙の言っていた秘密というのは、病気か。

「神候補が死んじゃったら、その国負けだもん。……私じゃ名光を勝たせてあげられない」

「あーそれで……」

「元の世界でも、そろそろお迎え来ちゃうかなーなんて思ってたらこの世界に来たわけ。で、しばらく寿命伸びたみたいんだけど、それももう限界かな、って」

「今、元氣じゃん」

「それはここが特殊ルームだからに！」

かなり簡潔。かつ、わからん説明。

「呼んだのは……やっぱり彼方くんには自由に生きていてもらいたくないって」

「へ？」

俺は自由に生きてる。

死にそうだったけど。

「だから、彼方君には元の世界に戻ってもらおうと思ってるの」

「え。いやいやいやそれマジ困る、うん。マジ困る」

身に覚えのないホモルート確定するんで、それだけは勘弁してください。

「勝つていく彼方君みるのは好きだったよ」

「そんな死亡フラグ立ちそうなセリフ言うなって」

あ。ちよっと思いついた。

「遥ずつとここにいたらいんじゃね？そしたら病気進行しないし」

「それはダメ」に。神職の人間が誰も責められない場所にいるのは、反則に」

ちっ。ケチ。

「ん？てことは、神職じゃなかったらいいってこと？」

「まあ……でもそうなると自然に名光はリタイアってことになるに。それに完全に治るわけじゃないしに」

「てことはちよっとは治るんだ？」

「まあ、特殊ルームだからに」

「じゃあ、おれが鳴神を引き継ぐ」

「え！？嫌っていつてなかった？」

「なんかもうどうせ面倒みてるしいいかなーって」  
どうせすでにおんぶに抱っこ状態だし。いまさらかなって。

「それでも、ずっとここに遥をいさせることは難しいに、もともとここは一人用だからに」

「ん、じゃー俺が勝つて新しいルール作るまで待つてて」

「でも、彼方君自由……」

「いいのいいの。俺勝つの見たいんでしょ」

にっという笑顔を見せると遥もにこっとなほほ笑んだ。

「うん！」

「て、きれいに閉めたとこでわるいけどに」

せっかくいい感じにしめたのに。

「もう一人君を呼んでる人物がいるに」

「君を必要としている人物がいる」

男が、神たまの後ろから出てきておれの腕をつかんだ。

「えー。おれ超忙しんだけど。あんた誰？俺じゃないとだめなわけ？」

「君じゃないとだめだろう……たぶん」

「多分かい」

「行ってきてあげてほしいのに。たぶん、君に関係する人間なのに」  
「んー」

神たまが言うくらいだし、関係する人間なら行かなきゃいけないだろうか。

「わかった」

「ちゃっちゃと行って、ちゃっちゃと戻ってくればいいか。」

「それじゃあ行こう」

「彼方君、気をつけてね！」

遥の手に手を振って、知らないおっさんの後を付いていく。  
関係する人間。

その人物が誰かなんとなくわかった気がする。

振りかぶって からぶった (後書き)

神たま久しぶりゝな状況

前を向いて行く(前書き)

序盤Whatとのリンクです。

こちらの本編とはあまり関係ないかも

## 前を向いて行く

出向いた先は、闇だった。

案内をしていた男はいない。

その闇の中にいるのは、懐かしい少女の姿だった。

「おいていかないで、彼方ちゃん……」

そういつて泣く彼女は、俺が置いてきたいとこだった。

おれが異世界に行くことを決めた大きなきっかけのひとつ。

幼い頃に両親が離婚して心に傷を負った彼女にもうさみしい思いをさせまいと、自分を犠牲にするように本当の妹のように接してきた彼女。

彼女はおれに依存しすぎていて、おれは自分を後回しにしすぎた。

彼女が依存しすぎているのに気がついて、おれは何も言わず異世界へと旅立った。

でも今こうしてここにいるということは、ちゃんとしないとだめなんだってことだよな。

「ごめんね、尋美」

俺は異世界でやることをみつけた。

まっすぐ前を向くことを決めただ。

だから、もう泣かないで、おまえもお前の道をゆけ。

お互いを、引つ張り合うのはもうやめよう。

「ごめんね、彼方ちゃん」

そう言つて彼女は笑った。

「ただいま」

なんだかむずがゆい気持ちのまま、戻ってきた。  
すつきりしたような、切ないような。

「お帰り、彼方君」  
遙の顔をみると、なんだかほっとする。

「ほんじゃ、さっさと行くに?」

「え。ちよ、もう少し」

「うー」

なんか霧がぶああああと豪風とともに迫ってきて、体がひっくり返る。

「どわあっ!」

ごろごろ体がわまってひっくり返ると、上から誰かの手が伸びてきた。

「シスター」

顔を見上げると、シスターの笑顔。

「あ、ありがと」

と手を握った瞬間に手首をひねられ再び空中で回転して地面にたたきつけられる。

「いでえっ!」

「二日もどこに行っていたのです?」

「え?二日もたったの?おっどろろき」

「……殺されたいようですわね」

うわお。ほんきで驚いたのに殺る気まんまんですね。

神たま時間調整ちゃんとしてよね。

「まあまあ!。で?今の戦況は?そっいや、ここどこ?」

「ここは、名光です。戦況は……なんともいえません」

体の誇りを払って、やっとまともに地面に足をつけると確かに、名光の景色が広がっている。

「……なんだか、すつきりした顔してますね」

「わかる?肩の荷がおりたっていうか、なんていうかさ」

「あなたが消えた後の私の苦勞も察してほしいものです」  
……。  
「こわい。」

「……でもまあ。なんだか頼もしいですわ」

「お？まじで？惚れた？デレ？デレですかシスター？」

「……」

「ごめんなさい」

マジで無言の笑顔は怖いです。

だからだと金瑠訪宮を目指す。

で、ついたとたんにリジールに抱きつかれた。

「ぎゃああああー！！」

「心配したのですぞ！」

その声を聞いて、ルド様たちもぞろぞろと集まってくる。

いいから、いいからこいつを早くのけてくれっ！！

「とりあえず、部屋に行きましょうか？」

門の入り口だったものだから、ルドさまは何を言うよりも先にとりあえずそう言っつて建物内を指さした。

いつもの会議室。

ただ、遙はいないけれどだいたいいつものメンツがそろった。

「で、彼方君はいつたいたいどこにいたのですか？」

「どこっつていうかー。あー」

これは言っつてもいいのだろうか。

「遙はどこに行ったの？」

ココアがみんな気になっているであろうことを質問する。

「どこっつていうかー。あー」

俺は同じセリフを繰り返す。

「先ほどから同じセリフばかりでは何も進みませんよ」  
ルド様に怒られた。

と、こんこん。とドアがのつくされる。

「？」

リジールが代表して扉をあけると、リジールの獣耳と違う、あの獣つこが立っていた。

「鳳来からの使いです」

「あ、お久しぶり」

「鳳来からの使い？なぜ？」

ココアがあきらかに不安そうな顔で彼女を見る。

彼女は少し戸惑ったように俺をみて、ルド様を見た。

「えと……」

「どうぞ、おっしゃってください」

「あ。はい」

ルド様に先を促されて、やっと口を開く。

「名光国の神、鳴神の位は更木遥から離れ、田中彼方へとうつされました」

「な！？」

「どうして？」

リジールとココアが明らかに動揺する。

「そうですか」

ルド様は心当たりがあるのか、少し残念そうにそう呟いた。

「それにより、更木遥の使仕を田中彼方に譲渡されます」

「んえ？遥、使仕なんて持ってたの？」

「はい」

そりゃ意外だ。

そついや全然見てなかったな。

「どうぞ。お受け取りください」

渡されたのは、猫のような使仕。

「更木遥が名付けたのは、ポポ。能力は、一時的に時間を止める能力です」

「超使えるじゃん」

「具体的には3分です」

……ラーメンできるねえ。

「ポポちゃんと遙は呼んでましたよ」

ルド様はさすがに知っていたのか、手を出すと「ごろごろ」とうれしそうに首を差し出す。

うーん。

こうして見るとますます猫だ。

「皆様、田中彼方氏が鳴神になることを承諾しましたでしょうか？」

「否定はできませんからね……」

ルド様がそう返事すると、使いは頷いてまた消えた。

「遙は……限界、だったんですね」

ルド様の言葉にうなづく、彼はさみしそうにまた笑って納得したようだ。

「今日は彼方くんも休んで構いません」

そういうと、みんなもここにばらつき始めた。

「全く、話がよめませんけど」

部屋に向かう途中で、シスターが不服そうに呟いた。

「ま、おれが次の席を継いだってことだよ」

「……。あ、そうでした。あの獣人たちにお礼を言っておいてください」

「あ？ヤトとか？」

「ええ、きつとその人たちだと思うのですが、彼女たちがいないと私死んでましたよ？」

そっぴや、戦場に一人残しっきりだったねー。

「すみません」

「刹寒は桐文に取られました。究温は追い返せたようですが、桐文が次に狙うのは翠雲でしょうね」

「あーまじやられたよねー。どうしたもんかなー」

前を向いて行く(後書き)

ハーレムだけが目的じゃなかたんだね。って話。  
人間臭さが田中にもあるんです。

俺、なめられてるのか

ぶっちゃけ、戦局やばいよね。  
っていう話。

「タイトル、最強になるうなのになー」  
机に頭を預けるようにしてぐでーとだらける。

「チート本微妙に使い勝手わるくてなんちゃってチート本だし。使  
仕たちだつて大人数には太刀打ちできないしなあ。だれ、チート  
とか言つてたやつ」

「彼方さんがなををおっしゃりたいのか少しも理解できませんけど、  
うざいですよ？」

ばしんつと聖書で頭をしばかれる。

あー脳細胞がしぬっ！！

「ああもうマジで戦争反対」  
がしいつと顎をつかまれる。い、痛いよシスター。

「どの口がそういうこと言ってますの？」

「ごめんなひゃい」

「全く、前回のあの人間的成長が一話ももたずして退化してるじゃ  
ないですかっ」

「シスターいらいらしてんなあ、あの日ですか？」

「……」

無言で武器構えられた。超怖い。シスター怖い。

「と、とりあえず戦局まとめたやつルド様にもらいにいーこおつと  
ダッシュでとりあえずシスターから離れる。

そつえば、ルド様は本殿かな？離れかなー。

できるだけ関わりたくはないけれどさぎ耳が見えたのでむっちょ  
なりジールさんに尋ねてみる。

「リジールさん」

「ぬ？おお、田中殿、何か？」

耳がぴこんつと立つのはかわいいけど、その下の顔がおっさんというのはいかんせんねない。というかなれたくない。

やっぱり刹寒国においてくればよかった……。

「ルド様しらね？」

「先ほどすれ違いましたぞ」

指さすさきは右方向。庭ですね。

「わかった、ありがとう」

リジールにお礼を言って指さす方向へ向かうと、やっぱり大庭にルド様がいた。

小さい子どもたちが一緒になって遊んでいる。

「ルド様」

「おや、これは彼方君」

「たなか」

小さい子どもたちはこの城で働いている人の子どもたちだ。

俺も深山功一捕獲作戦のときにこのこたちと出会ってから仲良くないつてだいが懐かれている。

「ルコちゃん、ミラーユちゃん……えと、イペルくん久しぶりだねえ」

「たなか、いまぼくだけ名前すぐにでてこなかった」

仕方ないだろ。そういう脳味噌してるんだから。

「気のせいだよ」

まあ、素直に子どもに言うこともないので笑顔でごまかす。

「ルド様、ちよつといいですか？」

「構いませんよ。君たち、また今度遊びましょう」

「ええーどおーしてー」

「ねえねえ、遙ちゃんはどこー？」

「たなかもあそぼーよー」

「遙ちゃんはね、ちよつと遠くにいるの。田中もルド様もちよつとお仕事の話だからがまんしてくれるか？」

……ちょっと気がついた。田中はたなかなのに遙は遙ちゃんなのか。そうか、俺は呼び捨て対象なのか。

「えーやだやだやだー」

「遠くつてどこ？遙ちゃんどこ行きたーい」

「ねえねえ、何して遊ぶ？」

子供って元気で可愛いけど、面倒くさいかも。

おれ、幼稚園の先生とかむりだるなー。

「わがまま言っちゃだめですよ？」

「はーい」

ルド様がやんわりと注意すると、子どもたちは一気に熱が引いたように素直に三人で遊びに行ってしまった。

そうか、俺はなめられ対象なのか。

いまならちよつとだけ学校の先生の気持ちがあった気がする。

「で、なんのはなしでしたっけ？」

「ああ、そうそう。ルド様現在の戦局をわかりやすく説明してもらえませんか？」

「構いませんよ」

室外じゃあれなので一応屋内に入る。

「それでは、今の名光の状況を言いますと　じつに危ういですね　致命的なダメージを与えられていないとはいえ、名光はもともと大國に囲まれた弱小國。

大國の桐文が動いたことによつて今まで沈黙を守つてきた他の大國も動くことだろう。

「ていうか、大國が大國とつちやダメつすよねー」

「ですよねー……幸い、西臥國はまだ動く気配がないようですが」

「ここは西臥國の人に助けを求めべきですかねー」

ライバルの桐文に先手を取られたからには、そろそろ究温國が動き出すのは明白。

「……究温絶対、うちくるよなー」

なんか考えるのが面倒だなあ。

「あ。でも現樹とまだ同盟が結ばれてないし」  
深山功「まだこっちで捕獲してるし。」

「そう言えば深山功」  
あいついるんだから、まだ同盟結ばれてないだろうし。  
てなったら一応同盟の面目で現樹から厘石の武力借りて防衛くらいならできるか？

「ああ、そうそう、そう言えば彼ね。遥が逃がしちゃったみたいですよ」

「あゝそうなんですか？それじゃあ駄目だなあ」

……。

……あ？

「……え？」

「ですから、新神である彼をね、遥が逃がしちゃったみたいですよ」  
「な、なん。なんでってかなに？え？バカなの」

ある意味切り札だった功一にがしちゃったの？そうなの？なんで？

「は、遥あああ！！」

なんか空みたら「てへ、やっちゃった。ペロ」な遥が見えた気がした。

「どうしましょうかねえ」

なんとなく遠い目をしたルド様。

全く、どうしましょうかねえ。

「翠雲とられても困るけど、本陣《名光》取られちゃ元も子もないからなあ」

ちくしょう。刹寒とる為に翠雲とったようなもんなのに。

厘石の支配力はほとんど現樹に譲っちゃったしなあ。

あのころの調子乗ってた自分本気で今殴りたい。

現樹もいつ裏切るかわかったもんじゃない。

先手必勝！とか言っても勝てる要素ないしな！。桐文も究温も。

だいたい何で公平にスタートしないんだよおお。

もういつそのこと、同盟無視して一番勝つ要素がある現樹攻めよう

かなあ。

きつとよしてきた！つてかんじで究温が攻め入って漁夫の利を得るんだろうなあ。

と、なると方法は一つか。

「西臥国の人に助け求めに行きましょう」

それしかないじゃないか！

桐文の神候補は顔見られて最悪な印象しか与えてないし。

現樹でさえも格式がどうたらこうたらって同盟のときごじやごじやいつてたのにもっと歴史的にも有名な究温が同盟に答えてくれる気がしない。

秋津沙耶には借りを作ってるけど、返してくれるにはちょっとメンタル足りなさそうだしな！

となると、いままでちつとも動きを見せていない西臥くらいしかのこつてないじゃないか。

女の子だったらいいなあ。

「動いていない分情報がほとんどありませんからね、西臥は」

「実は動いてないんじゃないかって動けなかったりして」

……だつたらとっても困るなあ。

何度も言うけど、でもそれしかないからなあ。

「それじゃあ西臥に同盟をお願いしにいきましょう」

「厘石や翠雲のときのようにな陣までびゃーってやっちゃいます？」

「大国ですから、相手怒らせたらふるぼっこですよ？」

「正面から誠意をもっていきましよう！」

相手の神候補が男だった場合を想定してココア様をつれていくとして。

ルド様とリジルで名光を守っていてもらおう。

行くのは俺、ココア様、シスター数名の兵士くらいでいいかな。

「礼儀正しくするのがって苦手なんですけどねえ」

「礼儀正しくといえ、彼方君。いつも現樹のふくと着てきた服を交互に来てますけど、正式な場ですから名光の正装でいってください

いね」

「あ、はい」

現樹が中華風なら名光は昔の韓国の王族みたいな服だ。

どっちかっていうと中華風の方が好きだから現樹の服ばかり着てきたんだけどー。

代表になったからにはそういうのもしないといけないな。

俺、なめられてるのか（後書き）

なにこの無理ゲーな状態。

西臥国ってなんか強そうな名前じゃないですか？

え？そうでもない？

## ぶっちゃけると

西臥国。

動かざること山の如しをモットーにしてるの？ていうくらいいつも動かない国。

その内部の秘密が、いま、明らかに！！

「あ。やっべももう来たよ、ちょ、だれかー王さまに言ってきてー！」  
……ならなきやよかつたのに。

約束の時間どおりに指定された場所に来たはずなんだけどなあ。  
門の兵士やらわいのわいのとはしゃいでいる。

「……わかつたぞ」

この国の人たちは思慮深く敵を観察して動いていないわけじゃない。  
「ただ、馬鹿なんだな」

こんな国が毎回中盤までよくもつたな。  
ぎよつぎよぎよえー！

とあれもほげー種の種類だろうか。喉でもしめられてるの？という  
感じの苦しそうな鳴き声が聞こえる。

と、城の中から多分王様とおもわれる人物が走ってきた。

「あーはいはいはいっ！遠くからよくいらっしやいましたー！」  
ものすごい作り笑顔と汗でさっき急いで着ましたよ、と言わんばかりのよれよれの服装。

……この国は大丈夫なのだろうか。

「お待たせして申し訳ないっ！ささ、こちらへどうぞ」  
というか、なんで王様直々にお出迎えしてるんだろう。そしてやけに低姿勢だ。

「王様！王さまは王座で待機って練習したでしょ！」  
なんか急いで侍従のひとが王様に近づいて小声で耳打ちする。  
けど、聞こえてるよー。練習したのか。

「あ、やべっ！」

王様でかい声で言っちゃったよー。王様髭生えてるからいい年だよねえ？

「じゃ、じゃあ私はこれで」

王様いい笑顔で走って行っちゃったよー。作り笑いだったけど。

「では、引き続きわたくしがお案内いたします」

「お願いします」

すでにココアが頭痛そうにしている。

やっと通路を抜けて奥の大広間へはいると、さっきの王さまが打って変って威厳たっぷりな感じで座っている。

「わざわざ遠くよりご足労御苦労であった!」

……いや、さつき軽いノリで聞いたし。

「わしは西臥国王、史狼・ファルゴ! 22歳B型、彼女と奥さん絶賛募集中。好きな食べ物はコルガで正直今の状況から逃げ出したい心境!」

真面目な顔と真面目な乗りでなんか言いきっちゃったよ、この人。コルガってなに。はたからみて汗すごい。

「ココア、きみあの王様の彼女になつてあげたら?」

「あら、彼方んつてばひどいこと言うのね……馬鹿は嫌いよ」

22歳の王様か。結構若いなあ。

「王様、ナイスファイト!」

なんか従者が王様の汗をタオルで拭いて水を飲ましている。

「私は田中彼方、名光国の神候補。ぴちぴちの18歳。好きなものは女性全般。ハーレム要因絶賛募集中で、そちらの国の内情がどうなっているのか気になって仕方がない心境です!」

「わざわざあわせなくてよろしい!……私は名光の王族代表。ココアです」

一応礼式をとる。

「さっそく本題に入りますが、我が国との同盟」

「あ、いいよいいよ。オツケー」

「ノリ軽いっ！」

後ろでごによごによと従者が耳打ちしている。

「……我が西臥と名光の利害が一致してある、この同盟双方の損…  
…なに? ……あー。損にはならないだろう。それに、わが国にとそ  
なたらの国には前回の戦いで深い縁があるしな」

「……もはや目の前でどうどうとカンペだされたのを読み上げられ  
るとは」

途中で急いでなんかしてるなあ。とおもったらカンペかよ。

「立ち話もなんだ、部屋をつつりましよう」

言いきって満足したのか、22歳ひげの王様はうれしそうにニコニ  
コしている。

「大丈夫かしら」

「なあ、ココア。深い縁ってなんのこと？」

「前回の戦いで、うちの神と提携を結んでいいとこまでいったこと  
かしらね？」

「なんであやふや？」

「うち、いろんな過去の書物を乱闘でことごとく燃えていってるか  
ら」

なんじゃそら。

「そそそ。こちらでございます」

もう部屋の前に着いたのか、なぜか王さまが低姿勢で部屋を勧める。  
中は円卓の机があつて、なぜか上座に俺が座らされた。

「ではでは、第一回西光作戦会議かいさーい」

わーぱちぱちと一人でタイトル付けて一人で盛り上がるおっさん。

「さっそく、書類にハンコを押しましようか！」

そして進行がやけにはやいぞ。

「あのさあ、王さま。二つくらい質問してもいい？」

「いいですよ。あ、あと、僕のことはフレンドリーに史狼と呼んで  
くださっても構いませんよ」

「いや、遠慮しとく。……あんたさあ、何でそんなに低姿勢なの？  
ていうか、そんなに王様らしくくないの？」

「うぐっ！いきなり痛いところをつついてくるとは……さすが鳴神  
！」

「だれでもわかりますから」

ココアが書類に目を通しながら呟く。

「実は、ぶっちゃけて言つて僕帝王学とか学んでないし……最近ま  
で普通に下町で下っ端の仕事してたんですよ」  
なんていうか、あーぴったり。な雰囲気。

「王族ですよな？」

「一応、血は引いてます。でも帝王学を学んでいた……二つ上の兄  
が……厳密には姉だったわけですが」  
なにその微妙に気になる設定。

よくわからないので首をひねっているに従者が付け足した。

「あーえっと。つまり。前回の神さまがすごい厳格な方で、余計な  
争いをなくすために長子にのみ帝王学を学ばせ、その他のものは市  
井に下り家臣として接せよつて言う法律をつくりましてね」

「ほほう」

「両親は死別して兄上が即位する予定だったんですけど。兄は、い  
や、姉は愛を知つて……出ていってしまった」

なんかそれはそれで物語できそうだね。兄が姉つてどういうこと？

「で、普通に下っ端としてそれなりに暮らしていた僕が去年急ぎよ  
即位したんですよ。髭生やすので精いっぱいですよ」

「髭、べつにいらんでしょ」

「書類、こちらはこの内容で承諾ですわ」

「あ、ありがとうございます」

ココア。話に全く興味ないのね。

「質問、もう一つあるんだけど」

「あ？はい。なんでしよう」

「この神は？」

さつきから居なくね？

「あ。あー最神ですか。そうですねー寝ているのかもかもしれませんねー」

あきらかに怪しい。目が泳いでいるいし、脂汗も流れている。  
ポーカーフェイスもできないなんてこの人やっぱりこの職あってないな。

「……あわせてもらえますよね？」

ココアもやんわりと圧力をかけた。

「う。え。あー。えとそのあの。」

どうしようと思者を見ると、だめだめむりむりとジエスチャーしている。

だから、見えているんだってそのジエスチャー！

「無理みたいです。はい」

「私たちは同盟するんですよね。両者の間に秘密があるのはどうかと思いますの」

ココアが思いつきり王さまに接近してこれでもか、と胸のお団子をぐいーっとひつつける。

「あああ。気持ちい……じゃなくて、こればかりはそのー」  
同盟するけど、別に両者の間に秘密があってもいいような悪いよう  
な。

まあ、イイか。

10分もしないうちに王さまは折れた。

「ちよろいですわ」

ちよつとつらやましいなーと思っただのは秘密だ。

「こちらです」

なんか小さい扉。

「1111?」

「でも、会えるかどうかは……わかりませんよ?」

一回深呼吸して、王さまはノックを二回する。

「あとう、最神さまあゝ？先日伝えましたお客様が、ぜひ貴方様にお会いしたいと」

「ばんっ！と扉に何かぶつかった音がした。

「ひいっ！すいませんすいません」

「……え？なにどういうこと？」

「簡単に言つと、うちの神さまひきこもりなんですよお  
従者がもろにぶっちゃけた。」

この従者さつきから何気におもしろいな。

「ひきこもりいゝ？異世界まで来て引きこもりい？！」

「ちなみに、カギならこちらにあつたりするんですよ」

と従者が再びぶっちゃけて、手に鍵を握っている。

「入って良いの？」

「ぶつちやけてあんまりこの部屋から出たことないので出していた  
だけると幸いです……うちの王さまあんな感じですよ」

……なんか落ち込んでる。

そのぶつちやけから鍵をもらつ。

さて、その顔拝見させてもらおうか！

ぶっちゃけると(後書き)

いろんな人が召喚されたんですね。

ひきこもりのあの人(前書き)

祝！70話

## ひきこもりのあの人

さて、鍵穴に鍵をつっこんであけて扉をひら……開……開かないよ？  
「つて、ためこのやろう！中から押さえてるだろ！」

がたがたと押してもひいても開かない。

すると、従者が気がついたようにおれの肩に手を置いた。

「あ、いやいや、それ引き戸なんです、右に引いてください」

「え？あ、ごめん」

右にスライドさせたらすんなりと開いた。

「……」

……思わず再び扉を閉めてしまった。

「ベタだなっ！！っ！かドアノブの意味わかんねえよ！！」

「そんなことよりも、名光の神さま、早くうちのひきこも……神さまに出てるように説得してきてください」

「はいはい、引きずってきてヤンよ！」

もう一度扉を開いて中へと入る。

……なんか、変なおいがする。

「あ。そうそう、うちの神さま……まあ、どうぞお入りください」

「すごい気になるよね！」

何か言おうとして途中でやめる従者。

影キヤラのくせにいい味だしてんなよ。

すーはー。

新鮮な空気をいっぱい肺に込めてもう一度気合いととも足を踏み出す。

……なんか空気がむあんつてしてる。

わかる？なんていうか、そう、むあんてしてる。

しか言いようがない。

「……………」  
なんかいろいろ気をひかそうとした功績なのか、いろんな装飾品やらおもちゃ？やらなんやらが無残に転がっている。

でも、どれもこれも一応いじった形跡がある。

「……………」  
「ふはっ……………」  
「くさ」

息が続かなくなって息を吸うと、なんだかいやなにおいがする。

ハンカチなんてものを持っていなかったので首もとの服をぐいっともちあげて鼻と口をおおう。

「おーい。ひっきーくん？ひっきーちゃん？ひっきーさん！」

部屋はそんなにせまくないだろうし、もともとは一つのへやだったのだろうが。

先ほどのようなおもちゃやらなんやらの山がそこかしらにあるせいで、変な通路が出来上がっている。

その辺になぜかお茶碗やらコップやら。

いつ食べたんだろうって感じのお菓子のカスも目に入る。

……………」  
「あ、ぼてちだ。なつかしー」

「……………」

がらつと山が崩れる音がしたので振り返ると、この部屋の主と目が合った。

「……………」

「……………」

髪はぼさぼさ。服はよれよれ。

そういえば、こいつこの部屋からでてないっていつてたよな。

トイレとかどうしてたんだ。もしかして……………」  
「いや、やめておけ、おれ。」

前髪が長くて顔が見えない。

ひよろつとしてて、なよなよしくて、いかにも卑屈ですって言う感じのオーラを出している。

何がこの人をそこまでさせたのかもものすごく気になるが、かわりたくない。

「えーと、君がその、ここの召喚された神候補、だよな？」  
男なんだろうか女なんだろうか。

肩のところまでしかこちらからは確認できない。

「はぁー……はぁー……」

かなり呼吸が荒い。

こわいよー。

「んー。恐がらなくていいから、おれ敵じゃないし。ほら、とりあえず顔をきちんと見せてくれないかなー？」  
今は敵じゃなーい。

小さい幼稚園児に語りかけるようになるべく刺激しないように諭す。  
怖いのは、こつちだよー。

「はーあはぁー……」

ここの空気悪いし、向こうの反応も悪いから、スライムくんをこっそり後ろに配置。

「とりあえずーここから出て風呂はいるうぜー！」

なんか背中や頭がかゆくなってきたのでスライムくんに合図して縄に変化してもらって拘束する。

「……」

かなり驚いたようで目を見開いてスライム君をみた。

「別に痛い目を見せようってわけじゃ……あ」

そして、気絶した。

いやいやいや、どんだけメンタル弱い。

「よし、ミッションコンプリート！」

こいつ、ずっとこの部屋にいたっていったし、使仕とかつかまえ  
てなさそうだよなぁ。

やっと姿をきちんと見る。

やっぱりぼさぼさの黒髪に、荒れ放題の肌。よれよれのうえになん  
か謎の汁のシミがついた服……あ、スカートはいてるから女子？

よくこんな状況で暮らせるなぁ。

持ち上げると、なんか軽い。

拒食症？つてくらいがりがり。

「貧弱貧弱う〜……うつくさ」

くさいのが鼻に染み付いてしまつともう悲しいじゃすまないのですさつさと部屋から脱出する。

そして、みんな何も言わず俺達を風呂へと鼻をつまんだまま誘導した。

「ああ、さつぱりしたー」

国によって風呂の文化も違うのかと思つたら、意外とどこも同じなんだよな。

シャワーも湯船もあるのよ。

まあ、露天か室内かの差はあるけど、地域によるし。

「彼方さん」

「ん？」

護衛をしていたシスターが寄ってきた。

「向こうの人も出てきたらしいですよ？今度こそ改めて話をしたい」と

「りょーかい」

一応と替えの服を持ってきていたのでそれに着替えてもう一度広間へと集まる。

「あ、すみません本当にありがとうございます」

そして一番に出迎え頭を下げる王さま。  
いいのかそれで。

「それで？彼女は今どこに？」

部屋を見渡してもどこにもいない。

「机の下にいます」

「……」

「我慢」

シスターが後ろでほほ笑みながら殺気を出したので先に押さえる。

「だって私……もともと始祖神さまを愚弄する神候補ってだけでやりたいのに、あんな行動されたら……たまりませんわ」

「でもだめですからねー」

というか、いいって言うわけないでしょ。

従者がテーブルクロスをめくってでてこーいと呼んでいる。

「あ、もちろん最近そのやりたい人リストに彼方さんも入りましたから、あしからず」

「なんで?!」

「だって神候補の代役になったでしょう?」

「……さーて! レットーキング!」

テーブルクロスの下を覗き込むと、机の角に寄り添って、体操座りで爪を噛んでいる。

なんかぶつぶつ言ってるこわい。

テーブルクロスを下して従者の顔を見る。

「あれ、だめだ」

「ですよね」

「だめですよー! だめって言っちゃだめですよ! そこを何とかしてください!」

王様だけが必死になっている。

というか、別に俺このひと出すって言ったけど、更生させるとは一言も言っていない。

「人前に出せるようにまではしてくださいー」

王様にひつつかれたので必至ではがす。

「無理だってマジで」

「彼をどうにか説得してください!」

「彼?」

一旦停止してもう一度テーブルクロスをめくる。

「……彼?」

「あ、はい。うちの神さまどうやら男性のようですよ」  
従者が補足。

「女性の格好をしていたのは趣味のようですね。お風呂に入れたの  
ではつきりしてます男性です。ちなみに性格及び思想的に女性とい  
うつもりはないそうです」

「……どういうこっちゃ。」

「おーい」

なんとなく呼びかけてみる。

「……眼だけがこちらを向いた。」

「お前、なんて名前なんだ？」

男とわかったのでテンションがた落ちなんですけどー。

「……」

喋らない。

こいつこの国のことわかってんのか？

わかってるわけないか。

「この人、使仕とかいる？」

「あ、一応。あの時はなんか異常なテンションでしたし」  
いるのか。

「ていうか、異常なテンションってなに？」

「「とうとう俺の時代がやってきたぜ！」とか「俺が神！俺が最強  
！俺の世界！」とか」

あいたたた。

いや、でもなんか微妙に俺とかぶってるんだけど。

あれ？俺ってもしかして痛いやつ？

「それで、帰ってきてしばらくして「これは夢これは夢」「おかし  
いなあいつまでたっても醒めやしない」といって以来誰も近寄らせ  
ず引きこもり、あの状況に至る」

「……」

ひきこもりのあの人(後書き)

( \* ^ ^ ) W W

男だから(前書き)

あんまり容赦しないよ

## 男だから

むりやり腕を掴んで引きずり出す。

「ひいっ！」

さすが引きこもりというか、ものすごくあっさり引き出せた。そのまま椅子に座らせ従者から受け取った紐で縛りつける。

「ああ、仮にも神にこのようなことをしてもいいのでしょうか……！」

王さまだけ戦々恐々としているが、従者をはじめメイドさんたちも平気な顔しているぞ。

「よし、じゃあお話ししようか、引きこもりくん！」

「ひいひい！」

人がやさしく笑顔で話しかけてやってんのにももの凄いびびっている。うしろでシスターが武器でもかまえているのかと思ったけれどそうでもないようだ。

なんだよ、そこまでびびられると傷つくだろ、おれのハートはガラス製なんだ。

「大丈夫ですよー怖くないですよー」

うしろで王さまがひきこもりの肩を優しく撫でている。

「引きこもりくん、名前は？」

「……」

「え？」

何か口をもごもごさせているが聞こえない

「……」

「聞こえねえ」

耳を近づけたもののよく聞こえない。

「……西藤……祐太」

「ユータくんね。なんで女装してたの」

「……」

言いたくないのかうつむいたまま動かない。

「趣味？べつにそういう趣味でも悪くないと思うよ、うん。なにせ俺は女装が趣味のむきむきまっちょまんが知り合いにいるからね。理解はできないけど軽蔑はしないよ、うん」  
もちろんリジールのことだよ。

「まあ、本題に入ると　この世界のこと、ちゃんと理解してる？俺もまあ、この世界のことをすべて理解してはいないが、基本的なことを知っているかどうか。」

「　　だいたい」

「使仕いるんだって？どんなやつ？」

「……　なんか、その変な……　奴です」  
いちいちぼそぼそとしゃべるから聞き取りにくい。

「なんだかイライラしてきた。のは、おれだけじゃなかったらしい。」  
「神さま、女装をしていたとしても一応男児なんですから、もうすこししゃきしゃき喋ってはいかがでしょうか？ただでさえ暗いですのにまるでゾンビみたいですよ」

「従者すごいぐいぐい言うね」

「神さまに向かってなんてこと言うの　！神さま、気にしなくていいですからね」

「神さま神様連呼しないでくださります？神様というのは　」

「ああ！はいはい！シスターは少し部屋出ておいてもらえるかなー？」

「というか、大勢いたら余計しゃべれないんじゃないかと思って二人つきりにしてもらった。」

「ユータくんはもちろんずつとうつむいたままだ。」

「あのさあ」

改めて声をかけると、体がびくんと動いた。

「せっかく別世界来てまで引きこもりとかどうなわけ？」

「……」

「やったぜトリップ。おれが主人公とか思ってたんじゃないわけ？」

まあ、主人公はこの俺なわけですが。

「……」

「したいことあるだろ？それが自分でできないというなら  
俺が叶えてやるつか」

「……？」

ユータは窺うように視線だけを俺に向けた。

「なにがいい？なにがしたい？」

俺はなるべく興味が惹くように言葉を選ぶ。

「多くの人をかしずかせたい？美人をはべらしたい？毎日働かなくてもおいしいものを食べて何もしなくても温かいお風呂に入れる  
そんな日々も簡単に送れる」

まあ、この程度ならこいつが自分自身で「神」として振舞えば十分  
過ごせるけどな。

「外敵が怖いというのなら、俺が排除してやる」

「……み、見返りとか……そういうの」

ああ、ちゃんとその辺のことはわかるのか。

「簡単な話だ。うちの国は金がない、人手が足りない。それをお前の国から借りたいだけだ」  
ぶつちやけ返す当てないけど。

「援助してくれば俺たちはあんたたちの国も守るし、その神候補であるお前ももちろん守ってやる」

もちろん、後ろ盾として使わせてもらおうし、最後にはこいつにも退場して貰う。

「俺は」

「ユータくんはちゃんと神候補として形だけのふるまいはしてくれないと、いろいろ困るからせめて引きこもりはやめてくれる？」  
他国に隙を見せればすぐにやられる。

「……が、がんばる」

「いいこだ」

これが女の子だったらもつと気分よく扱えたんだろうけど。

まあ、罪悪感とかもあんまりなくていい傀儡かもしれない。  
紐をほどいてやって誓約書にサインさせる。

王からのサインはすでもらっているから、これで正式に条約は締結だ。

「ああ、そうそう」

俺はスライムを剣に変身させてユータの首すれすれに突き刺した。

「ないとは思うけど、裏切ったら……わかるよな？」

「……！！！！！！」

さあっと一気に青ざめ体を小刻みに震えさせる、それから、膝をおつてこくこくと首を上下にふる。

「よしよし」

おれは笑顔で剣を引き抜き、ユータくんの腕をつかむ。

「それじゃあ、王さまたちに改めて報告しようか」

やっと他国に対抗できる力を手に入れた。

あとは 他国がどう動くかな。

男だから（後書き）

ぶっちゃけほとんど西臥国に利益ないよね

ストレス(前書き)

後半懐かしのあの人です

## ストレス

無駄とも言える時間を過ごした気がするが、ともかくようやくこれで正式に同盟が結ばれた。

この国の神は前回も名光と協力し、いいところまでいったらしい。なかなか心強い味方じゃないか。

「さあて、どこから攻め込みますか」

俺は地図を広げ見た。

「個人的には刹寒国に今すぐ行くべきだと思ってますわ」

本当に個人的な意見をシスターが横から提案する。

それもいいかもなあ、西臥に究温の牽制をさせておいて……あ、でもそのまえに翠雲が桐文に取られないようにいったん強化しておかないと……。

究温がうちに侵攻してきたということは……現樹はどういう対応をうちにしてくるかも考えないと……。

いっそのことこちらが同盟を反故して現樹に先制奇襲でもしかけるか？

「彼方さん、あまり根を詰めると体に良くないですよ……なにか、飲み物でもお持ちしますね」

「頼むよ、シスター」

シスターをうちに回収できたのはよかった。使仕くらい強いもんな、あのひと。

俺の強み

使仕たる、意外と融通きかないチート本に……

反則技使ってもへっちゃらなこの鉄製のハート？

「あのお、すいません遅れました」

入口のほうからユータクんの声が聞こえる。

そっぴいえば、呼んでおいたっけ。

「え？ああ、別に　ってなんじゃその格好！」

頭から爪の先まで完璧女子の格好をしている。

どこからどうみても、女子。しかも結構可愛い。

「え？ど、どこか変ですか？やっぱりピンクよりもあの黄色いのにすればよかったなあ」

「女装つてとこだよ」

いや、初対面も女装だったけどね、いまもまたわざわざ着てくる必要ないじゃない。

西臥の民族衣装なのかひらひらふりふりのやつ。

「え？だって可愛いじゃないですか」

「お前、性的にはノーマルって聞いてたんだけど？」

俺は椅子を引きながら問うてみた。

「え？ええ、ノーマルです。女の子が好きですけど、かわいい格好も好きなんです。みんな守ってくれるし、やさしくしてくれるし」

一部社会からはとても冷遇されるけどな。

「そうか、それじゃあ着替えてこようか」

「なんでですか！」

何がうれしくて可愛い男の子と一緒にいなくてはならんのだ。

俺は、ノーマルな女の子が好きな。

「可愛い男ものの服だしてもらえばいいだろう？」

「えーでもお」

「でもじゃねえ。つか、なんでさっきまでぼそぼそしゃべってたのにいまは平然としゃべってんの？」

ちゃんとした声量でしゃべるようになったのは良いけれどまるで別人のようだ。

「こういう格好の方が、自分に自信が持てるんですよ」

……ま、いいか。

シスターが飲み物をもらって戻ってきたが、女装男がいることに気が付き盛大な舌打ちをして「もうひとつもらってきますね」と引っ込んだ。

「シスターというの？今の人」

「似非だけどね、名前は長つたらしいからシスターって呼んでんの」  
「へえ、きれいな人だよねえ」  
ぼわんとした視線でシスターの影を追うユータくん  
やめておいた方がいいと思うぞ。

#### ところ変わって究温国

その首都に構えた城のとある一室で秋津沙耶は震えていた。  
自分の肩を両手でしっかりと抱き、今だやまぬ鼓動を感じていた。

戦争があんなにも、残酷だったなんて。

「どうしよう……どうしよう」  
無理だ。

やっぱり私が神さまになるなんて無理だ。

名光………とிட்டただろうか？

その国に初陣をしたとき、私も参加をさせられた。

戦の雰囲気を感じるだけでよいと、いやいや参加させられたのだ。

「うう、ううっ」

思い出しただけでも気分が悪くなる。

これは戦争なのだ。

まだ成人もしていない自分が、自分のことで精いっぱい自分が、  
こんなことに参加していいはずがない。

断ろう。

でも、何といえは断れる？

先の戦いでもっと攻めたかったのに、私が気を失い倒れたせいで一  
時撤収をしたことを巫は怒っている、神を辞めたいなんていえば、  
一生閉じ込められるのではないだろうか。

「やだっやだよ」

影の中から、使仕のツバサが出てきてくちばしで髪の毛をついばんでくる。

「ツバサ………うん、頑張る。がんばるね」

巫は怒っているだろう、むしろ、失望しているだろう。それでも、この戦いを勝つために私を使わないことにいらだっているだろう。

「がんばる」

とは言ったものの、私にはどうしたらいいのかわからない。戦うのはいや。

でも、見捨てられるのも失望されるのもいや。

せつかく逃げるようにこの世界にやってきたのに、またこんなにもつらい目をみなくてはいけないなんて。

また、誰か助けしてくれないだろうか　そう、ツバサを捕まえるときに、協力してくれた田中さんみたいにツバサを見ると、田中さんを思い出す。

彼は、神候補ではなかった。私をいじめたり失望したりもしなかった。

彼はいま、どこで何をしているのだろう。

やっと震えが消えてきた手で、ツバサの首をなでる。

こんこん

「宮神さま、次の戦いのお話があります」  
巫のキリさんの声がする。

「……はい」

いやだ。

そういいたい。けれど、言えない。行っただってどうにもならないのだし。

扉に向かって歩き出す。

また、せつかく止まり始めた震えがでる。

新神の、深山さん、だったか。

彼とも約束したのだ。

新しい、良い世界を作りかえるのだと。

そのために頑張ると決めたのに。

手が震え、頭の中が拒絶する。

「宮神さま、早くなさってください」

「はい」

私の本当の信念は、どこにあるのだろうか？

出せ払いで！（前書き）

いつぶりだろう。久しぶりの更新です

出世払いで！

ところどころになんとなく戦火の跡が残る名光。

西臥のおかげで戦力もやっと整ってきた。

さて、次はどうしようか。

やっと西臥から名光にもどり金璃訪宮の広い庭で、ぐでーと大の字の状態で見上げる。

「久しぶり、彼方くん」

ふいに、頭の方から声が聞こえた。

できれば聞きたいとは思わない人物の声だ。

「よう、久しぶりだなあ櫻辺」

頭を動かさず視線だけをよこすと、櫻辺はいつものようににやーと笑った。

いつもと違う、おれたちの世界の制服のような服装だった。

いや、それはまさに俺達の世界の制服だ。

「隣、イイよね？」

良いともなんとも答える前に彼女は「よいしょ」なんて言いながら俺の右となり座った。

「なに？その格好。コスプレ？」

俺は眼だけ櫻辺に向けた。

「んーまあ、そうといえはそうだね」

そういつて櫻辺は曖昧に頷いた。

「いつもの服装は、洗濯中なのさ」

「あっそう。んで、なんかよう？」

「あは。つめたーい」

たいして気にもしてない調子で櫻辺は軽く笑った。

「そうだね、大した用事じゃないけどさーちよつとした提案？」

「期待しないけど一応聞いてやろう。なに？」

上体だけ起こして櫻辺の方を見る。

「勝たせてあげようか？」

「はあ？」

「いや、だからあこの戦いに勝たせてあげようかって」

「いやいや、どういう意味？」

「そのまんまの意味」

櫻辺の顔はいつもと同じ飄々としていて何を考えているのかわからない。

「どうやって？」

「たとえば、この世界には飛行船がない。それで、上から攻撃を仕掛けることができる戦闘機をあげるといえば？」

「ただならもらってやる」  
なるほど、空からか。

そういえばこの世界に飛行機やヘリコプターのようなものはないなあ。あたりなかったり、めちやくちやな文明だ。

「ただであけてもいいよ」

「……いや、タダより高いものはないってな。見返りはなんだ？」

そもそも、何でもっているのか。

「見返り？可愛くないなあ、素直に貰えばいいのにー」

「やだ、なんか気持ち悪い」

「ええー。それじゃあ、んーそうだなー」

「簡単なのな」

「わがままだなあ」

櫻辺はちよつと考えてから、うなづいた。

「出世払いでいいよってことで」

「いや、対価なんだよっつーに」

考えるのがめんどろになつたのだろ。櫻辺は起き上がった。

それからんーと背伸びをして俺の方に振り返った。

「それじゃあ、帰るね。飛行機とかはそうだなー明後日までにはとどけるかも知れない」

「あいまいな」

「私の気分次第さ んじゃね」

「待てよ」

帰ろうとする櫻辺を呼び止める。

「珍しいね、いつもはさっさと帰れって感じなのにな？」

「聞きたいことがいくつもあるからな」

「年齢は答えないよ」

「なんでだよ。じゃなくて、おまえ、まじで何者なんだ？」

はじめは、どこかの神候補なのかも思った。でもすべての神候補を見たいま違うということはわかる。ならば、俺やあゆびよんのようにおまけなのか？

と思ったがそれにしてはどうも物知りだし、やや対応が上からだ。

「お前、過去の神候補の生き残りか？」

俺は前回の神候補の戦いの勝者を知っている。だからこいつがなんなのかがわからない。

「あれ？まだわからない？」

「わかんねーよ。」

「もつと単純に考えたらわかると思うんだけどな」

櫻辺は俺の方を見ないまま、再び歩き始めた。

「じゃね、彼方君」

もともと答えてくれるとは思ってなかったけど。

しばらくして櫻辺の姿が見えなくなってから再びねころがった。

「彼方さん」

しばらく眠り込んでしまっていたのか。

シスターの声で目が覚める。

「ん……ごめん。なんかよう？」

「救援要請が新樹から来たそうですよ」

「新樹から？救援要請い？」

まだぼんやりする頭で聞いた言葉を繰り返す。

「どうやら究温が動くみたいですよ」

シスターが濡れたタオルをくれたのでそれで顔をふく。  
ふう、すっきりだぜ。

「究温がどこに動くって？新樹か？」

「いえ、桐文に」

「ははん、これ以上桐文がデカくなんないうちに小さい国の俺らと協力してつぶしてから、小国をゆくりつぶしていこうって腹か」  
まあ、俺らが楽しんで桐文をつぶしてくれるなら大変結構。

とはいっても、桐文を丸ごと究温の手柄って持っていかれると困るからこっちはこっちで活躍しないとな。

「面白くなってきたんじゃないの？」

「それじゃあ、さっさと起き上がって作戦会議とでも行きませんか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5219k/>

---

そうだ、最強になろう

2011年10月2日14時55分発行